
TRILOGY

eleki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TRILLOGY

【Nコード】

N9379X

【作者名】

eleki

【あらすじ】

白魔法士・黒魔導士・剣士の3人の人格に（体ごと）分裂した変わり者の王子が、陰謀で王宮を追われ、途中で拾ったそれぞれのお供と一緒に離ればなれになった別の『自分』を捜しつつ、国の危機を救うための旅をするお話です。

現在二話目更新中、聡明で気の強い少女が、同級生と喧嘩したり義理の父親と喧嘩したり謎の隣人と喧嘩しながら、平和な街に訪れた事件へと知らず巻き込まれていきます。

第一章『邂逅』

春だというのに、嫌な風が吹いていた。

セレナは籐かごを抱え直すと、ふと頭上の空を振り仰いだ。

まだ昼過ぎだが、雨の降り出しそうな雲行きを見て、庭先に干していた洗濯物を取り込んでいたところだ。

このサンファールの国は、夏と冬の温度差が激しい。春はその合間の休息のように、過ごしやすい、心地好い季節であるはずなのに、空には陽の姿も見えない。いやに肌寒かった。

セレナは鈍色の曇天に、心持ち眉をひそめ、首を傾げる。おかしな天気だな、と思った。

静かな雰囲気をたたえた少女だった。

今年で十七歳。腰まで届くかという長い金茶の髪はゆるく編まれ、麻の上着から覗く腕は頼りないほどに細い。

薄紫色のスカートが、風に吹かれ、はたはたと流れる。胴巻きの布は、結び目がほどけそうに激しくたなびいた。

空が奇妙に暗いように思えた。

セレナは小さく溜息をつくと、取り込んだ洗濯物をしまったため、庭先から家の中へ戻った。

家は町外れの小さな平屋だ。母親とふたりきりだからそう大きい住まいは必要なかった。父親はセレナがずっと小さい頃に行方しれずになったという。物心ついた時には母親のユマとふたり暮らし。

ユマは優しく、セレナや自分がどんなに辛い時にも笑っている。そういう人だった。

(でも今は……)

セレナは食堂に洗濯かごを置くと台所から水差しを取り、そのまま廊下に出て、奥の部屋の木戸を開けた。

「お母さん」

そう、呼びかけてみる。返事は戻ってこない。

翳った部屋の中でユマが寝ている。セレナは寝台に近づくと、そつと彼女の体に布団をかけ直した。

長い間、女手ひとつでセレナを養ったため必死に働いてきたユマだが、今は床を出ることが適わなくなっている。

「お母さん、お水、枕許にあるからね」

セレナの呼びかけに、やはりユマの声は返らない。それでもセレナは声に出して話しかけることをやめない。

ひとつきも前から、ユマはこうして寝台に横たわり続けている。

セレナがどんなに名前を呼んでも、彼女の声は聞こえない。

ユマをみつめればセレナは悲しくなる。

だって彼女は、セレナをみつめ返してはくれない。

(お母さん)

唯一の肉親。血を分けた、自分の命にも等しい存在。大切な、大切な母親。

この町で暮らしていくセレナに、歳の近い友達もいない。いるのはほんの小さな子供か、ずっと年上の者ばかり。若者は皆この町の外にいる。ラキウスはそんな町だ。だがここへこなければ、何の力も持たないセレナたち母娘が、ただ暮らしていくこともできない。

その中でセレナの太陽は、常にユマだった。

なのに彼女は、目を開けてくれない。口を開いてくれない。

静寂だけがセレナを迎え入れる。

セレナは目を伏せ、溜息を押し殺すと、ユマの寝室を後にした。

「セレナ！」

明るい声に呼び止められ、路地に出たセレナは振り返った。

道の向こうからやってきたのは、セレナの隣人。セレナは、小走りに近づいてくる彼に、歩みを止めた。

「こんにちは、バツ」

「こんにちはセレナ、どこ出掛けるの？」

光のように明るい金色の髪を持つ少年だ。顔つきにまだ幼さがあった、そんな少年の優しい笑顔に、セレナも自然と笑みを返した。「ノイヤーさんのところへお仕事をもらいに行くの。この間の花飾り造りは、もう終わってしまったから」

「そうか。お母さんの具合はどう？」

「相変わらずつてところかしら……」

セレナが少し表情を曇らせると、バツィはそれを引き立てるように明るい、人好きのする笑みを浮かべた。

「早く好くなるといいね」

「ありがとう」

少年の笑顔に、どこか暖かな心地になりながら、セレナは微笑を返す。

セレナよりも五つ年下だというバツィは、半年前に隣の家へやってきた。天涯孤独の身で、薬草を摘んできて売ったり、セレナと同じく人づてにほそぼそとした仕事を受けては、日々の生活を送っている。

彼になぜ身寄りがないのか、ラキウスの町に来る前は何をしていたかなどは、セレナも町の人間も知らない。わけありの人間などこの御時世のこと、どこにでもごろごろしている。

そしてラキウスは王都バーンズの城からずっと遠い、辺境と言って差し支えない田舎町だ。サンファールの最東端に位置し、三方を海に囲まれている。海は深く暗く、海岸線は切り立った崖で、漁に出る船もない。大地は作物が根づくことに向かないようで、人の食べる野菜はおるか、家畜の餌を作ることすらままならない。

決して恵まれた地形とは言えず、住む人間も、訪れる旅人も少ない。それで、王都周辺で何かをやらかしたお尋ね者などの、いい隠れ場所となっていた。

自分たち母娘がここに住むのは、多分ユマも何かから逃げているからだ。セレナはそう察していた。ユマの過去を、セレナは何も

知らない。罪を犯したわけではあるまいと思いはするが　ただ、日常が穏やかだったから、あまり気にすることもなかった。

他人の過去も気に病む必要はないと思っていた。セレナたち母娘が仕事を世話してもらっているノイヤーという男も、強面に不吉な太刀傷を持つ屈強な男で、人を殺して逃げてきたのだと本人が笑い混じりに話していたのを聞いた事がある。冗談なのか真実なのか、セレナにはわからなかったし、わかる必要もないと思った。ノイヤーはセレナたち母娘には優しく、彼がいなくては仕事が手に入らず日々の暮らしが成り立たない。それだけ知っていればよかった。

ここはこんな町だし、時代は人の生活へ常に暗澹たる影を落とすオルジア王朝だ。人の過去に拘っていても、何もやっていけない。セレナの気に懸かるのは、ただユマのことだけだ。

（また、お母さんが元気になってくれるのなら）

そうすれば、今の暮らしに憂えることなど何も無い。

自分の思いに耽っていたセレナは、ふとバツの視線を感じて顔を上げた。

目が合うと、バツがにこりと笑いかけてくる。セレナはかすかに赤くなった。自分よりもずっと年下の少年なのに、時どきバツはセレナがハツとするほど大人びた表情をすることがある。出会った頃は、無邪気な笑顔でセレナの気分を明るくさせた。その笑顔の質が変わってきたのは、本当について最近のこと。

そう、ほんの、ここひとつきの　。

（男の子って、そういうものなのかしら）

バツがいると心強い。今までは、小さな子供だから気に懸けてあげなければね、なんてユマと話していたのに。

（そうか、お母さんが起きてこなくなっただからだわ）

思い当たってセレナは納得する。ユマが床に伏してから、バツは奇妙なほどセレナに気を配るようになった。顔を合わせればユマの様子を訊ね、セレナに励ましの声をかけてくれる。きつと、セレナの淋しい心を気遣ってくれているのだ。

「セレナ？ どうしたの？」

「あ……な、何でもないの」

問いかけられセレナは慌てた。バツィに見とれていた自分に気づかずかしさを覚える。「そう？」と小首を傾げながらバツィが笑った。

そのバツィの表情がふいに引き締められたのは、次の瞬間。

鋭くその眼差しが動く。セレナはつられるように自分の背後を振り返り、そして悲鳴を上げた。いきなり道の脇の草木を掻き分け、人影が現れたのだ。

バツィは何も言わずセレナの手首を強く引くと、自分の背後に庇った。

「あ……っ」

バツィの背中越し人影の正体を確かめようとしたセレナは、もう一度悲鳴を上げそうになり、踏みとどまる。

現れたのは細身の少年。その全身は砂や泥に汚れて、ところどころ衣服も裂け、そして両腕で庇った胸からは鮮やかな血が滴り落ちていた。

(ひどい)

ただの喧嘩や何かで受けた傷には見えない。元の色がわからないほど血や他のものに汚れた衣服が、鋭く切り裂かれていた。

太刀傷だ。

血まみれの体がかくりと植木に前のめり、咄嗟に手を貸そうとしたセレナを片手で制止して、バツィが彼に声をかけた。

「おまえは誰だ」

凜とした声に、ひどくのろのろと彼の顔が上がり、その視線がバツィの姿を捉える。セレナと同じ年頃にも見えるが、顔のあちこちにもひどい擦り傷や殴られたような痕があり、容貌はよくわからなかった。その彼は口を開き、

「子供を……捜している 歳の頃は十より上、名をバツィと……」
苦しげに途切れる声で言った。

目を瞪るセレナを背中であんなに庇ったまま、バツィはもう一度彼に呼びかけた。

「おまえは誰だ？」

「……バーンズの、ルナティン……ラクウスに住む、バツィという子供を、捜している……」

彼、ルナティンは大きく咳き込み、その衝撃で掌に押さえられた胸からぼたぼたと鮮血が散る。セレナはその場に膝を崩しそうになった。両手で顔を覆うセレナが地へ倒れずにすんだのは、バツィが思いのほかしっかりした力で支えていてくれたからだ。

「おれに何の用がある」

そう訊ねたバツィにルナティンは息を呑み、霞んでいるらしい視界で必死にその姿を捉えていた。

「俺は……おまえの父親に、頼まれて……っ」

そう呟くなり、ルナティンの体から力が抜けて、そのままざりと植木に倒れ込んだ。その体重を支えきれずに、背の低い木がルナティンの体ごと地面に崩れる。バツィが小さく舌打ちした。

「このうえ面倒を」

彼らしくない、吐き捨てるような小さな悪態に驚いて、セレナは顔を上げた。セレナと目が合うと、バツィはにこりと邪気なく笑って見せる。

「セレナは家に帰ってるといいよ」

「でも、その人は……」

バツィが倒れているルナティンを引き起こそうとするのを、セレナはなるべく視界に入れないように顔を背けた。

「ああ、セレナ、ノイヤーさんのところへ行くんだっけ。でも顔が悪いから、今日はやめにして、家に戻った方がいいよ」

セレナの台詞を作為的に捻じ曲げ、バツィは追い立てるようにそう言った。おそらく、怪我をしたルナティンの姿を彼女に見せるのが酷だと思ったのだろう。

「そう……ごめんなさい、そうさせてもらっわ……」

たしかに気分の悪くなっていたセレナは、バツの心遣いに甘えるようにその場を離れた。

家へ向かいながら、セレナの足取りが頼りなくぐらつく。気を張りつめていなければ今にも倒れそうだった。

(血が)

血の臭いにまるで酔ったようだ。脳裡に焼きついた鮮やかなあの赤い色。

(あの人は……)

果たして生きていられるのだろうか。見るからにひどい傷痕だった。おびただしい血液が体から流れ落ちて地に汚点をつくるほど。

(お医者さまか、祭司さまを……)

薬か癒やしの術が必要だ。けれどこの町に、そんな人たちはいない。教会は朽ちかけ、何年も前から祭司の姿など見えない。病院なんてこのずっとずっと先の町まで行かなければありはしないのだ。

(誰か呼ばなくちゃ……バツだけじゃ、何も……)

このままではあの人は死んでしまう。

(死んでしまう……)

ふらりとセレナはよろめいた。

(誰か……)

呼ばなくては。

そう思うのに、セレナはただ家の中まで辿り着くのがようやくで、そのままうずくまり動けなかった。

いささか乱暴に寝台へその体を投げ落とすと、相手から苦悶の聲が洩れた。

「何だ、まだ意識があるのか」

重い『荷物』から解放された肩を宥めるため、バツは腕をぐるぐる振り回す。放り出されたまま寝台で俯せになっている背中を

見下ろして、不愉快そうに眉がしかめられた。

「血痕つてのは、洗濯してもそう簡単に落ちないんだぞ」

どうせなら床に転がしてやればよかった などと、ぶつぶつ
独り言を洩らす。バツは、もう声も上げず寝台の上で微動だに
ないルナティンの肩を、これまた乱暴に揺すった。

「おい！ 起きてるんじゃないのか？」

返事はない。やはり気を失っているらしい。そう確認して、
バツはおもしろくもなさそうに腕を組んだ。ルナティンを見下ろし
ながら大きく息を吐き。

「さて……」

ひとりごちて口許に親指を当てる。

「どうしたもんかな、『バツ』？」

(温かい)

穏やかな白い光を見たような気がして、ルナティンはぼんやり
とそれに意識を凝らした。

意識を。

(俺は眠ってるのか？)

自分の状態がよくわからない。体がひどく重い。まるで鉛のよ
うだ。手足も動かないし、瞼も縫いつけられたように開くことが
できない。

それでもどうしてか、自分の全身が温かな光に包まれているの
を感じることができた。

「……」

何か声を出そうとしたのに、溜息だけが唇から洩れる。

「大丈夫」

額に触れる手。自分の知る手とは違う大きさ。子供の手みたい
だ、とルナティンは思う。それは小さかったけれど ルナティン

の知っている手と、同じくらいの温かさを持っていた。

「かあ……さん……？」

「大丈夫だよ」

かすかな笑いを含んだ声。子供の声。優しい。

「すぐによくなる。血はもう止まったし、ちよつと熱があるから辛いかもしれないけど……もう少し寝てなよ」

（ああ、この光は）

ようやく理解する。どこかで覚えのある温もり。これは。

（白の魔法だ）

癒やしの光。

（あたたかい）

穏やかな波動。掌も声も、まだほんの少年のものなのに、それはルナティンを大きく安堵へと導いてくれた。

「できるのならオレの名前を呼ぶといいよ。もう少しは力に変わるから」

子供の声がそう告げる。そうか、とルナティンは心で頷いた。

母親が昔、傷を癒やしてくれた時、彼女の名前を呼んだ。名前は力になる。

「オレは、バツ。今、ルナティンの体に癒やしの力を送っているのは、バツという名前を持つ者。どうかオレの名を呼んで」

「……バツ……」

その名を口にした時、柔らかく体が浮き上がるような心地好さを感じた。

うつすらと、どうにか開くことの叶った瞼の隙間から、ルナティンはおぼろげな人の輪郭をみつけた。

ルナティンはもう一度彼の名を呟くと、ひどく安心した気持ちになって、その暖かい光に体を包まれたまま吸い込まれるように眠りの沼へとはまりこんだ。

セレナは音を立てないよう精一杯の注意を払って扉を閉めた。

ノブを握った掌、それから額と背中が、驚くほどじっとり汗ばんでいる。

(今のは、何?)

家でしばらく休んでいたら、少し気分がよくなった。

あの大怪我をした少年を、バツィひとりに任せておくのはやはり不安で、とにかく様子を見に行こうと彼の家の門を叩いたのはつい先刻。

何度か声をかけたが家の中から返事はなく、悪いと思いつつもセレナはそつと玄関を開けた。鍵はかかっていたいなかった。

まず台所から搜したが、バツィの姿は見あたらず、誰か大人の手を借りに行ったのだろうかと思いつながら廊下に出たセレナは、突然奥の部屋へ走った光に驚愕した。かすかに開いた扉の隙間から、細く洩れた白光。何が起こったのかと、緊張しながら部屋の様子を窺い、そして愕然とした。

血濡れた服を着たまま、寝台に横たわる少年。

その彼を見下ろし、バツィが彼の体に手をかざしていた。光の元はバツィの両方の掌で、その光を受けてルナティンの体もぼうつとした白い光に包まれていた。

咄嗟に、バツィが何をやっているのかセレナにはわからなかった。あんな光を見たのは初めてだ。太陽の光とも、ランプの光とも違う。石の輝きとも別のもの。

(何なの?)

どうしてこれほどまでに不安なのか。セレナは自分の気持ちが変わらなくて、ただぎゅっと服の胸元を握りしめた。気味が悪いほど汗が出てくる。

小さく、バツィたちのいる部屋の中から物音がした。セレナの肩がびくりと揺れる。耳を澄ませても、中から人の出てくる気配はなかった。

セレナは乱れた呼吸を整えて、静かにその場を離れた。

(いったい……何だというの？)

一番わからないのは自分の気持ちだ。とめどない怯えと困惑。

じつとりと額を濡らす汗を拭いながらバツの家を出た時、道の向こうから歩いてくる人影をみとめてセレナは知らず身を竦めた。ルナティンというあの少年が現れた時のことを鮮明に思い出す。

その人影は、目を凝らせば丈高い男性だということがわかった。ルナティンとは違い、血にまみれている様子も怪我をしている様子ももちろなくなり、きちんとした身なり、しっかりした足取りで歩いていた。

ほんの少しセレナが違和感を感じたのは、身なりにしる立ち振る舞いにしろ、まっとうすぎるということだった。二十代前半か、四十代後半か。判別はつかない。歳をとっているようにも見えて、若いようにも見える。わかるのは、彼がセレナの知っているこの町の男たちとは、おそらく違う種類の人間だということだ。

セレナはその場所から動けなかった。セレナの家は、彼女が進む先、そして男が向かってくる先にある。家に戻るということは、男に向かって歩くということ、セレナはそう考えるとどうしても足が竦んでしまうのだ。

段々に近づいてくる男と、セレナの目が合った。男はセレナの怯えた表情を見つけると、柔らかい笑みを見せた。

知らない人は怖い。セレナはあまり人と付き合ったことがない。ユマと、バツと、ノイヤーと。まともに言葉を交わしたことがあるのはそれくらいだ。時どき街中で擦れ違い、下卑た言葉をかけてくる男たちとは、視線すら合わせないようにしていた。

なのに、セレナは、近づいて来る男から目が離せない。

(誰……？)

男はセレナの家の前で歩みを止めた。

セレナはふらふらと、まるで惹かれるように男の方へ足を踏み出した。心のどこかで警鐘が鳴っている。ルナティンが現れた時も

怖かった。流れる血。切り裂かれた服。そんなものに怯えた。

でも、違う。この男に感じる怯えはそれとは違うもの。男を見ただけでは、怯える要素などセレナにはひとつもないのだ。知らない人に対する恐怖？ 違う。

知らない人なのに、こんなにも惹かれてしまうことに対する恐怖。

「あ、の……」

男のそばまで近づき、セレナは乾いた声で言った。男が振り返り、少し首を傾げてセレナを見返す。

「……あの、何か……？」

「ああ」

男は小さく頷くと、セレナに向き直った。

「セレナ」

名前を呼ばれてセレナはぎくりとした。見知らぬ男。なぜ自分の名を知っているのか。

「あ……あの……わたし……」

自分で気づかず、セレナは胸の前でかすかに震える両手を握り込んでいた。

「ごめんなさい、どこかで……？」

それだけの言葉を発するのに、セレナには膨大な努力が必要だった。声がひきつれて揺れる。そんな自分を恥じる。そしてそれ以上に 怖い。

男は強張った顔のセレナに向かい、緩やかに口許を綻ばせた。

笑うと、何とも言えない雰囲気を醸し出す。まるで見ている相手を骨からとろけさせるような。セレナは魅入られるようにそれを見上げた。

「そうか」

スツと男の片手が持ち上がり、セレナの髪に触れる。

「覚えていないのだね」

セレナは息を呑んで、動けなかった。ほつれてこめかみに張り

つく髪を、男の指先がつまみ上げた。自分で驚くほどにセレナの鼓動が早まる。

「ごめ……んなさい、わたし……あなたのことを知りません……」
「私はおまえを知っているよ」

男が髪から手を離すと、セレナは安堵したような、淋しいような、おかしな心地になった。男がセレナの家へ視線を移すと、吸い込まれるようにその横顔をみつめてしまう。

「ユマはどんな様子かな」

「あ……お母さんの、お知り合いですか？」

戸惑いがちにセレナは問いかけた。母の知り合い。セレナはそんな人間に会ったことが、今まで一度もなかった。

男はセレナに目を戻し、再び笑った。

「でも今日は、おまえに会いに来ただけだね」

「わたし……？」

「そう。おまえは覚えていないかもしれないが、私はおまえのことをよく知っているんだよ。おまえのことも、ユマのことも」

「……」

「私を家の中へ入れてはくれないか？」

「あ、ご、ごめんなさい、気がつかないで」

ぼんやり男に目を奪われていたセレナは、恥じ入って赤くなりながら、家の門扉に手をかけた。錆びて朽ちかけたこの門を直してくれたのはバツ。庭先の手入れをセレナが欠かしたことはない。それでも男の整った身なりに較べて、自分の家はなんてみすばらしいのだろうと、セレナは消え入りたい心地になった。

「どうぞ……」

セレナは俯きがちに扉を開き、男はそれに続こうとした。

だが、ふと立ち止まったその爪先を見止め、セレナは顔を上げる。
「なるほど」

ぼつりと男が呟いた。その表情を見てセレナは息を止める。

男の顔は先刻までの穏やかなものではなく、冷たい、酷薄に見える笑いを浮かべていた。

「結構な仕打ちじゃないか……」

口調は愉快そうだった。男は困惑げな顔で自分を見上げるセレナに目を移すと、自然、元のような柔らかな笑顔になった。セレナが、今の冷たい微笑は見間違いだっただのではと思うほど、ごく自然に。

「今日は日が悪い。また改めて来るとしよう」

「え……？ なぜ」

セレナが問い返すより先に、男は踵を返した。セレナは無意識に男の背中を追って歩く。男が立ち止まり、振り返る。

「最近、変わったことはなかったかい？」

「変わったこと……？」

男に問われ、セレナはかすかに首を傾げた。男が頷く。

「そう、たとえば 見知らぬ人が現れたとか、今まで知っていたはずの人間が、突然変わってしまったとか」

「……」

セレナの眉根が、心細く寄せられる。

胸をよぎったのは、ルナティンと、そして、バツの姿。

まるでセレナの胸裡を見透かすように、男は何度か頷いた。

「では、気をつけなければいけないね。おまえの周りには、どうやらおまえをよく思っていないものを取り巻いている」

「よく思っていないもの……」

おうむ返しに呟いたセレナへ、男は再び頷きを返す。

「おまえの周りには敵が多い。それをわからなくてはいけない。そうしなければ、この先生きては行けないよ」

不安な表情を作るセレナの頬に、男の冷えた指先が触れた。

「そしてこれも覚えておくんだ。私がおまえの味方であるということとを」

「……あの……あなたは、一体……？」

見上げてくるセレナに、男は目を細めて笑った。
「ジン。それが私の名前だ。私はおまえを救う者。そして解放する者」

男はセレナの右手を取り、指先に接吻けた。セレナはされるがまま男 ジンをみつめる。

「必要な時はこの名を呼びなさい。私はいつでもおまえの許に現れよう」

最後にもう一度優しく笑みを作ると、男はそのままセレナの前から立ち去った。今度は、セレナも動かずその後ろ姿を見送る。

(ジン……)

心の中で、セレナはその名前を呼んでみた。

口にするのは、なぜか勇気がくじけてできなかつた。

「セレナ？」

名前を呼ばれて、セレナははっと振り返った。先刻セレナが出てきた家の扉から、バツィが顔を覗かせていた。

「どうしたの？ 何か……話し声でしたけど」

セレナは素早く男の歩み去った方を見た。

男の姿はもうどこにもない。

「何でも……何でもないの」

セレナが早口に答えると、そう、とバツィが呟く。

セレナは彼の顔を見る前に、自分の家へ入った。扉を閉め、鍵までかけて、小さく息を吐く。

何か動き出し始めている気がした。

第二章『白の王子』

彼が目覚めた時、目の前には冷静に自分をみつめる子供の顔があった。

「ふん、やっと起きたのか」

そして真つ先に降ってきたのは、つまらなさそうな、かすかに毒づくような声。

「まったく遠慮なく寝こけやがって。おかげでこの三日というもの、おれはソファで眠る羽目になったんだぞ、この、おれが！」

「……」

ルナティンはぼんやりと、何やら腹を立てているらしい子供の姿を見上げた。どうやら自分は寝台に寝ているようだ。その寝台の脇に、腕組みした子供が立っている。

子供は、まだはつきりとは覚醒していないらしいルナティンの様子に、大仰な舌打ちをひとつした。

「それなりの代償というものは覚悟しろよ。いいか、ただでさえおれは繊細なんだ。こんな埃っぽくて小汚い、馬小屋よりひどいところで暮らしてるおかげで病気になるそうなんだ。このガキが言い張らなくちゃ、おれはあの時すぐにでもおまえをそこら辺の道ばたに捨てるつもりだったんだぞ。それを助けてやったんだから、おまえは一生かけてもおれに尽くすつもりでいろ」

「……んあ？」

まくしたてた子供は、ルナティンの気の抜けた返事を聞くと、目を眇めて片手を伸ばした。ぎゅうぎゅうと相手の鼻をつまむ。

「いつまで寝呆けている。目が覚めたのならその間抜け面を改めておまえの事情なりをさっさと話さんか！」

頭ごなしに怒鳴りつけられて、ルナティンは一度大きく眉をひそめてから、ぎゅっと目をつぶった。

ルナティンがいるこの部屋は、見知らぬものだった。なぜ自分

は、こんな部屋でこんなふうに寝ているのか。それに何より、なぜ自分がこんな子供　少なくとも、自分よりはずっと年下に見えたに好き放題怒られなくてはならないのか。不思議になる。

(こんな子供に……)

そう考えた次の瞬間、ルナティンはハツとして目を見開いた。

「おまえ、バツ……痛え！」

咄嗟に寝台から起き上がるうとしたルナティンは、胸元に走った鋭い痛み思わず叫び声を上げ、そのまま寝台へ逆戻りした。

「馬鹿者だな」

その上から降ってくる、情け容赦ない一言。

「あちこち剣で斬り刻まれて丸三日間寝こけていた人間が、いきなり起き上がって無事にすむわけなかるーが」

「ぎ……っ」

子供の手が、ルナティンの胸を軽く押した。ルナティンは叫び声を喉で押し潰す。

「おっ、おまえ……何しやが……っ」

「無駄口はいいから必要なことだけ話せ。おれは生来寛大なたちが、あいにくここ最近で忍耐力のあまりが底を尽きている。いいか二度は言わないぞ、おれの気が変わらないうちに、おれに話したいことがあるのならさっさと話せ」

ルナティンは目の前にいる子供の、あまりといえばあまりに尊大な物言いへ呆気にとられた。

驚いた拍子に思い出した。自分がすべきこと。ルナティンは人を捜しに来たのだ。『ラクウス』に住む『バツ』という子供を。

王都バーンズからはるばるこの田舎町まで死に目に遭いつつ足を運び、そして気を失う前に少女と子供のふたり連れを見つけ。

「そっだ、おまえ、バツー！」

ルナティンは、今度はできるだけ慎重に寝台の上へ身を起こした。バツが相変わらず冷たい目つきでルナティンのことを見遣っている。その眼差しに気づいた時、ルナティンは混乱した。

(あれは、夢……か?)

おぼろげに覚えている記憶。温かな光に包まれた自分の体。

今自分の目の前にいる子供の声には聞き覚えがある。優しく癒やしの詞を唱えた声。バツ、と名を呼びかけたルナティンに、たしかにその子供は頷いた。

しかし、どうもその時の印象と、今のバツの印象の間には大きな隔たりがある。

ルナティンはとりあえず一番ひどい傷があつたはずの自分の胸へ目を落とした。新しくはないが、清潔な衣服に着替えさせられている。そつと襟口から覗いた胸には白い包帯が巻かれて傷口は見えないが、あるべきはずの壮絶な痛みはない。注意すれば自力で起きあがるほどには回復している。それに、胸の他にも無数の傷痕があつたはずなのに、完治こそしていないものの、それらは数日寝ただけにしては考えられないほどに治癒している。

「あれ……?」

やはり、治療されているようだ。自分の傷がどれほど悲惨なものだったか、もちろんルナティンは承知していた。もしかしたらこのまま死んでしまうのだろうか、半ば覚悟まで決めたのだ。

それがここまで癒やされているということは。

「やつぱりあれは、白魔法だった……」

ルナティンに間違えようはない。癒しの術は、過去幾度かこの体を受けたことがある。感触が同じだった。

そう考え　ルナティンは、瞬間的に寝台から降りようと体を動かし、途端にまた胸に痛みを感じてそのまま床へ転がり落ちた。

「何をやっているんだ、おまえは」

無様にひっくり返るルナティンに、呆れきった声がかかる。ルナティンは何とか起きあがり、きよるきよる辺りを見回し寝台のそばにおいてあつた水差しを片手でひっ掴むと、それを子供の方へ向けた。彼を威嚇するように睨み据えながら。

「で、いったい何の真似だ?」

もはや相手を罵る気力もなくしたような顔で、バツーがルナティンに訊ねる。ルナティンはずるずると壁に向かって後退り、痛む胸を片手で押さえながら必死でバツーを睨み続けた。

「おまえ、誰だ!？」

「何？」

ルナティンの問いに、バツーはわずかに意表を突かれたような顔になった。

「おまえはバツーじゃない! 何者だ！」

「これはこれは」

バツーは軽く眉を上げると、笑いを含んだ顔になってルナティンの方へ近づいた。さらに、ルナティンが後ろへ逃げる。

「おれがバツーじゃないだなんて、何を根拠にそんなことを？」

「バツーをどこへやった! 白魔法を使ったあの子供は!」

「それならおれのことだ」

「違う! おまえじゃない、わかる。あの時俺を癒やしたのはおまえじゃなかった。わかるんだ。波動が違う。こうじゃなかった」

「……」

『バツー』は、口許だけさらに笑った。瞳の形は笑っていない。「おもしろいな……」

そして、十をいくらか過ぎただけの子供には、決してそぐわない口調で呟いた。

「おまえこそ何者だ? ふん、まあ、そんなこと今はどうだっ

ていい。わかるのなら仕方がないな、たしかにおまえを癒やしたのはおれじゃない。このおれが直々に術を使ってやってこの程度の治りと思われるのはあんまり気分のいいものじゃないから、見破ったのはまあ褒めてやろう」

「じゃあやつぱり……ッ」

「だが、おれがバツーじゃないとどうして言える? おまえを癒やした方が、別の者なのかもしれないじゃないか」

「違う。あの時、バツーは自分で名乗ったんだ。あれが真名じゃないな

いのなら、俺が癒やされてるはずがない！ それであっちのバツ―は白の魔法で俺を癒やしてくれた！ そのバツ―のフリをしてるおまえの方が、どう見たって悪者！ 決定！」

水差しをぶんぶん振り回してルナティンが子供を指し示すと、子供は軽く眉をしかめた。

「言わんこつちやない」

警戒の色も顕わに自分を見上げるルナティンに、返る舌打ちがひとつ。

「このうえ面倒が起こるくらいなら、こんなものひとりくらい、捨てておけばよかつたんだ」

言葉どおり面倒臭そうに、子供がルナティンに近づく。

背後を壁に阻まれたルナティンは、それ以上逃げることも適わず、ぎりつと齒軋りした。

「お……おまえはバツ―と入れ替わってどうする気なんだ！ まさか、シノンの言ったとおりここまであの黒の魔導使いの手が伸びてるってのか！？」

「何だって？」

初めて子供の顔色が変わった。ルナティンへとさらに詰め寄る。

「おい、今、何と言った？」

「だから……シノンが」

「そのあと！」

身を屈めてルナティンの胸倉を掴み上げ、子供が声を張り上げる。

「シノンとかいう奴のことはどうでもいい、黒の魔導士がどうしたって？」

「何驚いてんだよ、シノンの子供を狙ってその姿に成りすましてるのはおまえだろう！ 聖神官の血を引く子供なら強い聖なる力を持つていて不思議じゃない、だからその力を利用しようとか」

「ハッ！」

子供は力一杯鼻で嗤うと、掴んでいたルナティンの服を乱暴に

離れた。勢いあまつて、ルナティンの頭が壁に激突する。

「聖神官の、子供？ その力が欲しくておれが、よりによってこのおれが！ わざわざこんなクソちびの体を狙っただつて？ あはははは！」

子供はルナティンを見下ろし、笑った。目を見開き、口許だけ持ち上げた怖ろしげな表情が笑いと表現できるのであればだが。

子供の迫力ある笑顔に、思わずルナティンの腰が引ける。

そんなルナティンの様子を見ながら一度大きく息を吸い込み、それから子供はルナティンを怒鳴りつけた。

「寝言は寝てから言え、この、おー馬鹿者！！ 何が悲しくてただか聖神官ごときの血を引いた程度のちびガキ風情をあてにしなくちやいけないんだ!？」

「だつて、おまえバツ一の贖者なんだろ!!!」

子供につられて大声になりながら、ルナティンが叫ぶ。間髪おかず、子供がルナティンの手に相変わらず握られていた銀製の水差しを引つたくと、それで手加減なく相手の頭をぶん殴った。中味の水が辺りへ飛び散る。

「戯け者ツ!!!」

「んなつ」

ルナティンは目を見開いて、殴られた頭を両手で押さえた。

「何すんだよ!!!」

「何すんだもかにすんだもあるか、このボケ、ボケナス!!! 言うに事欠いて贖者？ 無礼にもほどがある、誰に向かって口利いてんだ!!!」

「ぶ……無礼、つたつて」

ルナティンは思わず言葉に詰まった。「誰に向かって」などと言われても、この子供の正体がわからないことが、そもその大問題なのだ。

口ごもるルナティンに、子供は再び大きく鼻を鳴らした。水差しを持ったまま腕を組む。

「まあいい。話がずれた。その黒魔導士つてのについて詳しく話せ」

命令口調で言われて、ルナティンはムツと眉根を寄せた。

「俺は、バツの父親からくれぐれもバツに伝えてくれと頼まれたんだ。正体も知れないおまえなんかには話す義務は」

「胸の太刀傷はここかなあ？」

「……ッ、ッ！」

足を振り上げた子供の爪先が胸の傷痕を踏み躪り、ルナティンは声もなく床に転がって悶絶した。

「四の五の言わずにさっさと話せ。ああしまった、二度は言わないつもりだったのにポリシーを曲げてしまった。畜生もう一回蹴つてやろうかな」

「……んなにされても！俺はバツに会えるまで絶対喋らないッ！」

「強情だな」

叫ぶルナティンに、子供が思いきり舌打ちする。

「……待てよ？」

それから、ふと気がついたように、指先を口許へあてた。

「バーンズの間人だと言ったな、おまえ」

「そうだよ、それがどうかしたか！」

「いちいち声を張り上げるな馬鹿者ッ！……そうか、バーンズのルナティンか」

ルナティンを上回る大きさで声を張り上げてから、子供はひとり何度も頷いた。

「どつりで聞き覚えのある名だと思ったら、おまえはエイリアの息子だな」

「母さんを知ってるのか！？」

ルナティンは驚愕して子供を見返した。

「彼女ほど強い力を持つ巫女は見たことがない。ああ、巫女と呼ぶのは問題だったか、おまえという子供もいるしな。一応は、元巫女と呼ぶべきだろう」

「おまえ……どうしてそれを……」

ルナティンは、彼が自分や母親のことを知っているのにも驚いたが、何より、母エイリアの過去を知っていることに愕然とした。たしかにエイリアは、かつて王宮内の大神殿に仕える巫女だった。しかしそれも、ルナティンを身籠もるまでのことだ。

巫女は穢れなき女性のみにその力が与えられる。だからエイリアに子供ができたとわかった時、王宮は彼女を巫女の位から外し、今では書師を勤めさせているのだ。

だが稀代の力の持ち主と謳われた巫女エイリアは、ルナティンを産んでのちも、その力を衰えさせなかった。

数十年に一度は、純潔を失っても巫女としての能力を持ち得る人間が存在し、彼女たちは子を成してからもさらに神事に携わることがある。

ただ、エイリアは未婚のままルナティンを産んだため、不貞とされて当時巫女たちの首席にいたものを罷免された。それでも王宮内に残り様々な書物の管理などをしているのは、彼女の力を手放すことが、王宮にとっても惜しかったからだろう。

息子であるルナティンは十の歳になるまで城下に祖父母と暮らし、ふたりが亡くなった今はひとり住まい、エイリアはルナティンを産んでからはその息子と離れ、王宮内部で生活している。

彼女が父親のない子を産んだせいで巫女としての資格を失ったことも、力を失わずに書師になったことも、よほど王宮の事情に通じる人間しか与り知らないところだ。

それを、この子供が知っている。

「エイリアとは知らぬ仲でもない。何しろ、このおれを手加減なく叱りつけた人間は、子供の頃とはいえ彼女が初めてだったからな」
「母さんに、叱られた……？」

「ああ、おれがまだ小さい時、彼女の管理する図書蔵別館の黒魔導書に書かれた術を許可なく試していたら、王の御子らしくはない振る舞いだと叱責を浴びた。いやたしかにおれとしたことが、実に品

のないことをしてしまつた」

「……………お？」

「でも気持ちにはわかるだろう？ 別館といえば、禁忌魔術書の文字どおり宝庫だ。あの頃の『おれ』はまだ白にも黒にも興味を持つていたからな。まあ今の『おれ』はそんな品性を欠いたことはいないが、禁じられたからこそ紐解きたくなる心理は、人間として有り得ぬものでもなかるうよ」

「お……………お、お……………」

「うるさいな、おまえはさっきから何をどもっている、聞き苦しい」

「おおお、王子イツ！？」

「やかましい」

大声でわめいたルナティンを、子供が冷ややかに見下ろす。

「その頭と耳が飾りじゃないのなら、教えてやるから謹んで拝聴しろよ。おれが、このサンファール国の王子だ」

偉そうに両腕を組んで宣言する子供に、ルナティンはその場で絶句した。呆然とするルナティンに、子供は少々気分を害したような表情を作る。

「嘘、じゃ何おまえ、本っ気で気づかなかつたの？ 俺がバツーじやないってことはわかつてたんだろ？ なのに俺の正体には思い至らなかつたわけ？」

「あ……………あ、あた、あたりまえだツ！」

上がるルナティンの声は、悲鳴に近い。

「何て恐れ多い奴なんだ、バチが当たるぞ！ 今すぐセイマー神に謝れ！」

ルナティンは取り乱して慌てた。自分が王族だなんて公言するとは、恥というか命を知らない。

「ここにいるのが俺ひとりだからいいものの、表でそんなこと吹聴した日にゃ、宮廷騎士団にとつ捕まつて王から死刑にされるぞ！」
「何を言う。真実を口にして咎められるいわれなどない」

ルナティンの焦りぶりを意に介さず、子供はあっさりそう言っ

た。

「あまり無礼な振る舞いをする、父上より先におれがおまえを縛り首にして河に放り込んで、魚の餌にしてやるぞ」

「ち、ち、父上って……っ、まさかおまえ、オルジア王の妾腹だなんて言い出すんじゃないだろうな、子供のくせに、どこで入れ知恵されたんだ？」

「馬鹿者ッ！！」

もう何度目か、子供はまたしてもルナティンの頭を容赦なく水差しで殴った。

「誰が妾の子だって！？ 非礼もここまで来れば心の広いおれだってさすがに聞き捨てならないぞ！ いいか、おれは間違いなく、この国の現王オルジアの嫡男、ただひとりの」

「わかった！ わかったから、その先を言っな！！」

ルナティンは絶叫した。

オルジア王の血を引く者は、今のところ公式にたったひとりしかいない。王と、亡き王妃トゥーシャの息子。

病がちだったトゥーシャは、ひとりの王子を産み落としたその晩に亡くなり、妻を心から愛していたオルジア王は彼女の死をいたく悲しんで、以来後添えも側室も取らずに独り身で通している。

そして産まれた王子の名を、カナンといった。

『カナン』はこの国において、単なる名前という以上の重要な意味を持つ。今現在その名で呼ばれる者は、この国でただひとりしか存在しない。この国始まって以来、カナンという名を持つ人間は、同時期にふたりとしていないことが不文律となっている。

なぜならカナンとは、サンファールの王位継承承第一位の人間つまり次期国王であるということを示す名前、もしくは称号であるからだ。

それを偽りに口へ乗せるのは、最高級の妖魔の真名を呼ぶのと同じほど危険だということくらい、ルナティンも知っている。唯人ならば、その身と魂がずたずたに引き裂かれるほどの報いを受けるだろ

う。

しかしルナティンの目の前にいるこのおかしな子供は、どうやらそのことを知らないらしい。

(それとも自分のことを本気で王子さまだなんて信じてる、妄想癖の持ち主か……)

ルナティンは内心で溜息をついた。えらいのに関わってしまった。ただでさえ、今は王宮の目が重箱の隅でもつつきそうな勢いで、人々を監視しているというのに。

「何がわかったって？」

「い、いや……」

ゴホン、とルナティンは一度大きく咳払いした。

「おまえの言いたいことは重々わかった」

「わかりました、だろ」

「……わかりました」

何となく屈辱的な気分でルナティンが繰り返す。しかしここは、自分の方が大人にならなくては仕方あるまい。

「言いたいことはよーおくわかりました。でもな、王子は今、バーンズの王城にいるはずだし、それに何より年齢が合わないだろ？」
噛んで含めるような口調で、ルナティンは子供に問いかけた。

「今の『カナン』は俺よりひとつ上、今年で御歳十七になられるそうだろう。けどどう見たっておまえは、十二、三歳がいいところだ」
「そりゃそうだ。バツーは十二の歳だからな」

至極当然の口調で子供が言う。

「ちょっと待て、おまえは、バツーじゃないんだろ？」

「おまえおまえって、さっきから自国の王子に向かって何て口の利きようだ」

「混ぜっ返すな、ちゃんと説明しろよ」

ルナティンは苛立ちを隠さず声を荒げた。本来なら、自分はこのんな誇大妄想狂の子供にかかずらわっている暇などありはしないのだ。

「おれはバツじゃ無いが、これはバツだ」

さらりと意味不明なことを子供が言い、ルナティンは頭痛を感じて頭を押さえた。

「何だそりゃ、謎かけか？ それとも俺をからかっただけか？」

「言葉そのままだ。おまえ、あつたま悪いなあ」

呆れた口調で子供が言い放った。殴りたいのを、ルナティンはぐっところらせる。相手は『子供』だ。

「バツって子供は、半年前からこのラキウスに住み着いてるんだろ？」

どうにか気を落ち着けて訊ねたルナティンに、子供はまたもあつさり頷いた。

「そうだよ。たしかにバツは半年前からここにいる。けど、一カ月前に死んじまつたんだ」

「え？」

ルナティンは相手の顔を見返した。

「何……」

「バツが死んだ時、おれは自分の器からだをなくしたところだった。それじゃ都合が悪いから、ちょうど落っこちてた生きのいい、なりたてはやはやの死体を拝借させてもらったんだ。……不本意ながら」

まるで自分の体を見せびらかすように、子供は両手を拡げて見せた。

「こんなクソちびの体を借りるなんて、このおれともあろう者には落涙ものの悲劇だが、まあ唯一の救いはこいつにそこそこ聖なる力があるってことだな。使い勝手が絶望的に悪いってことはない」

「……頼む、待ってくれ」

混乱しかけた頭を抱え、ルナティンは辛うじて彼に呼びかけた。

「じゃあおまえ……いや、あんた……本当に、『カナン』なのか？」

「くだい！」

ルナティンの問いに、子供が一喝を浴びせる。

「ふん、そこまで疑うのならいいだろう、証拠を見せてやる」

言うなり、寝台の下へ上半身を突っ込むと、王子『かもしれない』
子供はするずる木箱を引っぱり出した。鍵穴に人差し指を触れ、口
の中で小さく何かの詞を唱え。

「 解呪」

最後にそう締めくくると、木箱がカチリと音を立てた。魔法で
施された鍵が開いたらしい。

「どーだ、エイリアの息子ならわかるだろう！」

ビシ！ と彼がルナティンにつきだしたのは黒革表紙の厚い本
だった。まじまじそれを眺めたルナティンは、表紙の右端に貼って
ある深紅のステッカーに、これ以上ないというほど目を睜った。

『 持出厳禁・バーンス宮廷図書蔵別館』

「お、おまツ、これ……！」

「わかったか」

狼狽したルナティンを見遣り、彼は満足そうに言うと、再び丁
寧に木箱へ蓋をした。

先刻の話題にも昇った、宮廷図書蔵の別館と呼ばれる場所。許
可さえあれば、宮廷外の間でも閲覧可能という本館とは別にある、
重要書物や禁忌魔導書ばかり集められた施設だ。

厳重な警備と監視の許、王族の間、しかも国王、もしくは次
期王位継承者、そうでなければ書師の長たる人間のみしか入室が
許されないという、一般には存在すら怪しいといわれている場所だ。
ルナティンがその場所の存在を知っていたのは、エイ
リアが書師長を務めているからだ。

さつきは聞き流してしまっただが、というより信じることなど
きなかったのだが、こうして事実別館に収められてあるべき本を目
の前に突きつけられてしまえば、この子供が正式な手続きを踏んで
別館に立ち入ったことは、ルナティンにも認めざるを得ない。なに
しろ別館の扉には、強い結界すら幾重にも施されているという。お
いそれと賊が入り込めるような場所ではない。

そして目の前にいる子供が、この国の王や自分の母親でないこ

とならば、ルナティンには嫌と言うほどわかるのだ。

（そんな馬鹿な！）

愕然として、ルナティンは子供を見遣った。

どうやったってにわかには信じがたい。ここにいるこの子供が、次期王位継承権第一位を持つ王子『カナン』で、拳げ句こんな子供の死体に移っている、などとは。

（あ……でも）

しかしルナティンは、現カナンについての風評を思い出した。

王家の人間は、普通の人間が持ち得るものより、遙かに強大な聖なる力を動かし白魔法を行使できる。このサンファールの国を興し、この国においてもっとも甚大な守護の力を持つのが主神セイマー。その血を引き、その力を与るのが王族なのだ。

そして現国王の嫡出子であるカナン王子は、その王族特有の強い聖なる力による白の巫術の他、黒の妖術も得意とするという噂がある。その上高度な剣の使い手でもあるらしい。

宮廷騎士団を相手取り剣の試合をしたり、気まぐれに城下に出て国民の病を治癒してみたり、それに飽きれば自室に籠もり怪しげな魔導の実験に走っているという、王族にしては相当に異端な、つまり妙な人間らしい。

噂を聞いたバーンズ城下の民たちは、次代にかなり不安を抱いている。聖なる力を元に発動する白魔法と違い、属性が妖の領域にある魔導というのは、サンファールの法において嚴重に禁じられている類のものなのだ。次期王が黒魔導の使い手だなど、国民が不安がるのも当然だ。

もしも万が一、カナン王子が噂どおりの人種だとしたら、死体の中に入り込むという魔導くらいやってのけても不思議はないのかもしれない。

「わかったようだな」

相手の表情を見て取り、ふふん、と勝ち誇ったように子供はルナティンを見下ろした。

「じゃ……あ……んた、本当に……」

ルナティンはひたすら目を剥き、震える手でその子供を指さす。

「カツ、カナ」

「だからどもるなと言つのに」

「カナン様で、あらせらりっ」

「あらせられますか」

「なのか!？」

「そう!」

カ一杯頷かれ、ルナティンはもはや声も失くした。

(そんな……!!)

愕然と目を見開くルナティンを、子供が悠然と微笑みながら見下ろす。

たしかにこの度を超して高飛車な態度、傲岸不遜な物言いは、ある種の特権階級にいる人間特有のものなのかもしれない。そう考えた瞬間、ルナティンは自分の体中の血が下がる音を聞いたような気がした。

もし本当に彼が『カナン』だとしたら、今までルナティンが取った言動その他、無礼というにもほどがある。不敬もいいところだ。「さあて、我が親愛なるサンファールの民よ」

ルナティンの動揺を見透かしたように、カナンが笑みを浮かべてそれに呼びかけた。

「何かおれに言うべきことはないかな?」

(あ………謝ろう! とにかく誠心誠意!)

嫌味な口調で言外に謝罪を促された時、ルナティンは咄嗟の判断でそう決意して口を開いた。仮にも真にも彼は自国の王子だ。一介の市民である自分など、本来なら同じ目線で言葉を交わすことから許されない立場の人間だ。

が、情けないことに、今さら態度を翻して相手を敬うことが、ルナティンにはどうしてもできなかつた。というよりパニック状態に陥って、頭の中味と行動が一致しなくなってしまったのだ。

結果どうなったかというと、

「どこの世界の王子がこんな辺境のド田舎にたったひとりでいると思う！ しかもそんななりで『カナン』だなんてわかる人間がどうかしてる！ わかるわけないだろうが！」

……怒鳴りつけてしまったのである。

「このっ、大馬鹿者ッ！」

そしてそのルナティンを一喝し、サンファール国の王子はその頭を今度は拳骨で一切の手加減なく殴りつけ、

「たしかにおれは、今こうやってこのクソちびガキの容れ物へ一緒くたになってるがな！ それでも内側から滲み出る気品や溢れ出る優雅さつてもんがあるだろうが！ ぱつと見てわからないか普通！」

無茶苦茶なことを言っている。

「だからそんなもん、わかるわけあるか！ 大体なあ、いくら死体とはいえ人のものだぞ！ 本人の許可なく勝手に取ったら、それは泥棒だ！」

返すルナティンの台詞も、なかなか支離滅裂なものへ成り果てた。泥棒呼ばわりされたのに気分を害したか、バツの『器』が顔をしかめる。

「おれは知らない。直接手を下したのは別の『おれ』だし、バツーの中にこのおれを放り込んだのはまた別の『おれ』だ」

「……はい？」

相手に做うように、ルナティンも手加減なく顔をしかめてしまう。

「何だつて？」

「今のおれには黒の魔導の力はない。力を持っている『おれ』はどこかに行ってしまったからな。ついでにバツーを殺した『おれ』も消息不明だ」

相手にはふざけている素振りもなく、ごくあたりまえの口調で言っている。ルナティンは、完膚なきまでに混乱してしまった。

「悪いけどもう一回言ってくれない？」

「だから、おれ以外の『おれ』はどこかへ行ってしまい、このバツ

「の中にいるのはおれだけってことだ」

「……はあ!？」

自分が馬鹿になってしまったのではなからうか、とルナティンは本気で恐怖した。

さもなければ、この自称王子様の頭の中味が腐っているかのどちらかだ。

「んーと」

『カナン』は、まじめぶって腕を組んでから、口許に手を当てる。

「おれは王族にしては珍しく、黒の方の魔導も使えたんだ。もちろん、お家芸の白魔法も使える。ついでに武術の腕もかなりのものだった」

ルナティンはとりあえず頷いた。何度も耳にした話だ。カナン王子の聖なる力、妖力に匹敵する力の持ち主は滅多にいないだろうとか、剣を使わせれば宮廷騎士団の者ですら一目おくほどの技倆があるとか。

「とにかく普通では考えられないほどの才能を、それぞれにおいてこのおれは有していたというわけだ。ま、言うなればオールマイティ、天才、稀代の超偉人つてところか」

相変わらず平然とした口調でそう言ったカナンに、ルナティンは今度こそ納得した。たしかにこいつは王子様だ。でなければ、こんな凶々しいことを臆面もなく言えるはずがない。

「しかし、やっぱりそれにはだいたい無理があつたんだ」

「無理？」

ルナティンが問い返し、カナンが頷いた。

「ひとつの器に、みつつもの超レベルの才能が入っているってことだろ？ 単なる人間の器ごときにそんな耐性もキャパシティもあるわけがない。そりゃあ、このおれの器ときたら、元々美形揃いの王族の中でもさらに群を抜いた絶世の美貌、我ながら見とれずにはおれないような、存在することすら素晴らしい奇蹟だったけど、おれ

の才能ってやつはその器の奇蹟すらも凌駕していたんだ」

「はあ……」

「仕方なく、おれは能力の数だけ『自分』を分けて、器からひとつずつ出たり入ったりを繰り返して何とか凌いでた。でなければとつくに、器の方が耐えきれずぶっ壊れてただろう」

聞けば聞くほど、ルナティンのカナンに対する評価が固まってくる。

(こいつ、まともな人間じゃねえ)

「そうこうしているうちに、やっぱり破綻してきたんだ。それぞれの『カナン』のやりたいことがまったく違ってたからな。器の取り合いは、そりゃあもう熾烈なものだったよ」

ルナティンは想像してみる。このカナンが、他にふたり。三人が揃って器の取り合いをして……あまり考えたい光景ではないし、そもそもどんな状況なのかも謎だ。

呆れるルナティンの前で、カナンはふと目を伏せた。

「おれは、きちんと国政を学び、国を知り民を知り、王位を継ぐことを誇りと思いたかった。この時代の腐った政治を、おれの手で叩き直したかった」

呟くカナンの表情は、先刻までと打って変わって静かな、真剣なものになっていた。ルナティンは何となく口を噤み、カナンのことをみつめる。

「何が正しくて何が間違っているのかを見極めたかった。世の中には、このおれすらも知らないことが山のようにある。そのひとつひとつをわかって思うんだ。国のこと、世界のこと、人々に宿る聖なる力や神セイマーのこと、心のこと……どれもおれには必要だから」

「……」

再び目を上げたカナンから、目が離せなくなる。

今までとは違う意味で、やはり彼は王子なのだろうと、ルナティンの心は納得できた。カナンの眼差しは強く、口調は真摯だった。彼が嘘や偽りの気持ちを言っているとは思えない。

「けど、もうひとり 黒の力を持ったおれは、魔導を試すことにしか興味がなかった。剣士のおれは、ひたすら腕試しをしたがつて、剣術を極めることしか考えていなかった。それぞれがそれなりに求めるところがあつたんだ、それでは破綻もするだろう」

なるほど、と相槌を打つほかルナティンにはない。

「折り合いのつかなくなつたおれ『たち』は、周囲の人間の不審を思いつきり買ったわけだ。そして父上の命により、城の西にある塔へ幽閉されてしまった」

「幽閉？」

ルナティンは驚いてカナンを見遣つた。

「いいんだ」

そんな相手の表情に気づくと、カナンは思いのほか、穏やかな微笑を作つた。ルナティンが驚くほど優しい笑みだつた。

「そりゃあ、父上の政治は腐りきつていて、あまりよい噂は立たないし実際噂どおりの悪辣非道な方ではあるが、おれに対する愛情はきつと本物だ。父上はおれのことを思つて行動なさつたんだ。挙動不審のおれを、何とかしようとお考えになつたのだと思う。でもかといつて、おとなしく閉じこめられているわけにはいかないんだ」

凜然と言つたカナンに、ルナティンは迂闊にも見惚れてしまつた。

やたら自信と自意識が高いのは、それだけ強い意志と誇りがあるからだろう。そう思えたのだ。

「おれは親としての父上を愛している。王としての誇りを尊敬していた。だからこそ、あの方に立ち直つて欲しい」

「オルジア王に……」

呟きを返したルナティンに、カナンが頷いてみせる。

「そうだ。おまえだつて聞き及んでいるだろう？ 父上 国王の所業を。あの方はもはや狂つておられる。民衆に対する愛情が欠落してしまつた。バーンズは今地獄だ」

カナンが、きゅつと小さく唇を噛んだ。

ルナティンもつられるように眉をひそめた。たしかに、オルジア王の政治は、よいものとは決して言えなかった。彼が王位に即いた頃には、善政を布いて民衆の絶大な支持を得たというが、数年前から少しづつ、何か歯車のようなものが狂い始めていた。身勝手な法律が増え、極度に民の生活を圧迫し、今では少しでも自分の害になると見做した人間、わずかでも叛乱因子と成り得そうな人間を次々に殺していく。虐殺、といって差し支えない方法で。

「まるで妖魔に取り憑かれたかのようだ。次々と罪なき民を殺して……だから、おれは再びバーンズに戻って父上と話し合い、たとえもし術や剣を交え互いに血を流すことになっても、バーンズを平和に導くつもりだった。そう決意したんだ。だからどうにか城を抜け出して　なのに」

わずかに一瞬、カナンの言葉が途切れ、すぐにまた口を開く。

「なのに、あの『おれ』たちときたら……」

言いながら、カナンは拳を震わせ、激昂して顔を歪めた。

「『そんなもんおれの知ったことか』などと吐かしやがった!!」

つまり、破綻はとんだところで『カナン』の弊害となったのだ。全員の力で塔から逃げ果せたまではよかったが、黒魔導士も剣士も城へ戻ろうとはしなかったという。オルジア王の許へ出向こうとしたカナンの意志を無視して、そのまま王都を出てしまった。白魔法士のカナンはもちろん抵抗しようとしたが、何しろ二対一だ。器の主導権を握ることがままならず、とうとうラキウスまで下ってしまった。

「剣士は城から出て逃げ込んだ先、この家のバツィを叩つ斬って、黒魔導士は魔導でその体におれを押し込めて、器のないまま行方を眩ませた。剣士もおれの体を持ってさっさと雲隠れしやがった。おかげでおれはしばらく器の治療に時と力を費やして、それから必死で十二歳の子供を演じる羽目になっちまったんだ。周囲の人間の怪訝な目がかかつてはここにもいられなくなってしまふ。まったく、何の因果で……」

「で、結局こうやってバツの体に居着いたってわけか」

溜息混じりのルナティンの呟きに、カナンは顔を顰めて見せた。「仕方がないじゃないか。おれが今のところ使えるのは白魔法だけなんだ。バツから出ていこうにも、そもそもこの状況を作り出した黒魔導士が術を解呪しないことにはどうしようもないし、替えの器だってない」

それより、とカナンは改めてルナティンを見下ろす。

「おれの正体も知れたところで、そもそも話題に戻すぞ。おまえが言っていた黒魔導士云々ってのは、いったい何のことだ？」

はたと、ルナティンも我に返る。

「そうか……あんたが本当に『カナン』なら、あんたにも話す必要があるのかもしれない」

「本当もクソもあるか。その黒魔導士っていうのは、『おれ』のことなのか？」

「いや、違う。違うと思う。あんたが完全に、なんていうかその、『分裂』したのは最近の話だろ？ あっちの魔導士は、少なくとも一年は前からその存在が確認できるんだから」

言ってから、ルナティンはふと気づいてカナンを見上げた。

「そついや、どうしてあんたはさっさとその魔導士たちを捜しにいかないんだ？ バーンズに戻る気ならそのナリじゃまずいだろつし、それに他のふたりがいた方が有利だろ？」

「あんたあんたと気安く呼ぶな。だから仕方がないんだよ。バツがどうしてもここを離れたがらないんだから」

「……は？」

またしてもカナンの言った意味が理解できず、ルナティンは怪訝に眉をひそめた。

「バツは死んだんだろ？」

「馬鹿者」

ふん、とカナンが、例によって思い切り鼻先で嗤う。

「おれが誰だか知っていて、よくもそんな間の抜けた質問ができる

ものだ。あいつらが黒魔導士・剣士なら、こっちは白魔法士だ。いわば治療のエキスパートだぞ。ちよつと死んだくらいの人間の治療なんて、朝飯前だ。死にっぱなしなんてことがあるもんか」

「な……ん、だつて!？」

ルナティンは立ち上がると、傷の痛みも忘れ、カナンに掴みかからんばかりの勢いで詰め寄る。

「バツ―は生きてるのか!？」

「ん……もーおおつ、いい加減、表に出してよっ!!！」

カナンが突然、ルナティンを凌ぐような大声を上げた。

「こっちはよけいな体内人口殖やして、迷惑被ってるんだよ!？少しは誠意つてものを見せてくれなくちゃ嘘じゃないの!？ちよつと聞いてんのかナン様ツ!!！」

驚きのあまり口を開けたままぽかんとしているルナティンに、少年はようやく気づいたようだった。その方を向いて、

「ルナティンだつてひどいと思うよね！オレを殺したのも助けてくれたのもカナン様なんだ、こっちだつて混乱して当然だよ、少しはいたわってほしいじゃない？なのにカナン様つてば人のこと下男かなんかと勘違いして、掃除も洗濯もなんもかんもオレに押しつけてさあ！昨日なんか自分が気持ちよく風呂に浸かっておいて掃除はオレだよ？あんまりじゃないそれって？あんまりだよねルナティン!!！」

そうわめく少年は、先刻まで自分が話していた人間ではない。

ルナティンはそれを感覚で悟り、結果さらに愕然とした。

「おまえ……!! バツ―か!？」

「うん」

あつさりとバツ―少年は首肯した。

「どついつことなんだ!？」

混乱して声を上げるルナティンに、バツ―が「あそつか」とひとりと頷く。

「説明しなくちゃわかるはずないよね。あのね、オレはたしかに力

ナン様に剣で斬り殺されたんだけどさ。その死体が新鮮すぎて、カナン様が白魔法を使ったら、あっさり生き返っちゃったんだよ」

「反魂の魔法か！？ でもそれは白の力じゃないだろう！」

色めき立ってルナティンは問い返した。死者の魂を呼び戻す術なら、黒の領域、最大級の禁忌魔法だ。

不審を覚えるルナティンに、バツーが首を横に振って見せた。

「反魂なんて大したものじゃなくて、単に死んであんまり時間が経ってなかったから、魂がそもそも昇天してなかったみたい。仮死状態だったんじゃないの？ んで、簡単に体に戻れたわけ。戻ってみたらみただ、何か違う人も中にいたから驚いたけど。 あーはいはいうるさいなあもおわかってるよ、カナン様の力がすごかったおかげだろ？ いちいち感謝を強要しないでよ、こっちだって被害者なんだから……えーとだからこの体には本来の所有者であるところのバツー、つまりオレと、それからカナン様が入ってるってこと」

ルナティンの脳裡に、寄生虫のイメージが瞬間的に浮かび上がったが、そんなことを口にしようものならすぐさま乱暴者の王子様がバツー少年の意識を押し退けて自分をぶん殴りに顔を出すことが目に見えていたので、あえて黙っていた。

(でも……そうか、じゃあこいつが)

今この少年から感じられる波動には覚えがある。彼こそが、自分の傷を治すために白魔法を使った人間だ。ルナティンはそう理解した。

これで状況は振り出しに戻った。

「バツー」

ルナティンは真剣な面持ちになると、バツーに呼びかけた。

「俺は、おまえに会いにやってきたんだ」

「……」

急にまじめな顔になったルナティンに、バツーも神秘的な表情で応じる。

「うん、何？」

「この傷」

ルナティンは上着の前をはだけて、胸をバツーに見せた。

白い包帯が生々しい。その下にひどい太刀傷が刻まれていたことは、もちろんバツーも知っているはずだ。

うん、とバツーがもう一度頷き。

「バーンズの騎士団にやられたんじゃないかって、カナン様が言っていた」

「そうだ」

ルナティンも頷きを返す。

バーンズの騎士団。王都バーンズの守備を司る、サンファールの要にして最強の宮廷騎士団だ。

「バツー、おまえは、シノンの息子だな？」

ルナティンの問いに、バツーの瞳が微妙に揺れた。ルナティンはそれを肯定と受け取る。

「何で……ルナティンがオレのお父さんを知ってるの？」

「俺は、ある人に頼まれて、パラスへ使者として向かった」

ルナティンはバツーの顔を覗き込み、バツーがわずかに緊張した面持ちで頷きを返す。

「行ってみてわかったが、パラスの有様はバーンズの比じゃなかった」

その国の状況を思い出し、ルナティンは我知らず苦い顔つきになった。

「ひどいもんだった。妖霊が跋扈していて、空気すら暗褐色のようにな……」

第三章『閉ざされた国』（1）

バーンズからしばらくは馬で走った。

パラスはサンファール北端の町から、山脈ひとつを越えた場所に位置する国だ。一週間進んだのち、ルナティンは国境沿いのトーヤ山中腹で馬を預け、その先の行程を徒歩に変えた。

そうそう険しい山ではなかったし、子供の頃何度か登っていて馴染みがあったから、予定どおりの日程でパラス最南端の町へ到着した。

その辺りで、ルナティンは奇妙な違和感を覚えていた。

妖霊の気配が、そこかしこでするのだ。

ルナティンは『聖なる力』の持ち主ではあったが、洗礼も受けておらず、術者としての一存在階級《クラスが低いので、妖霊の姿そのものを見ることはできない。ただ妖霊や、精霊の気配を察知するのがせいぜいだった。

自然から生まれたものの多くには、聖なる力を帯びた精霊が宿っている。もしくは精霊とは、聖なる力を具現化した、力そのものだともされている。

『聖教典』の教えによれば、精霊の宿った樹や花や石などが多くあれば、人は心平らげく健やかに過ごすことができ、精霊により聖の力を帯びた様々なものが集まって、聖域と呼ばれる場ができる。そこから新たに生まれ、生み出されしものは聖霊と呼ばれて人や物の守護になり、さらなる福音をもたらすという。

対して妖霊は人の邪念を好みその気に寄り憑き、力を蓄えて災いを喚ぶ。妖霊の好物は聖なる力だ。妖気は精霊や人の聖の領域にある力を喰い潰し、その気を邪に変え自らの力とする。それを払うことのできる唯一の存在もまた、聖なる力のみ。

人にとって、聖なる力とは、邪悪を排する力とも邪悪を取り込む礎ともなる。妖霊が育てば邪霊に変わる。そうなるとすでに、神か

ら強大な力を授かる洗礼者にしか退けることができない。

その町は、妖霊の気配が強すぎた。不審に思ったルナティンは、とりあえず落ち着いた先の、宿屋の主人に訊ねてみることにした。

「この町には、祭司はいないの？」

「おりますが」

宿屋一階に店を構えた酒場。

いくつかのテーブルとカウンターを囲んで、十人前後の男たちと女が酒を飲んでた。

ルナティンは、ひとり座るテーブルへ食事を運んできた主人の答えに、さらに不審を覚えた。

祭司は、町の中心部に必ずひとつある教会で、町の守護を司っている。精霊を護り妖霊を排する力を持つ祭司は、何カ所かの聖域を選び、そこへ結界を作り出すのが務めだ。それにより邪な霊は退けられるはずなのに。

「祭司がいて、どうして結界も張ってないんだ……」

ひとりごとに近いルナティンの問いに、主人は笑いを返してきた。「そんな馬鹿なことがあるわけじゃないでしょう、お若いお客さん。この町には、立派な祭司さまがちゃあんと結界を張って下すってますよ。その証拠に、妖霊のひとつも出入りしてない、よい町でしょう」

「妖霊がない？ いや、だって」

「よう美人の兄ちゃん！ そんなつまんねえ話なんてしてないで、こつちに来て飲まないか！」

反論を試みたルナティンは、唐突に首へ回された太い腕に、ぎよつと振り返った。間近に、商人らしい風情の男の横顔があった。

「うわ、何だよおっさ……」

「悪いことは言わない。この町から……、この国で無事に暮らしていきたくしたら、よけいな口はきかないことだ」

「！」

素早く耳打ちしてきた男を、ルナティンは驚愕して見上げた。

目が合うと、男はすぐに陽気な笑みを浮かべて、ほとんど強引に

ルナティンを座っていた椅子から引つ張り上げた。

「ほらっ、新顔だ！ パーツといこうぜ！」

男がルナティンを引き摺りながら、店内に向かって叫ぶと、四五人いた客たちが揃って歓声を上げた。

「おい親父、酒追加！」

「よし坊や、たつぷり飲ましてやつから覚悟しろよ？」

脳天気なはしゃぎぶり。その店に馴染んだような様子から、おそらくこの界隈の住民たちだろうが、その姿はとも妖霊がまとわりつく町の人間のものとも思えなかった。男に背中を押されてその輪に加わりながら、ルナティンはひとりうろたえた。

「お、おい、いったい……」

「いいから、余分なことを口走らずに、黙って酒でも飲んでな」

再び小声で忠告した男に、ルナティンはふと気がついた。男の言葉には、かすかなサンファールの響きがあったのだ。隣接したサンファールとパラスの国の言語に基本的な違いはないが、細かなイントネーションが違う。

(こいつ、サンファールの?)

そんなことを気にしたのは最初の頃だけで、元来酒好きの上お調子者なルナティンは、男に乘せられたこともあっていいだけ酔っぱらった。この町に対する違和感も、男の正体についても、すっかり忘れて明け方近くまで酒盛りに興じ、どこをどうやって歩いたのか、気がついた時には宿屋の一室の寝台で横になっていた。

目が覚めたのはすでに正午近く、ルナティンは慌てて出発の支度をした。用のあるパラスの都市リマリヤへは、その町から優に一週間にかかる。この日の昼下がりには、次の町に辿り着く予定だったのだ。

それでもルナティンはどうにか昨晚のことを思い出し、男の姿を捜して宿の中や酒場を歩き回った。だが宿屋の主人に聞けば、男はすでにどこかへ発ってしまったあとで、結局「サンファールからやってきた旅商人」『らしい』ことしかわからなかった。

諦めて自分も宿をあとにしたルナティンは、道を進む内、違和感を昨日よりもさらに募らせた。リマリヤへと続く森の中へ足を踏み入れた時には、それは誤魔化しようもないほど強烈な感覚になっていた。

ルナティンの覚えている限りでは、その森には、細いが人為的な道が存在していたはずだ。だが、その道は高い雑草に埋もれて隠れてしまっている。ルナティンは記憶を頼りに、鬱蒼と茂る木々と草を掻き分け、森を進んだ。

パラスは常春の国、美しい自然を賞でにやってくる旅人や詩人も多い。最も美しい花の都、リマリヤへ向かうためにこの森を通る人間はあとを絶たない。が、人影は、その時ルナティンのものしか見あたらなかった。

旅人に、木蔭と涼風を与え、木々の精霊が疲れを癒やしてくれるはずの優しい森だ。しかし吹きつけてくるのは、涼風というより冷風、寒風に近かった。風は木立の間をぬい、唸るような音を上げている。

道沿いに進んで、男の足なら一時間足らずで抜けられる森なのだ。それなのに、ルナティンがどれだけ歩いてても光が見えなかった。木洩れ日すらその姿を覗かせることがない。ランプを掲げなくては、危なくて歩くこともままならないような有様だった。そして妖霊の気配は、森を深く進むにつれて、増してゆくばかり。

思っていた時間の倍ほどを歩いてても、ルナティンの行く手を阻むように生い茂る植物たちは、途切れることすら知らなかった。

少し休もう、そう決めて足取りを止めた瞬間、懐に入れておいた守護石が悲鳴を上げるように激しく軋み、砕けてしまった。出発前に母親エイリアから授かった、バーンズ城直轄の大神殿御謹製である聖なるアミュレットの石が。

(これは……)

小袋の中で光を失い、砕け散ったアミュレットを見降ろして、ルナティンは眉根を寄せた。

白魔法を使えないルナティンは、アミュレットと共に妖霊からの防禦手段をも失ったのだ。途端に激しい頭痛と嘔吐感に見舞われる。それでも何とかよろよろと歩き続けたが、足がもつれて草地に膝をつき、ひとけのない森の中で、ルナティンはとうとう動けなくなってしまうた。

(まずいな……)

焦る気持ちとは裏腹に、地へ伏した体は痺れたように動かない。元々、ルナティンは妖霊の気配に敏感なたちだった。母エイリアはもちろん、すでに亡くなったという顔も名も知らない父方の血統にも、聖なる力が入っていたらしい。その両方の血を確実に受け継ぎ、ルナティンが持ち得る力はそれなりに強かった。

(くそ、こんなことなら、結界を張る呪文のひとつでも覚えときゃよかった)

声を出す気力もなく、ルナティンは内心でそう舌打ちした。

幼少の頃、息子に自分と同じく強い力を感じ取ったエイリアは、王都で修行をすることは自分の立場上できないが、どこか他の町で神殿に入ってみるかと思ねてきた。そして、ルナティンは「面倒だからいい」と至極わかりやすい理由で断った。

十四歳になった時、バーンズの隣の祭司がスカウトに来たが(それは実に名誉なことであつたにも関わらず)、ルナティンは以前と同じ理由で丁重にお断りした。

十六歳になった今年で一般教養学校を卒業し、以来その上級学校に進むことも、定職に就くこともなく、フラフラとその日の糧を得るために仕事をしては遊び歩くという生活を続け、放埒家の名をほしいままにしていたのだ。

気づくと、妖霊の気配がルナティンの頭上まで迫っていた。

感覚が強いだけで、妖霊を浄化することも捕縛することも払うことすらできないルナティンは、その邪念を全身に受け、さすがに危機感を抱いた。ルナティンの指向性のない聖なる力など、妖霊たちには格好の餌だ。このままでいれば心ごと乗っ取られて、妖魔に変

容してしまうかもしれない。そうやって、他の者を襲い始める人間の話は聞いたことがある。

一度妖の領域へ足を踏み入れてしまえば、そこから抜け出すことは容易ではない。大抵は、自分を失くして完全な魔族へと生まれ変わるか、運がよくて聖職者に浄化される、つまり存在そのものを失うことが『できる』かだ。

(妖魔になるなんて、冗談じゃない)

意識がなくなればもう終わりだ。しかしルナティンには、すでに森を抜ける元気も、立ち上がる力すら残っていない。

(そのくらいだったら)

痺れた腕で荷物を探る。護身用のナイフが入っているはずだ。短刀などで胸を突いて死ぬのは難しいだろうしそりゃあ痛くて苦しいだろうが、仮にも稀代の巫女と謳われた母の名を汚すよりはよほどましだった。

短刀を探り出し、その柄を握り、目を閉じる。ぎりぎりまでは頑張るつもりだ。でも、覚悟は決めておかなければ、一瞬の迷いで取り返しのつかないことになる。

(母さん、情けない息子で勘弁な)
と。

「……え？」

瞑った瞼、瞳の奥にふつと光が射し込んできて、驚いたルナティンは目を開けた。

「眠るのは寝台の上だけにしとけよ坊主、風邪ひくぜ」

からかうような声のあと、辺りへ高らかに言葉が響いた。

「主は我が守護者、我が神は我が避処、我は神に因りて望みを抱く」
男の右手には鈍く光を放つ石が握られていた。おそらく精霊の宿る石。

ルナティンが目を睜る先で、まるで石が膨張するようにその光は増し、音を立てて辺りへ広がった。

「光刃、光輪、我が佑けとなりて闇を払い、邪悪を討て！」

ルナティンはまぶしさに目を瞑り、瞼に灼きついた光が薄まる頃には、体を押さえつけるような重苦しい邪霊の気配がなくなっていた。あつという間のことだ。男の力にルナティンは驚いた。
(払ったわけじゃない)

浄化されたのだ。

「……おっさん……」

ルナティンは二重の驚きを隠しきれずに男に呼びかけた。助けてくれたのは、昨夜酒場で会ったあの男だったのだ。

「おいおい、命の恩人に向かっておっさんはないだろう」

「おっさん、それって詐欺じゃねえ……？ どう見たってあんた、聖なる力を持つてる人間には見えないって……」

動けない体のまま、ルナティンはへらへらと笑った。体を蝕む瘴気と吐き気は消えていたが、相変わらず手足が痺れている。

男はかなりの長身で、がっしりした筋肉が服の上からでもわかった。着ているのは商人が身につけるような服。腰には護身用の大太刀がぶら下がり、背中には旅商人が持ち歩く木箱。これではどう見たってただの商人、無理して剣士も兼ねた商人といったところだ。

しかし、妖霊を払うだけでも捕縛するだけでもなく、精霊との契約もなしに石ひとつを媒介として一気に浄化させられるなど、相当な力の持ち主と見て間違いない。

「商人？ 剣士？ 両方？」

男に上半身を起こしてもらいながら、ルナティンは先刻のお返しとばかり、からかい口調で訊ねてみた。

「いや。さすらいの聖神官だ」

男が極めてまじめな口調で言い、ルナティンはそのまま後ろにひっくり返りそうになった。

「おいこら、大丈夫か坊主」

「ぜんっぜん、信憑性がないって言うていい？」

「なくてもそうなんだから仕方ないだろ」

立たせてもらったはいいが、ルナティンは自力で立ち続けること

ができずに、仕方なく木の根本へ腰を下ろした。男を見上げる。

「そもそも、何で神職にある人間がこんなところにいるんだよ。おっさんサンファールの人間だろ？ 神官、しかも聖神官ってなら、バーンズの大神殿に仕えるのが筋つてもんじゃないか」

「そう、バーンズの聖神官シノンといえば、俺のことだよ」

「胡散臭え……」

ルナティンは、言葉どおりの表情で男、シノンを見上げた。

神官レベルになると、町の教会ではなく国に点在する神殿で神事を執り行うのが普通だ。上級の神学校で学び、決められた厳しい修行をこなし、与えられた試練を受け初めて選別の儀式に参加できるという。ある程度の聖なる力があれば比較的楽になれる祭司とは違い、神官の大抵は幼少の頃から正規の教育を受けた、いわばキャリア組のような存在だ。

祭司から経験を積んで神官になる者も稀にあるが、男は神職者にしては未だ若く、三十代後半か四十代前半程度に見えるので、おそらく幼い頃から神学校で学んだ口だろう。それも、聖神官を名乗っている。

通常、祭司は神官が選別する。

神官は上級神官が選別する。

上級神官は聖神官が選別する。

そして聖神官は、セイマー神の力を直接受け継ぐとされるサンファール国の王自らが選別し、国王を介して洗礼を受けたほんの一握りの人間だけにしか名乗りを許されない、異常に倍率の高い職業なのだ。

ルナティンが見たことのある下級の神官すら、すでに七十の老齢を迎えた、しわしわの歳寄りだった。それがこの若さで、よりによって聖神官。胡散臭いの一言だ。

男はルナティンの胡乱げな目つきに向かって、にやりと笑った。

「ちよつとばかりわけありでな。しかしおまえさんこそ無茶やらかすじゃないか。見たところ、聖なる力を持つてはいるようだが、防

禦機能までは持ち合わせてないんじゃないか？ それでこの森に入るなんて自殺行為だぞ。やたら強い邪気が集まってきたのに俺が気づいて飛んでこなきゃ、今頃おまえさん、妖霊の餌食だ」

「んなこと言っただって、俺、昔もここ通って無事にリマリヤまで行けたんだぜ？」

「何年前の話をしてるんだ。今現在の、この汚濁した空気がわからないのか？ 妖霊や邪霊がうじゃうじゃしてるだろう」

「邪霊まで……！？」

ルナティンは愕然と呟いた。たしかに、あまりにひどい邪気は感じた。だが、森という、普通ならば精霊が数多く宿るはずの場所で、邪霊まで跋扈しているとは。

特にこの森は、リマリヤへと至る重要な道筋だ。人の出入りが多いはずの場所へは、結界が張られ、妖霊すら入り込めないのが常識ではないか。

王都の大神殿では、全国に散らばる神殿、教会を統括し、妖霊の動きを監視している。祭司レベルでは対抗できない妖霊が発生した場合、ましてや邪霊の存在が確認されれば、すぐさま大神殿まで報告する義務が、祭司たちにはあるのだ。

パラスの守護神は女神メリイサ。

主神は違えど、サンファールとパラスのシステムはほぼ同じはずだ。その上で、邪霊の存在があるとなれば。

「祭司は何をやってるんだ……」

ルナティンは、宿屋の主人の言葉を思い出す。祭司はきちんと結界を張っていると言っていた。あんなに激しい邪気、妖霊の気配が満ちていたというのに。

「たしかこの森を戻ったところにひとつ、教会があったはずだよな。様子を見てきた方がいいんじゃないのか？」

国境を越えた管轄外とはいえ、聖職者として見過ごせるものでもないだろう。そう思っただけでルナティンが言うと、シノンは少し眉根を寄せてルナティンを見返した。

「祭司はいるし、教会もちゃんとしている。祭司は毎日聖域に赴いては、結界を張るための祭壇を整えていた。様子ならとつくに見てきたんだよ」

「だって、結界は」

「張られているんだ。いや、張られているはずなんだ。聖域が不浄の場所ではなく、オルターに捧げられるのが正しく聖の気を帯びたものであるのなら」

「え？」

問い返し、ルナティンは表情を曇らせる。

誤ったオルターを整え、穢れた地に毎日結界を張ろうとする祭司。

「なら、祭司が狂っているのか……？」

ルナティンに、シノンが静かに首を振った。

「いや。祭司が狂っているわけじゃない。それならば町の他の人間が気づくはずだ。あの町は、誰ひとりとして自分たちの守護を疑ってはいない。狂っているのは、町そのものだ」

「」

ルナティンは返す言葉を失くした。

シノンの言うことが信じられなかったわけではない。町へはびこる邪気。それに気づくふうもなかった昨日の宿の主人や、客たちの様子。そしてこの森の現状。考え合わせれば、どうしてもシノンの言葉が否定できなくなってしまったのだ。

「どうということなんだ？」

ルナティンは、どうにか乾いた声で呟いた。

「こんな話聞いたことない。町そのものが妖霊に侵されるなんて、ありえるのか？　だって聖なる力は最終的に妖の力を打ち破ることができるはずだろう？」 『聖教典』がある限り」

ルナティンが言うと、シノンが溜息を返した。

「そうか……未だサンファールの民は気づいていないのか……」

ひとりごちるような男に、ルナティンは首を傾げながら訊ねた。

「何の話？」

「いや、まあ、そうだな……。この現状を見ているおまえさんに、今さら隠し立てしても仕方がなかるう」

「だから何」

「『闇教典』のことは知っているか？」

「『闇教典』……？」

ルナティンはおうむ返しに呟いた。聞き覚えはたしかにある。昔に、エイリアからその名は聞いていた。

「まさか」

嫌な予感を覚えて、ルナティンはシノンを見上げる。シノンは苦い顔つきをしていた。

「あれが見つかっていったというんじゃないだろうな！？」

思わず声を荒らげて訊ねたルナティンは、シノンが頷いたのを見て慄然とした。

『聖教典』と対になる『闇教典』。

人々へ、聖なる光と安らぎをもたらすための教えがすべて記された書。聖職に就く人間が必ず右手に携えると言われる『聖教典』。

が。

人々に邪心と争い、不信腐心をもたらす邪悪な呪術が記された『闇教典』。

黒の魔導士が持つ呪術書はいくらかある。大抵は禁忌となつて、宮廷図書館へ保管あるいは封印、場合によっては術で焼き捨てられる決まりだ。取り締まる国の目を盗んでそれらを手にするのは、ひたすら裏街道を突つ走る、根性のある魔導士くらいだろう。

大抵の魔導書は、妖力を持つ人間のために闇の魔導。たとえば人を傷つけ、滅ぼしたり、この世にあり得ない生物を作り出し自分に服従させるような。を行う方法を記したものだ。

だが闇教典は、他のどんな魔導書とも違う。

人から、そして世界から光を消し去り、安らぎを奪つためのシステムそのものが記されているというのだ。

いつ生み出されたのか、誰がその存在を伝えたのか知る者のない

闇教典は、実物が世に出ることなく、名前だけが忌み怖れられながら今まで語り継がれてきた。どこにその書があるのか、果たして本当にあるものなのか。誰も知らないから、人々は心の平穩を保ってきた。

だがしかし、闇教典が本当に存在するとなれば。

「おい……それって、かなりやばいんじゃないか？」

「ああ。やばいんだよ」

顔色を失くすルナティンに、シノンが困ったように頷いた。

「俺も、その噂を聞いたのはほんの一年ほど前なんだ。魔導士の裏ネットワークから入手した情報なんだがな」

「ちよつと待ておっさん、何で神職にいるヤツが、魔導士のネットワークを知ってるんだよ」

「そこはそれ、ほら蛇の道は蛇とか言うじゃないか」

「それちよつと違うんじゃない」

「やかましい、いいから聞け。それで、噂を確かめるためにバーンズの神殿では調査に乗り出したんだ。そのうちに、どうも噂が下ってくるのは北の方から、つまりパラスが臭いつてことになってな」

「この国が……」

「そう。バーンズの神殿に対するパラスの態度が、急に素っ気なくなつたのも気になつた。年に数度行われるはずだった神殿の研究会や報告会が、何だかんだとあちらさんの都合で潰れたり、まあ先触れはいくつかあつたんだ」

「……」

「だから、俺は可愛いひとり息子もほつばいてこの国へ出張だ。まだ十をいくつか過ぎたばかりだつてのに」

「一年も？」

立っている男を見上げる格好で、ルナティンは訊ねた。男が苦笑する。

「まさかこんな事態になるとは思ってなかったのさ。パラスの神殿に何度か使者を出したが、まるで取り合ってくれなかった。よけい

な口出しは内政干渉と見做す、なんて言われたらこっちにこり押し
のしようはない。仕方なく極秘裏にパラスへ調査を差し向けること
になって、選ばれたのが聖神官の中でも、ま、最も若く優秀なこの
俺ってことだ。目立つとまずいんで、お供もないひとり旅だよ」

「で？」

「で、もう国中を歩き回ってる。実態がまるで掴めないんだ。この
国が妙だつてのはわかる。この町だけじゃなく、同じような状況の
場所をいくつも見たが、それが闇教典のせいかどうかは確かめるこ
とができないん。ただこの数カ月での大気の腐蝕がひどくてな。瘴
気が渦巻いているのすら目に見えるほどだ。だからもつと人手を寄
越してもらおうと、何度かバーンズの神殿に手紙を書いたんだが…
…」

「邪霊かなんかに阻まれたとか？」

「いや、それなら問題は　まああるが、障害はそれだけじゃなか
つたんだ」

男は表情を曇らせた。

「俺だつてこれでも聖神官だ。そこらの妖霊邪霊なんて、ものとも
しない自信はある。実際手紙には強力なシールドをかけたさ。半端
な妖力なら跳ね返す程度のな。だが、邪魔をしたのはパラスの郵便
屋さんだ。ここでは人間も妖霊の手先だ。誰にも自覚がないんだ。
祭司と同じように」

ルナティンもシノンと同じような顔になった。

「なるほど、それで昨日の態度か……」

「ああ。だから彼らは妖力に対して何の違和感も感じないし、こっ
ちが下手に事実を告げようものなら、町総出で袋叩きなんて憂き目
に遭いそうになったこともある。仕方なく、俺はこっやってひとり
で町々を巡って調査してるってわけだ」

「でも俺の感触だけど……町の人たちが魔物に変わったってことも
なさそうだよな？」

ルナティンにシノンが頷く。

「刺激を与えなければおかしな反応はないし、いたって普通の生活を続けてる。だからかえって、それがおかしいんだ。なぜ、この瘴気に満ちた町の中で人が平然として暮らしていけるのか」

「たしかに……」

ある意味、人々はすでに妖の領域に位置しているというのだろうか。

「でもさ、こんなに大変なことになってるんだから、手紙なんて回りくどいことしてないで、おっさんが一度バーンズへ直接戻ってみればいいんじゃないか？」

ルナティンが、何でこんな簡単なことに気づかないのかと訊ねてみたら、シノンは困ったような顔になり、右手でつるりと顎を撫でた。

「俺もそう思う。けど、山が越えられないんだ」

「山？ トーヤ山？」

そうだ、とシノンは困ったままの顔で頷いた。

「何度登っても、サンファールに降りたつもりがまたパラスに着いてるんだ。どんなに気をつけても、目印をつけてみても無駄で、おそらく強力な目眩ましの術がかかっているらしい」

「なっさけねえな、おっさん、腐ってもバーンズの聖神官だろ。そんなくらいに術、ぱーっと破っちゃえよ」

「無茶言いなさんな。並の力じゃないんだぞ。何たって、術の気配がないんだからな」

「気配がない？」

「山のどこからアプローチをかけても、結果は同じだ。ってことは山脈全体、下手すると国境を取り囲むように何かしらの結界のようなものが張られているのかもしれない。船で海に出てみても同じことだったからな」

パラスは一方をサンファールへ通じる山脈に、一方を広大な樹海に、残りを海に囲まれている。樹海はよほどの重装備をしても渡り切るのが難しく、しかも辿り着く先は生きた人間のいないという死

の国、ラムダ。

山も海も道先が塞がれていれば、たしかにこのパラスからバーンズへ戻る手段はない。

そしてそれだけの大がかりな術なら、行使される妖力も常識では測りきれないほどの大きさであるはずだ。

「白魔法で作った結界なら、悪しきものを排除しても、同じ聖の属性にある力を拒むはずがない。だからこれは、おそらく黒の方の力で作り出したものだ。そして黒の魔導で起こした結界ならどこかに力場ベースがなくちゃおかしい。それなのにその場所の特定すらできないんだ」

「特定できないって……」

「少なくとも、俺がこの国へ来る前に神殿から出した使者はきちんとバーンズまで戻ってきているから、術が施されたのはそのあとだろうな。それはわかる。だが、そこまでだ」

苦り切った顔でシノンが説明する。

「誰が、何のために、どうやって作った結界なのかわからないから解呪のしようがない」

「じゃあ、ひよっとして俺もここを出られないとか……」

「かもな」

あっさりと言ったのけたシノンに、ルナティンはカッとなって喰ってかかった。

「そんな！ 一生バーンズに帰れないなんて、冗談じゃないぞ！」

「ああ、冗談じゃないんだ」

わめくルナティンとは対照的に、シノンは落ち着いた口調で諭すように言った。

「いいか、坊主。これは冗談ごとなんかじゃない。現実だ。だつたら、わめき立てる前に冷静になつて対処法を考えろ。感覚ばかり強くつて自分の防禦手段すら持たないガキが騒いだところで、何の得るところがある？ わかつたら落ち着け。よく考えろ」

ルナティンはシノンに肩を叩かれて、軽く唇を噛んだまま頷いた。

彼の言うことはまったくの正論だった。

シノン は笑ったようだった。

「よし、さすが男の子だ」

「子供扱いするなよ。俺は坊主でもガキでもない、ルナティンだ」

ムツとして言い返すと、シノンがふと妙な顔つきになった。まじまじルナティンを見下ろし、その名前を口の中で繰り返す。

「ルナティン……」

「何だよ」

その反応に怪訝になりかけたルナティンは、ふと思いついてシノンを見返した。

「もしかして、聖神官ってことはおっさん、いつもならバーンズの神殿にいるんだよな」

「ああ」

「じゃ……知ってるのか？」

「……。そういうえば、髪や瞳の色が同じだな。顔立ちもよく似ている。エイリアも綺麗な姿をしていた」

シノンはルナティンの煉瓦色の髪と瞳を見下ろし、目許を和ませた。

「まさかこんなところで会えるとは思っていなかったよ。おまえさんはまあ覚えていないだろうが、ほんの小さな赤ん坊の頃のルナティンを、俺は知っているんだぜ。そうか、あの時の坊主か。大きくなつたもんだ」

思いがけなく昔の自分を知っていた人間に会って、ルナティンはそこはかとなく面映ゆい心地になった。

「母さんとおっさんは、親しかった？」

「エイリアが書師になって以来、滅多に顔を会わすことも少なくなつただけだな。彼女が神殿の巫女だった頃にはよく話をしたよ。あれだけの美人だったから、神官たちもこぞって彼女の気を引こうと必死でな。神に仕える人間が不謹慎なことだが、あれほど綺麗で優しい心を持つ人間だったら、誰だって惹かれる」

「……」

「エイリアは元気か？ サンファールを発つ前から、会う機会もなかった」

「さあ。病気だつて報せはこないから、元気だと思うよ。俺もこしばらく会つてないんだ。滅多に……まあ、会えないもんでさ」

「そうか。そうだったな」

シノンにはばんぼんと、母親譲りの髪の色を持つルナティンの頭を叩いた。

「俺にも息子がひとりいるんだ。今年十二になったはずだから、おまえさんよりもうちよつと坊主だな。バツって名の、めつぼう明るい子だよ。もう一年会つてないがな」

「そっか。元気だいいな」

笑つて頷くと、シノンはそのまま地に腰を下ろすルナティンの前へ膝を落とした。口の中で何かを呟き、次第にルナティンの体に宿つた不快感が消えていく。白魔法で、妖霊の邪氣に中毒あたつたルナティンの体を癒やしてくれたのだろう。

「さつすが、腐つても聖神官、詐欺師でも白魔法士。楽になつたよ、ありがと」

「だーれが詐欺師か。とりあえず、この森を抜けよう。また妖霊たちが寄つてきた。たからせないようにするのも体力を使うんでな、結界を張るより逃げた方が早い」

シノンに手を貸してもらい、ルナティンは立ち上がった。

「聖神官なら、妖霊の姿が見える？」

「いや、そうはつきりとは見えないな。どれも形を作れるほどには大した力を持つているわけじゃない。ただ、数が半端じゃないから澱みがひどいんだ。おまえさん、見えなくて正解かもしれないぞ」

妖霊にしる精霊にしる、強い力を持つ存在ほどその姿が明瞭になる。見る側の力が強ければなおさらだ。力が強くなるにつれて人型に近く、完全な人型となれば高い知能も持つ。人間と同じ言葉を話すものもあるという。シノンの話では、パラスに蔓延っているのは

ほとんどが力の強くない妖霊たちで、しかし精霊の数を遙かに凌駕しているため、どんどん空気が汚濁していつているらしい。

「早い処置が必要なんだがな……」

呟くようにシノンが言った。

それから、ルナティンはシノンに導かれ、どうにか森を抜けた。

そのままリマリヤへ向かうほどには力が残っていなかったため、その途中にある小さな村で宿を取り、ふたりでそこへ落ち着いた。

「ところで、おまえさんはどうしてパラスまでやってきたんだ？」

宿屋には他に旅人の姿もなく、どこか閑散としていた。その部屋の中で、シノンが寝台へ寝ころぶルナティンに訊ねた。

「人に頼まれて、リマリヤまでお届けもの」

ルナティンは寝台に載っている自分の荷物を叩いてみせた。

「俺も中味は知らないんだけど。ただリマリヤのガドナーって人に必ず手渡してくれって、頼まれたんだ」

「ガドナー……？」

ふと、シノンが怪訝な顔をした。

「何だよおっさん、知り合いか？」

「知り合いではないが、知ってる。リマリヤのガドナーっておまえ、その筋じゃ有名な黒魔導士だぞ」

「……は？」

ルナティンは寝台に起き上がり、鞆を見下ろした。

依頼主からはもちろん、そんなことを知らされてなどいない。ただこれを「大事なものだから、決して封を開かずに届けて欲しい」と言われただけだ。

「おい坊主、そんなこと、いったいどこの誰に頼まれたんだ？」

「イクサの祭司さまからだけど」

「バーンズの隣町の？ レンか？」

「知ってんの？」

「ああ、こつちこそ真正銘の知り合いだ。同期だったからな、神学校の」

「同期？ だってレン様って、その……あんたみたいな聖神官とは違って、こう言っちゃ何だけど、町の教会にいるような……」

「レンは優秀な白魔法士だ。ただ、理想が高すぎて神殿とは肌が合わなかったみたいだな」

シノンも、ルナティンの鞆を見下ろした。

「自分の無力さを自分で責め立てるような人間だった。神殿に居て何ができるのかと任官を拒んだが、それでも何をしないわけにもいかなかったんだろう。イクサのような小さな町に祭司としてとどまるのは、レン本人が望んだことだ」

「そっか……レン様はすごく優しい人で、二年くらい前に、自分のとこで祭司になるための修行を積まなかったって声をかけてくれたんだ。俺が断っちゃってからも色々力になってくれてさ」

父親のようだと、ルナティンはいつも思っていた。

エイリアに会うことは思うようにできず、祖父母が死んで以来、ひとりで暮らしていくのはやはり淋しかった。イクサの教会に行けば、穏やかなレン祭司がいつも優しく出迎えてくれる。それが嬉しくて、ルナティンは何度もその場所へ足を運んだ。

父親を知らないルナティンは、もし自分にその存在があれば、きっとこんな人だろうと想像していたのだ。

「そのレンが、いったいガドナーに何の用があるっていうんだ？」

シノンは考え込むような顔になった。

「仮にも祭司が、子供を使者に立てて、黒魔導士へ何の届け物をする必要がある」

呟くと、シノンは大股にルナティンのいる寝台へ近づき、ひよいとその鞆を持ち上げた。

「推測だけじゃらんちがあかん。開けてみよう」

「ちよっと待てよ、勝手に開けちゃまずいって！ 開封しちゃ駄目

だつて言われてるし、他人様のものだぞ！」

慌てて制止しようとしたルナティンの声も無視して、シノンはさつさと鞆に手を突っ込んで中を探った。

「あ、ひつでー！ 聖職者のくせに、信じらんない！」

ぎゃあぎゃああと文句を並べ立てるルナティンが無視して、シノンが取り出した木箱をじつと見つめた。

「シールドされてるな」

「だからあ、開けちゃ駄目だと」

「よし、解呪してみよう」

「おいこら、おっさん！」

シノンはルナティンに構わず、封印された木箱を開こうと、呪文を唱え始めた。ぼんやりとその指先から白い光が湧き起こる。シノンがそつと指を木箱に近づけた瞬間、

「！」

パチツと弾ける音がして、木箱と触れ合った指から火花が散った。シノンが軽く舌打ちする。

「強力だな」

ルナティンはシノンを止めるのをやめ、その様子を見守ってしまった。聖神官であるシノンにすら、容易に解けないシールドの魔法がかかった品物。その中味が何なのか、つい興味を抱いたのだ。

もう一度解呪を試みたシノンにより、木箱が開かれた。

「……何だった？」

シノンはしばらくはこの中味を眺めると、そのままもう一度蓋をってしまった。ルナティンの問いに、溜息で答える。

「なあ、中味何だったんだって」

シノンは険しい顔つきになって、無言のまま閉ざされた木箱をみつめていた。

業を煮やしたルナティンは、寝台を飛び降りてシノンのそばまで歩み寄った。木箱を取り上げようとしたが、シノンに躲される。

「もー、どっちかっていったらそれ、俺のものなんだからな！」

「ルナティン」

睨みつけた相手と真っ向から目が合つて、ルナティンは軽く目を瞠る。シノンは相変わらず厳しい表情をしていた。

「これは、黒の魔導で使う道具だ」

言われて、ルナティンはシノンと木箱を交互に見較べた。

「魔導？」

「そつだ。しかも、かなり高等な術を使う際に必要なものだと思う。これ自体の気が半端じゃない」

「ああ、だから、悪用されないようにレン様がその箱へ封印して言いかけて、ルナティンはそのまま続く言葉に詰まった。

(違う)

ならばなぜ、黒の魔導使いなどにそれを届ける必要があつた？
シノンはじつと箱を見下ろしている。

「これは封印されてたわけじゃない。妖の気配を消す魔法がかかっているだけで、術自体はすでに発動していたんだ」

「術つて……どんな？」

胸に何か嫌なわだかまりを感じながらルナティンは訊ねた。

どこかとても、嫌な感触だつた。

「これはおそらく、より強力な妖霊を集め出すための道具だ。呼子笛みたいなものだ。音ではなく気で邪悪なものを喚び寄せる。妖霊を集めて育てれば邪霊になり、さらに力を蓄えさせて上手く操れば、術者に絶対服従の生き物が作れるつてわけだ」

シノンが忌々しそつに短く息を吐き、

「なるほどよくできたからくりだ。妖霊の最も好むのは言うまでもなく聖なる力だろう。そんな力を持った人間が、このとんでもない代物を今のこのパラスで持ち歩いてみる。一歩ごとに妖霊が増えて力を喰い潰し、リマリヤへ着く頃には立派に術の完成だ」

「ちよ……つと待つて、その、聖なる力を持った人間て」

「そりゃ言わずと知れた」

ほん、とシノンがルナティンの肩を叩く。ルナティンは瞬間絶句

した。

「な……っ」

「おまえさん、レンの奴に一杯喰わされたんだよ」

「何で……!」

思わずルナティンは、シノンの胸ぐらに掴みかかった。

「何でレン様が!? まさかあの人が俺を騙したっていうのか!?

そんな」

続く言葉を失いかけ、ルナティンはそのまま寝台へ力無く腰を落とすとした。

「そんな……嘘だろ?」

「絶好の餌と言ったらそれとおりだったんだろうな。ある程度の聖なる力を持ち得ながら、邪悪を排するほどのクラスにない人間なんて、そうはいない」

「そんなの関係ないよ!」

声を上げ、ルナティンは寝台を拳で叩いた。

「そんなのはどうだっていいことなんだ。重要なのは、レン様が俺に嘘をついて、俺を……利用したってことで……」

言いながら、自分の言葉を信じられずに、ルナティンはそのまま両手で頭を抱えた。

「あの人がそんなことするなんて信じられない。信じない。レン様は本当に優しい、いい人だ。祭司としても町の人たちに慕われて、そんな、他人を裏切るなんてことするはずがないんだ」

「レンの真意がどの辺りにあるのか俺にはわからないが、これが魔導のためのものだってことは動かしがたい事実だ」

「……」

きつぱりと言ったシノンに、ルナティンは何も言い返せなくなる。

反論の余地がなかった。

「それにしても」

溜息混じりのシノンの声に感嘆の響きを感じて、ルナティンは眉をひそめながら顔を上げた。シノンは声音どおりの顔でルナティン

を眺めていた。

「よくもまあ、おまえさん命拾いしたな。大した力だ」

「え？」

「術は発動『していた』、と言っただろう。今は静まっている。道具自体にまだ邪気は溜まっているが、術は無効化されたんだ。ルナティン、おまえさんのせいだな」

「俺のせいって？」

「おまえさんの持つ聖の力が、術を破ったんだ。妖霊が力を喰いきれなかったんだろう。その様子じゃ多分無意識だと思うが、妖霊に聖なる力を喰われるどころか、逆にそいつが妖霊を取り込んで浄化させちまったんだろうな。だからまだ、体が疲れてるだろ？」

言われてみれば、ルナティンの体は泥のような疲労に包まれている。シノンが癒やしてくれたから、痛みや嫌悪感は薄れているが。

「でも、俺にそんなことできるのかよ？ おっさんみたいに聖神官とか、ご大層な身分でもない、ただの一般人だぜ？」

「そこだ」

言っただきり、シノンは黙り込んで、何かを考えている様子になった。

ルナティンも床に目を落として口を噤む。

考えるのは、父親代わりに等しい、優しかったはずの祭司のこと。

(まだ信じない。何か、きっと理由があるんだ)

レンを疑うことが、ルナティンにはどうしてもできなかった。

だから。

「サンファールに戻って……レン様に直接訊けばいいんだ」

そう決意して、ルナティンはシノンを見上げた。

「おっさん、パラスに張られた結界らしきものってというのは、絶対に破れないの？」

「そうだな……」

訊ねられたシノンが、思案げに顎を撫でる。

「今少し考えていたんだが、この国に張られた結界ってというのは、

この術と同じような目的を持っているのかもしれないな」

シノンが手にした木箱に視線を移す。

「妖霊と、その餌になる聖なる力をひとつの場所に集めて、外に出られないよう結界を張る。そうしてより強い力を持つ妖の生き物を作り出す。あるいは、この国自体を極めて邪悪な『場』に変えようとしている。最終的な狙いが何なのかはわからないが、そんなところじゃないかと思うんだ」

「うん」

「ってことはだな、おまえさんがやったように、場を解体することはできなくても、術を聖なる力で侵食して、突破口を開くのは不可能ではない ような気がするんだが」

「それ、できる!?!」

「断言はできないが、やってみる価値はありそうだな。ほんのいつときでいいから、結界の一部を力業で開いてしまおうんだ。俺と、それからおまえさんの力を足してみれば、どうにか……」

ルナティンは、その方に一の可能性へ賭けてみることにした。

「駄目で元々だ、やってみようぜ。力……貸してよ」

そう頼んだルナティンの頭を、シノンが軽く叩く。

「お願いするのはこっちの方だ。よし、今日はとりあえず休んで、疲れをとってから試してみよう。ここで立ち止まっただけでも、何も変わらないからな」

そう意見がまとまって、とにかくその日は休むことにした。

幸いなことに、食物や水までは汚染されていなかったらしく、ルナティンとシノンは揃って食事を摂り、風呂で疲れを癒やして、陽が落ちる頃には床に就いた。

「なるべく早く休んで、明日にでもトーヤ山へ行って様子を見てきた方がいいと思うんだ。もし本当にこの結界の意味するところが俺の思ったとおりなら、もう一刻の猶予もないからな」

隣の寝台でシノンが言った。ルナティンは頷いて目を閉じたが、体は疲れているのに頭は冴えていて、すぐには眠れなかった。

「…………おっさん」

明かりの消えた部屋の中で小さく呼びかけると、シノンはずぐに返事をした。彼もまだ眠っていなかったようだ。

「おっさんは、俺の母さんと一緒に神殿にいたことがあったんだろ？」

「ああ。俺も彼女も破格の出世頭だったからお互い多忙な身だったけど、彼女とは妙に馬が合ったし、仕事でもそれ以外のところでも付き合いはあったよ」

「そしたら…………俺の、父さんのことも知ってる？」

「…………」

暗闇の中でルナティンは目を凝らし、自分に背を向けて寝台へ横たわるシノンの姿を見つけた。

「…………エイリアはとても優しい女だったが、変に頑固で気の強い部分もあった。譲らないところは決して譲らない、そういう人間だ」

「うん」

ルナティンは頷いた。たしかに母親はそんな気性の持ち主だ。

「だから、俺や周囲の人間がさんざん問い質しても、最後まで相手の名前は口にしなかった。彼女がそうと決めたら、それは絶対なんだ。誰も…………多分、エイリアとその相手以外は知らないことだよ」

「…………うん」

衣擦れの音がして、シノンが寝返りを打つたらしいことがルナティンにもわかった。

「でも勘違いはしないでくれよ。エイリアは生半可な気持ちでおまえさんを産んだりしなかった。周り全体からどんなに責められても、詰られても、毅然と自分を貫き通した。相手の素性を人に話せなかったのも、彼女なりに何らかの事情があるはずなんだ。巫としても女としても誇り高かったから、もし意に染まない人間が相手だったなら、エイリアはきつと おまえさんごと自分の命を絶つことすら厭わなかったと思う」

ルナティンは軽く瞼を閉じて、母親の姿を思い浮かべていた。慈

愛に満ちた心と、凜然とした姿を併せ持つ美しい女性。ルナティンが彼女と過ごす時は、親子として考えれば少なすぎるかもしれないが、それでもルナティンはエイリアを愛しているし、尊敬していた。大切な存在なのだ。

「でもそうせずに彼女はおまえさんを産んだ。自分がどんな立場に追い込まれるかわかっていたらどうにそうしたのは、間違いなく相手を、おまえさんの父親を愛していたからだ。もちろんおまえさんのこともな。それはわかるだろう?」

「それは勿論」

母親の愛情を疑ったことなんて、ルナティンには一度もない。

「でも、少しでも、少しでも納得はできないんだ。どんな事情があるにせよ、一度くらいは……顔をみてみたい。せめて、名前だけでも知りたい。そう思うのは、俺の我儘なのかな」

「だからおまえさんは、そんなに強い聖なる力を持ちながら神職に就こうとしないのか?」

シノンの言葉に、ルナティンは僅かに目を瞠った。

それから、ばさりと寝返りを打って、枕に顔を埋める。

「……わからないんだ。母さんは巫女の力を失わなかったけど、それは結果論でしかない。母さんが力を失くすリスクと引き替えに産もうとした俺が、何のために聖なる力を持っているのか。血つて言ったら、それまでだけだよ。でもわからないんだよ。俺がいて、力を持っているっていうのがどういうことなのか。こんな半端な気持ちで任せちゃ、セイマー神に悪いだろ」

「父親に会いたいの?」

「……」

考え込むように少し沈黙してから、ルナティンは再び口を開く。

「答えを教えて欲しいわけじゃないけど……考えるきっかけにはなるかなって」

そう返してから、ルナティンは布団を引っ張り上げ、頭からそれを被った。

「あー、やめやめ、こんな辛気くさい話は！ 明日のために俺は寝る！」

かすかにシノンが笑う心配がした。

「おやすみ」

「おやすみ！」

話すことを話したせいで気も疲れたのか、ルナティンはそのまま深い眠りに就いた。

第三章『閉ざされた国』(2)

一晩たつぷり休んだおかげで、ルナティンが翌日目覚めた時には体はすっかり楽になっていた。シノンの癒やしも効いたのだろう。

なるべく陽の高い内に行動しようと、ルナティンとシノンは朝食を摂るとそのまま宿屋を出た。前日と同じ道を引き返し、森へ入る。シノンが注意深く妖霊を追い払ってくれたおかげなのか、この日は迷うことなく、森を抜けることができた。途中で馬を借りて、一気にトーヤ山の山裾まで辿り着き。

「さて」

馬から降りると一言呟き、シノンが目の前へ立ちはだかるトーヤ山を見上げた。ルナティンもつられるように目を上げる。暗い、と感じた。木々の緑と土の色。それだけのはずなのに、山はどこか暗い色に見えた。シノンの話を聞いたせいなのか。

人為的な道筋の作られた入り口があるのに、山を登ろうとする人間は、ふたりの他に見当たらなかつた。

「結果とか……わかる？」

ルナティンがシノンの横顔に訊ねると、小さくその首が振られた。「相変わらず気配は感じられないんだ。力の流出している元が測れない」

「登ってみる？」

「そうだな……」

シノンがしばし考えあぐねる様子で、それから頷いた。

「まあ、山から出られないってだけで、体や精神に関しては大した実害があるわけじゃない。それが大問題なただけだな。とりあえず、試しに行ってみるか」

ルナティンはシノンにつき、馬を置いてトーヤ山に登り始めた。

おそらく何か月もかけて作られたのだろう、広い石畳の道を歩く。なだらかな階段になっている。子供でも一日かからず越えられるよ

うな山だから、子供よりも少し大きなルナティンや、まるつきり大きなシノンにそう負担がかかるはずもないのだが、ふたりはしばらく歩いただけで、すでに汗みずくになっていた。

「キ…… ツツイなあっ」

拾った木の枝を杖代わりに、ルナティンはせいぜいと喘ぎながら声を上げた。

「この鬱陶しいの、どうにかなんないの？」

まるで惹かれるように寄ってくる妖霊の気配が、はっきりとわかった。シノンが払っても払っても近づいてくる。浄化させてしまえば少しは保つだろうが、なるべく体力は温存したいというシノンの意向で、軽く追い払うのがせいぜい。

「なるべく気を張ってる。気がくじけると、よけいにつけ込まれるぞ」

シノンも疲れているようだったが、ひいひい情けない声を出しているルナティンほどではない。日頃の鍛え方の違いだろう。

「おまえさんは、自覚がないのかもしれないが、そもそも大した力を持つてるんだ。何てったってあのエイリアの息子だしな。術はろくろく使えなくても、気の持ちようでもうどうにかなる」

「そんなもんなの？」

「そんなもんだよ。そも、『白魔法を使う』ってのは、術者が持っている聖なる力に指向性を持たせるってことだ。その方向付けをするのが、人の意志こころであり祈りである。意志が強ければ術も強い。祭司が全身全霊をかけて祈るのと、下級神官が大雑把に祈るのとじゃ、断然前者の方が有効だ。とはいえ、たとえば王族と祭司じゃ話は違ってはくるがな。較べようもない。王族ほど莫大な力を持った人間はまた別の話」

「じゃあ、詞は？」

「詞は指標のひとつだ。ただの、まあ記号みたいなものだな。一般に、魔法を使うための特別な、決まった呪文があると思われているみたいだがそれは違う。たとえば書物に記された呪文は、魔法が作

用しやすくするために体系化された公式ではあるが、結局は文字の羅列でしかない」

「そんじゃ魔法に詞は必要ないの？」

「そういうことじゃないさ。力を持つ人間が詞を紡げば、その詞自体が意味と力を持つようになる。力を持たない人間が詞を唱えても何も起こらないが、力を持つ人間にとっては、詞は意志を外に向けて一番簡単な手段だ」

ルナティンは大人しくシノンの説明を聞いた。

「たとえば、術を使う際に、術者の『真名』というものが有益になる。あれは何でかっていうと、その名を持つ術者のクラスが、その名前によって表されるからなんだ」

「でも真名を持ってない聖職者とか、黒魔導士もいるんだろ？」

「それは真名をもらっても、大した力にならないレベルの術者だ」

わかったようなわからないような顔で首を傾げるルナティンに、シノンが言を継ぐ。

「自分がどれだけの力、これは意志の力ってことだけど、それを持っているのかをより短い音で表せるのが真名なんだ。真名を与えられたから力を持てるんじゃないかって、力を持つ人間にこそ与えられるのが真名だ。だから本当のところ重要なのは、名前そのものじゃなくて、その名を持つ人間の存在そのもの、意志そのものなんだ」

「ってことは、名前を偽るっていうのは、存在を偽るってこと？」

「そう。それで嘘の名乗りを上げると、自らが自らの存在を裏切ったことになり、その報いを受けるんだ。あり得ない名前はあり得ない存在ということで、ゼロから魔法を動かそうだったって、そりゃあ無理な相談だろ？ もし自分よりもクラスの高い存在の真名なんてうっかり名乗れば、容器、つまり体がキャパシティ不足で打撃を受ける。逆に自分よりも力の強い術者、それも黒系魔導の使い手なんかに真名が知れば、簡単に聖なる力を奪われる羽目になる。真名ってというのは、力を閉じこめた個体、人間っていう容器に対する鍵みたいなものだからな。自分で鍵を開けるくらい制御する力がある

分には、勝手に開かれたらあとは外へ流れ出るだけだ」

「なるほどね。えーと、あと、なんで洗礼しないと白魔法が使えないの？」

続けてルナティンが訊ねると、シノンがあからさまにがくりと肩を落とす。

「おまえなあ、仮にもエイリアの息子ならそこまで初歩的な疑問を口にするなよ、情けないな」

「悪かったよ。でもこのまま無知でいるよりマシだろ」

「そりゃ正論だ　じゃ、超初歩的な質問。『魔法』とはいったい何ぞや」

シノンの問いに、ルナティンは力一杯眉根を寄せる。

「うう……ええと、怪我とか病気を回復したり、あとダメージを与えたりもできる力」

「……」

できの悪い教え子を見る教師の眼差しになったシノンに、なんだよあ、とルナティンが居心地悪く呟く。

シノンが深々と溜息をつき。

「それは結果であって本質ではない。いいか、自然界にはさまざまな生命や、その息吹が満ちあふれている。同時に邪気を帯びた物質、精神も。それらすべての集合体を総じて『世界』と呼ぶんだ。そしてそのエネルギーは、たったひとりの人間が持ちうる数千倍、数億倍の、さらに数億倍の力と匹敵する。それはわかるな？」

「んー、まあ、何となく」

「何だよ、頼りないなあ　まあいいや、とにかくそのエネルギーを丸ごと人間が得ることは、人間が人間である限り不可能だ。人間も世界の一部ではあるが、決して世界イコール人間ではあり得ないからな。だが、すべての力を手に入れることは無理でも、干渉することはできる。要するに力を借り受けるってことだ」

「それが魔法」

「そう。人間も世界の流れの一部だ。人間のうちの何か、たとえば

先刻おまえさんが言ったとおり、怪我や病気で失ったところ、あるいは何かの弾みで失ってしまった正しい心を、聖の領域にあるエルギーから補う。邪悪なものを打ち払うための力を生み出す。それが白魔法だな。逆に邪な力を得て他者を傷つけたり、生命を奪うのが黒魔導」

「ふんふん」

「そして生物のうちで、聖の領域へもつとも強く干渉できる存在を指して、我々は神と呼ぶ。神はもともと人間だった。その人間は他のどんな人間よりも莫大な力を持ち、自然の力を借り受けるのみならず、自らを自然と共棲させ、個体という不自由な殻を棄てて大きな意志となり、神と呼ばれるようになった。神と世界は同一ではないが同等だ。ここまで、了解？」

「そこそこ」

「やれやれ……で、白魔法を動かすには、詞や自らの聖なる力を使った流れ、システムがある。洗礼というのは、より確実に強力なシステムを発動させるための段階、手順だな。聖なる力は洗礼により神の力を享受するための土台。強い力を持ち強い術を発動できるように、土台や容器、精神を鍛える。そうすれば、システムを動かすくらいの術者になれるわけだ。とはいえ一気に神の力を受け継ぐのは無理だから、段階を踏んで、祭司、神官、王族、セイマー神から力を貰い受ける。だから、洗礼を受けたから術を使えるようになるというのは間違いじゃないが、力を貰い受けても土台が破綻しないほどの力を持ち、修行を積んで初めて、洗礼が受けられるってところが最も重要だ。真名と同じく、先に洗礼があるわけじゃない」

ふんふん、とルナティンは頷く。シノンがさらに続け、

「詞が力になるというのは、それが唯一、真実の心を表した場合だけだ。心にもない思いを口にしたところで魔法は動かない。偽らざる心のみが、世界と繋がるたったひとつの架け橋になる」

だから魔法を動かし、自然の力を得て、世界を動かすのは、より大きな祈りなのだという。正しい祈りを心に持つためには、正しく

世界や魔法のシステムを知らなくてはならない。

「どうだ、ちつとは勉強になったか？」

しきりに頷くルナティンにシノンが問うた。ルナティンが肩を竦める。

「ま、無事サンファールに辿り着いたら、神様のありがたみも感じると思うよ」

「罰当たりめ」

そんな会話のおかげで、ルナティンは少し祈りについて考えた。祈りと、意志。聖なる力を外に向けてするために必要なもの。洗礼を受けたから術が使えるということだけでなく、術を使えるほど強い祈りを持てば洗礼を受けられる。

重要なのは、システムを動かすのが『洗礼』ではなく『意志』だということなのだ。

(てことは、こいつらもちつとは退けることができるのか)

ルナティンは、道を進みながら、相変わらず体にまといつく妖霊たちに気を向けた。これは、よくない生き物。邪悪な存在。自分にとって不要なものたち。だから、いらぬ。

「飲み込みが早いじゃないか」

ルナティンの隣で、シノンが感心した声を寄越した。ルナティンの周りから少しずつ妖霊が遠ざかっている。ルナティンの『祈り』のせいだ。

「ついでだから、サンファールに戻ったら手っ取り早く教会で洗礼を受けたらどうだ？ おまえさんなら、ちよつと本気出して学べば神殿にも入れるかもしれないがな。洗礼を受ければ、もっと思うように力が使えるようになるぞ」

シノンの言葉へ、曖昧にルナティンは頷いた。

それからしばらく石畳の階段を登り、そのうちにそれが途切れ始めた。滑り止めの丸太が地中に埋められただけの道に変わる。頂上に近いのだ。

「そろそろ……だな」

シノンが眩き、荷物の中から青い布きれを取り出すと、手近な樹の枝にくくりつけた。目印にする。

「ここが、今通った道」

「うん」

その樹と目印を、ルナティンは目に焼きつけておく。

再び進み始めると、上り坂は緩やかなものに代わり、平坦に近くなつてから、すぐ下りの道になった。ここがサンファールとパラスの国境。立て札も出ている。

ふたりは休憩を取ることなく、少し足早に道を下り始めた。下り坂にも、昇りと同じような人口の道ができています。

そこを歩き始めて、しばらく経ったのち。

「え？」

「やっぱり、な」

同時にふたりは声を上げた。ルナティンは目を睜り、シノンは軽く溜息をつき。

ルナティンは布切れの揺れる樹へ、走って近づいた。まじまじ眺めるが、どう見ても先刻シノンがくくりつけたものだった。

「でも！ たしかに頂上まで行って、反対側の下りへ」

「だから言っただろう。こいつが結界なんだ」

「……」

ルナティンはしばらく唇を噛むと、青い布切れを睨みつけた。それから、山の頂上を見上げる。

何も言わず歩き始めたルナティンを、シノンが慌てて呼び止めた。

「おい、坊主？」

「もう一回やってみる」

ずんずん進むルナティンのあとを、シノンが仕方なく追いかける。無駄かもしれんぞ、という眩きを、ルナティンは無視してさらに進んだ。

再び頂上が近づき、ルナティンは一度歩みを止めた。シノンが隣に並ぶ。

「どうするつもりだ？」

「何か……」

手掛かりを見つけないければ。

ルナティンは静かに呼吸を整えた。結界の突破法なんてわからない。魔法と名のつくものに経験などもちろんなかった。

けれど何か、きつかけがあれば。

「ルナティン、……」

もう一度、声をかけようとしたシノンが口を噤んだ。

ルナティンは軽く瞼を伏せ、深呼吸を繰り返していた。

やり方なんてわからない。でも、先刻シノンが言ったのだ。

力を動かすために必要なのは、意志。心。祈り。ここに自分の意志を阻むものがある。あるはず。だから見つけなければいい。

「邪魔だ」

自分の行く先を遮る『何か』。不要なもの。

背中に何かが触れた。シノンの手だ。力を貸してくれようとしているのがわかった。

右頬にまた何か触れた。今度は、妖霊。邪魔なもの。

(要らない)

パチ、と小さくはぜる音がした。消えた、妖霊の気配。

「こりゃ、驚いたな……」

シノンの呟き。

「おい、そのまま集中していてくれ。少し見えてきた」

ルナティンにもわかりはじめていた。結界、のようなもの。それは、目の前にできているものではない。自分の、存在すべてを取り巻く力。

全部覆っていたからわからなかったのだ。

「少しずつ　そうだ、開くんだ。ゆっくりでいい」

シノンの言葉に導かれるように、ルナティンの神経は次第に研ぎ澄まされていた。自分を覆う「もの」を、ほんの少しずつ退けていく。開かれるイメージ。

「何てこつた、エイリアは知っているのか？」

再び、独り言のようなシノンの呟き。感嘆しているのか、呆れているのか。

「……ッ」

ルナティンの足許が揺れた。外向きに開こうとしたものが、抵抗するように内へ押し戻ろうとしている。拮抗する力。強い抗い。

「よし、あとちょっと頑張れ、このまま固定する」

ルナティンは両方の拳を握りしめた。がくがくと体が震える。シノンが荷物の中からまた何か取り出した。鮮やかな装飾のついた短刀。鞘から刃を抜き払い、何か詞を呟きながらシノンがそれを地に突き立てる。

がくり、とルナティンがその場へ膝をついたのは次の瞬間。一気に全身から汗が落ちた。ひどく体力を消耗した感じがした。

「まずい、奴さんたち、白魔法に惹かれて来やがる」

目に入った汗をルナティンが手の甲で拭いた時、シノンが忌々しそうに吐き捨てた。ルナティンは荒い息をつきながら、顔を上げて辺りの様子を窺った。たしかに、一度は薄くなった妖霊たちの気配が、また強まってきている。

「おっさん、早く、ここから……」

シノンの姿を捜して視線を動かしたルナティンは、そのまま大きく目を瞠った。

シノンも地に膝をついていた。短刀で体を支えるように。

「おっさん!？」

叫んでからルナティンは気づいた。自分の開いた結界の空白に、シノンが新たな結界を張っている。

そしてその、結界と結界の接点を狙うように、澱んだ感触　妖霊たちが大挙して攻め立てていた。

「お、おい、おっさん!　やばいよ、あんた……ッ」

これでは術者の負担が大きすぎる。うるたえて近づいたルナティンの手首を、シノンが強く掴んだ。

「いいか、坊主」

それから、まっすぐにルナティンの目を覗き込み。

「このまま山を下れ。おそらくサンファール側は大丈夫だ」

「でも、おっさんは!？」

縋る気持ちで訊ねたルナティンに、シノンは小さく首を振った。

血の気がなくなりはじめ、脂汗の滲む顔で。

「俺はここを支えるので手一杯だ。おまえさんひとりで行け」

「そんな、できるわけないだろ! あんたが一緒にこなくてどうすんだよ!」

「ここを離れたら、せつかくおまえさんが作った孔が塞がっちゃう。いいから行け。行ってバーンズの大神殿にパラスの状況を報せてくれ。これ以上の猶予は、この国の命取りだ」

「でも……」

ためらうルナティンを、シノンは強い瞳で見返した。

「俺は大丈夫だ。おまえさんが助けを呼んできてくれるなら、この国でまだ踏ん張って待ってる」

「おっさん……」

ぐ、とルナティンの手を掴むシノンの手に力が籠もった。

「この道を拓いたのは、ルナティン、他ならぬおまえさんだ。サンファールに戻って自分にできることをするんだ。振り返らずに、一気にここを抜ける。それで多分助かる。おまえさんが行かなければ、ただ共倒れになるだけだ」

「……わかった」

ルナティンは、シノンの手を両手で握り返した。シノンの手はひどく冷たかった。もう考えている暇はない。

「必ずバーンズの神殿に伝えるよ。信じて待っていてくれ、俺は、俺の名にかけて偽りは言わない」

シノンが頷く。ルナティンも頷きを返し、立ち上がった。シノンが指し示す方向へと向かう。

「ルナティン、バーンズにいる俺の息子にも報せてくれ。バツに

……俺は、父さんは大丈夫だ。必ず戻るからと！」

「ッ！」

果たして返事が音になったのか、ルナティンにはわからなかった。シノンに言われたとおり、振り返らずに駆け抜ける。一步ごとに足が重くなり、目の前が霞んだ。強い抵抗感。何かが行く手を阻もうとしている。

（邪魔だ！）

振り払うように心で叫ぶ。強い意志。それが力になるなら。

（どうか道を）

地を蹴る自分の足が、本当に動いているのかわからない。

（道を示してくれ）

自分が誰に祈っているのか、ルナティンにはわからなくなった。

世界か、神か、エイリアか、シノンか、あるいは自分自身か。

（教えてくれ！！）

ド　と耳許で音が響いた気がした。次の瞬間、体が浮遊したような感覚を味わう。

いや、『ような』ではない。

「おわわわッ！」

ルナティンは思わず悲鳴を上げていた。坂道をつんのめるようにして体のバランスが崩れ、カ一杯蹴りつけた地面が遠くなる。宙に浮いた体は引力の法則に従ってしたたか地面に叩きつけられ、そのまましばらくごろごろと坂を転がった。

「い、いてて……」

細い樹に激突して、ようやく転げ落ちた体が止まった。打ちつけたあちこちを掌でさすりながら、ルナティンはどうにか体を起こした。

ハッとなつて、上を見上げる。

「……おっさん……」

視界に移るのは、何度か登って見覚えのある山の景色。

『サ

ンファール側』の。

しばらくルナティンはその場で座りこけると、大きく息を吐き、それからぶんぶん首を振った。

呆けている暇はない。

「待ってるよ、おっさん！」

そうして、ルナティンはサンファールに向かい、トーヤ山を一気に下り始めた。

「山を下りた俺は、そのまま大急ぎでバーンズまで向かった。とにかく神殿に報せなくちゃと思ったんだ」

話すルナティンを、バツは真摯な瞳でじっと見上げていた。

「なりふり構わず王宮に辿り着いて、門番に中に入れてくれて頼んだ。だけど、まるつきり取り合ってくれなかったんだ。ここは子供の来る場所じゃない、大人しく帰れの一点張りで」

「それで……ルナティンはどうしたの？」

訊ねたバツに、ルナティンは頷き、

「そのまま引き下がれるわけがない、門番の目を盗んで、どうにかして王宮の中に入り込んで……でも、神殿に辿り着く前に、他の衛兵に見つかっちまったんだ」

思い出し、ルナティンは苦い顔つきになった。

「それでも俺は必死に事情を話した。パラスのこと、シノンのこと、神殿の助けがいてることを。そのうち衛兵の他に、政務官らしい人間がやってきて、とんでもないことを言い出したんだ」

「シノンが……反逆者として、死罪になったってことを……だよね？」

バツの言葉に、ルナティンはまた頷きを返した。

「そうだ。シノンがすでに処刑されて、息子であるおまえも王都を追放されたなんていうじゃないか。俺は当然驚いて、政務官に喰ってかかった。そんなはずない、頼むから神殿の人に話をさせてくれ

つて。でも、聞いてくれなかったんだ。宮廷騎士団までお出ましになつたから、仕方なくてそのまま逃げた。誰も話を通じる人間がいなかったんだ。母さんと呼んでもらう間もなかった。俺は王宮からどうにか抜け出て、城下の町に潜り込んだ。そこで、シノンやおまえが以前に住んでたっていう辺りを捜して、どうにかバツィがラクウスって町に移ったことを聞き出した辺りで追っ手に見つかつたんだ。殺されかかったところを、半死半生でバーンスを出た。あとは見てのとおりだよ」

「……」

バツィが床に目を落とすと、大きく溜息のようなものを吐く。

「よく、ここまでこられたね、ルナティン」

ぱたり、とバツィの伏せた瞳から涙が落ちるのが見えた。

「シノン、元気だったんだ」

「ああ、そりゃあもうぶつちぎりにな」

ルナティンの言葉に、顔を上げてバツィが笑った。

自分が Paras を去つたあと、シノンが果たしてどうなったのか、

ルナティンにはもちろんわからない。でも無事であるはずだと信じ

たかつた。それはバツィにしても同じ気持ちだっただろう。

「あの様子じゃ、王宮や神殿の助けは期待できない。俺はシノンとの約束を果たせなかったんだ。おまえに伝言を伝えることはできたけど、でも肝心のシノンの助けは呼べなくて……だから、俺が、シノンを助けに行く」

バツィがかすかに目を瞞った。

「シノンじゃなくて、俺がここにいてることを許してほしい。……ご

めんな、バツィ」

バツィは見開いた瞳から、再びぼろぼろと涙を落として、カ一杯首を振った。

「いいんだ！ オレは、シノンが助けようとしたルナティンが助かつてくれて嬉しいんだから。シノンは大丈夫だよ。自分が大丈夫じゃなくちゃ、他人を助けたりなんてできないんだよ。だから大丈夫

なんだ」

ありがとう、とルナティンが呟くと、バツィがまたぶんぶん首を振る。

「ホントはオレ、ずっと怖かったんだ。シノンが死んだって言われて、そんなこと全然信じられないし、信じたくないのに確かめる暇もなくオレもバーンズを追い出されて、何とかしなくちゃって思ってる間にカナン様には殺されちゃうし、まあすぐに生き返ったけど、でもそれからどうしていいのかわかんなくて、だけど、ルナティンが来てくれて……シノンが生きてるって、わかってよかった」

涙が止まらず、バツィの声が掠れた。

「シノンとの約束を果たそうとしてくれて、ありがとう……」

最後の方は言葉にならなくて、バツィが涙で濡れた顔をこしこしと腕でこする。ルナティンは、そんなバツィの頭を自分の方に抱き寄せて、撫でてやった。

「俺が力になる。何ができるかわからないけど、でもきつと何とかする。何とかしなくちゃいけない」

「うん うん」

ルナティンの言葉に、バツィが何度も頷いた。

ガシガシと、ルナティンがその頭を掌で撫で。

「……用がすんだらさっさと離れる」

突然、慄然とした声が聞こえてルナティンはぎよっとした。慌ててバツィから体を離すと 相手の顔つきが変わっている。

「……カナンか？」

「様をつける、凶々しい」

冷ややかにルナティンを一別すると、カナンがバツィの寝台に腰掛け、邪魔臭そうに両目に滲む涙を手で払った。そのまま片手で自分の髪を掻き上げ、部屋の壁を睨みつける。

「気配のない魔導……リマリヤのガドナー、イクサのレン、か」

呟くようにカナンが言った。ルナティンの話を、当然、バツィの『中』で聞いていたのだろう。

それきりカナンが黙り込んでしまい、ルナティンには声がかけれない雰囲気だった。

「ルナティン」

少しの間口を閉ざしていたカナンが、視線をルナティンに向けて呼びかけた。

「どうせ行くところなどないんだろ。しばらくここにいろ。部屋くらいは貸してやる」

まるでこの家の所有者のような口調でカナンが言う。

「カナン、パラスやシノンのことは……」

「わかつている」

言いかけたルナティンの台詞を遮るように、カナンは頷いて、寝台から立ち上がった。

「何にせよ、おまえはその傷を完治させないことには動きようがないだろう。焦ったところでどうしようもない、今バーンズに戻ったって同じことの繰り返しだ。おまえひとりくらいおれが守ってやるから、とりあえずは回復するまで休んでいろ」

「……わかった」

カナンの言葉は正論だ。

たしかに、じたばたと焦ったところで、今の段階では何ができるわけでもない。対策を講じる時間は必要だ。無策で急いでも、それは余計な回り道にしかない。それはルナティンにも納得できる。
だが。

（何だろ……）

漠然とした違和感。

（王子^{カナン}って、そんなものか？）

先刻彼が見せた表情。サンファールを正しい道へと誘うために、父王と戦うことすら厭わないと、そう言ったあの言葉。

あそこまで決然と言ったのけたカナンなのに、どうしてこんなに冷静でいられるのか。

「三日も馬鹿みたいに惰眠を貪ってたんだ、腹も減ってるだろ。バ

ツーに支度させるから、待ってる」

言うなり、ふっと両目が細まって、再びその顔つきが変わる。あとけない、子供の表情になった。

「もー、人使い荒いんだからカナン様は！」

ぶつぶつと文句を言いながら、今度はバツーがルナティンを見遣った。

「ルナティン、ずっと食べてなかったんだから、スープとかの方がいいよね？」

「え？ あ、ああ」

呼びかけられ、ハツと我に返ったルナティンを、バツーが不思議そうに見上げる。

「何ぼーっとしてんの？」

「いや、別に大したことじゃないけど」

「あ、そっか、急にカナン様とオレが入れ替わったりしてるから、わけわかんないんだよねー」

ルナティンの態度をそう解釈して、「じゃあちよっと待ってて！」と元気に言い置いてから、食事を作るためバツーが部屋を出ていく。

残されたルナティンは、部屋のカーテンを少し開き、窓から外の景色を眺め遣った。陽はもう落ちかけ、暗く重い雲が立ちこめていた。すぐに夜が来そうだった。

第四章『疑念』

数日すると、ルナティンの胸の痛みもだいぶ治まってきた。

何度かバツィが癒やしの魔法を使ってくれたので、ルナティンがバーンズに来てから一週間も経った頃には、自分で自由に動き回っても、さほど痛みを感じないようになっていた。バツィに包帯を換えてもらう時に見た傷痕も、ほぼ塞がりかけている。

それまで食事も寝台で摂っていたルナティンだが、一週間目の朝、体の調子がよかったので部屋から抜け出し、バツィが食事の支度をしている台所へと足を向けた。

「あれ、ルナティンおはよう」

朝から元気に動き回っているバツィが、ルナティンの姿をみつけて挨拶した。相変わらず、家事一切を取り仕切る というよりも取り仕切らされている のは『バツィ』のようだ。

「もう起きて平気？ すぐごはんできるよ」

「ああ、悪いな、何も手伝わなくて」

ルナティンがそう声をかけると、バツィは鍋の蓋を手にしたまま、感動の眼差しを作った。

「うー、そんな優しい台詞、久しぶりに聞いたなあ……カナン様は面倒なこと全部オレに押しつけて、なーんにも手伝おうとしないし痛っ！ー！」

バツィが、手にした鍋の蓋で自分の頭を殴り、悲鳴を上げた。反対の手で、頭をさすっている。

「痛いなあもあっ」

おそらくカナンの仕業だろう。そう察して、ルナティンは呆れた。本当に手の早い王子様だ。

「ずるいよなあ、痛覚も人に押しつけてるんだもん」

ぶつくさ文句を言いながらも、バツィはこまめに台所を動き回っている。普段からやり慣れているような感じだった。

「バツ、そついやおまえ、母さんは？」

食卓にある椅子へ腰掛けながら、ルナティンは思い至って訊ねてみる。シノンとの会話でも、彼の妻、つまりバツの母親のことに触れられた覚えがない。

「んーと、すつごい昔に死んじゃったんだって」

竈へ薪をくべて火加減を調節しつつ、バツが背中中で答える。

「オレは全然覚えてないんだけど。でもシノンがいてくれたからいいんだ」

「そうか」

父ひとり子ひとりの生活だったから、バツはこつやつて器用に家事をこなしているのだろう。

バツが支度を整え、ルナティンは彼と朝食を摂った。カナンは特に用事がないのか、表に出ようとしなかった。日常のほとんどにカナンは関わっていないらしい。バツの話だと、バツが考えていることはカナンに筒抜けなようだが、逆にカナンの思考は大抵閉ざされているので、向こうから『話しかけて』こないかぎりは、意志の疎通がないらしい。バツの思考にあれこれ口出しすることも滅多にないようだ。それはそれで気楽だけど、とバツは言う。

「初めはそりゃ、自分の中に別の人がいると思ったら気持ち悪かったけど、慣れたらどつてことないよ。でも、いきなり力づくで体の所有権奪われるのにはまいるかなあ」

どうやら、バツよりもカナンの力（精神力、のようなものだろうかとルナティンは考える）の方が強いらしく、体の取り合いになれば勝つのはカナンだ。

「まあ、タダで王家直伝の白魔法を教われるのはラッキーだよな。本当ならオレ、今頃神学校に入って、シノンみたいな聖神官になるために勉強してるはずなんだから」

「ああ、そうか……」

十二の歳なら、そろそろ神学校で白魔法を本格的に学べる頃合いだ。バツの身に降りかかったことは、まさしく不運としか言いよ

うがない。

「オレがもつと強い癒やしの術が使えたら、ルナティンの傷だってあつと言う間に治してあげられるのになあ」

申し訳なさそうに呟くバツーに、ルナティンは苦笑して首を振る。「それでも助かってるよ、魔法があるのとないのじゃ大違いだ」

一歩間違つたら、宮廷騎士を相手に、ルナティンの命などなくなつていたのかもしれないのだ。

(……でも)

ふと、ルナティンは以前から感じていた疑問を再び意識に乗せる。(『カナン』が術を使つたら、一発で完治したんじゃないのか?)

相手は王家の白魔法士だ。それもかなりの力の持ち主という。

しかしルナティンに癒やしの術を施してくれたのは、すべてにおいてバツーだった。

「ルナティン? どうかした?」

黙り込んだルナティンを、バツーが怪訝げに見遣る。いや、と首を振って、ルナティンは立ち上がった。

「ごちそうさま、うまかつたよ」

「部屋戻るの?」

「いや、少しその辺散歩してくるよ。寝たきりだったから、結構足腰弱ってるみたいだし」

「……そう」

少し戸惑つたように、バツーが相槌を打つ。

「何?」

様子を怪訝に思つてルナティンが訊ねると、バツーがすぐに笑顔を作った。

「ううん、気をつけてね。まだ本調子じゃないんだから、あんまり遠くまで行かない方がいいよ」

バツーに頷きを返し、ルナティンは台所を出た。狭い家だから、すぐに玄関まで辿り着く。

外に出てみると、空は相変わらずの曇天だった。ルナティンはラ

キウスに来て以来、まともに陽の光を拝んだ覚えがない。

それでも久しぶりに全身で浴びる外気は、それまで部屋に閉じこもっていたからか、ずいぶん心地よかった。

「あら」

澄んだ声を聞き止め、ルナティンは垣根越しに隣家を見遣った。

庭で洗濯物を干していた少女が、ルナティンのことを見ていた。

「もう……具合はいいの？」

少しためらいがちに問いかけてくる少女に、ルナティンは首を傾げた。

「ええと……」

「わたし、セレナです。あの、覚えていないかしら」

ぬけるような白い肌、緩く波打つ金茶の髪。静かな空気をまとう少女の姿に、ルナティンはおぼろげながら覚えがある。

「ルナティンさん、でしょう？ あの、十日くらい前に……」

「ああ、もしかして、俺がラクウスに着いた時バツと一緒にいた」

あの時は朦朧としていたのでルナティンの記憶も曖昧だが、たしかバツのそばに少女がいた。彼女がそうだろう。セレナ、という隣人の名はルナティンもバツから聞いていたが、実際ちゃんと意識がある時に彼女と話すのは初めてだ。

「あの時は見苦しい姿を見せて、ごめんな。大丈夫だった？」

垣根のところまで歩いて、ルナティンは隣家の庭にいるセレナを覗き込む。可愛い女の子とお近づきになれるチャンスを見過ごすほど、ルナティンは晩稲でも人生枯れてもいない。

セレナも垣根を挟み、ルナティンのすぐそばまで歩み寄ってきた。

「ええ、わたしは。それよりもルナティンさんはもう大丈夫？ すぐく、大変そうだったから……」

その時のルナティンの姿を思い出したのか、セレナの顔色は少し悪い。元から色白だからか、病を得たかのように血の気が感じられなかった。

「平気へーき、結構頑丈なんだ、俺」

ルナティンが冗談めかして両腕でまったくない力瘤を作る真似をして笑うと、つられたようにセレナも微笑んだ。

(綺麗な子だなあ)

彼女をしみじみ眺め、ルナティンは感嘆した。ラクウスなんてひなびた土地に住んでいる割に垢じみたところもなく、逆に都会擦れしてないから清涼な印象がある。都会育ちのルナティンには新鮮な感じた。きつと優しい子なんだろうな、と思う。ルナティンのことを、本当に心配してくれている様子だった。

「名前は呼び捨てにしてよ。俺も君のことセレナって呼んでいい？」

「ええ」

「じゃ、セレナ。君、ひとりで住んでるの？」

ルナティンが訊ねると、セレナが少し寂しそうに首を横に振った。

「母とふたり。でも今は、病気で伏せっているから」

「悪いの？」

「……わからない。ずっと目を覚まさないの。ひとつきも前から、眠ったままで」

「眠ったままで？」

ええ、とセレナが頷く。

「どこが悪いのかもわからないの。この町には、お医者様も祭司様もいらっしやらないし、他の町からお医者様を呼ぶほどのお金はないし……」

セレナの表情が暗くかける。頼りないほど華奢に見えてしまう体や、青白い顔色は、もしかしたら看病疲れのせいだろうか、とルナティンは我知らず眉をひそめた。

(祭司がいない、か)

パラスの町には、祭司がいたのに妖霊がはびこっていた。このラクウスでは、祭司がいないのに妖霊の気配は感じられない。

町に祭司がいないのは異常なことだ。どんな小さな町にもかならず教会が据えられ、神殿から祭司が派遣される決まりがある。

しかしこのラクウスは、首都からも忘れ去られてしまったかのよ

うな町。おそらく、何年か、あるいは十何年か遡れば、祭司がいた時もあったのだろう。だがその祭司は何らかの事情で行方を眩ませたか、あるいは命を絶ち、その報せは神殿に入ることもなく、記録の上ではまだ仕事をこなしていることになっているに違いない。ルナティンはそう考えた。

町の人々がまっとうな暮らしをしているのならば、祭司がいなくなってしまったことを正式に神殿や王宮に告げることもできる。それをしないのは、多分この住民たちが、大っぴらに自分の立場を明かして意見を言えない立場だからだ。

だからバツーやカナンも、ここを逃げ場所に選んだのだろう。

（このセレナも？）

一切の罪や穢れと縁遠そうな、物静かな少女。彼女も、何かから逃げているのか？

「祭司があてにならないのなら、バツーに看てもらえば？」

セレナを励ますつもりで言ったルナティンの言葉に、セレナは驚くほどびくりと体を震わせた。

「バツー……に？」

「ああ。あいつ、少しだけ癒やしの魔法が使えるんだ。俺も、バツーに助けてもらったし」

「……」

セレナが無言で目を伏せた。

「あ、もしかして、とっくにやっってもらった？」

それで効果がなかったのなら、セレナを傷つけてしまったかと、ルナティンは少し慌てた。

「……ルナティン」

重い口調で、セレナがルナティンに呼びかける。

「バツーは、白魔法を使えるの？」

「え？ ああ、そうだよ？」

セレナのかすかに震える声を聞いて、ルナティンは内心戸惑った。彼女は、どこか怯えているふうにも見える。

「どうして？ どうしてバツィは白魔法なんて使えるの？」

「どうしてって……聖なる力の持ち主だからだろ？」

どう返事をするべきか迷いつつも、ルナティンは彼女に答えた。

「でも……だって、バツィはまだ小さな子供だわ。たとえ聖なる力を持っていても、修行を積んで、洗礼を受けなければ癒やしの術なんて使えるはずがないんじゃないの？」

「そりゃあ……」

再び、ルナティンは返答に詰まる。

癒やしの術というのは、割に高度な魔法なのだ。たしかにセレナの言つとおり、ある程度修行を積み、最低でも祭司レベルにならないければ使えるものではない。

(けど、『カナン』が教えてるわけだしなあ)

王家直伝の魔法、とバツィは言っていた。『カナン』に指導を受けられるなら、そんじょそこいらの神学校で学ぶよりもいくらか有意義だろう。バツィはそもそも聖神官であるシノンの血を引いているのだから、素養だってかなりいいものを持っているはずだ。

しかしそのあたりは、セレナに説明できるものでもない。バツィはおそらく自分のおかれた状況、処刑されたはずの父を持ち、自分も王都から追放されたなどという事実は周囲に隠しているだろうし、ましてや体の中に次期国王たるカナン王子が入っているなんて公言しては、正気を疑われる。

「もしバツィが洗礼を受けた白魔法士だとしたら、神殿からの仕事も受けずに、こんな辺境の町で一体何をしているの？」

セレナの疑問ももつともだ。通常、強い聖なる力の持ち主は、神学校を始めとする神殿に属した施設で修行を積み、洗礼を受けて術を使うに足る力の持ち主と認められれば、必ず国の組織に組み込まれる。定められた場所に派遣され、定められた仕事を請け負い、国から糧を受けるのが普通だ。

「白魔法を使うには王宮の許可があるのでしょ？ 王宮の許可のない人は洗礼が受けられないから、術を使うことができないって聞

いたわ」

「いや、洗礼が受けられないから術が使えないってわけじゃないだろうけど」

詳しくわからないので、ルナティンの言葉は曖昧に濁される。

洗礼と術を使うことの関係は、シノンに聞いたとおりだろう。ただ、ルナティンも、それを聞くまではセレナと同じように思っていた。洗礼を受けていなければ術が使えない。それがあたりまえのことだと信じ込んでいた。

（そうやって、学校で習った気がするんだけど）

ただしルナティンが通っていたのは普通の一般教養を教える学校だったし、ルナティン自身がさほどまじめな生徒でなかったため、正確なところはわからない。それでも頼りない勉強の記憶から、白魔法士を名乗ったり、魔法を使って糧を得るには王宮の許可がいるということ思い出した。

（洗礼を受けてない人間でも白魔法を使えるなら、どうしてそんなこと学校で教えるんだ？）

疑問に思っただけを囁むルナティンを、やはり何かを怖れているかのようなセレナの眼差しが捉える。

「ルナティン、大丈夫？」

「え？」

「わたし……怖い。バツィがバツィでない気がする。前はもつとずつと普通の男の子だったわ。屈託なくて、優しい、ただの小さな子供だった。でも……今は違うような気がして仕方がないの」

必死に訴えかけるように、セレナが言った。

「いや、セレナ、それは」

セレナの誤解を解こうとルナティンは咄嗟に口を開くが、やはりどう説明していいのかわからない。カナンの正体を隠したまま、彼女を納得させるような説明が自分にできるとは思えなかった。

（タチの悪い冗談みたいなもんだよ）

この自分だって、まだ半分信じていないほどなのだ。頭で理解し

ていても、感情の部分ではなかなかそうはいかない。

セレナは怯えた顔をして、両手を胸元で握りしめている。

「気づくとバツと目が合うの。今のせいかと思ったんだけど、でも、この一週間、いいえ、ずっと前から、監視してるみたいな……」

「監視？」

あまり穏やかならざる単語に、ルナティンは表情を曇らせた。

「いつもバツと目が合うの。今までのバツとは違う表情で。わたしの知っているバツは……白魔法なんて、使えなかったわ」

「……」

そう、セレナの言うとおりだ。
今までのバツとは違う。中味は『カナン』だ。バツが癒やし
の術を使えるようになったのも、きつとカナンの教えがあつてこそ。
それを知らないセレナが怯えるのはもっともだろう。しかし事情
を知っているルナティンは納得できる。

できる、はずなのに。

（ちょっと……待てよ？）

それに気づいた瞬間、ルナティンはぞくりと全身を鳥肌立てた。
どうして今まで考えようとしなかったのだろう。

『剣士は城から出て逃げ込んだ先、この家のバツを叩つ斬つて、
黒魔導師は魔導でその体におれを押し込めて、器のないまま行方を
眩ませ』

カナンはたしかに、そう言った。あれほどとんでもない説明もな
かったから、ルナティンは鮮明に覚えている。

（じゃあ）

我知らず顔を強張らせ、ルナティンは自分の背後、バツの住む
家を振り返った。

（どうして剣士はバツを殺したんだ？）

とんでもない説明過ぎて、迂闊に聞き流してしまった。

剣士は、カナンの主張どおりなら、間違いなくそれもカナン自身

だ。

（それに……どうしてすぐに剣士や黒魔導士を捜しにいこうとしないんだ？）

バツィがここを離れたがらないから、というのがカナンの説明だった。

しかし、体の主導権を握っているのはカナンなのだとバツィは言った。つまり、バツィの意向がどうあれ、カナンはそれを無視して自分の目的を遂行することだって不可能ではないはずなのだ。

乱舞する疑問符が、さらにルナティンの不信を呼んだ。

（そもそも、本当にあれはカナンなのか？）

どうしてああまであっさり信じ込んでしまったのか、ルナティンは自分にすら疑問を抱いた。

思い出してみれば、実際にカナンが自分のことを『カナン』だと言葉にして名乗った記憶が、ない。

もしそれが、名乗らなかつたのではなく、名乗れなかつたのだとしたら？

（図書館別館の本だって、どんなルートで一般人の手に渡らないともわからない）

もしよほどの魔力を持つ者なら、図書館の警備や結界をかいくぐって蔵書を持ち出せる可能性が、まるつきりゼロというわけではないのだ。たとえば　　パラスに気配のない魔導で結界を張れるクラスの人なら……？

（そう、それから、俺のこの傷だ）

先刻バツィと話していた時もあった。もしバツィの中にいるのが本当にカナンだったら、この傷は一瞬で完治させられていてもおかしくはない。

なのに、カナンはルナティンの治療に関して、一切手出しをしていない。

もしそれが、手出ししていないのではなく、できないのだとしたら？

一度殺されたバツーが助かったのだから、本当に反魂の法を使っていたからかもしれない。

(だとしたら、バツーの中にいるのは黒魔導使いだ)

妖の領域にある魔術を扱う人間。それでルナティンが思い出すのは、もちろん、パラスに結界を張った者のことだ。

カナンの説明を頭から信じられなくなってきた今、疑い出せばきりがない。

(俺は何を信じればいいんだ?)

ルナティンは次第に混乱してきた。

バツーが嘘を言っているようには思えない。バツーが白魔法を使ったことに関しては、間違いなく事実だと言うことを、ルナティンは身をもって確かめている。

だが、バツーもカナンに欺かれている危険性はあるのだ。

「ルナティン」

険しい眼差しになり考え込んでいるルナティンに、セレナが思い詰めたような声を出す。

「気をつけてね。何が起きているのかわたしにはわからないけれども怖い。わたしのお母さんが病気になるのは、ひとつき前だつて言つたでしょう? それは、ちょうど……バツーの様子が変わりはじめたのと同じ頃なの」

ルナティンは、ゆっくりとバツーの家からセレナへと視線を戻した。

「ひとつき前……」

それは、カナンがこのラクウスにやってきた　バツーを殺した時?

「ええ。ただの偶然かもしれない、でも……怖い。不安で不安で、仕方がないの」

「……」

偶然じゃなければ、『作為』だ。

「お願い、ルナティン、気をつけて。わたし、何かとても悪いこと

が起こりそうで、怖いの……」

か細い声でセレナが繰り返す言う。

ルナティンは自分でも意識しないうち、まだかすかに痛む胸の傷痕を拳で押さえた。

ユマの部屋の扉を閉めて、セレナは溜息をついた。
今日も、ユマは起きてくれなかった。

「お母さん……いつになったら、目を覚ましてくれるの？」
扉に寄りかかって額をつけ、ぽつりと呟く声が、暗い廊下で小さく響く。

しばらくそうしていてから、セレナは扉から離れた。泣いていても始まらない。

（ノイヤーさんのところへ、お仕事をもらいに行かなくちゃ……）
あの日、ルナティンという少年がラクウスへやってきた時に行きはぐってから、セレナはノイヤーのところへ足を向けていない。何となく落ち着かなくて、仕事をする気にならなかったのだ。

外に出れば誰かの　　バツの眼差しが自分を捉えている気がして、怖い。

先刻ルナティンに話したように、ずっと、誰かに見られている気がして仕方がない。

（でも、もう、食べ物がなくなってしまう）
働かなくては食べていけない。食料庫に納めた穀物や野菜も、あとわずかしが残っていなかった。

（たくさん働いて……お母さんが目を覚ましたら、美味しいものをたくさん食べさせてあげなくちゃいけないわ）

ユマは、もう一カ月も食事をしていない。

セレナは自分の部屋へ戻ると、身支度を整え、ノイヤーのところへ行くために家を出た。

だが、外へ足を踏み出した瞬間、思わずその動きを止めてしまう。

「あれ、セレナ」

家の表に、バツィがいた。

「こ……こんにちは」

震えそうになる声で、それでもセレナは少年に向かって微笑んだ。バツィもにこりと笑みを浮かべる。

「ちょうどよかった、今、セレナのところへ行こうと思ってたんだ」

「え……」

「ノイヤーさんが、セレナを呼んでたよ。さっき買い物途中で偶然会ったんだ」

バツィは食料入りの紙袋を抱えている。

「何か、割のいい仕事が入ったんだって。女の人向けだから、他の人に回さないでセレナに取っとくって言った。今日中までは待ってくれるみたいだよ」

「そう……」

いいタイミングだったかもしれない。こうやって、ノイヤーはセレナや、ユマに時々便宜を図ってくれるのだ。

ノイヤーの気が変わらないうちに、彼のところを訪ねた方がいい。

「わかったわ、ありがとう、バツィ」

ぎこちないながらもセレナは微笑み、ノイヤーの家のある方へ進み出した。

「セレナ」

それを、バツィが呼び止める。

セレナはわずかにビクリと肩を揺らし、立ち止まった。

「元氣？」

訊ねるバツィを、セレナは振り返り、見遣る。どうしてか彼をまぶしく感じて、わずかに目を細めた。

出会った頃は自分よりもずっと小さいと思っていたのに、彼はこの半年ほどで急に背が伸びた気がする。気づけば、目線の高さが同じになっていた。

この年頃の男の子が成長するのは、驚くほど早い。

「……ええ、元気です」

セレナは自然と、いつものように静かな笑顔を作っていた。バツィがそれを見て、ひどく嬉しそうな顔になる。

その彼の表情が、なぜだかセレナの胸に染みいるようだった。

「気をつけて行っておいで」

大人びた口調でバツィが言う。セレナは頷きを返した。

「ありがとう」

バツィと別れ、家を出た時よりもわずかに軽い足取りで、セレナは道を進み始めた。

（わたし、気にしすぎだったのかしら）

バツィの笑顔はあんなに優しい。それに怯えていたなんて。

（馬鹿ね、バツィはいつだって、わたしのことを心配していてくれたのに）

まるで呪縛から解けたように、思い出す。バツィはいつでも優しくかった。ユマが病に臥してからは、とりわけ。

きっと、自分を見ていたのは心配してくれていたせいだ。それを

どうして、『監視』されているなどと思ったのだろう。

（馬鹿ね）

ここしばらく、バツィに接する態度がよそよそしかった自分を、セレナは恥じいる気分で叱る。

（今度のお金が入ったら、バツィにも何かお料理を作ってあげよう）
そう決めて、セレナはノイヤーの家までの道のりを急ぎ、その門戸にかかるベルを鳴らした。

「ノイヤーさん、セレナです」

セレナやバツィの家よりも大きく、庭もよく手入れされているノイヤーの家。彼にどんなつてがあつて他人にさまざまな仕事を斡旋できるのかはセレナは知らなかった。

「ノイヤーさん？」

何度かベルを鳴らし、声もかけてみるが、ノイヤーが出てくる気

配はない。

(出かけているのかしら)

つい先刻、バツに頼んで自分を呼びだしたばかりだというのに？
出直すべきだろうかと戸惑いながら思案するセレナは、急に肩を叩かれ驚いて振り返った。

「よう、セレナ。ノイヤーさんに用事かい？」

セレナの背後に立っていたのは、三人の人影。セレナと同じく、ノイヤーから仕事を紹介してもらっている男たちだった。セレナよりもずっと年かさで、力仕事ばかり請け負っている。

セレナが頷いたのを見て取ると、男のひとりが愛想よく笑いながら頷き返した。

「そうか、オレたちも、ノイヤーさんから仕事を回してもらえつつんで来てみたんだけどさ。留守みたいだな」

チツと、笑いながら男が舌打ちする。ちらりと、他の男に視線を遣り。

「オレたちと入れ違いになっちまったんだ。オレたちが酒場の方にいるって、コイツがさっきノイヤーさんに言ったらしいんだよ。そっちに行っちまったみたいだな」

男たちがセレナから離れ、歩き出す。ひとりがセレナを振り返った。

「あんたも一緒に来るかい？　すぐその酒場だよ」

少し考えてから、セレナは男に頷いた。すでに食べ物を買う金は家になかったし、それに先刻、バツに料理を作つてあげるのだと決めたばかりだ。他の人に仕事を回されるより先に、ノイヤーと会わなければならない。

男たちのあとをついて、セレナは道を進んだ。

向かうのは、セレナの家とはまるで反対の方向だ。ノイヤーの家から向こう、酒場などの盛り場がある方には、セレナは足を向けたことがほとんどない。

道がわからないから、足早に進む男たちのあとを、セレナは見失

わなないよう必死について歩いた。

まだ昼間だからか、酒場や食堂の看板がついた店は、扉を閉ざしているところが多かった。さして広くはない通りを行き交う人の姿も、ほとんどない。

「あの……ノイヤーさんは、どこの酒場に……？」

少し息を切らしながら、セレナは男たちの背中に訊ねた。歩くのが速すぎて、ついていくので精一杯だ。

「ああ、あそこだよ」

男のひとりがすぐそばの店を指さして、セレナはほっとした。ようやく着いたらしい。

店は他のところと同じように入り口を閉めていたが、男たちは気にせず扉を開き、中へ入っていった。セレナもそれに続く。

店の中は明かりもなく薄暗い。客の姿のひとつもなく、セレナは、にわかに不安を覚えた。

「あの……？」

「二階が部屋になってんだ。ノイヤーさんがよく休んでるとこだよ。今はいないけどな」

暗くて男たちの表情はよく見えない。誰かが振り返り、ゆっくりとセレナの方に歩み寄ってきた。

セレナの本能が、明確に危機感を訴える。

「わ……わたし、帰ります……っ」

震える声で言いながら後退させたセレナは、背中に何かが当たって、ビクリと振り返る。

「おいおい、来たばかりでそれはねえだろうよ」

背後にいたのは男のひとりだった。逃げだそうとするセレナの両腕をきつく指で掴んで押さえつけ。

ボタン、と大きな音が響いてセレナは全身を震わせた。入り口が閉ざされたようだ。

「いや……」

首を振り、泣き出しそうに怯えたセレナの声に、男たちの低い笑

い声が返る。

「まアさかこんな簡単に、ノコノコついてくるとはなあ？　今まではノイヤーの野郎が目を光らせてたから、手出しできなかったけどよ。オレたち明日から別の町へ行くことになったんだ。もうノイヤーの顔色窺うこたあねえ」

乱暴に体を突き飛ばされ、セレナは店のテーブルの上へ倒れ込んだ。

「今までさんざん偉そうにオレたち使ってきたノイヤーに、最後だつてんで礼のひとつもくれてやろうとヤツの家に行ったらお留守だ、ガツカリしたよ。でも　あいつをブチのめすよりも、こっちの方が……なあ？」

下卑た笑い声が、薄暗い店の中に低く響く。

「ノイヤーの奴、オレたちがいくらあんたをこっちに回せって言っても聞かなかった。あの野郎あんたがにもうちつと色気がつくまでなんて吐かして、焦らしやがって……一番最初にいただくのは自分だつて、ニヤニヤしてよ」

男の言葉に、セレナは耳を疑った。

(ノイヤーさん、が?)

強面で、乱暴ではあるが、セレナたち母娘には優しくかったノイヤー。

「でも、まあ、その代わりにユマには楽しませてもらったけどな」
「……!？」

愕然と　セレナは男たちを見返す。

「そりゃあもちろん、あんたに較べれば歳は少々いつてるが、まず美人だし、ノイヤーもオレたちも、何度も世話になったよ」

「嘘……」

問い返す声が、震える。

「嘘なもんか。でなけりゃ、どうしてあんたら母娘が割のいい仕事ばっかりノイヤーに回してもらえたと思ってるんだ。特別に斡旋料を、ユマが体で支払ってたからさ」

「ああ、ここんとこ姿が見えなくて、オレたちもずいぶん寂しい思いをしたもんだ。ちょうどいいじゃないか、今度はあんたがユマの代わりをしなよ」

「ノイヤーも、そろそろだって言ってたもんなア」

耳を塞ぎたかったのに、セレナは腕を動かすこともできなかった。信じたくない。何もかも。

「や……いや……」

男たちが、ニヤニヤと嫌な笑いを浮かべながら、セレナのそばに歩み寄ってくる。

「いや……っ」

セレナの口から洩れるのはか細く頼りない声ばかりで、恐怖に身が竦み、テーブルに背中を押しつけられても逃げることもできない。荒く息をする男にのしかかられ、節くれ立った手で口許を押さえられ、叫ぶことすら適わなくなった。

(誰か……)

あちこちから伸びる手が、セレナの手首を掴み、脚にかかり、服を剥ごうと動き回り始める。

怯えと怖れに、締めつけられる全身を堅く強張らせながら、セレナは必死に身藻掻いた。

(誰か助けて……ッ)

誰か 胸裡に浮かぶ姿は。

(助けて、誰か バツ……!!)

言葉にならない声で叫ぶセレナに救いの光など見えない。服が引き裂かれ、肌を露わにされ、おぞましい指や舌先が体を這い回る。縋るものは、心に浮かんだあの明るい金色の髪を持つ少年の姿だけだった。

(……バツ、助けて……)

涙のあふれだした目から見える暗い視界を閉ざし、そうして、セレナはただ救いを求めた。

(……お願い……)

こんな時に呼ぶ神の名を、セレナは知らない。

(神様なんて)

今まで一度だって、自分を救ってくれたことがあったか？

神の名を呼んでも聖なる力を持ち得ないセレナには何の奇蹟も起こらなかった。

ユマは何かに追われるように、

逃げるようにこのラクウスへ隠れ住み、

セレナは学校へ行くこともできず、

同じ年頃の少女があたりまえに過ごす生活も手に入れられず、

ただその日の糧を得るために働くだけの日々を過ごし、

それでもユマさえ優しくければセレナの時間は満ち足りたのに、

(でも)

仕事と引き替えにユマは男たちに体を売り、

(あのひとは)

深い眠りに沈んだまま、目を覚まそうとしない。

(わたしを置いて)

助けてなどくれない。

名前を呼んでも振り返らない神。名前を呼んでも目を覚まさないユマ。

(助けて)

心はこんなに叫ぶのに。いつも、いつも。

(助けて、バツ)

切り裂かれるような痛みには心は悲鳴を上げて、泣き続けているのに。

誰も 手を差し伸べてなどくれない。

「おい、順番だぞ！」

抗う力をなくしたセレナに、手足を戒める指も消えた。

男の声と荒い息が入り乱れ、肌に触れ、セレナを侵食しようとしている。

(たすけて)

なぜ自分がこんな目に遭うのか。
わからない。

『おまえの周りには敵が多い。それをわからなくちゃいけない』

不意に、脳裡へ甦る誰かの言葉。

『そしてこれも覚えておくんだ。私がおまえの味方であるというこ
とを』

(誰……?)

『私はおまえを救う者。そして解放する者』

おぼろげに浮かぶ顔。姿。声。

『必要な時はこの名を呼びなさい。私はいつでもおまえの許に現れ
よう』

(あれは……)

『私の名は』

瞬間、鮮明に記憶を巡る

(あのひとは)

「……………、ん……………」

『私はおまえを救う者』

「……………ジン……………」

自分を見つめる瞳を思い出した。

「助けて、ジン　ッ……！」

唇を覆う手を振り剥がし、セレナは持てる力すべてでその名を叫
んだ。

「何だア？」

声を上げるセレナに、男がおかしげな調子で呟く。

刹那。

「う……………わああッ!？」

仰天したような男の声が響く。続いて、激しい衝突音。

セレナの上から、のしかかっていた汗臭い体重が消えた。

「あああああっ……！」

「な……………んな、何だあ……………あ!？」

「おい、一体……」

驚き、肝を冷やしたような男たちの声、そして悲鳴は、床の方から聞こえる。

「やあ。ようやく私を喚んでくれたね」

そして、次に間近で聞こえたのは、たしかに覚えのある、深い響きを持つ低い声。

セレナはゆっくりと、きつく瞑っていた瞼を開く。

「……！」

大きく瞳を見開き、そして息を呑んだ。

目の前に、彼、ジンが立っている。

扉や窓が開かれた様子もなく、近づいた気配もなく、一糸乱れることもなく整った姿で。

「セレナ」

名を呼んで、指先を伸ばす。頬に触れられて体を震わせる少女に、「ああ」と小さく呟くと、ジンは身にまとっていた上着を脱ぎ裸の体に向け、彼女をそっと起こしてやった。

「愚かな者どもだ」

セレナの目を覗き込み、ジンが優しく笑う。

「おまえの体に気安く触れられるほどの資格があるとも思っているのか。下賤な人間に、おまえを穢すことなどできはしないというのに」

両手の指先を使って、セレナの頬を伝う涙を拭つてやると、ジンは振り返って床へ無様に倒れる男たちを見下ろした。

「憐れむような、蔑むような瞳で。」

「な……っ、何だデメエ、どうやって入った！」

男たちは、一体何が起きたのか未だ把握していない。自分たち大人の男三人を、まるでオモチャのように床に転がしたのが目の前の優男とはとても思えなかった。ものすごい力だ。男のうちのひとり、両手で片目を押さえ、わめきながら床を転がっている。その声、耳障りなほど店の中でこだまする。

店の扉は閉ざされたままだ。彼がどこから入ってきたのか、すべてが男たちの理解を超えた。

「か、構うもんか、殺せ！」

混乱が男たちから思考を奪い、自分たちがもつとも慣れ親しんだ暴力へと走らせた。

一気に押し寄せる男たちの勢いにまるで怯む様子も見せず、ジンは、ただ口許で優雅に笑っただけだった。

出かけていたのは珍しく『カナン』のようで、おまけに彼が手にしていたのが店屋の袋に入った食料だったため、ルナティンは多少驚いた。まさか食事の買い出しに、カナンが向かうとは。

それがカナンである。少なくともバツィではない。ことにルナティンが気づいたのは、家に戻ってきた彼が、じっと考え込むような表情をしていたからだ。子供バツィのする顔ではない。それでなくとも、しばらく一緒に暮らすうち、もともと他人の気配に聡いルナティンは、それなりに観察していれば相手の区別がつくようにはなっていた。

「買い物に行ってたのか」

食卓へどさつと紙袋を投げ出したカナンにルナティンが訊ねると、「ああ」と生返事が返ってくる。外の空気を吸いに出たルナティンと入れ替わりのように出かけてしまった彼は、家に戻ってきた今もすぐにバツィの部屋へ引き込み、ルナティンにろくろく言葉をかけさせる暇を与えなかった。

(でも……何をどう訊けばいいんだ?)

ルナティンはほとんど、困惑していた。

『カナン』に対して浮かんだ疑念。

もし彼が本物のカナン王子でないとしたら、それになりすます目的はいったい何なのか。

(いや、まだ、贖者だって決まったわけじゃないけど)

もし本物のカナン王子だとしても、不審なところが多すぎる。

不用意に核心に迫る質問を本人にぶつけて、それが彼に都合の悪いものだった場合　彼が『バツ』を人質に立ててしまえば、ルナティンに対処のしようがない。

もしも、万が一にでも『カナン』の正体が黒魔導士だったりしたら、どれほどひどい事態が待っているのか。

(だから、そうと決まったわけじゃ)

せめぎ合う自分の疑念たちに、ルナティンは気が滅入ってきた。何しろわかることが少なすぎる。

長い時間が経ったあとに、部屋から出てきて食事の支度を始めたのはバツだった。

バツにも元気がない。明るく振る舞っているようにも感じられるが、ルナティンの見たところそれは空気に近かった。

「あれ、ルナティン、そのサラダあんまり美味しくなかった？」

あまり食の進まないルナティンの皿を見て、バツが小首を傾げて問いかけてくる。

「いや……」

ルナティンは曖昧に返答してから、テーブルと夕食を挟んで向かい合う少年を見遣った。

「カナンは、何をしてるんだ？」

「何って？」

「ほら、だから、今……」

「思考を閉ざしてるからわかんないってば。用があるなら呼び出そうか？」

「あ、別に用があるわけじゃないから！」

慌てて手を振るルナティンに、バツが小首を傾げる。

あまり軽快とは言えない会話をしながら食事をすませると、ルナティンは早々と自分にあてがわれた部屋へ戻った。もう少し、頭を冷静にするため、ひとりになりたかったのだ。

バツも後かたづけをすませてから自室へ入ったらしく、台所からは物音が聞こえなくなった。

考えているうちに頭が疲労してしまい、ルナティンは気づくとソファでうたた寝をしていた。自分が眠っていたことに、目が覚めたので気づく。

窓の外を見遣ると、おぼろに空へ浮かんだ月が高い。昔から愛用していた懐中時計はバーンスの宮廷騎士に襲われた時壊れてしまったので正確な時間はわからないが、もう真夜中のようだ。

(喉渴いたな)

のろのろと起きあがり、無意識に胸の傷痕を押さえながらルナティンはソファから床に降りた。こっちは怪我人だというのに、少し回復してきた途端ルナティンは寝台のあるバツの部屋を追い出されて、この物置部屋のような場所へ押し込められている。もちろんカナンの命令だ。ソファがあるからいいようなものの、まったくひどい仕打ちだ。

ぶつくさと文句のひとりごとを言いながら部屋を出て、ルナティンは台所へ向かった。水が飲みたい。

(あれ、まだ起きてるのか?)

台所へ向かう途中、バツの部屋から細く明かりが洩れていることに気づいた。何となく足音を殺しながらその前を通り過ぎ、途中、ちらりと部屋の中に目を遣る。

カナン　あるいはバツ？　は、寝台に片膝を立てて座り、窓の外をじつと眺めていた。

バツの部屋の窓からは、セレナの家が見えるはずだ。

『気づくとバツがわたしを見ているの。監視してるみたいに』

昼間、セレナと交わした会話をルナティンは思い出した。

(監視……か)

あまり気持ちのいい言葉ではない。

ルナティンは台所へ入ると、水瓶からすくった水を直接柄杓で口に含んだ。ごくごくと音を立ててそれを飲み干し、柄杓を瓶に戻す

時、何か物音を聞いて反射的に耳をそばだてる。

（ カナン？ ）

音がしたのは家の出入り口の方だ。ルナティンが咄嗟に窓から玄関の方を見遣ると、子供の影が暗い夜道へ出て行くところだった。

（どこへ行くんだ？）

考えるより先に、ルナティンの足も外へ向かっていた。気づかれないよう大きく距離を開けて、子供のあとを追う。

（あれは、カナンか、バツか）

多分カナンの方だろう、とルナティンは見当をつける。離れすぎているので表情は見えないし、精神の波動を追えるほど気持ち冷静でないから、ただの勘のようなものだ。

カナンは、曇天で月の光もそう届かなくなった暗い道を、惑うことのない足取りで進んでいる。もう真夜中だから、表を歩いているような者は、カナンと、それからルナティンの他には見当たらない。ルナティンに聞こえるのは風に揺れる木々のざわめきと、忍ばせても響く自分の足音、息づかい、それから早鐘を打つ心臓の音だけだ。カナンがどこに向かっているのか、土地勘のまるでないルナティンにはわからなかった。ただ見失わないようあとを追う。

黙ってあとをつけるような真似をすることに罪悪感があったが、今はこうするよりほかに思えた。

（カナンはきつと、何かを隠している）

それはルナティンの中で確信に近かった。

しばらく歩くうち、カナンは一軒の家の前で立ち止まった。バツーやセレナの住む小さな民家に比べ、少し大きくて立派な作りをしている。都市の住宅に比べればみすばらしいものではあったが、敷地も庭も十分に広く、おそらくこのラキウスでは力と財力を持つ部類の人間が住んでいるのだろうと察せられる。

（こんなところに、何の用だ？）

どんな用があるにしても、今は人を訪ねるのにまるで向かない時間だ。

門に貼りついてルナティンは姿を潜めながら、入り口へ向かうカナンをそつと盗み見た。カナンは入り口の扉に手を伸ばし、何度かノブを回した。夜だから当然施錠されているらしいが、カナンは迷うことのない素振りですぐ何かの詞を呟いた。

（魔法だ）

鍵の代わりに魔法で扉を開けた。それが聖の領域の力が、あるいは妖のものか、ルナティンにはわからない。感じる暇もない早業だった。おそらくごく簡単な略式魔法だろうが、それにしてもあつという間だった。

（あいつの正体が何にしる……多分、持つてる力は相当なものだ）
そうルナティンが考える間に、カナンは開いた扉から家の中に入つていつてしまった。さすがに家の中まで追つていけば、気配や物音で気づかれてしまうだろう。ルナティンはしばらく迷い、それから足音を殺して、家の周囲に場所を移した。窓から何か覗けるかもしれない。

この家の敷地が広くて幸いした。外から窓を覗こうとしているのを誰かに見咎められでもしたら面倒だ。庭の周りには背の高い生け垣が巡らせてあるから、他の人間に見つかることはないだろう。

身をかがめて家の外壁を擦るように入り込み、手近な窓の下に貼りつくと、ルナティンはそろそろと立ち上がった。

慎重に、窓の中から部屋を覗こうと試みて、

（うわっ！）

慌ててもう一度身を潜める。

部屋の中に、間違いなくカナンがいる。早々とヒットしてしまつたらしい。

（危ない、危ない）

乱れてしまった呼吸を整えながら、ルナティンは意を決してもう一度窓越しに部屋を覗いた。細く開いたカーテンの隙間から、中が見える。

明かりもない暗い部屋。この家の住人は、眠っているのか留守な

のか。

カナンは、部屋の中央辺りに佇んでいた。俯いている。床を眺めているようだ。

（何だ？）

ルナティンも、カナンと同じ方向へ視線を凝らした。暗くてよく見えないが、おそらく寝室と思われる場所の床、そこに何か大きな塊のようなものがある。

カナンが片手に燭台を握っていた。元からこの家にあったものだろう。片手が闇の中で動いて、すぐに、ほのかな明かりで部屋が照らされる。

（こつち、見えちまう……かな？）

緊張しつつも、ルナティンはさらに家の内部に目を凝らす。カナンはやはり、寝室の床を見ていた。

「……」

ルナティンはわずかに眉をひそめ、それから、背中を伝う汗を感じた。

（何　だ、あれは）

床に転がる大きな塊。

赤い。

（あれ、は……）

床に広がる大きな染み。

赤い。

（血、だ）

蠟燭の明かりに照らされ出す、どす黒い染み。床に落ちた大きなものは、

（人間……）

死体。

カナンは大柄な男の死体をみつめ、ただその場に佇んでいる。表情もなく。

（人が、死んでる）

ルナティンは呻き声が洩れそうになるのを、必死にこらえた。気
持ち悪いほど冷や汗が出てくる。

明らかに、誰かに殺された死体。俯せに倒れた大柄な男の、後頭
部から背中まで、まるで大きなかぎ爪に抉られたかのように、無惨
な痕がついている。

（誰が殺したんだ？）

浮かんだ疑問に、すぐさま出てくるさらなる問い。

（なぜ殺したんだ？）

バツィを殺したのは カナン。

『剣士は城から出て逃げ込んだ先、この家のバツィを叩つ斬つて』
では、あの男を殺したのは？

ぞつと、ルナティンの全身に悪寒が走る。

カナンは手にしていた燭台を、手近な棚に置いて、ふたたび死体
と向き合った。

「ルナティン」

「！」

窓越し、大きく叫んだわけでもないのに、はつきり聞こえた声は、
間違いなくルナティンの名を呼んだ。

「おまえはここにいない方がいい」

命令する口調は、カナンのもの。ルナティンを振り返ることもな
く、死体を見つめたまま口を開く。

「離れている」

「カナン……」

呆然と、ルナティンは窓の中のカナンを眺める。

（気づかされたのか）

「おまえには負担だ。怪我も治っていないんだから、おとなしく家
に戻れ」

カナンの言葉の意味がよく理解できず、ルナティンは拳で壁を叩
いた。

「カナン、一体どういふことなんだ！ あんたはここで、何をやっ

てるんだ!？」

「今は問答している時間がない。いいから行け」

言われて、はいそうですかと引き下がれるわけがない。

ルナティンは自分の方を見向きもしないカナンに唇を噛み、今度は窓のガラスをダンダンと叩いた。

「カナン、開けてくれ! 何が起こっているのか教えてくれ!」

いつそこのガラスを割ってしまおうか、そう思って両手を窓につけたルナティンは、次の瞬間、その場で大きくよろめいた。

(……!?)

何の前触れもなく目の前に紗がかかる。頭と体が急激に重くなった。意識が遠のいていくのがわかる。もう何も見えない。地面に自分が倒れる音を聞いた。

「カナン あんたが……」

ルナティンの問いは、音にならずそのまま潰えた。

第五章『覚醒』(1)

重い頭で目が覚めた。

窓の外からは、相変わらず暗い太陽の光が射し込んでいる。朝が来たらしい。

「……………」

ずきずきと痛む頭を押さえ、セレナは寝台の上に体を起こす。

吐き気がする。

昨日　あの男たちは、ジンに殴りかかる直前、彼に何も手出ししないうちにいきなり床へ倒れ込み、ヒクヒクと体を痙攣させた。言葉にならない声で呻き、床をのたうち回る男たちを後目に、セレナはジンと共に酒場を出た。

『大丈夫かい？』

ジンはセレナの目を覗き込み、優しくそう訊ねた。恐怖からまだ覚めやらぬセレナは、彼に抱き寄せられるまま、泣きじゃくった。

『ひどい思いをしたようだね。だが、もう平気だ』

『……………どうして……………っ！』

怒りや、悲しみに突き動かされて声を上げたセレナを、男はよりいっそう強く抱き締めた。

『そう、どうしておまえは、あんなところに行ったんだ？』

訊ねられ、そして、セレナは全身に冷たい水をかけられた心地になつた。

(どうして……………?)

呼ばれたからだ。ノイヤーに。

(でもノイヤーさんはいなかった)

ならば、誰が自分を呼んだのか。

『……………バツ……………、に』

ノイヤーからだ、伝言を伝えたのはバツだった。

そう思い出した瞬間、セレナの中で何かの籠が外れ、そしてそのまま意識を失った。

もう一度目を覚ました時、セレナはまだジンの腕の中にいた。もうすでに真夜中で、セレナは深く眠り込んでいたらしい。

別れ際、ジンはセレナに何か言葉をかけた。セレナはそれに頷きを返したが、何を言われたのかは覚えていない。ジンと別れ、まだおぼろな意識のままどうにか家に戻り、そして眠った。

「わたし、何をしたらいいの……」

寝台に座りながら、セレナはぼんやりと呟いた。

この先どうすればいいのか。

心が麻痺してしまつたように、何も考えられない。

「そう……仕事……、仕事をしなくちゃ……」

よろめきながら、セレナは寝台から床へ降り立つ。

「お金をもらわなくちゃ、暮らしてけないもの……」

自分は何のために暮らしているのだろう。

何のために生きているのだろう。

誰のために。

セレナの胸の中を通り抜けるものは、痛みでも寂しさでもなく、ただ、虚無だった。

笑うこともできないのに、泣くこともできない。

自分の中には何も無い。

もう何も。

それなのに、セレナは服を着替え、身支度して、家の外に出た。

心は何も動かないのに、体だけは働こうとしている。ノイヤーの家に向かって歩き出した。

(今日は……おかあさんの様子を見ていないわ……)

歩きながらそれに気づいたが、セレナは足取りを止めなかった。

どうせ、ユマは目を開けてくれないから。

道を進む途中、がさがさと激しい物音がして、セレナは無意識にそちらの方へ首を巡らせた。道に沿って並ぶ植木を、乱暴に掻き分

けて現れたのは、男の姿。

「……………」

もう何も感じないと思っていた心なのに、セレナはその姿を見た瞬間、凍った表情で息を呑んだ。

「……………セレナ……………」

低くしゃがれた声で名前を呼ぶのは、昨日、酒場でセレナを組み敷いた男のひとり。顔を歪め、片手で右目を覆っている。

その顔と指の間には、どす黒い血液がこびりついていた。

「昨日の野郎はどこに行った……………」

歪めた口許で男が言う。

「あいつ……………あの野郎のせいで、俺の、俺の目が……………！！」

ジンが酒場に現れた時、男たちの体が一斉に床やテーブルに叩きつけられた。その時に怪我をしたらしい。

「見ろよセレナ、オレの目が！！」

叫んで男が目を覆っていた掌を外し、セレナへ見せつけるように血で汚れた顔をさらす。

セレナは短く悲鳴を上げた。

男の右目が、瞼ごと抉れ、ただの孔になっている。

「どうしてくれるんだよう……………ええ？ オレの目をよオ！？」

男がセレナに掴みかかる。セレナはその腕を振り払い、身を翻して駆け出した。男が追ってくる。

無我夢中で走るうち、セレナはどんどんと町の端の方まで進んでいた。人の作った道を外れ、放置されたままに生い茂る草を掻き分け、深い森の方へ入り込む。

「待てよ！！ この……………」

男が叫び、セレナに追い縋る。セレナは後ろを振り返ることもできず、その声と足音から逃れようと、さらに森の中へ走った。

だが、セレナの体力の方が、男よりも尽きるのが早かった。

「どうしてくれるんだよ、オレの目をヨオ、ああア！？」

男がセレナの結った髪を掴み、そのまま草叢に引きずり倒した。

下衣のベルトに挟んだ錐を、右手で握ってセレナに突きつける。

「あの男はどこ行った」

「わ……わたし、知りません……」

震えて掠れる声で、セレナは男に答えた。男が怒号する。

「嘘つきやがれ！！ サア、あの男を喚べ！！ 昨日だってテメエが喚んだら来ただろうがア！！」

セレナは必死に首を振る。この男は狂っている。狂人の瞳だ。

「じゃあいいよオ…… テメエでなあ」

薄く、男が嫌な笑みを口許に浮かべる。

「テメエもオレと同じにしてやる……」

セレナの瞳に、鈍く煌めく刃物が映った。

もう一度、あの時のようにジンの名前を呼びたかったのに、声が出なかった。

セレナのいつぱいに開いた瞳、その視界の中、錐の刃先が一気に迫った。

目が覚めた時、ルナティンはいつもの物置部屋のソファに横たわっていた。

「！！」

気づいて、勢いよく身を起こす。

朝だ。

「俺は……」

掠れた声で呟きながら、ルナティンは掌で自分の額を覆った。決して暑いわけではなかったのに、薄く汗が浮かんでいる。

（ゆうべのは 夢、か？）

一瞬縫るような希望を求めてそんなことを思ったが、ルナティンはすぐに自分でそれを打ち消した。

記憶は鮮明だ。あれが夢であるはずがない。

夜中家を抜け出し、誰かの家へ入っていったカナン。
彼が向かった先、部屋の中で、死んでいた男。

「……………」
ルナティンはソファから起きあがり、部屋を出た。

台所には人影がなく、ルナティンはすぐにバツの部屋を目指した。閉ざされた扉を、しばらく逡巡した後、拳で叩く。

「カナン。起きてるか？」

扉の向こうで小さく唸るような声と衣擦れの音が聞こえ、すぐに入り口が開いた。

「あ…………ルナティン、おはよう……………」

あくび混じりの声がする。

「バツか」

今ここにいるのはバツだ。ルナティンは小さく呟くと、目を擦っているバツを見下ろした。

「バツ、カナンを呼べないか？」

「え……………」

起き抜けでまだ寝ぼけているのか、バツの呟きは頼りない。ぐらぐら体を揺らしながら、再び寝台へ戻っている。

「ゴメン、オレ、眠くって……………」

大きくあくびをして、バツがどっさり自分の寝台へ腰掛けた。

「えと、何……………」

「カナンだ。カナンと話がしたい」

「んん……………」

もそもそと、バツはまた掌で目を擦っている。本当に眠たいらしい。

（ゆうべ、こいつもずっと起きてたのか）

それとも『体』が起きていたから、それを休ませるために眠りを求めているのか。

ルナティンは部屋へ大股に踏み込むと、バツの両腕を強く掴んだ。

「バツ、頼む、あいつと話をさせてくれ」

「何だ、朝から騒々しい」

パツと切り替わるようにバツの表情が変わる。あまり抑揚を感じさせない声音で話したのは、カナン。

「……カナン」

腕を握ったまま、ルナティンは身を屈めて相手の顔を覗き込んだ。

「説明してくれ。ゆうべのこと。一体、あなたは何をしたんだ」

「だから、『あんた』などと軽々しく呼ぶな」

不愉快そうにカナンが言う。ルナティンはもどかしげに首を振った。

「そんなこと議論したいんじゃない。教えてくれ、あなたは何をするつもりなんだ？」

カナンの眼差しが、わずかの間だけルナティンを捉える。

だがすぐに、視線は逸らされた。

「おまえに話すことではない」

「カナン！」

思わず声を荒らげてから、ルナティンは、冷静になろうと大きく息をつく。

もう一度、相手に呼びかけ。

「カナン……いや、あんたに訊きたい。あなたは、誰なんだ？」

答えは返らない。

「頼む、教えてくれ。何が起こっているのか」

乱暴に体を揺さぶると、かすかに眉根が寄る。

「なぜあなたはバツを殺そうとしたんだ？ なぜあなたは、バツ

も、この町を出ようとしなんだ。このサンファールやパラスを、シノンを救うために、あなたたちは動き出さなきゃならないはずなんじゃないのか？ それに、ゆうべの死体は

言う声が、どうしてもうまく続けられない。

答えを教えてほしかった。

「お願いだ、答えてくれ。あなたは誰なんだ？」

カナンは答えない。

「俺は……」

絞り出すルナティンの声は、何かに縋るようでもあった。

「俺は、一体何を信じればいいんだ？」

「……」

無言でいたカナンが、ゆっくりと視線をルナティンに戻す。

「おまえは」

そして、口を開いた。

「おれを信じればいい」

はつきりと、カナンはルナティンを見据えている。

「おれを信じろ。おまえの使命はそれだけだ」

「……」

ルナティンのはのろのろと、相手の腕を掴んでいた指先をおろした。迷いのないカナンの瞳。

父王と戦う決意を見せた時も、同じ目をしていた。

ルナティンが、何か言おうと口を開きかけた時、

「!!!」

唐突に、カナンがビクリとその全身を大きく震わせた。

「結果が　！」

声は、絶望的な呻きに聞こえた。

「カナン？」

一瞬にしてカナンの顔色が変わる。ルナティンが問いかける暇もなく、跳ねるようにその場から立ち上がった。

「カナン！」

驚くルナティンの横をすり抜け、カナンが走り出す。ルナティンも咄嗟にあとを追って、部屋を飛び出した。

カナンは持てる限りの力で道を走る。まだ完全に傷の癒えないルナティンとの間が開いていった。目指すのは、この町の端、森のある方向。

全力で走るカナンの足取りをとどめたのは、道の前方へ現れた男

の影だった。

ふっと、前触れもなくそこに出現した男の姿。冷たく整った顔。うつすらと微笑み、男はカナンを見ていた。

「慌ただしいご様子」

穏やかな低い声で呟く男を、立ち止まったカナンは少しの距離を置いて見上げた。

「お見受けしたところ高位の術者殿のようだが、聖職に就こうという方が、落ち着きのないことだ」

「……」

肩で息をしながら、カナンは男を睨み据える。

「穢れの臭いがする」

呟くカナンに、男の笑みが深くなった。

「おまえからは、穢れた血の臭いがする」

「そう……私は昏く深き淵より、おまえたちに絶望を告げに来た者」さらに鋭く、カナンは男を見遣った。

「おれは絶望などしない」

「どうか？　すでに心は千々に乱れているだろう」

カナンは空を薙ぎ払うように右腕を振ると、指先を拡げてその掌へ意識を向けた。

大仰に感心した様子で、男が眉を上げる。

「おやおや、あんな結界を張るほかに、まだそんな力が残っているか」

「我、主を知りつ、主の審判義なればなり」

男の言葉を無視して声を上げたカナンを、冷笑が見下ろす。

「呑気に詠唱などしている暇があるのか？　今頃おまえの作り上げた聖域は、我の手と同じく穢れし血で浸されているだろうに」

「！」

「あの娘のところへ、早く行ってやらなくてもいいのかい？」
ぎりつと、カナンはきつく歯軋りをした。

男が、笑う。

そのまま風に紛れるように、現れた時と同じく、ふっとその姿が消えた。

「カナン！」

ようやく追いついたルナティンが、呼びかけながらカナンの方へ近づいてきた。

「何なんだ？　今、ものすごく嫌な気配が　それに、急に空気が
澱んだみたいに」

「……セレナ！！」

カナンは叫ぶなり、再びその場から駆け出した。

「カナン！？」

「おまえは来るな、ルナティン！！」

一瞬だけ振り向いて、カナンが言う。ルナティンは走り続けて乱れた呼吸で肩を揺らし、痛む胸を押さえて、額を流れ落ちる汗を拭いた。

「来るなって言われて、引っ込むわけにもいかないだろうが……！」
すでに小さくなったカナンの背中を目指し、ルナティンは再び走り出す。

走りながら、ルナティンは次第に体が重苦しくなるのを感じた。

（これは　　）

こんな感じには覚えがある。

（パラスの時と同じだ）

ひどい澱み。陽は昇っているはずなのに、辺りは薄暗い。昨日までは、いや、ついほんの少し前までは、こんな澱んだ空気など感じなかった。体を嫌な臭いが撫でていく。触手がのびてくる感覚。

（妖霊がいる）

しかも、カナンの進む方から、その感じがどんどん強くなっていく。

カナンが、目の前に見えた森へためらいなく入り込む。ルナティンもそれに続き、深く草の生い茂る中へ足を踏み入れた。

「う……っ」

ほうぼうからのびている枝を腕で払い、草を踏み分け進むルナティンは、強い衝撃を感じて顔を歪めた。

あたりに瘴気が満ちているのがわかる。空気はさらにひどく濁り、少し前も見えないほど。

「カナン！ どこだ！！」

叫んだ時、森のもっと奥の方に明るい光のイメージをルナティンは感じた。その光だけを指針にして、よろめきながらさらに進む。

（何てえ空気だよ）

パラスの時と違い、今のルナティンにはアミュレットのひとつもない。おまけに傷を受けた身だ。激しい不快感に意識が吹き飛びそうになった頃、ようやくカナンの姿を捉えた。

カナンは瘴気を避けるように口許を腕で覆い、渦巻く黒い風に小柄な体がよろめくのを耐えていた。

彼の目前に、澱みの中心がある。

それに惹かれるように妖霊たちが集まっているのだ。

「これは……」

愕然と、ルナティンは呟く。

初めて見るものなのに、ルナティンはその澱みの正体をはつきりと理解した。

『……ナ……ンデ、オレガ……』

歪んだ声が、森の中に暗く響く。

『ドウナツチャツテンダヨウ……ッ』

泣き喚くような叫び。強い怒りと嘆き。絶望と憎しみ。

「死に人の魂か……」

ルナティンはあまりに激しいその怨みの波動を、怯みそうな心で見つめる。

ここで誰かが死んだのだ。

すでに血と死肉は闇に溶け、空に昇ることもできない魂が悲しく漂っている。

「カナン！」

カナンは怨みと憎しみに囚われた暗い思念の澱みへ、近づこうと
していた。

(無茶だ)

「カナン、やめろ!!」

この澱みに喰われれば、きっと生きている人間も渦の中へ取り込
まれてしまう。

「下がっている」

澱みの中心を見据えながら、カナンが言う。ここを浄化するつも
りなのだ。ルナティンは考えるより先に、カナンを引き戻すため彼
に近づこうとした。

「馬鹿、ルナティン……!!」

気配に気づいたカナンが、振り向いて声を上げる。

その声と重なるように、樹々がざわめく音をルナティンは聞いた。
枝々が軋み、激しい葉擦れを起こす。驚愕するルナティンの視線の
先で、次々と樹の枝が弾けるように折れていった。

「!?!」

瞬間、ルナティンは頭に走った鋭い痛みに呻き声を上げた。よろ
めき、数歩後退さる。

「痛……ッ」

顔を歪め、頭を両手で抱えようとした時、ルナティンは空を薙ぎ
音を立て、折れた枝の鋭い切り口が一気に自分の方へ向かってくる
のに気づいた。

「……!!」

だが、体が竦んで動けない。

「精霊、守護を!!」

ルナティンの体に突き刺さることはずだった枝々は、凜とした響
きを持つ声に阻まれたように、その目前で動きを止めた。粉々に砕
け、地に降り注ぐ。カナンが守ってくれたのだ。

「カナン……」

「いいから退いている、この気ではおまえの感覚に負荷がかかりす

ぎる！」

ルナティン突き飛ばすように澱みの中心から遠ざけ、カナンが懐に手を入れ、小瓶を取り出した。ルナティンの周囲、そしてルナティン自身に中味の液体を素早くかけた。

「我に順ろい、我に言向く精霊、彼の者へ光の垣根幾重に巡らせ、その護りとなれ」

唱え、カナンは空になった小瓶に軽く接吻してから、それをルナティンに放り投げた。

「握っている」

ルナティンは自分を取り巻く空気が唐突に柔らかくなったのを感じていた。カナンがルナティンの周りだけ、守護の結界を張ったのだ。

カナンはすぐにルナティンに背を向け、再び澱みの中心へと向き合った。

「私はおまえの嘆きを聞く者だ！ すべての苦しみや悲しみを癒やすためにここへ来た！」

強く、カナンが呼びかける。

「ナ……コ、キハア……」

聞こえる声は、すでに言葉になっていない。

澱みが、ゆらゆらと揺れながら男の顔を象り、カナンはわずかに目を細めた。見覚えのある顔だ。ノイヤーのところで、何度か見かけた。

「イ……イイイイイイイ……」

鼓膜を鋭く打つような音が、空気を震わせる。カナンはきつく右の拳を握った。

「駄目か」

すでにカナンの言葉は届かない。一度映し出された男の顔は、あつと言つ間に散開し、残るのはただ澱みだけだった。

男の怨みが強すぎる。

「これでは人として送れない……」

眩いたカナンに、突然、澱みが鋭い刃となって襲いかかった。

「聖楯！！」

カナンが鋭く叫んで右の掌を突きだし、その瞬間、ルナティンは彼の前に厚い光の幕が現れたのを見た。バチンと雷電が弾けるように、光の幕が暗い色の刃を跳ね返す。

(すごい)

瞬きもできずにその様子を見ていたルナティンは驚嘆した。カナンは一瞬の間、ひとつの詞だけで、護りの楯を造り出したのだ。

「神の御詞真なれば、神の御業は遍く真なり！」

渦巻く瘴気を突き破るように、カナンの声が森に響く。

「我は主神セイマーの声聞く者、我が声は神の声、この天、この地に宿りしすべての精霊、聖霊、我の詞を聞きて我に言向け！」

カナンの体に、ぼうつとした光が宿り始める。

光はカナンに集約するように、あらゆる場所から引き寄せられていた。

澱みに向かってのばしたカナンの両腕へ、光はさらに集められていく。まばゆさに、ルナティンは目を開けていられなくなるほどだった。

「我は知る、光の御許、闇の宿る処無し。昏き闇に囚われし魂を汝らの光を持ちて解き放て！」

カナンが詞を紡ぐほどに、森に響く悲痛な絶叫が高くなる。ルナティンは意識を保つだけで精一杯だった。

(ただの死に人じゃないんだ)

聖職者によつて魂が浄化される場面を、ルナティンはまだ見たことがない。妖霊や邪霊をシノンが浄化したのは目の当たりにしたが、その時とはまったく様子が違う。あの時もシノンが詞を唱えていたが、精霊を喚ぶこともなくことが終わった。唯人を神の御許へ送ることはもつと容易だろう。

(……妖霊か、邪霊に殺されたのか)

そうでなくては、この森中を巻き込むような妖気は説明できない。

「主を頌えよ！ 汝らすべての大地、唄え！ 賛美せよ！ 弦をかき鳴らせ！！」

カナンが高らかに詞を唱える。両腕に集まる光はなお強く輝きを増し、一瞬、耐え難い悲鳴が力をなくして途切れかけた。

「……苦しみから解放してやる。神の御許へ往くがいい」

とうとうルナティンは目を閉じた。最後に見えたのは、カナンの全身から弾かれるように放たれた光が、澱みの中心を取り囲むように包んだところ。

後は静寂。

「……」

両腕で顔を覆っていたルナティンは、恐る恐る、その腕を外して目を見開いた。

円を描くように灼けた土の中心に、カナンが立っていた。

「カナン……」

ルナティンは立ち上がり、カナンのそばまで近づいた。

「今のは、浄化されたのか？」

「人間としての魂を持ったまま送ることはできなかった。来世では人になれないだろう」

「……」

ほとんどの場合、魂は転生し、生まれ変わっても人間は人間になると言われている。

先刻の男は、闇に飲まれた魂が人に戻ることなくこの世から抹消されたということだろう。ルナティンはそう納得する。

「悪しき存在のまま地上にいるより、倅せだっただろ」

ルナティンには、カナンがひどく傷ついているような気がして、そう呟いた。

カナンが眉を寄せてルナティンを振り返る。

「貴様に言われるまでもない」

どうやらルナティンに慰められたことが癪に障ったようだ。はいはい、とルナティンは苦笑する。

「……にしても、さっきの、妖霊に殺されただけなのか？」

それから不審に思っていたことを口にする。妖霊や邪霊に人が殺される事件は、滅多に有り得ないことでもないのだ。彼らは人間の心の隙をつき、守護の隙をついて聖なる力や人間の魂を喰らう。

そんな事件が起こるたびに先刻のような状況になつては、いくら優秀な聖職者が各地に点在していたとしても、無傷で浄化できるとは到底考えられない。

(カナンだから、こんな短時間で対処できたんだ)

カナンの本当の正体はやはりルナティンにはわからなかったが、彼の力がとんでもなくずば抜けていることくらいはわかる。シノンも相当なものだと思つたが、それとは較べるべくもない。

「さっきの、嫌な感じの気配が原因なのか？」

ルナティンは、家を飛び出したカナンを追う途中に感じた気配を思い出した。

あれは、とてつもなくまがましいもの。

「あの妖霊が、さっきの男を殺したのか」

「……違うな」

考えて込んでいた風情のカナンに、自分の問いは届かなかつたのだろうとルナティンは思っていたが、しばらくの沈黙のうちふと声が聞こえた。

「あれは妖霊や邪霊なんてレベルのものじゃない。自分の体を手に入れている」

「え？」

「もつと高等な生き物だ。　悪しき存在の中の下下で言えばな」

「高等な……妖霊よりも、さらに力の強いもの？」

眉を寄せて問い返すルナティンに、カナンが頷く。

「すべての命の源は精霊だ。精霊が生み出した自然に人間ができた。だが、妖霊や邪霊だけは聖の気を帯びずに発生した。その妖霊たちが生み出したものは、人間と同じ形をしている」

「……じゃあ、それはひいては、神にもなれるもの」

「冒流だ」

思わずルナティンが呟くと、カナンが忌々しげに舌打ちした。それからすぐに踵を返し、森の入口、来た道へと引き返し始める。

「カナン？」

「セレナを捜す」

「セレナを？」

「説明してる時間がない。おまえはこのままここにいろ、さっき張った境界があるから動かなければ安全だ。……ほかは全部壊れてしまった」

「カナン、待つてくれよ」

ルナティンが呼びかけるがカナンは答えず、走り出してしまった。
(なぜ、セレナを)

追おうとしたのに、ルナティンは踏み出しかけた足が萎え、その場に膝をついてしまう。

「ぐ……ッ」

喉から苦いものが込み上げ、何度か嘔吐する。強い瘴気に当たりすぎたらしい。思った以上に体はダメージを受けている。

(情けない……！)

パラスでシノンと会った時と、自分は何も変わっていない。そう思うとルナティンは口惜しかった。

あの時も何もできなかった。何もできず、ただ妖霊に体や魂を蝕まれるままになるところを、シノンが助けてくれた。

今だって、ただカナンに救ってもらい、彼を追うことすらできない。

一体何が起きているのか、わからないままに座り込んだまま身動きも取れない。

「……畜生」

力が欲しかった。せめて知りたい。この国やパラスで何が起きているのか。カナンは何を思い何をしようとしているのか。

シノンをあの国へ置いてきてしまった自分が、カナンの張ってく

れた結界の中で、ただ安全にいていいはずがない。

（動け動け動け！！）

ルナティンは自分の脚を両手の拳で力一杯叩きつけ、己を叱咤して立ち上がる。まだよろめくが、歩けないほどじゃない。ルナティンはカナンの去っていった方向へ動き出した。

（セレナの居場所）

それを捜そうとして、ルナティンはやめた。街のことには詳しくないし、セレナが行きそうな場所だって知らない。歩き回れば無駄に時間と体力を消費するだけだ。

（カナンを捜せばいいんだ）

この数日で、馴染んだ彼の波動。

ルナティンは近くの樹の幹へ背中を預けると、ゆっくり目を閉じた。静かな呼吸を繰り返す。

（思い出せ）

さつき彼は、白の魔法を使った。光。輝く光。強い意志。澱んだ空気の中で彼を取り巻く聖なるものたち。聖霊たちがカナンを照らしていたのではない。

彼自身の輝きだ。

ルナティンは呼吸を整え、一步を踏み出した。はつきりとわかるわけではない。なのに体が引き寄せられるように動く。光のある方向へ。

（どうしてわかるんだろう）

それが不思議だったが、その存在を疑いはしなかった。自分が向かう先に、必ずカナンはいる。

（光だ）

導かれるように、ルナティンはよろめきながら走り出した。

第五章『覚醒』（2）

「邪魔だ！」

鋭い声を上げ、カナンは周囲に群がる妖霊の渦を振り払った。後から後から、まるで湧き出るように妖霊や邪霊が現れる。カナンの行く手を阻もうとするように。

場を浄化する時間なんてない。どうせ術を使ってこの場の澱みを消しても、他の場所から妖霊たちがまた押し寄せてくるだけだ。

（こんなに早く結界が壊れるなんて）

まるで夜のように暗い道を走りながら、カナンは齒噛みする。

もう少しは保つはずだった。せめてあと三日。

後悔に心を奪われそうになり、カナンは大きく首を振った。今は悔やんでいる時ではない。

（セレナを捜すんだ）

だが、ひどい淀みの中でセレナの気配を辿るのは難しかった。カナンは苛立つ。焦ってはいけない、そう思うのに、焦燥感が集中の邪魔をする。

《ごめん、カナン様》

歩みを止め、心を落ち着けようと目を閉じたカナンは、不意に聞こえたバツの『声』に意識を向けた。

《オレが、最初に失敗したから。だからカナン様も、セレナも、ルナティンも、ひどい思いをして……》

「……馬鹿」

少しだけ、カナンは微笑う。

「おまえは余計なことを考えるな。おれが何とかする。心配しなくていい」

《うん》

「セレナを助ける。それからおまえの父親だ。おまえの体を借りた礼はかならずする。それに……セレナもおまえの父親も、おれの国

の人間だ」

澱む空気の中、カナンは真っ直ぐに前を見据えた。

視覚以外でセレナを捜す。この一カ月に覚えた彼女の波動。間違えようもない。

ずっと見てきたのだ。

「行くぞ、バツ」

うん、とバツが答えた。

「精霊、聖霊、守護せよ、我が足許を照らし道を拓け」

カナンは小さく詞を唱えながら、再び走り出した。カナンの聖なる力を狙って集まりだした妖霊たちが、カナンに触れることもできずに弾き飛ばされる。

「……やはりそこに戻るのか、セレナ」

走りながら呟くカナンの声に微かな悲しみが混じるのを、自分の体の中でバツだけが聞いていた。

妖霊たちを拒みながらカナンが辿り着いた先は、自分たちの住む家だった。

否。

その隣、セレナの暮らす家。

「……ひどい瘴気だ」

すでにその惨状を予測していたかのように、セレナの家の門前まで歩んだカナンの声には驚きはない。ただ、確認するように言う。

ほんの少し前までカナンたちが家の中にいた時には、こんなふうになっただけではなかった。

家中を無数の妖霊たちが取り囲み、これまで進んできた時の倍、空気の淀みがひどい。目を凝らしても家の形すら判別し難いほどだった。

《カナン様、結界は》

バツの声も苦渋に満ちている。

「……ああ。ここも、跡形もないな。まるで吹き溜まりだ」

一カ月に亘って張っていた結界が、今は完全に壊れてしまってい

る。

先刻の男が悪しき者の手によって殺された時、完全にこの街の聖と妖のバランスが崩れた。

《カナン様……セレナを助けて》

バツもこの惨状で何かを悟っている。カナンに聞こえてくるその思念は、悲痛なものだった。

「当然だ」

短く答え、カナンはセレナの家入門扉へ手をかけた。そのまま一気に玄関まで向かい、鍵が掛かっているらしい扉を迷いなく蹴りつけて開け放つ。

「セレナ！ セレナ、いるんだろう！」

家の中はひどい臭気が漂っていた。カナンは片腕で顔を覆い、息苦しいほどの空気の中で呼吸する。一度息をすることに、体力ごと消耗していきそうだった。

家の中は外以上に暗い。明かりがひとつも灯されていないかった。狭い廊下を歩くごと、耳障りに木の軋む音がした。家の入り口から一番近い部屋を開け放つが、誰もいなかった。おそらくセレナの部屋。寝台や小さな籠が並ぶだけの簡素な部屋だったが、花や綺麗な布が飾られている。

（おれが摘んだ花だ）

いつか、母親の具合がまるで治らないと涙を堪えるセレナに、元気を出して欲しくてカナンが花を摘んで渡した。街の中に花の咲くような場所はほとんどなく、隣町のぎりぎりまで出かけて捜してきたのだ。

花はすでに枯れてしまったが、セレナがそれに綺麗な布を結び、壁へ飾ってくれた。

カナンは軽く唇を噛み、セレナの部屋を後にする。水場や窯のある部屋にもセレナの姿はなかった。

（澱みが激しすぎて、中心がわからない）

いわばこの家自体が澱みの中にある。

だが、一番奥の部屋に向かうにつれ、カナンの足取りは重くなりじつとりと背中汗が浮かんだ。ここが一番、重くて暗い。

(ここだ)

確信し、カナンはその部屋の扉に手をかける。

その時、背後から唐突に明るい気配がして、カナンは驚いた。妖霊や邪霊とはまったく異質なものの近づく感じ。軽く眉を顰める。

「……ルナティン」

振り返っても姿は濼みのせいで見えないが、わかった。ルナティンがこの家に入ろうとしている。

「あの、馬鹿」

舌打ちして見遣るカナンの視線の先に、壁に縋るようにして廊下を歩いてくるルナティンの姿があった。

「カナン……」

息を切らしながら廊下を歩き、ルナティンはカナンの姿を見つけるとその場に崩れ落ちた。

「何をやっている。あそこから動くなと言っただろう」

少し離れた場所から、カナンがルナティンを見下ろした。ルナティンは再び立ち上がろうと壁につき、強く首を横に振る。

「俺だけ安全なところになんて、どうして」

「……まあいい、来てしまったものは仕方がない。こうなれば、おれの側の方が安全だ」

カナンはルナティンの側に近づき、その腕を取って立たせた。それはさほど強くはない力だったのに、ルナティンは真っ直ぐに立つことができて、詰まりそうだった呼吸が数段楽になるのを感じる。

カナンの周りは空気が澄んでいる。

「おれが守ってやる。側を離れるな」

そう言い置いて、カナンは再び部屋の扉へと近づいた。ルナティ

ンも後に続く。

「何を見ても取り乱すな。心の隙を突かれれば人は脆い。いいな」

「わかった」

扉に手をかけてそう告げるカナンに、ルナティンは頷いた。

その返答を受け取り、カナンが扉を開け放つ。

「……ッ！」

扉を開けた刹那、中から激しい瘴気が吹きつけて来た。ルナティンは一歩後ろへとよろめき、カナンは足を踏みしめ、ルナティンを庇うように一歩前へ出る。

「やはりおまえか」

カナンがそう呟いた。

部屋の中央には悠然と微笑む男の姿があった。逆巻く風に髪や暗い色のマントを靡かせ、悠然と、冷たい笑みを浮かべながら立っている。

男の傍らには、一台の寝台。

床に崩れるように座り、寝台の上へ伏せているのはセレナ。

そして、寝台には誰かが眠っていた。

(誰だ?)

強い風に吹きつけられ、ルナティンは痛みを覚えて目を細める。

瞳が灼けるようだ。目を凝らしてみると、寝台の上にいるのが人だというのはルナティンにもわかる。おそらく女性。

(セレナの 母さん?)

たしかひとつき前から臥せっているのだと彼女から聞いた。だつたらあれば、セレナの母親だ。

「御名でもお聞きしようか。術者殿」

男はカナンやルナティンを、見下す目でそう言って笑った。

ルナティンは無意識のうちに心臓の辺りを押さえる。男を見ているだけで、全身に悪寒が沸き起こった。何て圧倒的な存在感。先刻、バツィの家を飛び出したカナンを追って、ルナティンも外へ出た。その時に覚えたたとえようもない『嫌な気配』は、今、この男から

発されている。

「貴様などに名乗る名前を持ち合わせていると思うのか、このおれが」

男を睨み据えてカナンが答えると、クツと、男が喉を鳴らして可笑しげに笑う。

「ではそちらの、光を抑える術すら知らない愚鈍な生き物の名を問おうか」

男がカナンから目を移し、自分を見て言ったのはルナティンにもわかったが、答えることができなかった。

頭では怯むなと全身を叱咤するのに、男に見られ、全身が恐怖で強張っている。

こんな存在は初めて見た。ルナティンの心臓がうるさいほどに早鐘を打つ。今すぐにでもこの場から逃げたい。これは異質だ。異質なものだ。今まで妖霊にも、邪霊にも襲われたがそんなものの比ではない。

男の存在だけで、自分の存在すら蝕まれてしまおうのではと、ルナティンはそんな怯えに支配される。

「答える必要はない」

今度答えたのも、カナンだった。

カナンはわずかさえも怯えなどは見せず、毅然と男のことを見据えていた。瘴気に翻られ、明るい色の髪が靡いている。

「では私の名を教えようか」

「必要はない。おれはおまえの存在を拒む。闇に生きる者は闇へと還るがいい」

カナンがスツと右腕を上げた。目線の高さまで。指先が男の方を向いている。

「それで聖霊を喚べるのか。街中を覆うほどの結界を張り、この家に結界を張り、闇に囚われた魂ふたつを浄化して、おまえの力はまだすべて回復はしていないだろうに」

「おまえひとりを消し去るくらい、おれのすべての力を持たずとも

できる」

カナンの周囲から、澱みが薄れていくのをルナティンは感じる。同時に自分の周囲からも。カナンが簡易な結界を張っているのがわかった。

(……俺、カナンといると何か冴えるみたいだ)

そうルナティンは気づいた。カナンが聖なる力を使うところを見てから、はっきりわかるほど感覚が鋭くなっている。

「私ひとり？」

男が、カナンを見たまま愉しげに言った。

「ではこの娘はどうする？ 退けることも消し去ることもなく、このままこの場所に置いておく気か？」

男の言葉に、ルナティンは眉を顰めた。娘 セレナのことだ。

(どうしてセレナを退けたり、浄化する必要がある)

「いいや。セレナをこの街にはいさせない。もっと住みよい美しい街に移す」

男が、声を上げて笑った。

「これはいい。この娘を姫君のように扱うのか」

「この街はセレナには似合わない。こんな、祭司の姿もないような街に」

「セレナには祭司などおらぬ街の方が住みやすかるうよ」

「……だから殺したのか。結界を張った人間を」

セレナはじっと、寝台に俯せている。身じろぎもしないその後ろ姿を、ルナティンは固唾を呑んで見遣った。そしてカナン、男へと視線を移す。

(何の話をしてるんだ、カナン)

「そうだ。セレナに必要なのはセイマー神の加護などではない。セレナの力を目覚めさせるに邪魔なものは、排除するまでだ」

「ノイヤーを殺したのもおまえだな」

「セレナがこの街を出るための算段など、下らぬことをおまえが持ちかけるから、あの男は死ぬことになったんだ」

今はラキウスで身を潜めているものの、ノイヤーは国中のあちこちに人脈を持つている。だからカナンはそれに頼った。セレナには戸籍がないのだ。ノイヤーならば、セレナに新しい名を与え、住処を与え、新しい場所で暮らす術を与えることができる。

「おまえが殺さなければ、セレナはこの街から解放されたんだ。もうノイヤーはセレナのために新しい暮らしを用意してしてくれたのに！」

「……嘘よ」

寝台に伏せていたセレナが、カナンの声に反応するようにゆっくりと上体を起こした。カナンには背を向けたまま。

「ノイヤーさんは、お母さんのこともわたしのことも、けだもののような目で見ていた。そう扱っていた」

「違う」

セレナの言葉を打ち切り、強い口調でカナンが否定する。

「いいえ。違うわいわ。わたし、聞いたもの。ノイヤーさんが、お母さんを好きに扱うことで仕事を譲ってくれていたこと。……他の人たちにも、同じようなことをさせていたこと」

「違う。この街へ最初に来た時、暴漢たちに襲われたユマを助けたのはノイヤーだった。それからユマの側に近づく男たちを、常に遠ざけてきたのはノイヤーだったんだ」

セレナをこの街から離れさせ、新しい暮らしをさせるようノイヤーに頼んだ時、彼自身がカナンにそう言った。

「……そんなこと。口でなら何とでも言えるわ」

「ノイヤーは嘘をつくような男じゃない。実直で、ただ不器用だった。バーンズの騎士だった頃、罪人を捕らえる時に誤って殺してしまったことを悔いて、自らこの街に落ちた。でもこの街ですら、狼藉を働く輩は見過ごせなかったし、君たち母娘のことも見捨ててはおけなかったんだ」

「……」

セレナはただ、黙って俯き、首を横に振っている。

「ノイヤーはユマを愛していた。そしてセレナ、いつも君を心配していた」

「やめて……もうわからないの……わたしは何を信じればいいのか細く、セレナが呟いた。

「君は君に見えるものを信じればいい。ノイヤーは君に優しくはなかつたか？ 暖かく見守っていてくれはしなかつたか？」

セレナはまだ拒むように首を振っている。

男が、セレナの方へ近づく。跪き、その肩を優しく抱いた。

「セレナ。もう何も考えなくていい。私と共に来なさい。住む場所も優しい眠りもすべて私が与えてあげるから」

「やめろ！」

カナンが伸ばした片手にもう一方を当て、触れた場所に光を集める。

光の輪が澱みを切り裂くように男へ向けて走ったが、男はふわりとマントを動かすだけで、その光を避けた。

カナンは男を激しい眼差しで睨み据える。

「セレナの心を惑わせるな。おまえの側にあるのは闇ばかりだ、そんなところに彼女を連れて行かせられるものか」

「下らぬことを言っ」

カナンを見て、男は唇の両端を持ち上げる。壮絶な、そして美しい笑み。

なぜ存在はこんなにまがまがしいのに、男はこんなにも美しいだろう。動くこともできずカナンの背後で立ち竦みながら、ルナテインは魅入られる心地で男の姿を見た。

「ならばセレナに光が似合うと言うのか？ 本気で、そんなことを考えているのか」

セレナがゆっくりと顔を上げて、傍らの男のことを見上げた。

男はセレナを見返さず、カナンを見て微笑んでいる。

「おまえもわかっていたのだろう？ この娘が、邪なる血族の力を受け継ぎしことを」

「……」

カナンは答えず、ただ男のことを見据えたまま。

「だからこそ、完全な魔属にのみ反応する結界をこの家に施した。決してセレナが閉じこめられることのない、そして私を拒む結界を」

「え？」

ルナティンは呆然と眩き、セレナのことを見た。

セレナは、見開いた目で、ゆっくりとカナンのことを振り返っていた。

「知って、たの……？」

カナンはセレナにも答えない。男からセレナへと視線を移し、静かな眼差しで見つめている。

「バツ―は、わたしを、知っていたの……？」

譫言のように呆然と眩き、そしてセレナは震える両手で自分の顔を覆った。

「いや いやああッ!!」

そして、絶叫する。その場へ蹲ろうとするセレナを男が抱き寄せ、セレナは自分の姿をカナンに見られまいとするように男の方へ縋った。

「いや! いや、見ないで! わたしを見ないで、いや!!」

「セレナ!!」

セレナに駆け寄ろうとしたカナンを、無数の妖霊たちが阻む。素早く詞を唱えて払おうとするが、追いつかない。すぐそこにいるセレナの側へも近寄れない。

「お願いだからわたしに教えないで!! 何も知りたくなかったの、わかりたくなかった!!」

「セレナ、違う、そうじゃない! 人の存在なんてその本人が決めればいい、君が怖れることも怯えることも、何ひとつだってありはしないんだ!」

カナンの言葉からも逃れるように、セレナは自分の耳を塞いでいた。部屋を渦巻く風に阻まれ、カナンの声はセレナに上手く届かない。

い。

カナンは絶望するセレナから、愉しげにそれを見下ろす男へと鋭く視線を移した。

「なぜセレナに教えた！なぜ思い出させるんだ！セレナは何も知らなければ、ただの、普通の人間として倅せに生きていけるのに！」

「戯れ言を。本来持ち得る力にも気づかず、愚鈍な人間共の中で生きていくのが我らにとっての倅せなどと思うのか」

「セレナはおまえとは違う！」

セレナは男の体に顔を伏せ、怯えきつた姿でがくがくと身を震わせている。

「セレナ 君は君の心を思い出せ。この男の言うことなんて考えなくていい、君はただ優しい心を持つ人じゃないか。君が誰であろうと、何であるうと、今まで暮らしてきたセレナがいなくなるわけじゃない、これからだって」

「……だめよ……」
力なく、セレナの声がカナンやルナティンたちに届いた。

「だめよ、わたし……お母さんを殺してしまった」

ルナティンは愕然と、寝台の上に視線を走らせる。

あれは、ユマ。

すでに朽ちかけた死体となった、セレナの母親。

（そんな……じゃあセレナは、死んだ母親の世話をずっとしてたつてののか？）

あんなに、母親のことを心配しているようだったのに。ルナティンは信じられずユマを見る。

「……あ……」

そして、気づいた。

この部屋の、この家の瘴気は寝台を中心に沸き起こっている。「わたしが殺したの、お母さんを！病で衰えていく体に耐えられなくて、このまま喪ってしまうのではと思っただけ怖くて、何もせず朽ちていくだけの体をただ見ているだけなら……」

セレナはわずかに身を起こし、ふと、その口許に笑みを浮かべた。何の笑いなのか、見ていたルナティンにはわからなかった。

「わたしが殺して、自分の力にすればいいと」

「教えたのはその男だ!!」

カナンが声を張り上げる。セレナの笑みを打ち砕こうとするかのように。

「おれがこの街に来た時、その男に聖なる力を持つ男が殺された後だった! 町中に妖霊や邪霊が跋扈しだして」

だからセレナの妖の領域にある力が、萌芽した。ずっと隠されていた力だ。

いくらラキウスが罪人たちの集まる街だからといって、このサンファールの国中で聖域のない街など存在し得るはずがない。それをカナンはよく知っている。なぜなら、そうでなければ人は住んでいけないからだ。

たとえ国の作った教会にいる、国が選んだ祭司がいなくても、聖なる力を持つ人間が結界を張っていたはずなのだ。

カナンが、祭司という名を与えられていなくても、この街とこの家に結界を張ったように。

「この男の狙いは君を無理矢理妖の気配に浸すことだったんだ。普通に暮らしていれば、そんなこと起きっこないのに」

「……でもわたしは、自分の力に気づいてしまった」

セレナはまだ、笑っている。だがその双眸からは大きく涙が落ちていた。

「そう、声が聞こえたのよ。『ユマを殺してしまえ』。『そうすればセレナは力を得て、闇の生き物になれる』。……それが聞こえた時わたしは納得したの。それがわたしには必要なことなんだって」

涙を落としたまま、セレナはカナンを見る。

「どうして全部忘れていられたのかしらね。わたしはお母さんを殺そうとした。それを、初めて見るとても美しい人に止められた。あれは……誰だったのかしら」

セレナの口調は、まるで夢を見ているかのようなものだった。

「強い力を持つているのがわかった。剣を持つていたわ。その剣で、あの人はわたしを斬ろうとして、それをバツィが止めた。止めようとして、代わりに斬られて……死んでしまったはずなのに」

(……『剣士』が殺そうとしたのはセレナだったんだ)

ルナティンは、ようやく附に落ちた。

セレナを庇って、バツィが斬られた。だが死にきらないうちに、白魔法士のこのカナンが、バツィの体に入って治療した。だから死なずにすんだ。

「あの人は、どこに行つたのかしら……」

「……おれが自分の体を出てこのバツィの体に入った時、その衝撃で魔導使いもおれの体の外へ弾き飛ばされた。剣士は元の体の中に残つたが、やはり衝撃でしばらく我を喪い、そのまま街を出た」

「……」

カナンの説明を、セレナはまるで理解できないようだった。カナンも元より、意味を伝えようとしているわけじゃない。

「おれは君を止めることができず、バツィの体を癒すことで力を使い、君の記憶を閉じこめることで力を使い、結界を張ることで力を使い……君を本当に救うために動くことができなくなっていた」

力と体力が回復するまで、カナンはバツィの体の中でじっと待っているしかなかった。

いつセレナが記憶を取り戻すか、ユマがすでに死んでいることに気づくか。自分の回復とどちらが早いかわからない、毎日最悪の事態を避けるよう祈りながら。

だが、最悪の事態はもう起こってしまった。

「……記憶に目隠しなんて、しなくてもよかつたのに。わたしはわたしの醜い心を、自分で知らなくてはならなかつたのだから。お母さんを殺し、さつき森でまたひとり殺した」

「セレナ、違う、それは君の本当の心なんかじゃ」

「わたし……本当はずっと、心のどこかでおかあさんを憎んでいた

のかもしれない……いいえ、憎んでいたの」

すっと、セレナが寝台の上へ目を移す。静かに伸ばした指先が、ベッドの上に眠るユマの体に伸びると、その体は簡単に崩れ去った。まるで火に焼かれた炭のように、細かな欠片をまき散らしながら。

（セレナの母さんの病は）

ルナティンは、遣り切れない思いで崩れ去るユマの体を見た。

（長い間、セレナによって少しずつ生気を奪われ続けたから）

それだけが原因ではないかもしれない。

だが、もし些細な病でも、妖の生き物が側にいれば、治癒する妨げになっただろう。

そしてユマはセレナに殺され、森の中の男のように自らも妖の領域へと足を踏み入れ、妖霊や邪霊を呼び寄せていた。

それを、カナンの結界が、外に出ないように守っていた。

カナンは今も、この部屋の中で自分とルナティンの周りに結界を張り巡らせ、瘴気の渦から身を庇っている。

「思い出すんだ、本当に君はユマを憎んでいたか？ 心の底から？ その男の存在なしに、ただ君の心だけで考える！」

「戻れないの、もう……わたしは、この人に出会ってしまったから」
男の体に両手を触れ、セレナはカナンを見て微笑んだ。

「ひとめ見た時から心を奪われてしまった。どうしようもないくらいに惹かれるの。この人のそばにいたい。この人と共にありたい。

この人に 愛されたい」

「セレナー！」

悲痛なカナンの声を聞きながら、男はセレナに笑いかける。優しい、禍々しい笑みで。

「そうだ、だから私とおいで、セレナ。私ならいくらでもおまえを愛してあげよう。可愛い、私の娘」

男の指先がセレナの頬を撫でる。セレナは陶酔したように男の顔を間近でみつめていた。

「人間の女など、おまえを作る依代に選んだのが間違이었다。お

まえが産まれればすぐに殺してやろうとしたのに、おまえと共に小賢しく私から逃げ回るなど許し難い」

だからユマは逃げていたのだ。あらゆる街を、男から逃げ、セレナと共にラキウスまで落ち延びて。

「我らが理想郷を創り出すために、愚かな人間などすべて殺し尽くしてしまうのだ。その血は、怒りは、嘆きは、我らの力となる」

男が立ち上がり、座ったままのセレナに手を差し伸べる。セレナがその指先をみつめた。

「ふざけるな！！」

カナンは再び両手を体の前に持ち上げ、腕の間に光を集めようとしている。

「おまえたちの好きになど誰がさせるものか！ この街もこの国もおれが守る、セレナを奪わせはしない！」

セレナの右手がゆっくりと持ち上がった。男の手をみつめたまま。「セレナ！ セレナ行っては駄目だ！ 諦めては駄目だ、救いなら

君自身が望まなければ何も動かせはしないんだ！！」

セレナの悲しげな眼差しが、わずかの間だけカナンを捉える。

それから、セレナは男の手を取った。

「セレナ！！」

「……もうわたしには何も望めない。わたしはもう、自分を愛せない」

「心なら俺があげるから……」

強く首を振り、カナンはセレナ以上に悲しい瞳で彼女の姿を見ていた。

悲しむのは、彼女を喪う自分の痛みのためじゃない。

セレナの悲しみが辛くて。

「戻るんだセレナ。世界は誰のためだけでもない、君自身のものなんだ。だからセレナは君自身を捨ててはいけない」

「ごめんなさい、バツ」

男の手に掴まりながら、セレナがゆっくりと立ち上がる。

「わたしは、あなたのことが好きだった」

「……！」

カナンが言葉を失くし、男に抱き寄せられるように体を支えられるセレナのことを見る。

「ずっと弟みたいだと思ってたわ。でもいつの間にか……お母さんが死んでから、あなたはわたしに前よりもずっと優しくしてくれた。見違えるように強くなった。誰よりも眩しい光を集めているようにで

……」

「……」

「あなたが変わっていったのは、すべてを知っていたからなのね。本当にあなたは優しい。優しすぎて……わたしには辛い」

「セレナ」

「自分がいかに醜い存在なのか、もう嫌というほど理解できてしまふの。あなたに憐れまれる自分は惨めだわ」

「そうじゃない……そうじゃない、セレナ」

もどかしく首を振り、カナンは集めた光で自分とセレナの間を空気を切り裂いた。妖霊たちが弾かれ、悲鳴を上げて消失する。

「愛しているんだ」

それでもすぐに別の妖霊たちが澱みを連れて部屋を埋め、黙り込むセレナの表情はカナンには見えなくなった。

耳障りな風の轟音の中、男の高らかな笑い声が響く。

「さあ、セレナ。そんな戯れ言を聞く必要はない」

ギリツと歯を噛み締め、カナンは澱みの渦の向こうに浮かぶ男を見据えた。男もカナンを見ている。

「しかし、その力は魅力だな。体ごと喰らえば、より大きな力となつてくれるだろう」

「……貴様……」

「この先どんな障害になるか知れない。あの方の妨げとなる者は、今のうちに消し去っておくのがよからう　セレナ」

優しく、男の声がセレナに呼びかけた。

「あの子供をその手で殺してあげるといい。憎いだろう？ 自分には持ち得ない力を持ち高処に居て、ひとり穢れなき顔でおまえを見下ろす人間が。恋しい分 憎まずにはいられないだろう？」

「耳を貸すなセレナ！」

「だから殺してしまえばいい。そうすれば今度は私がおまえを愛してやろう。憎しみも何もかも力に変えて、きつとおまえは完全な魔の存在に成れる」

「完全な……」

無言でいたセレナが、ぽつりと、独り言のように呟いた。それを聞き止め、男が大きく頷く。

「そう。おまえはずっと、淋しくはなかったか？ 聖の領域にも妖の領域にも行けず、唯人にすらなれぬ自分が。だからいつそ捨ててしまっんだ。中途半端な優しさも願いも祈りもすべて！」

セレナがゆっくりと男からカナンに顔を向けた。

「……そう……じゃあわたしは、楽になることができるのね……」
会心の笑みを浮かべ、男が左手を高く頭上へと掲げる。澱みが男の手に集まり、それは一本の剣の形を成し始めた。

「だから言ったはずだ。私はおまえを解放する者」

長剣を象った黒く鈍く光るものを、男がセレナに手渡した。セレナは両手でそれを受け取り、柄を握り締めながら、ゆっくりとカナンの方へ足を踏み出す。

「カナン」

咄嗟にカナンを庇おうと、強張る足を踏み出そうとしたルナティンを、カナンが片腕で制した。

そのままセレナを見て、呼びかける。

「セレナ」

セレナは澱みに阻まれることなくカナンの方へ近づいていた。妖霊が彼女を邪魔することはない。彼女もまた、妖の生き物なのだから。

「……心なら、おれがすべて君にあげるのに」

セレナは何も言わずにカナンの間近まで辿り着いた。

しばらく、ふたり無言でみつめあう。カナンは逃げることもなく止めることもなく、ただセレナを見たまま。セレナもカナンを見たまま。

先に口を開いたのは、セレナだった。

「さよなら、バツ」

ルナティンはきつく歯噛みして、カナンを押し退けるようにふたりの間に割って入った。

「やめるセレナ！！」

「邪魔をするな、小僧！」

男が片腕を払うと、暗い澱みが大きな塊になってルナティンの体に叩きつけられた。そのまま、ルナティンの体が塊ごと部屋の壁に吹き飛ばす。

「！ ルナティン！！」

カナンが制止する間もなく、壁に叩きつけられたルナティンの体はずるずると床に倒れ込む。大きく咳き込んだルナティンの口から鮮血が散った。

「さあ、どうする？」

愉悦の浮かぶ表情で男が問いかけながら、再び軽く手を振る。ルナティンの体が自分の意志とは関わりなく持ち上がり、再び床へと叩きつけられた。

「やめる！」

ルナティンの方へ駆け寄ろうとしたカナンを、セレナの長剣が阻んだ。

喉元に切っ先を向けられ、カナンは動きを止める。

男が笑ってカナンを見ている。

「どうする、と訊いている。おまえが抗えば、この小僧の命もなくなるだろう」

ルナティンは激痛を訴える体を叱咤して、床に腕をついて無理にカナンの方を見上げた。

「カナン、いいから 俺はいいから！」

カナンは逡巡し、ルナティンからセレナに目を移す。セレナは剣の切っ先をカナンに向けたまま、だが動こうとはしていない。彼女も迷っている。

「カナン！ あんたはあんたの信じる道を行け！！」

叫ぶルナティンに、男が再び暗い塊を作り出してそれを放った
気づいたルナティンが、強くその塊を睨み据えて右手を向ける。

「何……！？」

驚愕する男の声が聞こえた。ルナティンに触れる前に暗い塊は四散し、代わりにルナティンの体を鈍く光る白光が包み出している。

男は舌打ちすると、光から体を庇うようにマントを持った手を動かし、セレナの方を見た。

「何をためらうセレナ！ おまえは自分の居場所がほしくはないのか！？」

「……わたしの、居場所」

「そつだ！ おまえはこの先私の側で生きるがいい、永遠に！！」
「……」

セレナの唇が、はっきりと笑いの形を作った。邪悪な形。今まで彼女が見せたことのない笑みと、暗く光る瞳の色。とつとつ闇に心を任せ、セレナは狂気への一步を踏み出す。

「カナン……！！」

ルナティンの叫び。

カナンは一度きつく目を閉じた。

もうセレナを救う方法は、たったひとつしかありえない。

「……っ！！」

カナンはセレナから長剣を奪い取り、渾身の力で空気を払った。
「馬鹿な」

目前で起こったことが信じられず、男が呻きに似た声を洩らす。男が作り出したはずの邪悪な剣は、カナンが握り、一振りしただけでまばゆい光を放ち始めている。

「我が右手に宿るは聖なる力、神の光。私の触れるものに妖の宿るものはない」

カナンが詞を紡ぐたび、その手に握られた剣が研ぎ澄まされた光を放つ。

「セレナ」

「……」

セレナはカナンの呼びかけには応えず、次には自ら両手を頭上に掲げ、先刻の男を真似るように剣の形に邪な気を集め出している。

浮かんだ剣の柄を再び握り締め、セレナはカナンに向かって信じがたく軽い動きで足を踏み出した。

「光即ち主神、聖の剣にその力顕現せしめ、邪悪を討ち滅ぼす佑けとなれ！」

高く詞を唱えながら、カナンはセレナの繰り出した剣を剣で受け止めた。

セレナは剣ごと後ろへ弾かれるが、すぐに体勢を立て直して再びカナンへと向かってくる。

呼吸すら忘れそうにその様子を見ていたルナティンは、男がセレナに手を貸そうと動き出すのに気づいた。

「やめる！」

ルナティンは、咄嗟に懐からカナンが森でくれた小瓶を取り出し、男に投げつけた。男の足許に当たった小瓶は破裂するように光をまき散らし、男が苦痛の呻きを上げてその場に膝をつく。

「おのれ小僧……ッ」

男の力を借りず、セレナは両手で握った剣を、体ごとカナンに叩き込もうと床を蹴る。

カナンは何かを振り切るように大きく頭を振り、剣を握り直した。

「我が守護、我が神に問う！！ 邪悪を滅すのは誰の力か！！ 誰の望みか！！」

叫ぶようなカナンの声が響き、同時に聞く者の耳を打つ甲高い音が轟いた。セレナの剣にカナンの剣がぶつかり、ドツと激しい光が

閃いた。

（おれの望みは正しいのか）

セレナの剣を弾き、カナンは剣を持つ右手を高く振り上げる。

（答えはなくとも）

進むしかない。

『あんたはあんたの信じる道を』

カナンが叫び、振り上げた剣を鋭く下ろす。

光が、すべてを包み込んだ。

第五章『覚醒』（3）

目を開けていられず、ルナティンは腕で顔を庇いながら目を閉じた。

（熱い）

灼けるような光。暖かいだけでなく、痛い。

（痛いのは……）

光のせいじゃない。

心を直接打つような痛みが、ルナティンの体を動けなくする。

（泣いている）

見えなくてもわかった。

（あの人が あの人の魂が）

悲しみに満ちた心が、泣きながら叫んでいる。

愛しているのに。喪いたくないのに、選ぶたくない方法を選べない。

（痛い）

気づかず、ルナティンも涙を落としていた。堪えられない痛みが全身を、魂を支配する。

そのまま流れ込んでくるように、体中、彼の悲しみに埋め尽くされる。

悲しみと、慈しみと、癒やしの手。

（何て優しい）

悲しいのに暖かい。望みはいつもそこにある。それが希望。それが拓ける未来への路。

癒やしの心。

まばゆさに目が慣れ、ようやくルナティンが目を開いた時、すべ

てが終わろうとしていた。

カナンの剣がセレナの胸を貫いている。

剣を伝い、真っ赤な鮮血が流れ落ちてカナンの手を濡らしていた。

「バ……ッ……」

セレナの掠れた声が、唇から零れた。

セレナの目はまっすぐカナンを見て、先刻までの狂気は形を潜めていた。

ルナティンも、はっと現実には立ち戻る。

（今の 何だ）

まるで魂を奪われるように、自分の心ではないものに心を支配されていた。まだ泣いている。悲しくて悲しくて動けない。

「……ありがとう……わたしの……願い、は」

カナンは間近で、自分をみつめるセレナのことを見返していた。

「あなたの、手で……解き放つてもらおうこと……」

セレナは首を巡らせ、床に座り込む男の方を見下ろした。

男は、ルナティンに傷つけられた足だけではなく、体の半面をまるで焔に焼かれたように爛れさせていた。カナンの放った光に体が耐えられなかったのだ。

「私を救うのは……あなたではなかった……『セレナ』の心が……それを、拒んだもの……」

男は何か言おうとして、耐え難い音を喉で鳴らすとどす黒い体液を吐き出した。

部屋を渦巻いていた澱みも、今はほとんど見えない。

セレナはそれ以上男に言葉はかけず、カナンに目を移した。

「わたし……あなたの望みの邪魔にはならなかった……？」

「 セレナ」

「あなたはきつと、進む人……導く人。迷わないで、どうか……わたしは、倅せに死んでいけるのだから」

セレナの体から力が抜けている。カナンも、支えていることができずに、セレナは自分を貫く剣ごと床にゆっくりと崩れ落ちていっ

た。

「セレナ」

カナンは床に膝をつき、静かに目を閉じていくセレナの伸ばしたかけた手を取った。セレナ指先は冷たい。

「……ありがとう、バツ……どうか、あなたに、神の祝福と守護が……」

セレナの声はもうほとんど音になっていなかった。カナンはセレナの冷たい指先をきつく握り締める。

セレナが少し、笑ったように見えた。

「そしてわたしの……」

セレナの体から力が抜ける。

彼女の胸に深々と刺さった剣が、次第に輪郭を喪い、空気に溶けるように歪みだした。

そして剣は光の粒子となり、セレナの体を包み込むように降り注いでいく。

「……セレナ おれの、名前を呼んでくれ……」

セレナの体に、光と共にカナンの涙が落ちた。頬を打つカナンの涙に、答えるセレナの声はもうない。

「バツ……じゃない、おれの……本当の名を」

光に包まれ、セレナの体もゆっくり、ゆっくりと輪郭を喪っていった。大気へと溶けていく。光に導かれ、セレナの形を喪っていく。

(浄化されたんだ……)

ルナティンも、言葉もなくそれを見ていた。

たった今まで生きていた人が、浄化され溶けていくのを、ルナティンは初めて見た。

カナンが握り締めていたセレナの指先も、光に溶け大気に溶け、消えた。

部屋の中は、ただ静寂だけが支配している。

「貴……様……」

静寂を破ったのは、聞き苦しく掠れた男の声だった。

「貴様、許さんぞ……よくも、よくも私の体をこんな」

「それだけか？ 言うべきことは」

カナンは床に這いつくばる男に視線を遣ると、静かに問いかけた。
「最後だ。何かあれば聞いてやる」

「はっ。慈悲をかけるというわけか」

男が嘲るように笑う。カナンは怒りも笑いもせず、ただ静かな眼差しで男の顔を見ている。

「いや。最大の辱めを与える方法を考えている」

「」

一瞬、怯えたような色が男の表情に浮かんだ。

「馬鹿な……今あれほどの浄化をして、それ以外にまだ使える力を残しているなんて」

「さあな。やってみなければわからない。……おまえだけは許さない。たとえ力を使い果たしこの身が朽ちても、おまえだけはおれの手で還す」

殺す、とはカナンは言わなかった。

妖の生き物にとって、最も屈辱を覚えるのは聖なる領域に送られ浄化されること。

人と同じ姿を作り、自ら妖霊や邪霊を操るまでに力を持った男を浄化するには、たった今セレナを送った以上に力や体力を消耗するだろう。

「駄目だ……カナン、それじゃあんたが死んじゃう！」

立ち上がるうとするカナンを、ルナティンは床を這うようにして近づき、制止しようとした。

「邪魔をするな、ルナティン」

カナンの中には怒りや憤りはなかった。

ただ、悲しみだけが。

「カナン！」

ルナティンはカナンの腕を掴もうとしたが、カナンはそれを外し、立ち上がった。

(駄目だ……)

そもそも、カナンは自分の体を喪い、殺されかけたバツの体を癒し、セレナの記憶を隠蔽し、街やこの家に結界を張り、ノイヤーや森の男の魂を浄化することで、力を使い続けている。回復しきるわけがない。

そしてたつた今セレナを浄化して、残っている力なんてほんのわずかもないはずなのだ。

「おれも一緒に逝く。神の御許へ」

ルナティンは、すでにカナンが立っているだけでやつとな状態であることに気づいた。止めどなく汗が流れ落ちている。それは男も同じ状態だったが、共倒れになんてなっていないはずがない。

「カナン駄目だ、じゃあセレナの願いはどうなるんだよ!」

男の方へ進みかけたカナンは、ルナティンの悲鳴じみた声でハッと目を瞠った。

「進めつて! 迷うなってセレナが言っただろう、あんたが今死んじまったらセレナは何のために」

「……」

わずかに戸惑った眼差しでカナンがルナティンを振り返ろうとした時、男が爛れた手を振り空気を薙ぐ仕種をした。

「……ッ!」

カナンとルナティンが気づいてそれを見た時には、もう男の姿はどこにもなくなっていた。

「……クソッ」

追いかけてようと足を動かしかけ、カナンはそのまま床の上に倒れた。

「カナン!」

焦燥してルナティンはカナンに近づき、その様子を見下ろす。

「……何がカナンだ……!!」

差し出しかけたルナティンの手を拒み、カナンは握った拳を力一杯床へと叩きつける。

「セレナすら たったひとりすら救えずに、おれは何を思い上がって！」

ルナティンは、何度も床に叩きつけられるカナンの手を、上からそつと押さえた。

「もういいよ、カナン。手が壊れちまう」

カナンは血が滲みそうなほど歯噛みして、両手の拳を握り締めた。

「すまない……次の王が、こんなに不甲斐ない人間で」

「いいって、仕方ないんだ」

「けど……！」

顔を上げ、カナンはルナティンの胸ぐらを掴んで必死な顔で叫んだ。

「強くなるから！ 絶対、おれは強くなるから！ だから……」

「……ああ」

ルナティンは、強く頷いた。

「だから、一緒に行こう。『カナン』を見つけて、シノンを助けて、元凶を叩いて、皆を救おう」

ルナティンの言葉に、カナンも頷く。

（……何もできないのは俺の方だ）

カナンは、セレナを救った。間違いなく苦しみや悲しみから彼女を解き放ってやった。

それがカナンにとつての救いにもなるといい。

そう願いながら、ルナティンはカナンの片手をずっと握り締めていた。

最終章 『旅立ち』

「聖なる力を持つ者よ、サンファールの偉大なる守護神セイマーの力を受け継ぎし血族、王子カナンの名を以て、汝に聖なる光を授ける。一億の盟約と共に、天より与えられし聖なる御詞を開放し、邪悪を灼きつくし、大地に平穏とやすらぎを齎せ。」 復唱

「我、ルナティンはサンファールの偉大なる守護神セイマーの力を受け継ぎし血族、王子カナンにより、聖なる光を享受する。一億の盟約と共に、天より与えられし聖なる御詞を開放し、邪悪を灼きつくし、大地に平穏とやすらぎを齎すことを誓う」

ゆっくりと、光が降りていくようにルナティンの体を包んだ。

カナンの右手がルナティンの額に触れている。そこから全身に温かな光が流れ込むのをルナティンは感じていた。触れられた額が熱い。

朽ちかけた教会の中で、ルナティンは床に跪き、両手を組んで祈っている。

その前に立つカナンがルナティンに触れ、ルナティンの額に小さな結晶が浮かび上がるのを確かめてから手を離れた。

「……やはりな。おれからの洗礼を受け入れられるほど、おまえの力は強い」

カナンの口調には、わずかながらに呆れた気配が含まれていた。

「何だつておまえ、それだけ馬鹿ツ強い力を持つてるくせに、聖職に就こうともしないんだよ」

「だからあ、思春期はいろいろ複雑でー……」

「戯け者」

「痛っ！」

ふざけて答えたルナティンを、容赦なくカナンの足が蹴りつける。

「聖なる力を何だと思ってやがる！おまえみたいに力ばっかりばかすか開放してる奴が側にいたら、妖霊が寄ってきてきて寄ってきて迷惑

なんだよ。せつかく結界も張り直したのに台無しじゃねえか！」

「わかった、わかったから蹴るなって！ だから俺だって、ポリシ
ー曲げてあんたから洗礼受ける気にもなったんだろ！」

相手は子供の体とはいえ、容赦なく全身全霊を込めて蹴りつける
のだからたまらない。

ひととおりルナティンを蹴りつけて飽きたのか、カナンはようや
く攻撃を止め、近くのベンチへ身を投げ出すように座った。

「まあ、今やったのはあくまで簡略な方法だから。あとでちゃんと
大神殿に出向いて、洗礼を受け直せよ。おまえ聖教典だって持って
ないだろ」

「へーい」

「返事は短く！」

「はいはい」

今度は地面に落ちていた小石が吹っ飛んできた。思い切り頭にそ
れを喰らい、ルナティンは溜まらず悲鳴を上げる。

「痛い！だからあんた、何でそんなに乱暴者なんだよ王子の癖に！」

「そうだ、俺は王子だ。だから敬え。かしずけ。あんたあんたと気
軽に呼ぶな！」

「痛っ、痛たたただから蹴るな、蹴るなってやっとな傷治ったばっか
りなんだから！」

座ったまま次々蹴りを繰り返す王子に、ルナティンは情けない声
で悲鳴を上げ続けた。

ルナティンの胸の太刀傷は、ひどい瘡気に辺り、動き回ったこと
でまた開いてしまった。

それを治療してくれたのは、やはりバツィだった。

カナンはあの日、セレナの家を出た後気を失うように眠りに就き、
数日その意識が表に表れることがなかった。

『すっごい疲れて、眠ってるみたい』

一日がかりで街の端々に光る小石を置き、帰ってきたバツィが、
眠りから覚めたルナティンの枕許でそう説明した。ルナティンもバ

ツーの家に帰るなり、また眠ってしまったのだ。

『眠っちゃう前に、光る石を捜して街の隅にたくさん置きなさいって。簡単な結界の代わりになるから』

セレナを浄化した時、街に蔓延るほとんどの妖霊も一緒に消された。聖と妖のバランスは再び保たれ、ラキウスの街は、いつも通りひっそりと静かな佇まいを取り戻した。

『……たくさん死んだな』

ぼつりと、ひとりごとのように呟いたルナティンに、バツーは少し黙り込み、それから明るく笑った。

『ね、ルナティン、またおれがルナティンの傷治してあげるよ』

『いや、いいよ、おまえだって体が疲れてるだろ』

『だーいじょーぶ、傷とか全然ないしさ。オレは……見てるだけで、何もしなかつたし』

『……』

笑いながら呟くバツーの表情には、はっきり口惜しさが滲んでいた。

その気持ちはルナティンもよくわかる。自分も同じだからだ。

『カナン様が起きたら、オレ、もっともつと白魔法について教えてもらうんだ。それで、オレも強くなるよ。強くなつて、お父さんも……セレナみたいな人も、助けてあげられるように』

言う途中で声を詰まらせ、ぼろぼろと大粒の涙をこぼすバツーをルナティンは抱き締めた。バツーは声を上げて泣いて、泣き疲れて眠るまで、ルナティンと同じ胸の痛みや苦さを味わっていた。

数日経ってカナンが目覚め、少し力を取り戻したらラキウスを出るということをルナティンに告げた。

『あの方の妨げとなる者は、今のうちに消し去っておくのがよかる』
『う』

あの時、セレナの家であの男が言った言葉がカナンとルナティンの頭に残っていた。

あの男の他に、もっと別の存在がある。それは、パラスに張られ

た結果と、関わりがあるのかも知れない。ふたりはそう考えていた。パラスの結果を解くことで、シノンも助かることになる。

だからまずは、他の『カナン』たちを捜しに。力を集めなくてはいけない。

自分ひとりよりも、他の自分の力を取り戻した方が、大きな力になるとカナンはわかっている。

そしてもう、カナンをこの街に留める理由は何もない。

『他のふたりの居場所はわかるのか？』

『わかる……かもしれないし、わからないかもしれない。感じるものはあるから、それを頼りに行くしかない』

ルナティンの問いに、カナンは慎重にそう答えた。

おぼろげに、他の自分がどこにいるのかはわかる気がするのだ。

方角があちらだろうとか、どれくらい離れているかとか。

ただ問題は、相手にもそれがわかってしまえば、窮屈な王子稼業から逃げ回る彼らを追うのは難しいのでは、ということだ。

『捜す他ないんだ。おまえも、旅立ちの支度をしておけ』

そう言ったカナンに、ルナティンは自分から洗礼を受けさせて欲しいと頼んだ。

カナンはさんざん『順番をすつ飛ばして王家の洗礼を受けようだなんて図々しい』と文句を言っていたが、今はカナンも器が他人のものだし、力がすべて回復したわけではないし、洗礼に使う道具も何も一切ないので、簡略方式で行うことで話がまとまった。

「よかった、シノンから話聞いて、俺程度の力の持ち主が王家の洗礼なんか受けたら、キャパシティ不足で器がぶっ壊れるかと思ったわ」

洗礼を受けた聖職者の証である、額に浮かんだ石を指先で触れつつ、ルナティンは大きく安堵する。

「……そうだな」

カナンは少し曖昧な口調で答えて、立ち上がった。

「カナン？」

「そろそろ街を出るぞ。おれはもう一度必要なものがないか家を見てくる。おまえも荷物を確かめろ」

「はいはい、つつたつて、俺もともと荷物ほとんどないんだけどね」
体力が回復した後、少しの労働で路銀や衣服を手にいれた。微々たるものだったが。

カナンはルナティンを教会に残し、バツィの家まで戻った。
空はよく晴れている。

あの日の澱みや暗さが、まるで嘘のように。

カナンはバツィの家まで辿り着くと、ふとその門扉に手をかけたまま足を留めた。

隣の家は、もうない。

長い眠りから目を覚ました後、カナンが自分の手で焼いた。朽ちてしまったものは、火で焼くこともまた浄化になる。

「……」

カナンはそつと門を離れ、かつてセレナの家があった場所へと歩んだ。今は黒く焼けた地面と、焼け残った木材ばかりがある。

そしてその隅には、カナンやルナティンが眠っている間にバツィが植えたらしき、いくつかの花。きちんと根づいたようで、綺麗な桃色の花弁をつけていた。

『花なら、街の端に空き地があるでしょう。あそこに咲いている桃色の花が好きなの』

いつか、どんな花が好きかと訊ねたカナンに、セレナがはにかむように目を伏せながらそう答えた。

「……セレナ」

小さく、名前を呼ぶ。

最初会った時からわかっていた。これは、異形の存在。人間に紛れていても、自分とは確実に違うもの。

(だけど心は)

一体、存在を何が決めるのだろう。

セレナの心は優しく、側にいると癒された。夢げに笑う姿に胸が

掴まれるように痛かった。

セレナの寂しさは側にいてよくわかった。父親から逃れるため、おそらく友達も、恋人もおらず、ただ母親だけを頼りに暮らしてきた。人の悲しみや慈しみの心は、ずっと昔からカナンにとっては真っ直ぐに伝わってくる感情だった。

あんなに優しく美しい魂と、妖に生を受けた体と、その血が呼び起こす邪悪な心。

それらすべてがセレナという少女を作っていた。

（おれはすべてを愛したのだろうか）

異形のを、カナンは取り除かなければならない。人々に苦しみを与えるものならば、聖なる力の持ち主として、この国を護るべき王家の人間として。

でも、

（セレナは、護るべき人間の中に入れてはならない存在なのか？）

カナンにはわからなかった。

ただ残るのは、セレナを愛しいと思う気持ち。

……もう会えないという、悲しみ。

『わたしの願いは……あなたの手で解き放ってもらうこと』

最後に、セレナはそう言った。

「……セレナ。最後の運命は君に優しくなかったかい？」

風に揺れる桃色の花弁を見下ろしながら、カナンは小さく呟いた。セレナが本当に幸福でいてくれたのなら、カナンは新しく一步を踏み出すことができる。

『ありがとう、バツ』

花を揺らす風と同じものが、カナンの頬を撫でた。

カナンは目を閉じて、その風の触れる優しさに心を馳せる。

「カナン。準備できたし、暗くなる前に出ようぜ」

少し後、遠くから遠慮がちに呼びかけるルナティンの声が聞こえた。

「ああ」

頷いて、カナンが振り返る。ルナティンから自分の分の荷物を受け取り、隣り合う街へ向けて歩き始める。

「とりあえず、どこか手頃なところで宿と仕事を探さないと。おれもあんたもバーンズへは戻れないだろうし、先立つものがないと旅をするのもままならない」

「わかった。がんばれ。労働階級」

歩きながらカナンが答えると、げんなりした顔でルナティンが肩を落とす。

「あんた……俺ひとりに働かせるつもりだろ……」

「何言つてんだ、バツがいるだろ」

ルナティンは、自分が一緒に旅するのが文字どおりの『王子様』であることに、改めて頭を痛めた。

(頑張れ俺……今さら後戻りなんてできるもんか)

悲愴な覚悟を決めながら歩き、ふと、ルナティンは傍らを歩くカナンの方を見た。

「セレナは、次に産まれる時には人間になれるのかな」

「……さあ。どうだろうな」

妖魔と人間の間に産まれた魂が、次に産まれる時には何になるか、カナンは知らない。

でも最後、セレナは浄化されて姿をなくした。

「人間よりも、花とか……綺麗なものに生まれればいいのかも说不定」

あるいは大気に溶けて、自分を優しく撫でる風に。

思いつきを口にしたカナンに、ルナティンは笑って、「そうだといいな」と頷いた。

彼女が何に生まれ変わるのか、誰にもわからない。

ただ今も、道なりに緩やかな暖かい風が吹いていた。

そしてその風に優しく背中を押されるように、カナンとルナティンは並び、これから始まる旅へと歩いていった。

第一章『春の町』

心地よい風が吹いていた。春は辺り中にその暖かさを主張し、咲き誇る花のほのかな匂いが、よく晴れた日には感じられるようになっていた。

今日もとてもいい天気だ。

はるか頭上で鐘の音が響くと、広い部屋の中にいた大勢の少年、少女たちが、書物を閉じペンをしまい、座席から立ち上がる。

ざわざわとにわかに騒がしくなる教室の中で、ミューザも座席から立ち上がると、すぐそばにある窓枠に手を掛け、身を乗り出して空を見上げた。

授業を聞く間にも、窓からは暖かな柔らかい風が吹いてきていた。春はいつもそわそわと、ミューザを落ち着かない心地にさせる。

ミューザは胸いっぱい、いい香りの空気を吸い込み、吐き出しながら空を眺めた。

歳の頃なら十五。藍色にほど近い黒い瞳が、空の陽の光を返して驚くくらい輝きに満ちていた。瞳の美しい少女だった。

淡い草色の上着と、男の子のようなズボンを纏うまだ丸みの少ない体は、衣服のせい、小柄な少年だと言ってしまえばしまえるものだ。彼女は女の子の割には背が高い。

弾むような呼気が、ミューザの白い頬を薄く紅潮させた。栗色の柔らかな髪は、ばつさりと、思い切りよく切られて、剥き出しの首筋にも春の風が触れる。

「いい天気だな」

声に出して、そう呟いた。眩しさに少し目を細める。今日は午前中で授業の終わる日。こんな陽の高いうちに、それもこんなお天気の日、学校が終わるのは、いつだって何となく嬉しい。

「ミューザ、何を見ているの？」

背後から声をかけられ、ミューザは窓の外へ乗り出していた体を

いったん中へ収めると、振り返った。

「いい天気だなあつて。こんなことなら、外に布団を干してくればよかった、洗濯物も」

ミューザの言葉に、友人がくすくすとおかしそうに笑った。小さくて可愛らしい友人の笑い声に、ミューザは軽く首を傾げる。

「どうかした、マナ？」

「だって、とつても眩しそうな、気持ちよさそうな様子で空を見ていたのに。お布団やお洗濯の心配をしてるんですもの」

ミューザは軽く肩を竦める。

「今、試験前だから。家にいるのが、頼りにならなくて困ってるんだ」

ミューザの口調は大人びている。誰のことを言っているのか、マナはすぐに察することができた。

何しろミューザが彼のことを話す時は、いつだってそんな口調になるのだから。

「お父様は、またお籠もり？」

「そ。夜から机に齧り付いたまま、話しかけても生返事だし。ちやんとごはんを食べてるかも怪しいよ、一応、学校に来る前に、食事は作っておいたんだけど」

マナはさらにくすくすと笑い声を立てた。

「お洗濯とか、食事とか、ミューザだったらまるで母様みたい」

言ってしまうから、マナは「あ」と小さく呟くと、急いで片手を口許に当てた。

「……ごめんなさい」

いいの、というふうには、ミューザは気の優しい友人に向けて首を振ってみせた。

ミューザの家には母親がいない。父親とたったふたりの暮らしだ。それを知っていて迂闊に話題に出してしまったことを、マナは悔やんでいる。

「気にしないで、もうずっと昔からセルバンとふたりなんだ。慣れ

てるよ」

さっぱりした口調でミューザが言う。マナは、尊敬を込めた視線で、自分よりもずっと丈高く、すっと背筋の伸びた友人の顔を見上げた。

「わたしも、ミューザのようになりたいわ」

「どうしたの、急に」

真剣な眼差しで言ったマナに、ミューザがおかしそうに笑ってから、開いたままの窓を閉めた。

「いつもミューザのこと、わたし、尊敬しているのよ。おうちのこつとやお父様のお世話をきちんとやって、学校ではいつも首席だし、憧れなの」

「やだな、まじめな顔でそんなこと言わないでよ。照れるったら」

「ほんとうよ」

両手を握り合わせ、まるで祈るように自分へと言いつのるマナに、ミューザは少し困った顔で笑うと「ありがとう」と小さく礼を言った。

マナはとても愛らしい少女だ。ふんわりと波打つ金の髪は長く、腰の当たりまで届いている。肌の色は抜けるように白く、きめ細やかで美しい。小さな顔は、十人が見れば十人が『可愛い』と評することは間違いなかったし、言葉の端々や仕種のひとつひとつ、少女らしく優しいものだった。

彼女に憧れる同性も、もちろん男の子も多いことをミューザは知っている。彼女のようにになりたいと思ったことはないが、それでも彼女の可愛らしさはとても好ましく、何かと自分に懐いてくるのは嬉しいことだった。

「マナ、そろそろ帰ろうか。お腹すいちゃった」

「ええ、そうね」

こくりと、小さく頷いて、マナが荷物を取りに自分の席へと戻っていく。

ミューザも、帰り支度のために荷物をまとめてしまおうと、再び

自分の座席へ着いた。

マナと入れ替わりに別の人間の気配がした時、ミューザは内心で大きく溜息をついたものだが、決してそれを表には出さなかった。

「ミューザ」

いつものように不機嫌な語調で呼びかけてきた声に、ミューザは視線は向けずに返事をした。

「なあに」

「いい加減教えろよ、きみ、来年の進学はどうするんだ」

ミューザはとんとんと、机の上でノートの束をまとめながら、机の前に立つ少年のことを見上げる。

「それなら何度も答えてるだろ。きみには関係ないことだよ、エリスバート」

少年は、女の子みたいにきれいな顔を、露骨に不快そうに顔を顰めミューザを見下ろした。

「フルネームで呼ぶな。あと、男みたいな言葉遣いもよせよ」

「それもきみには関わりないと思うけど？」

わざとからかうような口調で言っていてやって、ミューザは丁寧にノートを鞆に詰めると、立ち上がった。並ぶと、少年、エリスバートとミューザの背は、ほぼ同じ高さになる。

「関係あるさ。このぼくのライバルが男のできそこないのようじゃ、格好がつかないからな」

「呼び方が気に喰わないなら略してあげようか、エリス」

につこりと、ミューザは不穏な笑顔を浮かべてエリスバートの方に軽く身を寄せた。反射的に、エリスバートが身を引いてしまい、そんな自分に口惜しそうな顔になった。

「その名前でも呼ぶな」

「あれやこれやと注文の多いライバルさんだこと」

どん、と少し乱暴な音を立てて、ミューザはノートや書物の詰まった鞆を机に置き直した。

「いい、よく聞きなさいエリスバート。きみがあたしをライバル視

するのは勝手だ。周りに踊らされて愚かなことだとは思っけど、あたしには興味がないから関与しない。そう、興味がないの。だからあたしがこの学校を卒業してどこに行こうが、教える気は毛頭ない。二度と同じ質問をするな」

エリスバートの鼻先に指をつきつけ、ミューザは決めつける口調でそう言った。

だがエリスバートは今度は怯まず、きつい眼差しでミューザを見返した。

「興味がないのはきみの勝手だ。ぼくの事情はぼくのもので、そう、きみには関わりないからな」

でも、とミューザを睨みながらエリスバートは言を継ぎ、

「この学校での三年間、ぼくは一度もきみにテストで勝てなかった。勝てないまま終わるなんて御免だ。そんなこと、このぼくのプライドにかけて絶対許せない」

「くだらない。訊くけど、じゃあエリスにとって学問って何？ 自分の知識を高めること？ それともあたしを負かして、煮え湯を飲ませようとするための道具？」

ぐつと、言葉に詰まるエリスバートを、ミューザは冷たい視線で見遣った。

さらに何か言ってるやろうと口を開いた時、エリスバートの向こうから悲鳴のような声が聞こえて、ミューザはその氣勢をそがれてしまった。

「バーティ！ ミューザ、あんた、何バーティにケンカ売ってるのよ！」

勢いよく駆け寄ってきて、エリスバートの腕を引っ張ったのは、気の強そうな美人のクラスメイトだった。

「あたしは買ったの、売ってきたのはエリスの方」

「ばかばかしい、と内心白けた気分で、それでもミューザは彼女に答えた。

「嘘おっしやい。バーティがそんなくだらしないことするわけないで

しょう、いつもいつもバーティにちょっかいかけて、まさかミューザ、バーティに気があるわけじゃないでしょうね」

恪気も顕わに、彼女が見せつけるようにエリスバートの腕に自分の両腕を絡め、ぎゅっと身を押しつける。エリスバートが少し困ったような顔になった。

「メアリル、大きい声を出すなよ」

「この際だから言うておくけどね、ミューザ。あんた、気安くバーティに話しかけないでちょうだい。たかだか神学校の教師風情の親を持つあんたと違って、バーティは領主さまのご子息よ。単にクラスが同じってだけで、本当なら対等な口なんて聞けないような立場なんだから！」

「メアリル、そういうことは」

「そうね、悪かったわ！」

勢い込むメアリルの言葉を遮ろうと声を上げたエリスバートの声を、さらに遮る大きな声でミューザは言った。

少し驚いた顔になるメアリルに、ミューザは先刻エリスバートへ向けたのと同種の笑顔で、にっこりと笑う。

「領主のご子息と、議員のご息女であるきみたちに関わる気なんて本当に、さらさら、これっぽっちもないの。誤解させたんなら悪かった。これ以上不快な目に合わないよう、今後はあたしの視界に入らないように気をつけてもらえるとありがたいわ」

言うだけ言うと、荷物を持ち、ミューザはさっさと自分の席

エリスバートとメアリルのいる場所から離れた。

「マナ、帰ろう」

教室のドアのところから、まだ帰り支度をしているマナに呼びかける。はらはらと、遠巻きに三人の様子を窺っていたせいで支度の手を止めていたマナは、慌ててノートなどを自分の鞆へ詰め込んだ。

「ミューザ、ぼくは」

「バーティったら、もうっ、あんな人に構わないでよ！」

ドアのところでマナを待つミューザへ、エリスバートが近寄ろう

とすると、メアリの強い力がその腕を掴んで阻む。

「ミューザなんて、自分の父親が教師なのをいいことに、きつと試験の問題のことも教えてもらってるのよ。そうじゃなくっちゃ、パーティーより成績がいいなんてことありえないわ。パーティーは小さい頃からずっと首席だったのに」

「メアリル！」

メアリの言葉に、いち早く反応したのは、帰り支度を終えてミューザの方へ駆け寄ろうとしかけたマナだった。

マナはそのまま行き先を変え、メアリの前まで怒った足取りで近づく。

「な……なによ」

普段は大人しく、ちょっと強いことを言えば泣いてしまいそうなマナが、思いのほか強気な顔つきで近づいてきたのに、メアリの腰が退ける。

「失礼なことを言わないで、ミューザは自分の力で勉強して首席を勝ち取っているし、それに、セルバン先生はそんな卑怯なことをなさる方じゃないわ」

「そんなこと、わからないじゃない」

メアリの方は、相手に強く出られればますます依怙地になるタイプで、怯んでしまったのも口惜しかったのか、さらに険のある目つきになって小柄なマナを上から見下ろした。

「誰だつて、自分の娘なら可愛いものでしょう。知り合いの教師から、試験の内容を聞き出したりなんて」

「生憎ね。セルバンはこないだから、自分の学校の試験のことで手一杯で、あたしが試験を受けるってことすら知らないんだ」

ドアにもたれながらミューザは冷たい口調で言い、すぐにマナへと視線を移した。

「お腹空いたな、マナ。帰りがけに美味しいパンでも食べていこうか」

「ええ」

こくりと、小さく頷いて、マナはミューザのそばへと駆け寄った。
「何よ、逃げる気？」

いきり立つメア ril を無視して、廊下へと出かけてから、ミューザはふと思いついたように振り返るとエリスバートの方を見遣った。
「そんなに気になるなら教えてあげる、その代わり、今後二度と同じ質問をあたしにしないでね」

エリスバートがミューザを見返し、頷いた。

ふっと、ミューザは彼に向けて優しい笑顔を浮かべる。

「卒業したらあたし、テイメントに行くのよ。よかつたら一緒にいらっしやる？ 春の花に遊ぶ小鳥さん」

「……っ！ ミューザ！！」

怒ったエリスバートの声に高らかな笑い声を返し、ミューザはマナの手を引いて廊下へ出た。

「やだ、ミューザったら」

横でマナも、おかしそうに笑いを堪えている。テイメントは、このサンファールの国の首都、バーンズにある、厳格な教育と、家柄審査で有名な花嫁修業の学校だ。もちろん、女学院である。

「ミューザが、テイメント女学院……」

「冗談に決まってるでしょ。柄じゃないよ」

笑いながらも、感慨深げな声で呟いた友人に、ミューザは苦笑する。マナが少し首を傾げた。

「そうかしら、わたし、きつとミューザは、とても素敵なお嫁さんになると思うのよ」

「何言ってるの、それならマナの方こそだよ。家柄も申し分ないし」
マナは長く続く商家の生まれで、その功績からもうじき貴族の称号ともらえるだろうと噂もある。成り上がり、と陰口をたたく者もあるだろうが、マナの両親やその両親も立派な人物であることは、彼らを目の当たりにしてミューザも知っている。

「そつえば、メア ril は、本当にテイメントに行くって聞いたわ」
マナの言葉に、ミューザは肩を竦める。

「で、エリスのお嫁さんにもなるつもりかな」

メアシルがやたらミュウザにつつかかってくる理由を、もちろんミュウザは知っている。エリスバートが自分にやたらつつかかってくるからだ。ミュウザにとっては迷惑なことこの上ない。

「別にいらぬのになあ。首席の座なんて」

誰にともなく、ミュウザは呟く。こんなことをエリスバートやメアシルに聞かれれば、またもう一悶着あることだろう。

(学問って何、か)

ミュウザは先刻、エリスバートに向けた自分の言葉を思い出した。それから微かに、苦笑する。

(よくも言えたもんだな。あたしが)

「……ミュウザ？」

黙り込むミュウザに、不安そうなマナの声が届いた。見下ろすと、声を通りの表情がそこにある。

「ああ、ごめん。何でもないんだ」

「悲しそうな顔をしてるわ」

自分まで悲しそうな表情になりながらみつめ返してくる友人に、

ミュウザは明るく、笑って見せた。

「お腹が空きすぎて辛いんだよ、ほら、急ごう」

「……うん！」

それ以上は何も問わず、花の咲くような笑顔で頷く友人のことを、ミュウザは心から大切だと思った。

本当は、この学校に通うことが自分にとって何の意味もなく、勉強にもそれを見いだせはしなかったが、マナがいるかぎり少なくともこの場にいる理由になると、ミュウザは改めて思った。

マナとの軽い食事を終えたミュウザは、彼女と別れ、土産の焼きたてパンを抱えて自分の家へと戻った。

学校から家までは、歩いて結構な距離がある。うららかな春の陽射しをいっぱい浴びながら、ミューザはゆっくりとした歩調でその道を進んだ。

ここはバーンズ国の南端、ドモスの町。

町、とは言っても村に近いもので、市場が出ることもないような境界のさらに境界、自慢できるのは地平線さえ見える、人工物のまゝでない自然くらいだ。

しかしミューザはその自然が気に入っていた。続く草原、季節ごとの花々、幾つもの森、澄んだ湖。どれを取っても美しく、きつとまだ見たことのないお隣の国、常春と呼ばれるパラスだって、こんなに素晴らしい景色を持つてはいないのではと思う。

ミューザはものごころついた時から、このドモスの町に住んでいた。ここ以外の町を知らない。首都バーンズはドモスから遠く離れ、ときおり商いで出かけるマナの父親から、その様子を聞いたことがあるくらい。

同じ学校の友達の中には、首都に出て華やかな暮らしがしたと夢見る者も多かったが、ミューザは別段それを望んではいなかった。

(学校を出た後、ね)

ぶらぶらと道を歩きながら、ミューザは思い返した。

エリスバートがしつこくミューザに卒業後の進路を訊ねるのは、その卒業がもう間近へ迫っているからだ。

町の子供たちは、よほど貧しい暮らしをしているわけではなく、七つか八つになるとひとまず下級の学校に入る。そこで基礎の学問を教わって、必要ならばさらに上の学校へ入る。それが今ミューザの通う学校だ。大抵は、一度学校に入ればここまでは自然と進学する慣わしになっている。

そこからさらに上の学校に進むとなると、それなりに優秀な成績が必要となる。

上級学校はドモスにもあったが、さほど教わることは多くない。進学するほどに優秀な生徒は、バーンズとまでは行かなくとも、も

つと都会の、レベルが高い学校で学ぶようになることがほとんどだ。そこまでして学校に通う必要はない、と本人や周囲が認識した場合には、学校へは行かず、そのまま親の職業を継いだり、別の仕事に就いてその下働きから始める。学校に行くよりも、将来の職業のために修行を始める方が効率がいいからだ。

女の子の場合は、ほとんどが嫁ぎ先をみつけ、家を出て行く。あるいは、ミューザが冗談で口にしたように、花嫁修業の学校に行くか。田舎町に住む少女にとっては、都会の花嫁修業学校で学び、舞踏会などで貴族の『素敵なご子息』もしくは『素敵な貴族』のご子息を射止めることが、最大のステータスだ。

ミューザは、そのどれにも魅力を感じることができなかった。

上の学校に行くことも、仕事を探すことも、もちろん家を出て誰かと結婚するなんてことも。すべてに気が進まない。

(嫌な時期になっちゃったな)

ただ、そう思う。

(神学校だったら、まだこんなこと悩まなくて済んだのに)

詮ないこととはわかっていても、ミューザは最近、何度も何度もそう考えずにはられない。

学校には二種類ある。ミューザが通うような一般教養学校の他に、『聖なる力』を持った人間が聖職に就くために学ぶ、神学校だ。領主や事業主が作る学校と違い、神学校はすべて、サンファールの国の管轄下にある。神学校で学び、聖職者たる資格を得た者は、やはり国の下にある各領地の教会で働いたり、優秀な者は首都や主要都市にある神殿で神に仕えることになる。

そして聖職者としての資格を得るためには、長い修学と修行が必要となり、たとえば自分の年で身の振り方を考えなければいけない必要なんて、ありえないはずだとミューザは思っている。

(無理な話だけどさ……)

「おや、ミューザ、今帰りかい？」

重い溜息をつきながら歩いていたミューザは、不意に声をかけら

れて道の向こうを見遣った。ちょうど、買い物袋を抱えた顔見知りのおばさんが歩いてくるところだった。

「こんにちは、ルカおばさん。さっき学校が終わって、マナと食事をしてきたんだ」

「そうか、ああ、ほら、果物が安かったんだ。たくさん買すぎてうちじゃ食べきれないから、持って行ってセルバンとお食べ」

「ありがと、あ、じゃあうちのパンも」

ルカおばさんからいい香りのする果物を受け取る代わりに、ミューザが先刻買ったばかりのパンを分けようとする、すぐにその手を止められた。

「いいって、気を遣うんじゃないよ。あんたんここはあのほんやりの先生と一緒に大変だろう」

心底心配している風情のルカに、ミューザは何とも言えずに苦笑いした。

「大丈夫だよ、セルバンだってちゃんと働いて、あたしとふたりちやんと暮らしてけるくらいには稼いでるんだから」

「だってあんたたちまだそんな小さくて、それにセルバンはぼうっとしてるし、心配なんだよ。ほらほら遠慮しないで持っていきな、これも」

ルカの勢いには勝てず、ミューザは気づくと両手いっぱい果物やら、野菜やらを持たされてしまった。

まあいつか、とミューザはすぐに反論を諦めた。

ルカも、それからよく道や店で擦れ違う人たちも、何かとミューザの家を気に懸けて、力を貸そうとしてくれる。いい人たちばかりなのだ、この町は。

「あんたも母様がいなくて大変だろうけど、頑張ってやってくんだよ。困ったことがあったらいつでも頼っておいで」

「うん、ありがと」

ミューザが素直に頷くと、ルカは嬉しそうににこにここと笑った。それから、ふと思い出したように口を開く。

「そついやミューザは、学校を卒業したあとどうするんだい？」

あまりにタイミングのいいルカの質問に、ミューザは少しぎくりとした。何かに見透かされたようだと思った。

「まだ、決めてないんだ」

「そうか。ほら、うちの息子が今年、上の学校に進むってんでミルデンに行っただろ。なのにあのバカ、三月もしないのもう帰って来やがった」

「え、ラル兄さん、帰って来ちゃったの？」

ミューザの問いに、ルカは大仰な溜息で答えた。

「もともと大したデキでもないのに、どうしてもっていつから無理して上の学校にやったってのに。これだったら、最初からうちの店を継がしておけばよかったよ、まったく……」

ルカにはひとり息子がいるが、どうしても上の学校に進みたいといつので、両親の反対を押し切って少し遠い町へ去っていったはずだった。だが、おそらく想像以上に厳しい学校や寄宿舎の生活に、嫌気が差したがついていけないと悟ったか、戻ってきてしまったらしい。

「仕方ないね、ミルデンの学校は、とりわけ厳しいって先生に聞いたことあるし」

「こうなったら後はもう、跡継ぎとして容赦なく鍛えるまでだよ。

それでさ、ミューザ」

ルカは、まじめな顔でミューザのことを見遣った。

「あんた、うちのラルんどこに来る気はないかい？」

「来る……、って？」

咄嗟にはルカの言っている意味がわからず、ミューザは首を傾げてしまった。

「やだね、来るって言ったら、嫁についてことに決まってるじゃないか」

そして至極当然のようなルカの言葉を聞くと、思わず、ぎょっとした顔で軽く後退さってしまふ。

「だ、だってあたし、まだ十五だよ？」

「何言つてんだ、あたしが旦那んとこに来たのは十四の時だよ。まあ今は昔よりもう少し嫁ぐ年が遅くなってるっていうけど、十五となれば立派なもんだ。何、今すぐ来いとは言わないよ、来年、学校を卒業して行くところがなければいいんだ」

「え、ええと」

普段、たとえばエリスバートやメアリルに詰め寄られてさえあまり狼狽するということのないミューザだったが、さすがにこんな話題を持ち出されては、動揺しないわけにもいかない。

「でも、あたし、まだそういうの全然……」

「考えてくれるだけでいいんだよ。あの子がだらしなから親のあたしが言っちまうけどさ。ラルは、ずっと小さい時分からあんなこと、憎からず思ってた節があつてさ。あんな最近どんどん美人になるし、ミルデンの学校から戻ってきたのも、ミューザ、あんなのが気になってたつても多少はあるみたいなんだよ」

「……」

困惑しきつて、ミューザは相槌も打てなかった。自分の知らないところで、そんなご大層な話になっているなんて、欠片も思っていなかったのだ。

「あんな学校卒業したら、きつとあちこちの家から声がかかるよ。賢いし、父様の面倒をよく見てるから家のことは任せて問題ないだろうし、働き者で元気で明るくて、おまけに器量よしと来たら放っておかれるわけがない」

「でもあたし、器量よしつたつてナリはこんなだし、そんなこと、ないと思うんだけどなあ」

ミューザはズボンの端を摘んで、自分の体を見下ろした。

今の学校に通う頃になつてからずっと、ミューザはスカートを穿かず、誰に何を言われようと男の子のような服で過ごしてきた。小さい頃は長かった髪も、今はばっさり切つて伸ばそうと思つたこともないし、うるさいエリスバートたちに対抗する時は、言葉遣い

までつい乱暴になってしまふ。

おまけに体は細っこいの背は高く、年頃の娘ならでっぱったり括れたりするべきはずの部分がまるで平らだから、後ろ姿や遠目に男の子と間違われることだってしょっちゅうだ。

「それだったらマナや、それにメア Ril の方が、よっぽどひくてあまたになると思うんだけど」

マナはきちんとした家のお嬢様だから、家事全般人並み以上に教え込まれているし、メア Ril は性格はともかく美人だし、マナとは別の意味でお嬢様だから家事技術には不安が残るが、家柄は申し分ない。ふたりとも、自分よりもよほど、嫁取りの候補になるべき人材のように感じられた。

そう呟くミューザに、何言ってるんだ、とルカがからから笑う。

「あんたは今に、この町一番の美人になるよ。いや、サンファール一かもしれない」

「またそんな、大袈裟な」

「大袈裟なもんかい。あんたみたいに利口そうな瞳は見たことないし、しゃんとして立ってる姿は凜々しいし、まあたしかに真っ平らなのは痛いけどそれももうちょっと経てばあちこち出っ張ってくるだろうし、髪を伸ばして化粧のひとつもすれば、本当に綺麗な女になるよ」

「そ……そうかな」

あまりの褒めように、ミューザは照れるというよりただただ恥ずかしくなって、柄にもなく赤くなってしまふ。

「そうしたら町中の男が放っておかない。いや、隣町とか、もっと遠くからだってあんたを嫁にして人が来るかもしれない。だけど最初に声かけたのはうちだって、忘れないでくれよ」

ルカはそう念押しして、ミューザは仕方なく、小さく頷きを返した。ミューザにはとても本気に取れる話じゃなかったが、少なくともルカはまじめだったし、笑い飛ばしてしまうのは失礼な気がしたのだ。

その様子を見て、ほっとしたようにルカが息を吐く。

「それじゃ、あたしはそろそろ帰るよ。あのバカ息子がお腹を空かして待ってるだろうし。ミューザも早く帰って、父様に美味しいごはんを作っておやり」

「うん。本当にこれ、ありがとう」

改めて譲ってもらった果物や野菜の礼を言って、ミューザは家に向け歩き出そうとした。

「あ、ミューザ」

ルカも少し先を行きかけてから、もうひとつ思い出した様子で、ミューザを呼び止めた。

「うん？」

「あんた、隣に越してきた男の人と会ったことがあるかい？」

「隣？」

ミューザは首を傾げて、少し考えてから「ああ」と相槌を打った。「二週間かそのくらい前にあのボロ屋に来たっていう人か。ううん、会ったことないよ」

答えるミューザを見るルカの表情は、あまり楽しい話題を口にする時のものではなく、ミューザはもう一度首を傾げる。

「その人がどうかした？」

「いや。あたしや他の人たちも、最初に引越しのお祝いを持っていった時以来、外でその人に会ったことがないんだ」

「へえ」

ドモスの町は、狭い。おまけに大陸の一番端に突き出すようにしてある土地だから、よほどの用事がなければほかの町に「行くことも普通はない。

そしてドモスで暮らして行くからには、町にたったひとつしかない商店街へ赴くことになるわけだが、その商店街に店を構えるルカも、おそらくその店の人間たちも、最近越してきたという男の姿を見たことがないという話になる。

それはとても、不自然なことのようになり、ミューザにも感じられた。

「変な話だね」

「だろう。まあ、やまほどの保存食があるとか、ひとりで家畜を飼つてるとかいうなら、ありえない話じゃないけどさ。けど何だか気味が悪いだろう、あたしがお祝いの食事を持ってそいつの家に行つた時、家の中にいるつてのに顔までマントで隠して、しかも全身黒ずくめなんだ。髪も瞳も黒かったし、何だか気味が悪いじゃないか」

「黒ずくめ……ずいぶん、悪趣味だな」
「ラルは、ひよっとしたら魔導遣いじゃないかなんて言い出して」
「魔導遣い？」

問い返すミューザの声は、少し辺りを憚るようなものになった。日常で口にするには、あまり縁起のいい言葉じゃない。

「そしたらラル以外の、他の人たちもおんなじようなことを言い出すじゃないか。あたしも最初は悪い冗談だと思つてたけど、何だかねえ、町には出てこないくせに夜になれば町の端をうろろろしてるだの、擦れ違つた時そいつの手が赤く濡れてただの、気味の悪い話ばかりで」

黒魔導士なら、動物や人間の生き血を遣つて呪術を行う。ルカの話が本当なら、そんな噂が立つても無理はない。

「物騒な話だなあ……」

あくまで噂は噂と思いつつ、話を聞いてしまえばミューザもぞつとしない。黒魔導士だろうが何だろうが、夜中に外を徘徊するような人間とは、あまりお近づきになりたくはないものだ。

「まあ、ともかく、あんたたちが一番そこに近いからさ。気にしておきな」

「わかった、ありがとう」

ルカに礼を言つて、ミューザは今度こそ彼女と別れて歩き始めた。歩きながら、少し首を巡らせて、当たりを見渡す。

真つ直ぐの道の向こうに、もうミューザと父親の住む小さな家が見える。周囲は花の揺れる野原が囲み、遠くを見れば深い森がある。その向こうはもう海だ。ミューザの家は、大陸の南にあるドモスの

さらに南端に近くある。

その隣　　というのは、ミューザの家からもつと南に入ったところ、深い森の中にある家のことだろう。もう何年も人が住んでおらず、ずっと昔に探険と称してマナとその家を訪れた時は、あまりの不気味さに二度と足を踏み入れまい、と思ったほど。鬱蒼と繁る森に暗い影を落とされ、太陽の光も入らないようなありさまで、まさか好んでそんな家に住む人があろうとは、ミューザも、町の誰も思っっていなかった。

（きつと変なやつが住んでるんだ）

失礼なことを考えながら、ミューザは自分の家へと辿り着き、その玄関のドアを開けた。

「ただいま、セルバン、いるの？」

予測どおり、ドアには錠が下ろされていなかった。そしてこれも予測どおり、帰宅の挨拶をしても、ミューザに返ってくる声はない。大荷物を抱えて、ミューザは玄関を過ぎて短く狭い廊下を進むと、突き当たりにある部屋に入った。ドアは開け放たれている。

「ただいま」

呼びかけても、やはり返事はない。

三つあるこの家の部屋の、ここが一番広い居間だ。残りのふたつは、それぞれミューザと父親の寝室。ミューザはいつも帰ってくる時、まっさきにこの居間を覗く。父親がいる場合、大抵ここで何かしらの仕事をしているからだ。

居間には、端の方に小さめの調理場と、小さな庭から汲み上げた井戸水を流すようになっていた水場がある。天井から吊してある巻き上げのカーテンが、水場と居間とを区切っていた。居間の壁ぎわには小さなタンスがいくつか並んでいて、細々とした日用品がきちんと整頓されて入っている。部屋の中央に丸い食卓。

その食卓に顔を伏せ、せかせかと羽根つきのペンを忙しく動かす、紙の山を作っているのがセルバン。

ミューザの父親だ。

「セルバン、食事買って来たよ」

ミューザは三度目の呼びかけを口にした。

やはり、返事はない。

ミューザは食卓のそばまで近づくと、空いている椅子の上に、どつさりパンや果物の入った袋を降ろした。多少乱暴に扱ったのだが、向かい側に座っている男が反応する様子はなかった。

(まったく……)

呆れ顔で、ミューザはその相手を見遣る。

いかにもな優男。横から姿を眺めると薄っぺらい体。筋力とか、そういったものとは縁遠そう。丸い、小さなレンズの眼鏡を掛けた顔は、限りなくと形容詞がつくほど柔和だった。柔弱と表現したっていい。

当年取って三十三歳、そろそろ中年と言って差し支えない年齢に足を突っ込みかけてはいるが、イメージとしては『青年』だ。先刻のルカや、セルバンを知る町の人間から、いつまで経っても「頼りない青年」のイメージを払拭できないままもう十数年。

ミューザの髪からさらに色を抜いたような、薄い茶の長い髪を大雑把に布で束ね、よれよれの白い寝間着を着込み、必死になって紙の山に向かっている姿は、本人が真剣な分だけ笑いを誘う光景ではあった。

「セルバン、ただいま！」

ミューザは先刻よりもいささか大きな声になって、何度目かの呼びかけを試みた。が、なおも、セルバンは紙から顔を上げない。ミューザは軽く目を細めた。

「セルバン、家に帰ってきたらまず挨拶しなさいってあたしをしつけた人は誰！」

「え…… ああ、うん、そうだったね」

「……」

生返事をしているセルバンを、ミューザは不機嫌な表情で覗き込んだ。机に両手をつけて、ぐっと身を乗り出すように相手の顔を覗

き込んで、まるで気がつく様子がない。

「質問してるの、あたし」

言いながら、ミューザは片手でセルバンの掛けていた眼鏡を取り上げた。

「わ、なっ、何だ？」

唐突に視界のほとんどを失い、セルバンがぎよつとしたように、ようやく紙から顔を上げた。

ミューザはセルバンの手が届かないよう、眼鏡を持った腕を背中に隠し、にこやかにセルバンの顔を見下ろす。

「ただいま、セルバン。学校終わったよ」

「あ……ああ、おかえり、ミューザ。ええと、眼鏡を返してくれるかな」

セルバンが慌ててミューザから眼鏡を取り返そうと、椅子を蹴倒しながら立ち上がった。

ミューザは、さらに眼鏡を持った手を遠ざけ、にっこりと、笑顔で彼を見上げた。立ち上がったセルバンは、身の丈だけは立派なもので、少女としては背の高いミューザと頭ひとつ分は優に差があった。

「さつき、ラルのおばさんに会ったよ。果物と野菜をもらったんだ、会ったらちゃんとお礼、言ってね」

「うん、そうするよ。ミューザ、眼鏡を」

「どうせご飯食べてないんでしょ、今支度するから、机の上を片づけて」

ミューザはセルバンに近づけていた体を離して、空いている手で買い物の袋を探った。

「あのう、ミューザ、僕はとても目が悪いから、眼鏡がないと何も……」

「しなくていいの、何も。あたしがご飯を作って運ぶまで、その紙の山をまとめて机の端に寄せる。ペンとインクは汚れないように隣の棚に置く。それからちゃんと座って待ってるの。それくらいなら、

眼鏡がなくてもできるでしょ」

相変わらず眼鏡を背中に隠したまま、ミューザは片手で器用に袋の中身を出していく。

「ねえ、食べ終わったら、少し外を散歩しない？ 帰ってくる時、東の丘に綺麗な花が咲いてるのを見たの」

溜息をつきつつ座り直したセルバンに、ミューザは笑って呼びかけた。

途端、がっくりと、セルバンの肩が落ちる。

「あのねえ、ミューザ。僕の今の状況はわかってるね？」

「知らない。何が？」

取り出した食材を、眼鏡を持ったまま調理場に運び、ミューザはにべもなく答えた。

「何がって、だからその、僕の職業は知ってるだろ？」

「神学校の先生でしょ？」

「で、僕が今やっていることは？」

「試験の問題造り」

「✂切りは？」

「今日の午後」

「今の時刻は？」

「午後一時半」

「……」

セルバンは、さらににがっくりうなだれた。

「咲いてたのは夏の花なんだよ。今年は早いよね、異常気象なんじゃない？」

眼鏡を近くの棚に置き、ミューザは仕切りの布越しに、軽くセルバンを振り返る。セルバンは諦めた様子で、大人しく紙の束をまとめ始めていた。よしよし、とミューザはひとり満足げに頷き。

（まったくこうでもしなくちゃ、ご飯だってまともに食べないんだから）

調理場には、オーブンで温めてすぐに食べられるようにしておい

た朝食が、そのまま手つかずで残っている。ゆうべもこんな調子だった。一度仕事に没頭してしまうと、後のことは何も手につかない、不器用な性格。

ルカや町の人たちが心配するのだって、無理からぬ話なのだ。

「これで神学校の先生なんて、まともにもできてるのかなあ……」

セルバンには聞こえないように、ひっそりとミューザは呟く。

セルバンは聖職者だ。『聖なる力』を持ち、その力を使う資格を国から得ているらしい。

強い力を持ち、それが国に認められれば、神殿に属するか、名だたる神学校の教え手として教鞭を執ることが出来る。だが、セルバンが属しているのはこの田舎町の小さな神学校だ。しかもセルバンは、直接生徒に白魔法について教えているわけではない。理論や一般教養の授業をするだけで、だから他の生徒や教師から、たまに『本当に聖なる力をもっているのか？』と不審に思われるようなありさま。

セルバンとミューザがこの町にやってきたのは、ミューザが生まれて間もなくだという。伝え聞きのようない方になってしまふのは、ミューザがあまりに小さくてその頃を覚えておらず、セルバンや町の人の話でしか知らないからだ。

ドモスにやってきて数年は、セルバンは町にある店で下働きをしたり、薬草を摘んでは売るような仕事で生計を立てていたという。もちろん楽な暮らしではなく、町の人たちの好意でようやくかつかつの生活ができるような状態だった。

セルバンが神学校の教師に収まったのは、今から二年前。

ミューザが新しい学校に入る、その年だ。

(あたしのためだ)

それをミューザもわかっていた。

セルバンはどうしてか、聖職に就くことを拒んでいるようなふしがあった。

聖職者たる資格を持っていても、国の施設に申請しなければ、仕

事が与えられない。無断で聖職者としての仕事　白魔法を使った怪我や病の治癒、祭祀の扱いなど　を行えば罪になるが、何もしない分には咎められることはなかった。国からの仕事を請ければそれなりの糧がもらえるから、資格を持つている人間は何らかの聖職に就くのがあたりまえだったが、セルバンはそうしなかった。

その理由をミューザは知らない。セルバンは話したがらなかったから、無理に聞き出すこともしなかった。いつか必要な時がくれば教えてくれるだろうと思っている。

『極力聖職に就きたくない』という気持ちを曲げてすら神学校の教師に収まったのが、自分を上の学校にやるための資金作りが目的だと、もちろんミューザは気づいている。セルバン自身は、学校でどうしても人出が足りずに困っているから仕方なくと話していて、それも事実ではあったが、何よりの理由は自分のためだと知っている。だから本当は、セルバンが学校の仕事をしているのであれば、自分がそれを邪魔してはいけないとわかっていた。

だがどうしても、耐えられない。

セルバンが仕事に没頭して、睡眠や食事を削っていること。

それから、自分に視線すら向けないことに。

「セルバン、そっち、片付いた？」

朝食をそのままオーブンに放り込み、ルカがくれた果物と野菜で手際よくサラダを作りながら、ミューザはまたセルバンの方を振り返った。

だが、返事がなくて眉を顰める。また懲りもせず仕事を始めてしまったんだろうか、そう思いながら不機嫌に台所と今を遮るカーテンから体を出すと、セルバンは机に突っ伏すようにして寝息を立てていた。

「……もう……」

軽く、ミューザは溜息をつく。だから言わんこっちゃない。

連日のほぼ徹夜に疲れ果て、無理をした拳句、倒れるように眠りに就いてしまったのだ。

「セルバン、寝るなら寝台に行きなよ。暖かいからって、こんなとこじゃ風邪ひくよ」

近づき、軽くその肩に手を置いて揺さぶってはみるが、セルバンは反応しない。ミューザは諦めて、一度セルバンの部屋に入ると、毛布を抱えて戻ってきた。

そして、その薄い肩に毛布を掛ける途中で、ふと手を止める。

「……」

セルバンの肩は、本当に薄い。大の大人の体なのに、まるで頼り甲斐というものが感じられない。

「……馬鹿」

小さく、セルバンを起こさないよう小声でミューザは呟いた。

家の中、そしてこの陽気なのに、セルバンは長袖を着ている。そして上着の襟は、首の半ばまで詰められ、きつちりとボタンが留められていた

セルバンの衣服が乱れているところを、ミューザがこれまで見たことがない。

いや。

(あの時)

たった一度だけそれがあった。

一年ほど前のこんな春の、真夜中だった。ミューザは自分の部屋で不意に目を覚ました。

苦しいような声が聞こえたと思ったのだ。

「……セルバン？」

声は、隣の、セルバンの部屋から聞こえているようだった。半ば寝惚けていたミューザは、眠たい目を擦り擦り、それが紛れもなく苦痛に掠れる声だと気づいた瞬間、考えるより先に寝台を飛び降り、部屋から駆け出していた。

「セルバン！」

開け放った部屋の中、寝台で、セルバンが夜目にもわかるほどびっしょりと汗をかき、まるで土のような顔色で呻き声を洩らしてい

た。苦痛に耐えるように体は丸まり、毛布を掴む指先だけが、ぞつとするほど真っ白になっていた。

『セルバン、どうしたの、大丈夫？』

どうすることもできず、ミューザはただ、その体に触れた。まるで体温のない人間のように、汗に濡れたその体は冷たかった。

『セルバン、セルバン！』

名前を呼びながら、そうだ、教会に行かなくてはとミューザは思い至った。真夜中だったが、祭司を叩き起こして家に呼ばなくてはいけない。

『服を緩めて、汗を拭いて、呼吸が楽にできるように、舌を噛まないように』

焦燥しながら、ミューザは口に出して自分のすべきことを確認した。家を出るまえにやっておかなくてはならないこと。教会までは走ったって大分かかる。その間セルバンをひとりにしなくてはいけないのが怖ろしかった。

『……ザ……』

ミューザがセルバンの服に手をかけた時、やはり呻くようなセルバンの声が絞り出された。

『うん、あたし、いるよ！ ミューザはここにいるよ！』

必死に声をかけながら、ミューザはセルバンの上着の釦を外した。何だってセルバンは、寝る時にだってこんなにきっちり服を着ているんだろ。それを恨みながら、焦りで強張りそうになる指先を叱咤して、釦を外していった。

そして首から胸の半ばまで服をはだけた時、ミューザは思わず指の動きを止めていた。

『や……何……』

知らず、身が竦んだ。

セルバンの肩と言わず胸と言わず、まるで鉤裂きのような痕が、あちこちに走っていたのだ。ひとつやふたつではない、それも大きな傷痕。

『やだよ、セルバン、どうしたの、ねえ!』

傷は昨日今日についたものではない。もうずっと昔のものだと、見てすぐにわかったが、ミューザは体が震えた。

今のセルバンの苦しみようが、この傷のせいではないかと思えた。忌まわしい傷痕が怖ろしかったわけではなく、この傷がセルバンに与えた痛みや苦しみを思っ、ミューザは震えた。そしてどうしようもなく悲しくなった。

『嫌だ』

悲しくて悲しくて、気づいた時には、縋るようにセルバンの体にしがみついていた。

何もできない。それは知っている。自分には聖なる力がないから、治療の魔法が使えないから、セルバンを癒すことはできない。

それでもミューザはいてもたってもいられず、泣きじゃくりながらセルバンの体を抱き締めた。

『……ミューザ……?』

そのミューザの髪を、頼りなく撫でる指先があった。ミューザは、ハツとして顔を起こし、セルバンの方を見た。

セルバンは土気色の顔のまま、霞む視界を凝らし、ミューザのことうを見上げていた。

『すまない……起こしてしまったね……』

『バカッ! 謝るな!』

ミューザはセルバンの言葉を聞いて、一も二もなく怒鳴りつけていた。

『苦しいんでしょう、今、祭司さまを呼んでくるから! 待ってて!』

起き上がろうとするミューザの腕を、思いのほか強い力でセルバンが掴んで止めた。

『セルバン?』

『大丈夫……必要はないから』

『何言ってるんだよ、苦しいんでしょう、すぐに治療をしてもらわ

ないと!』

『平気だよ……こうしていれば』

セルバンは掴んだ腕を自分の方へ引き寄せ、横たわった胸にミューザを抱いた。ゆっくりと、ぎこちない動きで再び自分の髪を撫でる手に、ミューザは恥ずかしさも何も忘れて、ただ、泣きじゃくった。

『嘘、あたしには何もできないのに。セルバンを治すこともできないのに、平気なわけない!』

『……そんなことない。ミューザのおかげで、ほら、少し呼吸が楽になった』

セルバンに髪を撫でられ、宥められ、まるで立場が逆だとうしようにもなく悲しい気分になっていたミューザは、それでも彼の言うとおり、その呼吸が先刻よりは落ち着いてきたのを確認すると、ほんのわずかに安堵した。

『……苦しいのに、どうして助けを呼ばなかったの』

剥き出しの傷痕が浮かぶ肌に頬を擦りつけ、泣きながらミューザは訊ねた。

『具合が悪いわけじゃないんだ』

次第に落ち着いてきた声音で、セルバンが優しく言った。セルバンはいつだって優しい。

『でも』

『悪い夢を見ただけなんだよ。だからもう、大丈夫。ミューザが起こしてくれたから』

見上げると、セルバンは汗の浮かぶ顔で、やっぱり優しく笑っていた。

『悪い夢……』

『そう、ただの夢だよ。目を覚ませば、お終いだ』

『……馬鹿……』

安心して、ミューザは再びセルバンの胸に顔をうずめた。

セルバンは相変わらずミューザの髪を撫で続け、ミューザはその

心地よさに、少しまどろんできた。真夜中、ミューザだって眠りの半ばだったのだ。

撫でる手の動きの心地よさと、次第にゆっくり落ち着いてくるセルバンの呼吸、それから鼓動を聞いてうっとりとしながら、ミューザは間近にある鉤裂きの痕を見つめた。

『……この傷』

そっと、一番大きな傷痕に触れる。

『どうしたの？』

『……』

セルバンはすぐには答えなかった。もしかしたら訊ねてはいけなかったことだろうか。ミューザはどうしてか、少しだけ怖くなった。

『……昔にね』

だが少しの沈黙の後、セルバンが優しい口調で答えてくれた。

『とても大切なものを守った時に、できた傷だよ』

『大切なもの……』

『そう。何よりも、誰よりも大切だった宝物だ』

『どんなもの？』

顔を上げて訊ねたら、これには答えは返らなかった。ただいつもみたいに、優しい、穏やかな顔でセルバンは笑っただけだ。

ミューザはまるで心臓を直接掴まれたように、どうしようもない痛みを胸に感じていた。

（あたしにはわからない、大事なもの）

そう思うと、悲しかった。悲しかったのに、さっきみたいには泣けなかった。

『……痛くないの？ もう』

『痛くないよ。ずっと昔の傷だから』

『司祭さまに、治していただけばいいのに』

『いいんだ』

心配というよりも、悲しさが言わせたミューザの言葉を、セルバンはやんわりとした口調で拒んだ。

「傷が深すぎるからね。もう全部は治らない。それに
ミューザの髪を撫でながら、セルバンは続けた。」

「この傷はね、僕の誇りなんだよ。大切なものを守ることができた。その分他のものをたくさん失ったけれど、僕は、たったひとつ、それだけが守ればよかったから……」

話す半ばで、セルバンの声が不明瞭になっていった。髪を撫でる手も止まった。

見ると、目を閉じ、再び眠りの淵に落ちていったようだった。苦しんで、疲れたのだろう。眠る様子は落ち着いていて、ミューザはほっとした。

ほっとしながら、自分でも手の施しようがないくらいの悲しみに胸を支配されて、苦しくて、苦しくて、仕方がなかった。

(宝物って、何?)

訊ねたいのに、できなかった。きっとそれは、セルバンが眠ってしまったせいだけでなく。

その時から、ミューザは、今になるまで一度だってその『宝物』が何なのか、セルバンに訊ねることはできなかった。

今、食卓に突っ伏して眠るセルバンの肌にも、消えない傷痕が残っているだろう。セルバンがいつでもきっちりと服を着込むのは、傷痕を隠すため。

あの夜以来、ミューザは二度とその傷痕を見ることはなかった。

回想から現実に立ち返り、ミューザは食卓の上で小さく規則正しい寝息を立てるセルバンを見下ろした。かすかな溜息をつくとき、先刻まで彼が何かを書きつけていた紙の束へと手を伸ばした。何枚か取って、眺める。

「我が主神、恵深く、その憐れみ、とこしえに絶ゆることなし。その善、大いなるかな」

丁寧な文字で書かれた言葉を、ミューザは声に出して読んでみる。『聖教典』の一説だ。聖職に就くもの、またはそれを目指す者ならば誰もが右手に携えるという教えの本。ミューザも何度かセルバン

のものを讀んだので、始めのくだりだけは覚えている。

「『豊饒の大地、空の光、我が足許を照らす詞』」

呟きを、ミューザは途中で留めた。

「……あたしが詞を唱えたって、なんにもならないんだよな」

聖なる力を持つ人間が唱えれば、それは邪悪を滅ぼす力となり、人を佑ける力となる。だが、ミューザは聖なる力を持たなかったから、詞はただの言葉でしかない。

自分にだって、ほんの少しだけでもその聖なる力の兆しが見えれば、その力を育てるためとか、強引にでも神学校に居座ることはできたはず。だがそれすらも適わないほど、見事なまでに、ミューザには力を持つ人間としての資質がなかった。

（もしあたしに強い聖なる力があつたら、あんな傷なんて、すぐに治してあげられるのに）

もう痛くはない。セルバンはそう言った傷痕。

なのにあれを消したいと思うのは 自分の浅ましい心からだ。
ミューザにはわかってる。

（別に、それが悪いことだとは思わないけど）

紙を束の上に返すと、椅子を少し動かして、ミューザはセルバンのすぐ隣へと腰を下ろした。その寝顔を眺めて、少し笑う。

子供みたいだ、と思った。自分よりもずっと年上のひとなのに。子供みたいに、規則正しい呼吸を続ける体に、ミューザはそつと唇を寄せた。

ほんのわずかに逡巡した後、ミューザはセルバンの頬に接吻け、そうしてから慌てたように周りを見渡すと大きく息を吐き出した。

「……バツカみたい……」

彼女の呟きを聞く者は、彼女自身の他には誰もいなかった。

ハッと目を開けたセルバンは、それから、激しく狼狽した様子で

椅子から立ち上がった。勢い余って、その椅子が床にひっくり返って大きな音を立てる。

「しっ、試験問題の×切がっ！」

「ああ。さっきレスマイン先生がいらっしやって、全部持ってたよ」

セルバンの叫びを、洗濯籠を持って廊下を通りがかったミューザが聞き止め、ひょいと入口から顔を覗かせて言った。

「も、持っていったって、でもあれはまだ」

「あれで充分だって先生おっしゃってたよ、セルバンはいつまでも考えすぎてキリがないからってさ」

「……そうか……」

ふう、と息を吐き出し、セルバンは再び『椅子』に座り直そうとした。

「あつ、馬鹿、セルバン！」

ミューザが声をかけるのも遅く、セルバンは倒れたはずの椅子に腰かけようとして、結果自分も見事に床へひっくり返ってしまった。

「もーっ、何やってんだよ！ほんっと、トロいんだから……」

呆れ声で呟きながら、ミューザは廊下を戻っていく。

「い、痛ててて……ミューザ、僕の眼鏡は」

「机の上にあるだろ。起きてすぐ気づくようにわざわざ置いといたんだ」

「あれ？ 本当だ」

打ちつけた腰をさすりさすり、セルバンは机へ顔を近づけてから眼鏡があるのを確認し、それをつけ直した。

セルバンがそうして眼鏡をつけ、椅子を戻し、座り直してから思いついて立ち上がり、お茶を淹れたところでミューザが居間に戻ってきた。

「お茶を飲むかい？」

「ありがと、もうっよ」

洗濯物を干し終えて戻ってきたミューザは、タイミングよく入っ

たお茶に顔をほころばせ、椅子に腰を下ろした。

「すまないね、せっかく食事を作ってくれたのに、冷めてしまった」

「あつため直す？ まだ食べられるよ」

「今自分でやったよ。ミューザもまだなんだろう？」

「だってひとりで食べたって、つままないもん」

唇を尖らせるミューザに、セルバンは苦笑気味に笑う。

「ね、もう試験問題作りは終わったんだし、少しはゆっくりできるんでしょ？」

「いや……」

訊ねたミューザに、セルバンが申し訳なさそうな顔で首を横に振った。

「予定より遅れてるから、もうすぐに試験なんだ。試験が始まると人手が足りないから、毎日学校に行かなくてはならないと思う」

「何だよそれ、去年は、そんなことなかったのに！」

「今年は何だか受験者の数が多いんだ。お歳を召された先生が、せんだって数人辞められたこともあるし……」

色めき立って声を上げるミューザに、セルバンはますます申し訳なさそうな口調になって、そう説明する。

もちろんミューザには納得がいかない。

「多いつて言っただって、ドモスの神学校にそれほどたくさん生徒がいるわけないだろ」

「そうでもないんだよ、最近は隣の町からも人が来るようになって…… すまない、しばらくは食事は朝だけでいいよ」

「何だよ、それ……」

もう一度咳いて、ミューザは無然とお茶の入ったカップを見下ろし、黙り込んだ。

困った様子で、セルバンがそんな彼女を見遣る。

「……いつから始まるの、試験」

俯いたまま、ミューザは小さな声で訊ねた。

「来週の、始めからだよ」

「ならそれまでは少し時間があるよね？」

「明日から、もう準備に取りかからないといけないよ」

「……今日、これからは？」

「やっぱり試験問題が気になるから、レスマイン先生のところへ行つて来るよ」

顔を上げてキツとミューザがセルバンを睨むと、セルバンは、いつもと変わらぬ穏やかな、少し困ったような微笑を返す。

「ミューザ、君ももうじき十六になるんだ。こんなおじさんと一緒に散歩するより、だれか素敵な男の子と一緒にでかけなさい」

ミューザは深く傷ついた顔を決して見せまいと、セルバンをさらに睨みつける。

「セルバンはおじさんって歳じゃないだろ、まだ三十二だ」

「おじさんだよ、ミューザに較べればね。ああほら、ファムスを誘つたらどうだい？ 歳も近いし、話も合うんじゃないか？」

「ファムス？」

聞き覚えのない名前に、ミューザは眉を顰めた。

「誰？」

「ほら、お隣に越してきた」

「ああ」

ミューザは家に帰る前に聞いた、ルカの話思い出した。

「黒ずくめの、変な奴って噂の。やだよ、何だか妙なんだもん。家に閉じこもって、何やってんだか」

実際に見たことはない隣人。そんな人間を誘うよう言われたこと

に 相手が誰であろうと、セルバンの代わりに別の人間を誘えなんて言われたことに、ミューザは猛烈に腹を立てた。

「あたしと歳が近いっていうのに、学校にも行かないで、仕事もしてないなんて変。怪しい奴だと思わないの？ もしかして黒魔導士とか」

売られてもない喧嘩を買う口調で言ったミューザに、セルバンが大きく表情を曇らせた。

「滅多なことを言うんじゃないよミューザ、黒魔導士だなんて」
「だって」

「白の魔法だって、オルジア国王の許可を得ずに使うのは禁止されてる。だから許可を得るために学校で学んだり、町の司祭さまの弟子になったりするわけだろう。黒の魔導に及んでは許可が下りるはずもない。それじゃファムスが罪人ってことになるんだよ、失礼じゃないか」

ミューザは、拗ねたように唇を尖らせた。

「はい、セルバン先生の演説でした」

ミューザだって、本気でファムスが黒魔導士だなんて思ったわけじゃない。ただ、引き合いに出されたから、冗談じゃないという気分を表してしまっただけなのだ。

セルバンはまた困ったように笑って、丸眼鏡の真ん中を指でずり上げる仕種をした。

「ミューザ、『セルバン』じゃないだろう、『お父さんだよ』」

ミューザは最後までセルバンの言葉を聞ききらないうちに、机へ乱暴に両手をついて立ち上がった。

「お茶ご馳走さま。あたしひとりで散歩行ってくるから。試験の準備頑張っつてね、セルバン」

叩き付けるように言うと、ミューザは居間を出るため歩いていく。気をつけて行ってきなさい」

穏やかな声を掛けられると、ミューザは、きつとした顔でセルバンを振り返り そのままふいと外へ出て行った。

「……」

セルバンは微かな溜息をつくど、窓の外を見遣った。家から出たミューザが、乱暴な足取りで道を歩いていく姿が見えた。すっかり怒らせてしまったようだ。

セルバンは窓の外から目を戻し、眼鏡を外すと服の裾で拭いて、それを掛け直さずに机の上へ置いた。座った椅子に深々ともたれ、目を閉じて天井を仰ぐ。もう一度、今度は深い溜息が洩れた。

「……無理……なんだよ、ミューザ」
眩きを聞かせるべき相手は、この場所にはいなかった。

第二章『隣人』(1)

すっかり夜のとばりが降りていたが、ドモスの町で一番大きな屋敷のひとつの部屋からは、ランプの灯りが漏れていた。

屋敷にいる他の人々はすっかり寝静まっている。おかげでエリスバートは、思う存分勉強に集中することができた。

広い部屋の隅にしつらえた机に向かい、熱心に教科書のページを繰る。ぶつぶつと、小さく声に出し、確認するように単語を覚えた。

「よし、ここまで覚えた」

いちいち口に出してしまうのは、昔からの癖のようなもので、覚えたことが形になったことがはつきりわかって安心するから止められない。

壁にかけられた時計を見て、エリスバートは軽く息を吐くと、椅子の上で大きくのびをした。

(そろそろ眠らないと、朝起きられないかもしれない)

学校に遅刻なんて、無様なことをするわけにはいかなかった。エリスバートはこのドモスの領主の跡取り息子だ。町を纏める一族の人間として、人の手本にならなくてはいけないのだ。

それに、

(ミューザは、もう寝ただろうか)

何度か訊ねてみたが、『一日にどれだけ勉強をしているのか、何時まで勉強をしているのか』などという質問に、彼女が答えてくれることは一度もなかった。ただ、呆れたような顔で自分を見返して、「エリス、きみ、まさかあたしよりたくさん時間をかけて勉強すれば、その分賢くなるだなんて思っていないよね?」

と、いかにも軽蔑した口調で言うだけだ。

わざわざその口ぶりを思い出してしまい、エリスバートはひとりで腹を立てた。まったくあのミューザという少女は、人を怒らせることに関しては天才的だ。同年の子供で、エリスバートにあんな

口を利く人間は、他にいない。

領主の息子という立場の自分と対する時、級友も、先輩も、ずっと年配の教師ですら、どことなく線をひいているのをエリスバートもわかっていた。敬いとおそれ。それが自分という存在ではなく、その後ろにいる父親に向けられるものだというのも。

例外があるとするれば幼馴染みのメアリルくらいなもの、しかし彼女の存在もまた、最近やけにエリスバートを困らせていた。

『兄様、さつき、メアリルがまた来たよ』

学校が終わった後、街の図書館に寄ってから家に戻ると、顔を合わせた弟がそう告げた。

勉強に熱中して帰りが遅くなったことに、エリスバートは口には出さず、そつと安堵した。

メアリルが嫌いなわけじゃない。幼馴染みで、いわば兄妹のように育ったから、我儘を言われても腹が立ったりすることはない。ただあまりに開け広げな好意や独占欲を向けられるのが、困る。

エリスバートがそれに応えることはできなかった。だから、困る。『卒業したらあたし、テイメントに行くのよ』

メアリルのことを考えて、どうしたものか、と困惑していたエリスバートは、何のはずみか今日の昼間にミューザが言った言葉を思い出した。

エリスバートは、さらに眉を顰めてしまう。

(冗談にもほどがある)

ミューザがテイメントに行くだなんて言葉を、エリスバートが信じられるはずがなかった。

ミューザは学校始まって以来の才媛とまで言われる生徒だ。こんな田舎町の学校にとどまっていることは、罪だとエリスバートには思える。その彼女が、上の学校にも進まず、花嫁修業に行くなんてこと、信じられないし許せることではない。

なにしろ、幼い頃から常に首席を保って、神童だ、天才だと言われてきた自分を、ミューザは簡単に負かしたのだ。彼女と同じ学校

に入ってから、エリスバートは延々次席という屈辱に甘んじ続けている。

（このぼくに一度も負けないまま、結婚なんてしていいはずがない）
エリスバートは机の上に置いたペンを、再び手に取り握りしめた。
（ミューザに負けずに勉強するんだ）

そう、自分に言い聞かせる。

卒業までに、必ずミューザから首席の座を奪い取らなくてはならない。

なぜなら

（……負けるもんか）

決意を新たにしたエリスバートの部屋から、その夜、長い間灯りは漏れ続けていた。

相変わらずいい天気が続いていた。

だが、暖かな風に吹かれながら、窓辺の席に頬杖をついていたミューザの表情は、まったくもって完膚無きまでに不機嫌そのものだった。

ミューザの側の席にはマナが座っていたが、ミューザの低気圧を察してか、とくに言葉をかけてくる様子はない。放っておいてくれるマナの優しさが、今のミューザにはありがたかった。

今口を開いたら、どうあつたつて漏れるのは父親への悪口雑言ばかりだろう。

（セルバンのやつ。あれじゃ本当に、いつか倒れるんだから！）

ミューザが朝起きると、セルバンの姿は家のどこにもなかった。夜のうちにミューザが準備しておいた朝食にも、夕食にも手がつけられた様子はない。せめて、と思って作った弁当だけなくなっていたことに、ミューザはやっと少しだけ安堵する。

安堵してしまったことが、やけに腹立たしい。

ここ数日、ずっとそんな調子だ。ミュージザが学校から帰ってきて、夜までずっと待っていて、セルバンは家に帰ってこない。待ちくたびれて居間のテーブルに突っ伏して眠ってしまったミュージザを寝室に運び、おそらくその後自分の仕事をしてからやっと眠って、そしてミュージザが目覚ます前に家を出て行ってしまふのだ。

いくら試験の時期で忙しいとはいえ、こんな状態は異常だ。去年だって、この時期はやっぱり忙しかったけれど、夕食くらいは一緒に取れたし、朝の挨拶だってきちんとしてきていたはずなのに。

「……いつそ、倒れちゃえばいいんだ」

そんな本音が、思わずミュージザの口を衝いて出た。

そうすれば、ミュージザは無理矢理にだってセルバンを家に連れ戻して、誰が何と言ったって、最低三日はベッドに寝かしつける。縛り付けたっていい。

セルバンが倒れる、という想像は、それだけでミュージザの心臓を凍らせるようなものだったけれど、それでも取り返しがつかないほど体を壊してしまうよりはよっぽどマシだ。

「何だよミュージザ、窓の外なんて睨みつけて」

怪訝そうな声を聞いて、ミュージザはそのまま、窓に向けていた目を閉じてしまいたくなった。

「ずいぶん眠そうだな」

「きみはずいぶん暇そうね、エリス」

面倒だと思いつつも、ミュージザは律儀に応えてしまう。エリスバートと同じ学校に入って以来、彼が自分に突っかかってくるのは日常のことだったし、それに返事をするのもいわば習慣のようなものだ。

「暇なもんか、授業が潰れてしまったんだ、今から図書室に行つて自習しようと思ってたんだよ」

頬杖をついたまま、ちらりと、ミュージザはエリスバートの方へ視線だけ向けた。

本来なら歴史の授業のあるこの時間、担当の教師が急な用事で休

みになって、ミューザたちのクラスは自習を指示された。ミューザはどうしても勉強する気分になんてなれず、こつこつと、教師に咎められないのを幸いと心を余所に馳せていたのだが。

「そ。なら早く行ったら、いちいち人の方に寄ってこないで」

ミューザの冷たい口調に、エリスバートがむっとしたような表情を作る。

「同じ教室の中に、そんないかにも疲れてます、眠たいですって顔のやつがいて、落ち着いて勉強ができるもんか。目障りなんだ、さつさと医務室にでも行って休んで来いよ」

「目障りって、エリスきみ、図書室に行くんでしょ。教室で誰がどんな顔してようが関係ないじゃないか」

「関係あるさ、もうじき試験だったのに、このぼくのライバルがそんな不甲斐ない様子じゃ張り合いがない！」

「……」

ミューザは眠気に負けて閉じかけた瞼をどうにか開いて、エリスバートのことをまた見上げた。

「いいわね、きみは、平和そうで」

つい溜息が出てきた。自分の試験なんて、今のミューザにはどうでもよかったのに。

呆れたふうなミューザの態度に、エリスバートがムツとした顔になった。

「余裕綽々だな、ミューザ。いいのかそんなだらしないことで、今のきみになら、ぼくだって簡単に勝ててしまっただせ」

「だから何度も言ってるでしょ、試験の結果になんて興味ないって」
さらにムツとした顔で、エリスバートが手にしていた教科書をミューザの机の上に叩きつけた。

さすがに面喰らって、ミューザはちよつと目が覚める。

「なによ」

「今にみてる」

「だから、なによ」

大まじめな顔で自分を睨みつけてくるエリスバートに、ミューザは首を捻った。

エリスバートは怒ったような、真剣な顔で、ミューザに指をつきつけた。

「今にみてる、試験できみのことを負かして、そうしたら」
「語気荒く言ったエリスバートの言葉が、途中で費える。」

わけがわからなくて、ミューザはさらに首を傾げた。

「そうしたら？」

「い、言うことを、きいてもらうからな！」

エリスバートはなぜかますます怒ったように声を張り上げ、赤くなった顔でそう怒鳴ると、きびすを返して教室から去って行った。

「なあにあれ、変な奴……」

前から変な奴だったけど……と呟くミューザの側で、一部始終を見ていたマナが、どことなく気の毒そうな顔でエリスバートの後ろ姿を見送った。

「……ミューザ」

それから、マナが控えめな調子でミューザを呼ぶ。すっかり目が覚めてしまったミューザは、心配げな顔を自分に向けている友人の方を振り向いた。

「うん？」

「バーティの言うとおりだね。ミューザ、医務室に行って休んだ方がいいと思うの。あなた、朝からずっと顔色がよくないもの」

マナの口ぶりは、まるで彼女と同様に、あのエリスバートが自分を心配して『休め』と言ったというように聞こえて、ミューザはちよっとおかしかった。

(マナは優しいから、何でもいい方を取るんだ)

「平気だよ、ちよっと眠たいだけ」

「あまり眠れていないの？」

セルバンのことをマナには話していない。余計な心配をかけるだけだと、ミューザにもわかっていた。ミューザがセルバンのことで

心を痛めていることに、きつとこの優しい友達も同じように心を痛めてしまう。

「本当に、ちょっとだけだよ。今日はちゃんと眠ろうと思う」

微笑んで答えたミューザに、マナは少しだけ悲しそうに微笑み返して頷いた。

きつとミューザがついた嘘はわかってしまったらるうに、マナはそれ以上何も言わずにいてくれた。

「ちょっとだけ、今眠ろうかな」

友達に心配をかけ続けるのが申し訳なくて、ミューザはそう言つと、机の上に頭を乗せた。マナがほつと息を吐く気配が伝わる。

「そうして。次の授業が始まる頃に起こすわ」

「うん、お願い。でも、少しだけ話していて？ マナの声を聞きながら眠りたいわ」

マナの声は、まるで鈴の鳴るようで、聞いていると心地よい。ミューザは母親の子守歌を知らなかったが、それがあればきつとマナのようなものだったと思う。

「そうね……ミューザ、今日も一緒に帰れる？」

「もちろん。どうして？」

少しずつまどろみ始めながら、ミューザは眠たい口調で相槌を打った。

「母様が、ひとりで帰るのはよくないって。最近噂があるのよ、とても悪い噂……」

「悪い噂？」

おうむ返しになるミューザの言葉に、マナが頷く気配。

「黒の魔導士が、町にいるんだって。本当かどうかはわからないけど、噂が出るだけで不吉だから、ひとりで帰っちゃいけないって。

ミューザ、できれば一緒にうちまで来て？ それで、強い人におうちまで送らせるわ」

「大丈夫よ、そんな……魔導士なんて、ただの噂……」

答えながら、しばらくの睡眠不足がたたってか、ミューザは急速

に眠りに落ちていった。

夢の世界に沈み込む前、マナの言葉が頭の中で繰り返される。

『黒の魔導士が、町にいるんだって』

『とても悪い噂』

その言葉たちが、ミューザの心をそつと撫でた。とても嫌な感触だった。

(何だろう)

ラルの母親に話を聞いた時よりも、もっと不吉な感じ。

(悪いものが、近づいてくる)

どうしてか、そんなことをはつきりと思った。

だがそれは眠りの中に夢と一緒に取り込まれ、溶け込み、そのままミューザが思い出すことはなかった。

空いた授業の時間で少し眠り、マナに起こされた後、ミューザは軽い頭痛に悩まされた。おそらく中途半端に眠ってしまったのがいけなかったのだろう。

それでもマナに心配を掛けまいと、ミューザは努めて元気に放課後を迎え、帰りは彼女が提案した通り一緒にその家へと向かった。

マナとその両親は、ミューザのことを案じて護衛の人間を付けてくれようとしたが、大袈裟だと笑ってミューザは断った。

「こんな町中で、そんな怪しい奴に会う方が難しいよ」

ラルの母親は、ミューザの隣に引越してきた男が怪しい、と言っていた。だがマナとその両親たちは、そのことは知らないらしい。ただ、使用人の噂話で、『黒ずくめの男を町で見た』と聞いたただけだ。

(ラルのおばさんの時と、話が違おうわ)

だからミューザは大して気にしなかった。ラルの母親は、その怪しい男は町には出てこず、だから怪しいと言った。マナたちが言う

怪しい男は、町中に出ると言う。街に出てこないのならば遭遇しようがないし、市街地に現れるのだったらその場で助けを呼べば住む話だ。

だいたい、この平和な町で、黒魔導士だ怪しい男だと言われても、ミューザにはまるで現実味がない。大方、たまたま黒い服を着た旅人を目に留めた町の人間が、大袈裟にことを話し、それがさまざまな尾ひれをつけて伝わった結果なのだろう。本当に平和な町だ、そう思いながら、ミューザは明るくマナとその家族に別れを告げた。

マナの家は、町の中心部近くにある。商店を開いているだけあって、にぎやかな場所にあつた。ついでに店の建ち並ぶ通りで買い物も済ませ、ミューザは自分の家へと戻つた。もちろん町中のこの時間から、黒ずくめの怪しい男なんて目にしなかつたし、市街地を離れて自然の多い道に入つても、待ちかまえていたのはいつもと同じ穏やかで美しい風景だけだつた。

家に戻り、誰もいないことをたしかめてから、ミューザは大きく溜息をついた。

やっぱり、と思う。やっぱりセルバンはまだ帰っていない。神学校の試験とやらがいつまで続くのかは知らなかつたが、こう連日遅くなるのはどう考えてもおかしい。

わざとだ。そう考えるしかない。

(せっかくパイを焼こうと思つて材料を買つてきたのに)

口惜しい気分と、悲しい気分が緋い交ぜになつて、ミューザは何だか泣いてしまいたくなつた。

セルバンの好きな、甘いフルーツのパイ。大人の男の人なのに、セルバンは甘いものが好きだ。ミューザの作るケーキやパイを、いつも嬉しそうに食べてくれた。

その笑顔が見たいと、心の底から思うのに。

きつと試験で満点を取るよりも、今の自分には難しいことだとミューザは思った。

セルバンが食べてくれないパイを、自分のためだけに焼く気は起

きなかつたし、大人しく勉強をする気分にもなれない。このまま家
にいては気が塞いでしまうが、マナとは別れたばかりだし、気晴ら
しに買い物、なんてことも面倒でしかない。

セルバンのいない空白の時間をどうするか、ミューザはぼんやり
と居間のテーブルの前で考えあぐねる。

(そうだ)

ふと思いついたのは、例の噂話。噂そのものではなく、『隣に引
つ越してきたファミスという青年』のこと。

(引つ越してきたつてのに、挨拶もしてないわ)

今さらながらにそんなことに思い至った。セルバンはその家に出
向いて挨拶をしてきたらしいが、ミューザはそのファミスとやらの
姿を見たこともない。

男、しかも自分とそう変わらない年頃のひとり暮らしなら、さぞ
かし食料 量よりも質 に困窮しているだろうと思い、ミュー
ザは買い込んで来た荷物を開いた。

(どんな奴なんだろ)

少しの好奇心と共に、想像力を働かせながらミューザはパイ作り
を始める。自分ひとりのためにごちそうを作るのはつまらなかつた
が、食べてくれる人がいるのなら少しは違う。

たとえその相手が、顔も知らない存在であっても。

誰よりも愛していると思える人間ではなくても。

寂しくて、寂しくて、何かしていなくては、おかしくなりそうだ
った。

(考えるな)

セルバンの不在に気持ちを遣らないようにしながら、ミューザは
いつもよりも熱心にパイ作りに励んだ。家事は得意だ。学問以外に
関してはからっきしのセルバンに代わり、幼い頃から料理も掃除も
何もかも、この家のことはミューザがやってきた。料理に関しては
ちよっと自信がある。

どうせなら、美味しいものを食べてもらいたいと、いつもいつも

思っていたから研究には余念がなかった。

ミューザは偉いのねとマナなどは言うが、義務や使命感でやっているわけではない。ただ、ミューザがそうしたいと思うから。美味しいと言ってもらえるのが、本当に嬉しかったから。

(……と、いけないいけない)

つい父親のことに気持ち向きそうになって、ミューザは慌てて火加減に意識を集中させた。

手早くパイを作り上げ、まだ温かいうちに籠へ入れてしまうと、ミューザはそれを持って家を出た。書き置きを残していこうかと思つたが、無駄になるだろうとやめた。どうせ、セルバンは真夜中にならなければ帰ってこない。

陽の沈みかけた路を、ミューザは南へと辿つていった。

家より南に入るのは、ずいぶんと久し振りだ。マナと来て、それから二度と来るまいと誓つた。あれから数年経つて、その時よりも少しはおとなになったというのに、ミューザはやはり得体の知れない緊張感を味わつた。昔、子供だから怖かつたわけじゃない。

(暗い)

森へ入ると、夕日すら見えなくなる。覆い繁つた木の葉の隙間から、わずかに赤い光が漏れるばかりだった。気をつけて歩かないと、道の悪さに足を取られてしまいそうだった。

来るべきではなかっただろうか、と微かな後悔を浮かべながら、今さら引き返す気にもならず、ミューザは歩き続けてようやく一軒の家の前に立つた。

その家の周囲には、背の高い鬱陶しい草が、好き放題に伸びていた。人が本当に住んでいるのか怪しいものだ、一目見ただけでは思えるほど。大きさはミューザたちの住む家と同じくらいか。家の裏手には巨木が十の単位で生えていて、大振りの枝が家を半分覆うように延びていた。気味の悪い場所だ。建物自体も、現在の住居人が来るまで何年も放っておかれたから、すでに廃屋寸前といったような雰囲気醸している。

ドアを叩いて壊れはしないか心配になりながら、ミューザはとりあえずその小屋の入口をノックした。

返事はない。

(留守?)

それとも聞こえていないのかも知れない。ミューザは少しの間を置いて、もう一度ドアを叩く。ドアの向こうで物音がした。何だいるんじゃないと、ミューザはドアが開くのを待った。

「誰だ」

だが目の前のドアが開くことはなく、ただひどく不機嫌そうな低い声が、ドア越しに届く。

「先に言っておくが、俺はおまえに用はないぞ」

物言いに、かちんと来た。

(何だよ、顔も見せずに)

門前払い、とはこのことか。ミューザはもともとよくはなかった機嫌を、さらに損ねてしまった。

男の声を、聞こえないふりでもう一度ドアを叩く。あくまで上品に。

「誰だと聞いている」

もう一度。

軽い舌打ちの音が聞こえて、中からドアが開いた。

その、刹那。

(え?)

ざわりと、ミューザは背中中の産毛が逆立つような、体の芯から震えが沸き立つような、奇妙な感覚を瞬時に覚えた。

(何……)

それは悪寒にとてもよく似ていたかも知れない。一瞬、目を開けているのに何かに目隠しされたような錯覚が生まれる。

自分が立っているのか座っているのか、それすらもわからなくなつて、ミューザは必死に足許を踏みしめた。一度大きく頭を振ると、やっと視界が開ける。必死に、自分の前にあるものへ目を凝らす。

家の中から姿を見せ、今ミューザの前に立っているのは、長身に、黒色のおそらく寝間着引つ掛けた不機嫌そうな青年だった。

そして、その容貌は。

おそらく百人が見て、九十九人が言葉を失うだろう美形だ。すらりとした長身に、細面の顔。腰まで届こうかという、少し波打った絹糸の如き漆黒の髪。切れ長の眼も、綺麗に弧を描く眉も、艶やかな唇も、通った鼻梁も、まるで人形造りの名手がすべての才能を注ぎ切ったような秀麗さを宿していた。非の打ち所もなく整い切った容貌。

そう、すべてにおいて、彼は完璧だった。完璧すぎて、作り物めいた感が否めないほど。

これでもう少し愛想でもあれば、本当に人形と勘違いしてしまいそうだ。惜しむらくは、というべきか幸いなことにと評するべきか、彼には愛想というものが、どこをどう探しても見当らなかった。それが却って彼を、辛うじて人間らしく見せている。

家の間に生えた巨木の影になった暗い玄関先で、男の漆黒の瞳が底光るような、奇妙な感じがしていた。長い髪がその顔の半ばを隠していた。それはぞっとするほどの美しさを生み出す佇まいだったが、ミューザはただ「鬱陶しい男だな」とだけ思った。つまり彼を見ても声を失わない、百人中のたったひとりがミューザだったのだ。

(何だったんだろう、今の……)

ようやく冷静に隣人の姿を観察することに成功したものの、ミューザは先刻覚えた震えの正体がわからず、ひとり首を捻った。

「どちら様？」

自分を見るなり黙り込んだ少女に、男は冷え切った眼差しと声音で訪ねた。咄嗟に不快感を覚えるような、上から人を見下すような、冷たすぎる口調だった。

ミューザはすっと目を細め、隣人、ファムスの質問を黙殺した。

とても初対面の人間に向けるとは思えないその態度が、先刻の不可

解な感觸を忘れてさせてくれた。

「おい、聞こえていないのか？ 誰だと訊いている」

じつと、藍色の双眸で自分を見上げる少女に、ファムスは苛立った様子を隠さずもう一度訊ねた。

「覚えてないの？」

にこりとませずに、ミューザは今度は答える。男はばかげて背が高く、その顔を見上げるには、ぐっと顎を持ち上げなくてはならなかった。

「残念ながら」

ファムスは投げ遣りな口調で言った。

「奇遇ね、あたしもよ」

「……」

無礼な相手に、自分だけ礼儀を持って接することはない。ミューザは遠慮なく不機嫌を男に向けることにして、挑戦的、あるいは好戦的な瞳でその顔を見上げた。

「あたし、ミューザ。よろしく」

「ファムスだ。別によろしくされる覚えもないが、用ならさっさと済ませてくれ」

「『ファムス』か。ずいぶん妙な名ね」

セルバンにその名を聞いた時から思っていた。『ファムス』なんて、人の名前につけるべき単語じゃない。

ミューザの正直な感想を聞いて、ファムスはふんといかにも嫌味っぽく鼻を鳴らした。

「おまえの名もずいぶんと俗っぽいと思うけどな」

瞬時に、ミューザは厳しい目でファムスを睨みつけた。

「人の名前にケチつけないでよ、気に入ってるんだから」

俗っぽい、と言われる理由がミューザ自身にもわからなくはない。おそらくこの国に、同じ名前の少女は何人もいることだろう。この国を作り上げたというセイマー神の娘が、名をミューゼルといい、一般に美を司る女神としてまつられていた。

だが、この名前をつけてくれたのがセルバンだったから、ミューザは自分の名が好きだった。

「おまえが先に人の名前をくさしたんだろ」

「そうだったっけ、ごめんなさい。あんまりあなたの態度が不躰なものだから、あたしも移っちゃったみたいだわ」

ミューザの舌鋒には容赦がない。エリスバートやメアリのルの態度が腹に据えかねることはあったが、ファムスの物言いや眼差しは、それとまるで質の違うものに思えた。傲岸不遜、という言葉では追いつかない。エリスバートも領主の跡取りだったから、身分的にはミューザの方が劣っていたが、少なくとも彼は対等にミューザとやりあおうとしていた。

だが、ファムスは、最初からこちらの存在も何もかも見下しているような、嫌な感触があった。

(違う)

見下している、というのならば、まだ腹も立たなかったかもしれないと、ミューザは思い直す。

ファムスはまるでこちらに興味がない。

人を見るのも、地に落ちていいる石ころを見るのも、同じことなのだ。おそらく、彼にとって。

俄然、ミューザはこのまま引き下がれない気分になった。

「ねえ、こんな玄関先で突っ立たせて、ご近所さんにお茶くらいご馳走して下さらないの、気が利かないな」

言いながら、ミューザはひょいと家の中を覗き込んだ。

瞬間、目の前に何かが降りてくる。

「おもしろいものなんて何もないぞ。噂を確かめに来たのなら無駄足ってもんだ。帰れ」

「別にあなたが黒魔導士だろうが何だろうが関係ないよ。暇だから遊びに来たの」

ファムスは怪訝な顔になって、ミューザの視界を塞いだ右手を外した。

「呆れた奴だな、初対面の人間に対して遊びに来たもないだろう。口実ならもつと上手く作れよ」

「べつつに。言ってるでしょ、あたしはあなたの素性になんて興味はないの。あつたら他の人と同じように、あなたがドモスにやって来たその日に押し掛けてるわ」

ミューザの台詞を聞くと、ファムスは思い切り顔をしかめた。

「この町の人間は、全員が余所者の家を訪ねる風習でも持つてるのか？ 引越してきた日からここ二週間、連日誰かしらが入れ代わり立ち変わりやってきて、その度に追い返すのに苦労した」

だからファムスの態度がうんざりしたものになっているのだろうと、ミューザは察した。それ以前に、そもそもがそういう性格なのかも知れないが。

「珍しいんだよ、余所の町の人が住み着いたのなんて十年振りなんだった。そうやって追い返すから、黒魔導士だのって噂が立つんだ。怪しい奴って言われてるわよ？」

「結構だね。それで、怪しんだ奴らがここを避けて通ってくれれば万々歳だ」

そう言つて、ファムスはドアを閉めようとする。ミューザはさすがにドアの端を掴んだ。

「何をやっているんだ」

「これ、パイを焼いてきたの。お暇だったらお茶でもいいかが？」

につこり微笑むミューザを、ファムスが呆れた顔で見返す。

「おまえ、どうして今の会話の流れでそんな口がきけるんだ。いいか、おれはこの町の人間と馴れ合う気なんてないし、わけのわからない女と一緒にお茶なんてまっぴら御免だ。わかったらさっさと帰れ、仕事の邪魔だ」

「……」

言葉どおり、邪険な口調で言つて、ご丁寧にファムスが犬猫でも追い払うような仕種を作る。

ミューザは瞬時に、心臓が妙な具合に締めつけられて、息が苦し

くなくなった。

『ごめんミューザ、仕事が忙しいんだ』

手を振るファムスの姿が、セルバンのものに重なった。

「……何よ」

「ああ？」

「何よ、どいつもこいつもっ！」

「何だ、いきなり」

不審そうなファムスの声音、呆れた顔が、ミューザの神経を逆撫でする。

「どうしてあたしのこと邪魔にするのよ、あんたなんて嫌いだ！

セルバンなんてもっと嫌い、大嫌い、馬鹿ッ！」

突然激昂しだした目の前の少女に、ファムスがぎよっと目を瞠り、思わずドアから手を離れた。結果、ドアは思い切り外に開け放たれ、勢い余ってミューザはよろけてしまう。

「おいっ」

咄嗟にファムスが手を伸ばし、ミューザは地面に転がる醜態を避けられた。

が、ファムスに抱きかかえられるようになって、ミューザは反射的に勢いよくその手を叩いた。

「痛いじゃないか、助けてやったんだろぅがこっちは！」

さすがに怒った風情でファムスが声を荒らげる。

「そもそもあんたがドアを離すのが悪いんでしよう！」

負けじと、ミューザも声を張り上げた。

（馬鹿、違う、ミューザ）

ファムスは悪くない。それはわかっている。でも。

八つ当たりだ、とわかっていたのに、ミューザは自分でもそれが止められなかった。

ずっとずっと、辛かったのだ。

帰ってこないセルバン。声を聞くことも、顔を合わせることもすらできない。たったふたりしかない家族なのに 大切な人なのに。

拒まれることがどんなに辛いか、たったひとりだと思っことがどれほど悲しいか、それをなぜわかってくれないのだろう。

辛くて、悲しくて、そして怖い。

怖くて、怖くて、本当はいつでも泣き出しそうだった。

「……………」

ミューザの言葉に、何か言い返してやろうと口を開いたファムスは、その瞳に涙が沸き上がってくるのに気づくと黙り込んだ。

堪えきれずにミューザは涙をこぼし、それをファムスに見られるのが口惜しくて、手の甲で頬を拭いながら顔を逸らした。

ファムスが困惑してミューザを見下ろす。

「おい、一体何だっというんだ。いきなり泣くなよ、わけのわからない女だな……………」

「何よそれ、もうちょっと気の利いた言い様があるでしょ」

バツと顔を上げて、ミューザはファムスのことを力一杯睨みつけた。が、相手が本気で困ってしまった様子なのに気づく。

泣いている女の子を怒鳴れないファムスの様子に、急にミューザの肩から力が抜けた。

「……………ごめん」

再び俯いたミューザに、ファムスの綺麗な眉が微かに寄る。

「ごめんなさい。まるっきりの八つ当りだ」

自分の身体を支えてくれていたファムスの手をそっと押さえて彼から離れ、ミューザは今度は先刻よりも心持ち目許を和らげ、落ちて着いた瞳でファムスを見てから、小さく頭を下げた。

「ちよつと今、頭がごちゃごちゃになってたんだ。そうね、挨拶しに来たのに、どうしてケンカなんて売ってるのかしらあたし」

勝手に挨拶に来て、勝手に不機嫌になられては、ファムスだってたまらないだろう。

ミューザは急に自分のやっていることが恥ずかしくなった。

「当たっちゃって、悪かった。ごめんなさい」

まだ止まらない涙を拭い、恥じ入って苦笑するミューザの様子を

しばらく無言で眺めてから、ファムスは口を閉ざしたまま踵を返した。

「あの」

「入れ」

え、とミューザが問い返したとき、ファムスはすでに背中を向けて歩き出していた。

戸惑いつつも、ファムスがさっさと家の入ってしまったものだから、ミューザは成り行きのようにその後が続くことにした。

「……お邪魔します……」

もぞもぞと呟いて、ミューザはファムスの家へと足を踏み入れる。ごく狭い入り口を抜けると、木でできた扉がある。ファムスがそれを開け放つと、薄暗い、狭い部屋が現れる。

見ると、部屋の窓には厚く暗い色のカーテンが掛かっている。部屋中央に据えられた食卓の上のランプは消されたままだ。

ミューザはファムスの後に続いて、その部屋へも足を踏み入れた。何も無い空間だった。あるものといえば、食卓に、二脚の椅子。

それから食卓の上に何かの飲み物の入ったカップと、皿の上に齧りかけて放棄されたパン。からからに干涸びている。あとは火が消えたままのランプ。

窓は、カーテンのかかったひとつだけだった。入ってきたドアの向かい側にはもうひとつドアがあって、他の部屋と繋がっているらしい。壁の片側、少し壁が奥まったところに、調理場と水場が設置されている。

「……ずいぶんと殺風景な部屋ね」

ミューザはそんな感想を洩らした。木の板を打ちつけただけの簡素な壁に簡素な床。ミューザの家と同じような造りだが、雰囲気はそれよりもはるかに荒んでいる。まるで人が住んでいないような場所だ。見ると、床には足跡がつくほどわずたく埃が積もっていた。

ミューザの家も、広さで言えばこのファムスの家と大差ない。セルバンがそれほど高級取りではなかったので、町のお偉いさん方の

ように立派な館に住むことはできなかった。それでも、ミューザやセルバンの心尽くしで、暖かい、明るい住まいになっていた。窓辺には花が飾られ、壁には絵が飾られ、床や家具はいつでもぴかぴかに磨かれて。

しかし、このファムスの家は。

「どうせ仮の宿だ、掃除する気も起きん」

ミューザの感想に対して短くそう言い置くと、ファムスは一度部屋を出て行った。

ミューザが所在なく壁の染みを眺めていると、すぐに手にカップをふたつ持ったファムスが戻ってきた。乱暴に食卓の上にそれを置く。

「このおれがわざわざ淹れてやったんだ。まさか要らないはずはないよな」

「……世の中には『どうぞ召し上がれ』っていう言葉があるんだけど、知ってた？」

ミューザが呆れて言うと、ファムスはふん、とカー杯鼻で嗤った。「愚問だな。真意に反した行動を取った場合におけるせめてもの好意的な表現だ。ありがたがっておとなしく飲むのが礼儀ってやつだろう。ついでに言えば、椅子つてもものは座るために存在するんだが、そこにあるのはおれの勘違いでなきゃ椅子だぞ」

ミューザはますます呆れ果て、今度は言葉もなかった。

どうしてこいつは、素直に『椅子にかけて下さい』という単純な言葉が口にできないのだろう。

言いたいことは山ほどあったが、面倒になって、ミューザは手にしていたパイ入りの籠をテーブルに乗せると、おとなしく椅子に座ることにした。

しかし数秒後には部屋の暗さに辟易して、つい口が出てしまう。

「カーテンくらい開けたら？ 暗くて、陰気臭いじゃないの」

「ほんのちよつとだけ頭を使ってみる。普通の人間は誰だって暗い場所を陰気臭いと思うんだ。思ってたなお開けないということは、そ

ここに何かしらの事情が存在しているってことだろ」

ファミスはにこりともせずそんなことを淀みなく言つてのけ、ミューザはふてくされた顔で食卓に行儀悪く頼杖をついた。顔を斜めにしてファミスのことを睨めつける。

「そつちからケンカ売るっていうなら遠慮なく買っけど。あたし今、とつても好戦的な気分だから」

「心外だな。事実の認識を促しただけなのに」

ファミスは椅子の背もたれに寄り掛かり、カップを口許に運んだ。「礼儀が建て前程度にでも存在してるなら、あたしだってそれ相應の態度は取らせていただくわよ」

ファミスに倣つて、ミューザもカップに口をつける。ミューザがちよつと驚いて目を瞪るくらい、匂いのいいハーブティだった。

「怒つたり殊勝ぶつたりまた怒つたり、忙しい奴だな」

ぼそりと呟くファミスの声が耳に届いて、ミューザは「あ」、と心中で呟いた。

(ひょつとして……)

もしかすると、とてもそうとは思えない態度ではあるが、自分を慰めてくれたり、していたのだろうか。

たしか自分は、つい先刻まで泣いていたはずだ。それが、そんな気分はいつのまにやら失せている。

それは、ファミスのおかげではあるのだろうか

「もう少し上手なやり方はあると思うんだけどなあ」

ついそう洩らしたミューザを、ファミスはじろつと睨んだ。

「下らないことを言っている暇があるなら、さっさとカップの中身を空にしろ」

不思議なもので、一旦慰めてくれるとわかつたら、ミューザのファミスに対する印象はがらりと引っ繰り返ってしまった。

何だ、照れてるんじゃないのとひつそり笑う。

そのミューザの表情が気に喰わなかつたのか、ファミス是不機嫌に輪をかけた顔でごくごくとハーブティを飲み込んだ。

「ね、パイを食べない？ 焼きたての方が美味しいよ」

ミューザがそう勧めると、ファムスがにべもなく首を横に振った。「結構だ。ものを食べる予定がない」

「そう、じゃあ、置いておくから食べる予定になったら食べてね」
妙な言い回しだ、と思いつつ、ミューザは冷たい口調にもう頓着せず答えた。ファムスの喋り方は、こちらに悪意を向けているわけなく、ただただひとえに無礼な性格なのだろうとミューザは理解してきた。そこが問題だ、という気もするが。

「ファムスは、ここにひとりで住んでるの？」

「おれの他に誰か別の人間でも見えるのか？」

世間話のつもりで訊ねた言葉に、返ってくるのは相変わらず木を鼻で括ったような言い種だった。

「見えないから訊いたんでしょ。ね、さっき仕事って言ったよね。

何の仕事をしてるの？」

「答える必要がない」

投げ遣りにファムスが答える。それが答えになっていければの話だが。

「おまえ、さっきおれの素性には興味がないと言ってなかったか？
面倒そうに言ったファムスを、ミューザはにっこりと笑顔で見返した。

「そうだったっけ。あたし、生憎物覚えが悪いの。ねえ、カーテン
開けられない事情って何？」

「訊いてどうするんだ」

「訊いてみないとわかんないわよ、そんなの」

ファムスが大仰に溜息をついた。

話しながら、本当は、ミューザにも不思議だった。

ファムスが質問を快く思っていないことは、はっきりと伝わっている。答えたくないことを訪ねられる面倒さは、エリスバートのことでミューザも知っていた。

なのに、ミューザは質問を止めることができない。

(変なの あたし、こんな嫌なやつのこと、どうして知りたいだなんて思っただろう)

それはまるで、物語の続きを欲する時の気分とよく似ていた。

吸い込まれるように思う。ファムスのことを知りたい。どんな人間なのか。どんな存在なのか。

(変なの……)

内心で首を傾げながら、ミューザはさらに言葉を続ける。

「さっき仮の宿って言ったわよね。またどこかに行っちゃうの？」

どのくらいドモスにいるの？ 前はどこにいたの？」

「べらべらべらべらよくしゃべる女だな」

「探求心が豊かだと言ってくれ」

「成程物は言い様だな。探求心じゃなくて野次馬根性の間違いだろう」

嘲るようなファムスの言葉に、ミューザは軽く笑いを零した。ファムスが眉を顰めてそれを見返す。

「何だ、その笑いは」

「だってあなたが今、自分の仕向けた言い争いで煙に巻かれるほど間抜けな女の子を相手にしてるって勘違いしてるんだもの。可笑しくって」

「……そういう可愛げのない性格だから、『セルバン』に邪魔にされるんだ」

笑っていたミューザは、その表情を収め、ぴたりと口を閉ざした。

ファムスが勝ち誇ったように目を細める。

「友人だか恋人だかは知らないが、同情するよ、そいつには。こんなにうるさい女にまわりつかれたら、誰だって鬱陶しく」

ファムスが言葉を途切らせたのは、ミューザが顔を強ばらせてファムスを凝視したからではなく、彼女の手にしたカップの中身が勢いよく顔にかかったからだ。

「なっ！」

立ち上がりかけたファムスが、再び言葉を失った。

「……謝りなさいよ」

ミューザは蒼白になっていた。薄暗い部屋でもはっきりわかるほど、顔色が悪くなっている。

震える唇で、ミューザは繰り返した。

「謝りなさい。少しでも良心があるなら」

顔色が青ざめているのに、怒りのせいで瞳だけ強い光を湛えている。

ファムスは一瞬、その目に魅入られるような視線を彼女に向けた後、忌々しそくに顔ごとミューザから背けた。

「悪かった」

不本意に他ならない、という表情で、ファムスがぼそりと言った。ミューザはまだ顔を強張らせたまま、服のポケットからハンカチを取り出し、ファムスに差し出した。ファムスはそれを引ったくり、濡れた顔や髪を拭う。

「こういうものを寄越すくらいなら、人がせつかく淹れてやったお茶を無駄にするなよ、始めから」

無然と言うファムスを見て、ミューザは深々と溜息をつきながら、手にしていた空のカップをテーブルに置き直した。

「あたしだって、挑発になんて乗りたくなかったわ。お互い、あたしがこんなに過剰反応するなんて想像しなかったところが、現状の元凶ね」

「……何だその、ひとごとのような口調は」

「恥ずかしいのを誤魔化してるのよ。こういう場合は見て見ぬふりをするものよ」

おごそかに言ったミューザに、ファムスはまた呆れた顔になった。

「おまえは頭がいいのか、ただの阿呆か、どっちなんだ」

「残念ながら頭がいいのよ。でも修行不足ね」

平然と、ミューザは答えた。

「あたしの口を閉じさせたかったら、次からは別の材料で怒らせるようにしてくれる。その方が効率がいいわよ」

わざわざファムスが、自分を怒らせようとしたのはミューザにもすぐわかった。慰めてくれていた人間が、一転してその弱みをつづいたのだ。何らかの作為があると見て当然だ。

そうわかっていてもミューザが挑発に乗ってしまったのは、ファムスが口にしたのが本場に『弱点』だったからだ。

「……なるほどね。それで、頭はいいけど修行不足、か」

皮肉げに呟いたファムスも、それなりに頭の回転はいいらしい。ミューザはそう察する。

それから、ミューザは改めてファムスを見遣った。

「で、大変頭のよろしいあたしとしては、そこまでして口を割りたがらないファムスさんの事情ってやつが相当すごいものなんだってことに気づいて、さらに興味が募ってしまうわけなだけ。そっちのドアの向こうの部屋が怪しいかしら、なんて考えてしまうな」

「さらに頭のいいおれとしては、小煩い女の口を塞ぐためにもつと弱点を突くこともできる、ってことを示唆してしまったりするわけだがどうだろうか？」

即座に胡散臭いほど優しい笑顔になったファムスを、目を細めてミューザは見返す。

「ふうん。あなたってサドだったんだ」

「おれも未知の自分を発見できて、喜ばしい限りだよ」

投げ遣りに答えたファムスに、ミューザも負けず劣らぬ笑顔を作った。

「今度はお茶じゃすまないわよ？」

籠からそつとパイを取り出し、ミューザは笑顔でそれを掲げて見せる。ファムスが露骨に顔を顰めた。

「おまえは、よくよくいい性格だな」

「あら、お互い様でしょ」

答えて、ミューザは椅子から立ち上がった。

つかつかと奥の部屋に続くドアに歩み寄るミューザを見て、ファムスの顔色が変わる。

「よせ、馬鹿!！」

ミューザがドアノブに手をかけたようとした瞬間、ファムスは椅子から飛び降りてミューザに駆け寄った。

「きゃあッ!？」

ドアノブに触れた右手に、まるで静電気でも起きたような衝撃が奔り、ミューザはたまらず悲鳴をあげた。

「このっ、馬鹿!！」

「馬鹿とは何よさつきから!！」

右手を掴まれたミューザが反射的に怒鳴り返すと、ファムスが鼻白んだような顔になる。

「まったく、どうあっても口の減らない女だな」

腹立たし気に言い捨てると、ファムスはミューザをドアから手首を引っ張って遠ざけ、床に座らせた。正確に言えば、突き倒したのであるが。

「痛つたいなあ、もっと丁寧に扱いなさいよ、年頃の女の子なんだから!！」

「うるさい、年頃の女ならもっとおしとやかにしている、この跳ねっ返りが!！」

ミューザを上回る声で怒鳴り、ファムスは彼女の横に膝をついた。「見せてみる」

有無を言わさぬ重々しい口調に、ミューザはしぶしぶと掌をファムスに向けた。

ミューザの掌には、焼け焦げたような痕がくつきりと残ってしまっていた。ファムスが大きく舌打ちする。

「すぐに医者にいけ。痕が残る」

「……もう家に帰るからいいわよ、セルバンなら癒しが使えるもの。そのセルバンが家にいないことが、自分の気持ちを荒らげているのだとは、もちろんミューザは口にしなかった。

「セルバン　ああ、そうか。聞き覚えがあると思ったらあの男か。人の好いのほほん面した、確か神学校で白魔術を教えているとかい

う……引越してきた日に菓子折リを持って挨拶にきたな、そういえば」

「そういってこ律儀なのよ、セルバンは」

なぜか胸を張って言うミューザに、ファムスは大きく溜息をついた。

「結界の張つてある場所を素手で触るなんて、命知らずな奴だな」

「……結界？」

眉をひそめて、ミューザが問い返す。

「結界なんて張ってるの？」

「触った時に気がつかなかったのか？ おまえ、セルバンの妹かなんかだろう？」

「娘よ」

「聖なる力は……そういえば持っていないようだな。感じない。父親が人に教授するほどの力の持ち主なのに、どうして娘のおまえが一般人なんだ」

ファムスの問いに、ミューザは掌の傷のせいではなく、痛みをこらえるような顔になった。

「……血の繋がりはないのよ。義理の親だから」

「そうか」

ファムスもわざわざ、もう一度ミューザの傷を抉る気はないらしかった。それきりその問題についてはコメントしない。

『聖なる力』は血のせいか環境のせいか、持ち主の子供に受け継がれることが多い。ミューザは顔も見たこともない祖父、セルバンの父親は、別の町で神官をしていたと聞いた。『祭司』ではなく『神官』なのだから、その力は相当なものになるだろう。

そしてセルバンの力も、おそらくこんな辺境で一介の教師に収まるには不自然なほどのレベルにあるとミューザは察している。

たとえ聖なる力を持つ親から生まれても、子供がそれをまるで引き継がないことはあった。両親のどちらかが唯人であればその確立は高い。

(でもあたしは)

だが、ミューザがセルバンやその父親の力を受け継がず、唯人と
して過ごしているのは、もっと明確な理由がある。

つまり彼女とセルバンは、血が繋がっていない。セルバンの年齢
が、十五の歳の娘を持つ父親としては若すぎるのも、そのせいだ。

(血の上では、まるっきりの他人だから……)

しばらくの沈黙ののち、次に口を開いたのはミューザの方だった。
「結界って……でも、一般人に対して攻撃性を持つ結界なんて聞い
たことがないわ。あたしが妖霊でもない限り　え？」

ミューザが眉根を寄せると同時に、ファムスが小さく舌打ちして
立ち上がった。その寝巻きの裾を、ミューザがささず左手で掴む。
「黒魔導ね？」

ミューザが訊ねるが返事はない。それがファムスの答えだ。

ミューザは、ファムスの寝巻きに掴まったまま立ち上がった。よ
いしょ、と言いなから体勢を立て直す。

「こういうシチュエーションだと、余計なことを知ったばかりに、
あたしってば殺されちゃうのかしら」

「……ずいぶん冷静じゃないか？　聖なる力も持ち得ない人間のく
せに」

ファムスを見つめるミューザに対し、ファムスの方は彼女から眼
を逸らしている。ミューザは怯えなど微塵も抱いていない様子で微
笑んだ。

「殺す気のある人間は、多分結界を触りそうになった人間を止めよ
うとはしないと思うのよね、一般的に」

「こういうことが一般的であればの話だな」

「あたしには加護があるもの」

言い切るミューザを、ファムスは興味深そうな面持ちになって振
り返った。

「立派な心がけだ。血で力を区別する『神さま』とやらに、おまえ
は信仰心を持っているのか？」

「ばかね、神さまなんてしょせん万能じゃないんだから、信じられないわけないでしょ」

不謹慎なことを、ミューザはきっぱりと言つてのける。町の司祭が聞いたら眉をひそめそんな台詞だ。

「じゃあ、何の加護だつて？」

「セルバンのよ」

ミューザが微笑う。ファミスは微かに眼を瞠つたようだった。

「他人が何しよう構わないけど、取り敢えず周囲に迷惑はかけないことね。じゃ、あたし、暗くなる前に帰るから」

そう言つて出口に向かうミューザを、ファミスが呼び止めた。

「追い出そうとはしないのか？ 愛する故郷に住み着いた黒魔導士を。黒の魔導士つてやつは、古来から他人に迷惑をかけるのが生き甲斐になつているはずだが」

「かかつてから考えるわ。さよなら」

ひらひらと、ミューザは怪我をしていない手を振りながら部屋を出た。今度は呼び止める声がない。

『黒魔導士』に背を向けたのに、不思議と不安は感じなかった。

(あたしは、大丈夫)

それは幼い頃から、ずっとミューザが手にしている感覚だ。何があつても、どんな事態が訪れても、自分が取り返しのつかないほどの目に遭うことはない、と、確信している。

暗い森を進む途中、ミューザはふと足を止めて空を見上げた。鬱蒼と繁る木の葉の間から、すでに明るい月が覗いている。肌寒さに、少しだけミューザは身震いした。

(……でも、何だろう)

大丈夫だと、そう思うのに、微かに不快な感触がミューザの背中を撫でた。どこかで覚えのある感触。それは、昼間マナから黒魔導士の話聞いた時と同じものだったが、ミューザには思い出せなかった。

ただ、つい最近覚えたはずのその感覚が、唐突により深いものに

なつたような気がする。

(きつと、夜のせいだわ)

森の中は、月明かりがちらちらと落ちるばかりで、他に頼りになるような光はなかった。ファムスのところではランプを借りてくるべきだったかもしれない。そう思ったが、ミューザは引き返す気にはなれず、少し足早に獣道のような細い筋を歩き出した。

早く家に帰りたい。そう思った。

第二章『隣人』(2)

「ああ おかえり、ミューザ」

ファムスの家から戻ってきたミューザを迎えたのは、もう十何年も前から見慣れ続けている柔らかな笑顔だった。

部屋の入り口で立ちすくみ、ミューザは少しの間言葉を失くす。セルバンが帰っていた。

「……驚いた。今日はずいぶん、早いね」

セルバンが戻っているなんて思っていなかった。ミューザは無意識に、痛む右手をセルバンの司会に入らないよう、反対の手で庇った。

「忙しいの、終わったの？」

「いや、まだなんだけどね。少し……心配で」

セルバンが柔らかい微笑を浮かべ、ミューザの方を見る。

ミューザはセルバンから顔を逸らし、綺麗に磨かれた床に視線を落とした。

「何か飲むかい？ 外は少し寒かったろう」

セルバンは食卓に紙の束を広げて座っていた。ミューザは居間の入口でそれを見下ろし、小さく首を横に振る。

「いない」

「お腹は？ さっき、リリアさんのところでお裾分けをいただいてね。すぐに食べられるよ」

「今は空いてない。食べるのなら、セルバンだけ食べて」

ずきずきと、ミューザの右手が痛んでいる。こんなことなら帰りに医者に寄って薬草をもらってくればよかった。でもそんなことをしたら、怪我の理由を問われたかも知れない。

「少し、帰りが遅かったようだね。どこまで？」

穏やかに訊ねるセルバンを、ミューザは顔を上げて見返した。

「いつものセルバンよりは早いわ」

セルバンが少し、困ったように笑う。

ミューザは入り口のところに寄り掛かって、苦笑するセルバンを見下ろした。

それから、セルバンが次第に自分から眼を逸らすさまを、じっと見つめる。

「……セルバン。黒の魔導を使う人間って、悪い人ばかりかな」

ミューザが前触れなく呟くと、セルバンは少し驚いたように彼女を見返した。

「なぜ？」

「何となく。黒魔導士って、悪い人間？」

「……妖力を持っている人間が、悪い人間だというわけじゃないけれどね」

セルバンは視線を食卓の上に彷徨させた。

「聖なる力と一緒に、妖力は生れつきのものなんだ。一般的に、妖力はこの世にありうべからざる呪われた力であり、それを持つ者がありうべからざるものを望んだ呪われた人間だと言われている。でも白魔法と同じように、黒魔導だって、その因子を持っていない人間に使うことはできないんだよ」

神学校の教師らしく、セルバンは落ち着いた口調で丁寧に説明してくれた。

「どちらの力も、望んだから手に入るというわけではないし、いらなと思うたからと言って消えてしまうものではない」

それはミューザにもよくわかった。これほど聖なる力が欲しいと思うのに、それは決して叶えられない望みだ。

「だから、妖力にしる聖なる力にしる、持っただけでも使わない人もいる。黒魔導は完璧な道具と場が必要になるし、よほどの知識がなければ妖力は行使できないものだ。大抵の妖力なら、聖なる力で封じることができし、そもそも悪しきものとして忌まれる魔導に手を染めようとするのは、よほどの悪い心を持っていなければできないことじゃない。だから……自ら望んで黒の魔導を使う人間は、悪

い人間なのかもしれないね」

「ミューザの脳裡に、あの黒ずくめの隣人の姿が浮かんだ。」

「そうして魔導に一度手を染めた者は、魔導を重ねてさらに強い力を手に入れようとすることがある。魔導を元にした魔導にはかなり強い妖力が必要になるんだ。そんな力の持ち主がさらに強い力を持つようになれば、とても恐ろしいことになるよ。力は留まることを知らなくなる」

「……」

「どうかしたのかい？ 急に、黒魔導のことなんて訊いて」

「何となくだつてば。……セルバンは……」

「え？」

「セルバンは、たとえばあたしが黒魔導でどうにかされてしまったら、助けてくれる？」

「……変なことを言うのは、やめなさい」

セルバンは、食卓に視線を戻した。もう何度目かの動きだ。ミューザと食卓の間を、セルバンの視線が行ったり来たりしている。

「そんなことがそうそうあるはずないだろう」

「たとえばの話。助けてくれる？」

ミューザは無表情だった。ほんの少し咎めるようなセルバンの口調に、眉ひとつ動かさない。

「……助けるよ。君は、僕の大切な娘だ」

「そう」

まるでセルバンの答えを予測していたかのように、ミューザは眩き、小さく頷いた。そのまま壁から身を離し、自分の寝室に向かつて歩む。

背を向けたミューザの右の掌が、見た目にわかるほど赤くなっているのに気づき、セルバンはがたりと音をたてて椅子から立ち上がった。

「ミューザ」

呼ばれてミューザが振り返る。

「その手、どうした？」

「ただの擦り傷だよ」

答えて、逃げるように部屋へ戻ろうとするのに、セルバンの眼差しがそれを許さない。

「そうは見えない。ちゃんと見せてみなさい」

「大したことないの」

「ミューザ」

セルバンはミューザに近付き、その手を取ろうとした。一瞬泣きそうな顔になり、ミューザは右掌を反対の手で隠した。

「ミューザ。見せなさい、ひどいようなら癒しを使わないと、痕になっってしまうよ」

「……大したことないんだよ、心配いらなから、お父さん」

ミューザの言葉に、セルバンは驚くほど過剰に反応を示した。不意を突かれたように、傍目にもわかるほどその体が強ばる。

ミューザは完全に泣き顔になった。

「呼べって言ったのはセルバンじゃないか、そういう反応は狡い！」

「ごめん……ごめん、ミューザ」

自分の額に拳を当て、セルバンは擦れたような声で呟いた。辛うじて笑おうとするが、まるで上手く行かない様子で。

「驚いただけなんだ。慣れないから」

「愛してるって言って」

ミューザは、足を爪先立てて、セルバンの首に腕を回した。

「……ミューザ」

「父親なら言えるでしょう？ 娘に言うだけよ、大好きだって。愛してるって」

「……」

セルバンは抱擁を返せない。

「愛してるよ、セルバン」

「ミューザ……」

狡いのは君だ。

セルバンの言葉は声にならない。しかしその言葉が伝わったかのように、ミューザがセルバンを抱き締める腕に力をこめる。

「昔みたいに言ってる。『お父さんは君を愛しているよ』って、言ってるよ」

セルバンは溜息を押し殺して、ミューザの腕を自分の首から外した。

ミューザは抵抗せず大人しくセルバンから離れ、ただ、大粒の涙をこぼしていた。

「血なんて繋がってないのに。それでも、親子だからいけないの？」
「……」

セルバンは答えない。

「わかんないよ、セルバン。わからないんだよ、あたしには」

セルバンは黙ってミューザの右手を取ると、掌を上に向けた。左手で、火傷になってしまったそこに触れる。

「我が声は神の声、我が詞は神の詞、我は汝の名を呼ぶ者なり」
続けてセルバンは、ミューザには聞き取れない言葉で何かを呟いた。ミューザには聖なる力がないから、セルバンの詞がすべて正しくは聞き取れない。

「ドモスの精霊、我の名の下に依り、傷つきし者に癒しの光を」

ミューザは触れられた右手に、火傷を負った時とは別の熱を感じる。熱いのに痛くない。内側からも外側からも光に包まれる感触。

その光が消えた頃、セルバンはそつとミューザから手を離れた。

「……目に見える傷なんて、時間が経てば治るのに」

ミューザは傷の消えた自分の掌に視線を落とす。まるであの時怪我をしたのが嘘のように、綺麗な肌が見えた。

「こんなもの放っておいてくれて良かった」

「その傷はただの火傷じゃないね？ 黒の気配がするよ」

「何でもないの。本当だよ」

ミューザは静かに言っていると、疲れたような足取りで自分の部屋に戻っていった。

ぱたん、と乾いた音がしてミューザの寝室のドアが閉じたと同時に、セルバンの影が揺らいだ。

数歩よろけるように足を動かし、セルバンは食卓に片手をつく。前のめりに身体を折り曲げ、逆の手で口許を強く押さえる。壁一枚隔てただけの部屋にいるミューザに、荒い息遣いが聞こえてしまわないように。

セルバンはきつく目を閉じて、しばらく激しく身体を駆け回る苦痛に耐えた。胸がひどく痛む。あまり声を上げないように何度か嗚咽した。

「……ミューザ……」

声は喉の奥で消える。

思ったよりも時間は少ないのかもしれない。

精霊と契約しての癒しさえ、これほどまでに身体に負担がかかってしまうとは。

恐怖が身体を占める。ぞくりと寒気が背中を落ちる。

守りたいのに。

守ってあげいのに。望むのなら、たとえどんなことがあっても。

もしそう望まないとしても、どんな時にでも、何を犠牲にしたって駆けつける。かならず助けにいく。

誰よりも大切なのに 守りたいのに。

家族だという想いだけなら、愛してるなんてうんざりするほど伝えられた。

耳障りに扉の軋む音がして、エリスバートは眉を寄せた。

ちょうど喉が渴いたからと、自室から廊下に出たところだった。

エリスバートの部屋は二階。同じ階にある水場の方へ向かう途中、広い階段の下に黒い影があるのを見つける。

(……また来たのか)

黒い影に見えるのは、人間だ。真つ黒な長い外套に身を包み、長い髪を垂らしている。顔の色がいやに白くて、まるで蠟のようだとエリスバートは思った。

二階の廊下から自分を見下ろすエリスバートの姿に気づき、男が、ゆっくりとその方を振り仰いだ。

まだ若い男のようだ。ようだ、というのは、遠目でもあつたし、それに長い髪と黒いマントがその白い顔の半ばを隠し、顔の作りすらよくわからないからだった。

ただ、やけに赤い唇が、笑みを象つただけが見て取れる。

エリスバートは唾棄したい気分になりながら、辛うじてわずかに頭を下げた。視線を逸らす仕種が露骨だったかもしれないが、礼儀は失わない範囲だ。

本当は、この薄気味悪い男に頭など下げたくなかった。

しかし、彼は父親の客だった。息子の自分が礼を失するわけにはいかない。

「おお！ よくいらして下さった、お待ちしておりましたぞ！」

階下の廊下から、父親の大きな声がした。黒い男の来訪を告げられ、嬉しそうな様子でいそいそと部屋から出てきた。父親は大仰に両手を広げ、目一杯に男へ歓迎を現している。

ぼそぼそと、低い声で男が父親に答えていた。父親がいちいちそれに、やはり大仰な相槌を返している。男が何を言っているのかまでは、エリスバートにはわからない。

父親に誘われ、男は賓客のための部屋へと消えた。

男が視界からいなくなると、エリスバートはほつと息を吐く。

あの男が家に入入りするようになってから、半月ほど。その姿を見るたび、エリスバートは何とも言えない息苦しさを味わっている（あんな真つ黒の服を着て、妙な男だ）

家にいる使用人たちも、自分と同じようなことを思っているらしかった。実際、ああして男が来訪したというのに、父親以外に彼を出迎える者がいない。父親が自分で迎えに行くからと、そうは言っ

ているにしても。

(何者なんだろう、一体)

父親の客だというのはわかる。そうでなくては、この家にあんな素性の知れない者が入れるわけがない。エリスバートの家は、数年前に病で母親が亡くなって以来、父親のリエインとエリスバート、そして年の離れた弟クレデイスの三大家族だ。住み込みの使用人や父親の側近は大勢いるが、彼らは皆一様に男の来訪を疎んでいる。

直接父親に男について訊ねてみても、いつも『今にわかるさ』と笑って答えてくれない。

リエインはエリスバートやクレデイスにとって、ずっとよい父親だった。領主という立場にあっても、町の人間に慕われ、尊敬され、エリスバートにはその存在が誇りだった。学校にいた時からずっと優秀な成績を修めていたという父親に恥じぬよう、自分も立派な人間になろうと努力してきた。

だが、あの男が家に来るようになって以来、リエインは自室に閉じこもることが多くなり、公務もおろそかになっている。有能な側近が当面はリエインの代わりに動いてくれていたようだったが、この調子では、じきに町の中にもリエインに関するよくない噂が経つてしまっだろう。今日も、昼間に議会の集まりがあつたはずなのに、父親が家から出た様子はなかった。

(噂……か)

不意に、エリスバートは数日前に幼馴染みの少女が言った言葉を思い出した。

『あの男、噂に聞く黒魔導士なんじゃないかしら』

家に遊びに来たメアシルが、あの黒づくめの男を目にした時、気味悪そうにそう呟いたのだ。

不吉な言葉に、エリスバートはぎよつとした。

『そんな言葉を口にするもんじゃないよ、メアシル』

思ったことがすぐ口に出るタイプのメアシルを窘めるつもりでエリスバートが言うと、あら、とメアシルは意外そうな顔つきになっ

た。

『バーティ、あなた噂のこと知らないの？』

メアリルは芝居がかって声を潜め、エリスバートに耳打ちした。

『最近、この町を黒魔導士がうろついているって、みんな言ってるのよ』

知らなかったことだったので、エリスバートはひどく驚いた。そんな話、聞いたことがなかった。それほど重大なことなら、たとえ噂であっても領主の住む家にいる自分の耳に入って来ないのは、おかしい。

悪い冗談だと、言いかけてエリスバートはハツとした。

本当に『皆が』噂しているのなら、領主の息子である自分の耳に届かないのは、至極当然のことではと思いついたのだ。

その噂の主は、他ならぬ領主の家に入りしている。

『実際に見たのは、あたしもさつきが初めてだけど。いつもはドモスの南にいて話よ、それも知らなかった？』

驚いているエリスバートに、満足した顔でメアリルがそう続ける。

『ドモスの南？ 家が、そっちにあるのか？』

『そうよ、あのミューザの家の近くに住んでいる人が、その黒魔導士じゃないかって』

そう言ったメアリルの言葉を思い出し、エリスバートは、我知らずぎゅっと心臓の上を拳で押さえた。

ミューザの家は、ドモスの北側にあるこの家とは、真逆の方向にある。市街地からは遠く、人の住む家も少なかった。何かあった時に、駆けつけられる人間がそういるとは思えない。

(あそこの父親は、優しそうだけど、何て言うかぼんやりだし……) 思い出すのは、セルバンの穏和な姿。何度か顔を合わせたことがあるが、あの口の達者なミューザの父親とは思えないほど、どこか抜けたところがあるように見える男だった。

ひどく胸騒ぎがする。

エリスバートはとても軽快とは言えない足取りで、考え込む顔に

なりながら、水を飲むことも忘れて自室へと戻った。

第三章『暗雲』

まただわ。

レセルは庭先で足を留め大きくため息をついた。

広い庭のあちこちに散らばる鶏の羽。そう、羽根だけ。

つい昨日の夜までは、何羽もの鶏が庭にいた。商売に使うわけでもなし、自家用の飼育鶏だったから、ひどい損害を受けたわけでもないが、口惜しいし気味が悪い。

ここ最近、こうして何度となく朝になると鶏が消えている。心ない者が庭に忍び込み、盗み出しているのだ。鶏は夜になれば小屋に追い遣り、盗人が入らないように鍵もかけているのに、この有様。

このドモスの町はとても平和で、レセルがこの家に嫁いで二十年以上、こんなにたちの悪い泥棒が入ったことなんて一度もなかった。子供のいたずらとか、喰うに困った浮浪者がつい、と言うことはあったけれど、こんなふうにも何度も同じように鶏が盗まれなんて、初めてだ。

最初はどこかの悪ガキがおもしろがってるのかと思ったけれど、こうも続くと気味が悪い。鶏以外に盗まれるものはないのだ。やはり家族が食べるための小さな菜園や、蓄えが入った小屋も、庭にはあるというのに。

「レセル」

もう一度溜息をつきかけたレセルは、声をかけられて、垣根の向こうを見遣った。

「ルカかい、おはよう」

レセルが浮かぬ調子で声をかけると近所に住む顔なじみのおかみが、やはり浮かぬ調子で挨拶を返した。

「どうしたんだい、あんた、そんな顔色で」

ルカはレセルと同じ年頃の子供を持つ女で、いつもは家を切り盛りする剛胆なおかみとして、元気に振る舞っている。それが、今は

見るからに意気消沈していた。

「それがさ、ラルのやつが、まだ家に帰ってこないんだよ」

ルカがやはり溜息混じりに言った。

ラルはルカのひとり息子で、つい最近まで大きな町の神学校に通っていたはずが、勉強を諦めたのか途中で家に帰ってきていた。ルカは『放蕩息子が』などと言いつつ放っていたが、久しぶりに家に息子が帰ってきたのが嬉しいらしく、しばらくはラルの話ばかりしていた。

そのラルが、どこかへふらつと出かけたまま帰ってこないとしてセルが聞いたのは、昨日の昼間のことだった。

「あの子も久しぶりの故郷なんだ、顔なじみのところでも遊びに行ってるんじゃないか」

レセルの言葉に、ルカが曖昧に首を振った。

「あたしもそう思ったんだけどね。一番仲よしのイムラスのところに、ケイヤのここにも行ってないらしくてさ。ラルはミューザのこつぱっかり気にしてるから、悪い女に捕まってるってこともないだろうし……」

しょんぼりと、珍しく肩を落としているルカが、レセルには気の毒になった。

「ミューザのところに行ってるってことはないのかい」

「あすこにはセルバン先生がいるだろ、うちのバカ息子が居座ろうたってすぐに追い出されちゃうよ。でもまあ、立ち寄ってるかもしれないから、今から行ってみようと思うんだ」

そう言って、ルカは町の南へ向かって歩いていった。

レセルはその後ろ姿を見送りながら、表情を曇らせる。

何だか不吉な予感がするね

ルカを心配させまいと、口には出せなかったが、レセルはなぜかそう感じた。悪いことばかり重なっている気がする。起こっているのは大した事件ではないのに、どうしてか、ふいにそう思えたのだ。レセルは我知らず小さく身震いすると、とりあえず鶏のことを夫

に知らせるため、足早に家の中に戻っていった。

また来たのか、とファムスは露骨に厭そうな顔を作った。今日もまた、床に裾の着くほど長い黒服を着ている。相変わらず長い髪が鬱陶しいと思いつつ、ミューザはにっこりと、胡乱なくらいさわやかな笑顔を作った。

初めてのご対面から、二日後。

「そういう言い方はないでしょ、せつかくお友達が訪ねてきたのよ、ようこそいらっしやいくらいの挨拶はしても罰は当たらないと思わない？」

「これは驚いた、相互理解と友情ってのは、いつから異義語になったんだ？」

「あなたがカーテンも開けない陰気臭い部屋に閉じこもってる間に、よ、ざまを見なさい」

白々とした空気がふたりの間を流れた。

ミューザはファムスの家に入ろうと、さっきから体をひよこひよこ動かしている。ファムスはさせまじとドアの前に立ちはだかつている。

いらいらと、ファムスが声を荒らげた。

「いい加減にしろ、おれはおまえの暇つぶしの相手をしてやるほど心が広くないんだぞ！」

「そんなこと威張って言わないでよ、いいわ、じゃあこれを見なさい！」

言うなり、ミューザは右手をファムスの方へ突き出した。

目に鮮やかな純白の包帯が、そこには嚴重に巻きついていた。ファムスがぐつと顎を引くあ

「今すぐ町中の人にこの傷を見せて回っていいのよ。町の人間の誰もが、あたしみたいに黒魔導士を見逃してあげるような優しい性格

をしてる、なんて思わないべきね」

「優しい性格の人間が他人を脅迫するか！」

ファムスは忌々しげに吐き捨て、満足げに笑うミューザを力一杯睨みつけると、ふいとドアの中に入った。

ミューザは当然の足取りでそれを追う。歓迎されていないのは百も承知だが、かといって追い出されくほど自分が厭われていないのも感触で察していた。

相も変わらず陰気な部屋だ。ミューザはこないだと同じ部屋を眺めながら、こないだと同じことを思った。

ファムスは慥然を絵に描いたような顔で、居間の食卓についた。

「治してもらわなかったのか」

やはり当然の顔で向かいに座るミューザに、ファムスが訊ねる。

ミューザは「ああ」と呟くと、

「さつすがセルバンよねー、ほら、傷ひとつ残ってない」

包帯をするする外し、顔の横で右手の指を動かして見せる。ファムスは絶句して、何か信じがたいものを見る顔つきになった。

「……おまえ……ほんっとーに、いい根性してるな……」

「災難だと思つて諦めて、悪いけどこれって八つ当たり継続中つてやつだから」

「父娘喧嘩に赤の他人を巻き込むな！」

「誰がセルバンと喧嘩したなんて言つたのよ！」

ばん、とミューザは治つた右掌で食卓を叩いた。ファムスが怪訝な顔をする。

「違うのか」

「喧嘩できればこんなところで人に八つ当たりなんてしてないわよ！」

もう何度目か、ファムスは呆れた顔になる。

「だからどうしてそこで威張るんだよ、おまえも。そもそも、何でわざわざおれのとこに来て鬱憤晴らしをするんだ。話を聞いてくれる友達なり、他の家族なりはいないのか」

「家族はセルバンだけだし、友達になんてこんなこと相談できるわけないじゃない。心配かけたら申し訳ないわ」

「おれには申し訳なくないのか」

「だってあなたは別に、あたしの心配なんてしないでしょ」

「待て。心配しないほど遠い関係の人間へ当たり散らすことに、そもそも間違いがあるとは思わないか」

「だからあたし、最初から八つ当たりだって言ってるでじゃない」
「……」

「あー、もう、ごめんごめん！」

深々と嘆息しながらこめかみを押さえるファムスに、ミューザは両手を合わせて見せる。

「家にひとりでいると滅入っちゃって、駄目なのよ。誰でもいいから話を聞いて欲しいの。置物だとも思ってたくれればいいわ」

「置物が勝手に喋るか」

ファムスに睨まれ、ミューザは殊勝に首を竦める仕種を作った。
「っていうか、あたし、こないだのことを謝りに来たのよね。ひとりであーわー騒いじやったからさ」

「おまえのその態度のどこが、謝る人間のものなんだ」

「だってさ、来るなり『また来たのか』って嫌そうな顔するじゃない、何かあったまきちゃって」

「だから、謝りに来た人間がどうしてそこで『あたまきちゃって』なんだ」

「本当、どうしてなんだろ。あなたとあたし、よっぽど相性が悪いのかな、前世で敵同士だったとか」

ミューザにも、つくづくそれが不思議だ。

ファムスは愛想はないし嫌味ったらしいしお世辞にも善人なんて言えそうにないが、だったら相手にせず近寄らなければすむだけの話だ。ファムスの方はわざわざミューザのところまで出向いて喧嘩を売るようなまねはしないだろうし、そうすれば顔を合わせることもない。

ファムスのひねくれた物言いは腹が立つし、相手にしてもそれは同様だろう。なのにこうしてここにやってきて、また腹の立つ言い争いをしてしまう。

（あたしだって、もうちょっとうまく立ち回れていいはずなのに）無視することも、あしらうこともできずに、自分からファムスに近づいていくのが不思議で仕方なかった。

「ま、いいわ、袖すり合うも多生の縁って言うじゃない。あなたとあたしが出会ったのも、何かの縁だろうし」

「悪縁って言うよな」

「願ったりよ。良縁だったらたまらないわ」

ファムスは諦めたように溜息をついた。

「あの滅多やたらに礼儀正しそうな男に育てられて、どうしておまえみたいな根性のしつかりした娘に育つのか、聞きたいもんだ」

微妙な話題だったが、ミューザの気には障らなかった。ファムスは言葉どおり呆れているだけで、昨日のような悪意がなかったからだろう。

「ぼんやりした人に育てられると、しつかりものの娘ができあがるのよ」

胸を張るミューザに、なにをかいわんやの面持ちでファムスは肩を竦めた。

「ねえ、昨日は教えてくれなかったけどさ。本当のところ、ファムスはどこから来たの？ モーフリートって知ってる？」

「モーフリート？ 首都パンスの近くの大きな町か。知っているが、それがどうした」

「唐突に出てきた問いに、ファムスが怪訝そうに問い返す。

「あたし、そこで生まれたんだって。セルバンがもともと住んでいた町。行ったことないから、どんなところかなって。ファムスは何行ったこと、ある？」

「通りがかかる程度になら。大きな神殿のある町だ」

そう、とミューザが頷く。

「その神殿に、セルバンの父親がいたのね。だから、セルバンは父親の許で神官になるために、学校に通いながら修行をしていたんだって」

「モーフリートの神殿と言えば、バーンズに次ぐ規模だろう。そんなところで修行していた人間が、どうしてこんな片田舎で教師なんてしてるんだ」

「十五年前の黒魔導士の事件は知ってる？」

訊ねられ、ファムスはミューザに頷いて見せた。

「バーンズの王宮を、グーマーという黒魔導士が襲ったやつだろう。妖霊や邪霊が大挙してバーンズの町を襲ったが、神殿の人間が結集してそれを退けた。グーマーは、民衆の手で処刑された」

「詳しいのね」

「有名な話だろ」

「そう、それで、セルバンはその時に、モーフリートの神殿の人間と一緒にバーンズに向かったんだって。セルバンのお父さんは、妖霊にやられて死んでしまった。騒ぎが収まった後、セルバンはモーフリートには戻らずこのドモスの町へと住み移ったの」

「そのままモーフリートで神職に就かなかったのか？ あの騒ぎで神殿の人間も大勢死んで、人手ならまるで足りなかったはずだろう」

「……あたしがいたから」

ミューザは少し目を伏せて、テーブルの上で握った自分の指先をみつめた。

「あたしの両親もその時バーンズに住んでいて、襲撃のあおりを喰って死んでしまったんだって。荒れてしまった町の中で、誰も孤児を引き取る余裕なんてなかったから、生まれて間もない赤ちゃんだったあたしは、崩れた家の中で放ったらかしにされて泣いてたらしいんだ。それをセルバンが見つけて、一緒に連れてきてくれた」

だからミューザの記憶はあやふやだ。モーフリートに住んでいた両親の間で生まれたこと。知っているのは、たったそれだけ。

「その時までセルバンは今のあたしと同じくらいの歳で、他に頼る

家族もなくて、あたしを育てるには学校に行ったり、仕事をする余裕がなかったのよ」

セルバンは決してそうは言わない。でも、話を聞いていればミューザにはわかった。父親のおかげで蓄えはあつたけれど、生まれたばかりの赤ん坊の世話をしなければならず、学校に行くことも職を得ることもできなかった。モーフリートからドモスにやってきたのは、荒れ果てたモーフリートよりも安全で、物価がずいぶんと安かったからだろう。

「それからずっと、セルバンは男手ひとつであたしを育ててくれたの。誰かに預けることだつて、何なら捨てたつて仕方ない状況だつたと思うの。だけどセルバンはそうしなかった。『神さまから預かった子供だから』つて、一生懸命育ててくれた。名前をつけて、愛してくれた。だからあたしはセルバンにはものすごく感謝してるの。この世で一番、大切な人なの」

片手を反対の手で包み込み、ミューザはまるでそこに大切なものが入っているかのような表情を作った。

ファムスは頬杖をついたまま、そんなミューザを眺め遣る。

「で……その父親と、今はうまくいってないわけだ」

ミューザはふと表情を曇らせ、首を横に振った。

「うまくなんていつてるわ。いきすぎて、腹が立つくらい。……どこまでも父親だつてことにこだわるんだもの、あの人は」

溜息は、薄暗い部屋の空気に混じる。ミューザの顔に翳りが落ちると、その表情はひどく大人びて見え、ファムスは内心うるたえた。

「好きなのか。セルバンが」

「好きなんかじゃないわ。愛してるのよ」

真摯なミューザの声だった。ひとつの手加減もなしに、セルバンへの想いを抱いていると、わからせるような。

呟いてから、ミューザはハッと我に返った。

「や、やだ、何でこんなこと話してるんだろ、あたし。やめてよね」
赤くなつて自分を睨みつけてくるミューザに、ファムスは顔をし

かめる。

「おれが何をしたっていうんだ」

「あー、もうやだよだ、帰ろー！」

慌ただしくミューザは立ち上がり、挨拶もそこそこ、玄関へと向かう。「何なんだ、一体」と憤るファムスの声が聞こえたが、それに言い訳をする余裕もない。

誰にも、マナにすら話したことのない心。セルバンへの思い。何だって、会ったばかりの、あの嫌な男に告げてしまったのか。
(どうかしてる！)

お邪魔しました！ と玄関で声を張り上げて、ミューザはファムスの家を後にする。

やたらに恥ずかしくて、逃げるように家への道を辿ろうとしたミューザは、そのまま驚いて足を留めた。目の前に、見慣れた少年の姿があつたのだ。

「エリス？ 何やってるの、こんなところで」

「その名前で呼ぶなよ」

ミューザが声をかけるなり、エリスバートは条件反射で返事をした。

エリスバートはファムスの家を遠巻きにして、道を少し離れたところ立っていた。大きな木の蔭に隠れるようにしていたから、ミューザがその姿に気づいたのはほんの偶然だった。

エリスバートは木の蔭から出てくると、少しファムスの家を憚るような視線で見遣つてから、ミューザの方へ歩み寄ってきた。

「何やってるは、こっちの台詞だよ。ミューザはこの家で何をしていたんだ」

「何って、ご近所だもの。遊びに来てたのよ」

ミューザは、このクラスメイトにまさかこんなところで出くわすなど思いもせず、ただ面喰らった。何しろ距離があるとはいえあくまで『お隣さん』の自分とは違い、エリスバートの家は町の反対側にあるのだ。そしてこの辺には店も畑も狩り場もない。何かのつい

でここまでやってきた、ということもないだろう。

「ファムスに用？ だったら、家にいるけど、今」

「『何も^{ファムス}ない』？」

エリスバートも、ミューザと同じくその名前の意味に気づいて、眉を顰めた。

「偽名か？」

「さあ、わからないけど。本名にしる偽名にしる、つけた人間の気が知れないわね」

あまり縁起のいい言葉ではないのだ。そもそもが。

「べつに、そのファムスってやつに用事じゃないんだ。ただ

どんなやつなのかと思って」

「変わり者に違いはないわね。真っ黒な服なんて着ちゃって、趣味悪かったら。それにやなやつよ、性格悪い」

ファムスとの様々なやりとりを思い出し、ミューザは大仰に顔を顰める。もつとも、ファムスの方も、自分の印象を訊かれたら全く同じように答えるであろうと理解していたが。

そして反射的に素直な意見を述べてしまったから、ミューザは改めて首を傾げた。

「どうしてエリスがあの人のことを気にするの？」

訊ねても、エリスバートはどことなし言葉を選ぶふうに、口を噤んでいる。

もしかして、とミューザは思い当たった。

「ファムスが黒魔導士じゃないかって噂、エリスも聞いたとか？」

はっと、エリスバートがミューザの方を見た。

「ミューザも知っているのか」

「う、うん、マナから聞いて」

エリスバートの真剣な というより強張った表情と言葉の勢いに、ミューザは珍しく怯んだ。

「どうしたのよ、そんなおっかない顔して」

エリスバートは育ちがいいせいかわからない顔して

つても、どこかお坊ちゃんお坊ちゃんしたところがあって、およそ
迫力というものに欠ける少年だった。少なくとも自分の知っている
彼の姿は。

しかしいま、エリスバートは怖いほど張りつめた顔になっている。

「最近、夜、家に黒ずくめの男がやってくるんだ」

「黒ずくめ……」

エリスバートの言葉に喚起されて思い出すのは、もちろん、つい
先刻まで向かい合って座っていた、あの性格の悪い美貌の持ち主の
ことだ。

「そう、きみが言ったとおり、彼が噂の黒魔導士じゃないかと思っ
て、様子を見に来たんだ。うちに来る男は、名前も素性も知れない。
どこに住んでいるかすら定かじゃない。だから居場所を突き止めて、
父様のいないところで話を聞こうと……」

エリスバートの様子は、どこか焦燥したものになっている。ミュー
ーザもつられて眉を寄せた。

「エリスバートの家に、黒魔導士が来てるってこと？」

「少なくとも、噂では。もちろん魔導を使ったところなんて見たこ
とはないし、本人がそうだって言ってるわけでも、確証があるわけ
でもないけど……でも、とても不吉なんだ。あの男は、不吉だ。ほ
くの家にいい存在じゃない」

「……」

ミューザは何も言うことができない。

何しろファムスが魔導を使っていることを、ミューザは知っている
のだ。

そしてその名前以外、素性を知らない。

「でも……あの男、そんなに悪い人じゃないと思うわ」

何も言えない、と思っていたはずなのに、ミューザは気づくとそ
んなことを口にしていた。

「でもミューザ、さっきは悪い、嫌な人だって」

「そりゃ、性格がとっても悪いんだもの。でもそれだけよ、不吉と

か、そんな大袈裟な感じはしない」

「親しいのか？ 彼と」

エリスバートに詰め寄られ、ミューザは思わずたじろぐ。

「親しいってほどじゃ、ないけど。会ったのは今日で二回目だし」

「じゃあどうしてそんなこと言いきれるんだ」

「どうしてって、話した感じとか、まあ、勘みたいなものだけどさ」

「その人が黒魔導士じゃないって証拠はあるのか？ さっき他の人

に聞いた、ファムスは昼間、家から一歩も外に出ないそうじゃない

か。ここに住み始めてから二週間も経つのに、ちゃんとその姿を見

たことがないっていうのはおかしい」

「でもあたしは会ったわよ、ちゃんと」

「それで、嫌なやつだって思ったんだろ」

「そうだけど、でも、違うのよ。そういうんじゃない……」

説明しようとするミューザの口調は、あやふやなものになる。当

然だ。ファムスが黒魔導士なことに間違いはない。

なのにどうして庇おうとするのか、ミューザは自分でも理由がわ

からなかった。

(でも、違うもの)

思ったことをうまく説明できないミューザに、エリスバートが苛

立った顔になる。それが、ミューザに違和感を覚えさせた。

「なぜ庇うんだ、ミューザ。もしかするときはみは、ファムスの悪い

魔法で取り込まれているんじゃないか？」

「おかしなこと言わないで、そんなことあるわけないでしょう？」

思いもかけないエリスバートの言葉に、ミューザはぎょっとする。

「わからないじゃないか、きみはもう魔導にかかっていて、ファム

スの都合のいいようにしか話すことができないように」

「やめてったら、おかしいわエリス、どうしてそんなこと思いつく

のよ」

「きみこそどうして違っつて言い張るんだ！ きみにはわからない

はずだろう、たとえ魔導にかかっていたって、聖なる力もないのに」

「
」
声を荒らげかけたエリスバートは、顔色を変えるミューザを見て失言に気づいた。

ミューザは言い返すこともなく、黙って目を伏せている。

「……すまない」

エリスバートもミューザから目を逸らし、小さく頭を下げた。

エリスバートも、セルバンとミューザが血の繋がらない父娘だということ、ずっと以前から知っている。

「いいのよ」

ミューザは力なく首を横に振った。

もしかすると、いつもの自分だったら、ただ腹を立て、場合によってはエリスバートの横っ面を殴りつけて、大げんかに発展させていたかもしれないと思った。

でも今は、泣きたいのを堪えるだけで精一杯だった。

泣きそうになるのを堪えるために、思考を働かせながら、ミューザは顔を上げてエリスバートを見遣った。

「どうしてエリスはそんなに不安がってるの？ 黒魔導士のことなんて、ただの噂話なのに」

エリスバートがミューザに突つかかるのなんて日常茶飯事だったが、先刻の様子はいつもよりもずいぶんとおかしい。エリスバートは、いくらけんかを売りつけてきても、人を傷つけるようなことを言う少年ではなかった。

よほど、彼に自分を失わせるほどの心配事があるというのか。

「……自分でもわからないんだ。何がこんなに不安なのか」

エリスバートは目を伏せたまま、自問に近い口調で呟く。

「でも、家に来るあの男が、ぼくには怖ろしくて仕方がないんだ。噂のせいだけじゃない、思い込みだけじゃなくて、あの男が本当に不吉に見えて仕方がない。弟も怯えてる。決して人見知りをするやつでも、気の弱いやつでもないのに、あいつが来るとクレデイスは部屋に隠れてしまうんだ。クレデイスだけじゃない、家にいる使用

人たちも、みんな。父様だけなんだ、あの男を喜んで迎えるのは……」

ミューザは黙ってエリスバートの言葉を聞き、少し考えてから、口を開いた。

「ねえ、エリス、もしとても心配なんだったら、教会に行けばいいわ。それか、セルバンに聞いてあげる。黒魔導士なのかもしれない人間がいるなら、聖職に就く人たちが黙っていられるはずないもの」
ミューザの提案に、エリスバートは力なく首を横に振った。

「それはぼくも考えた。でも、駄目なんだ。父様が、あの男に関して何か手や口を出すことを、絶対に許さない。あの優しかった父様が、まるで別人のようだ。最近では、少しでもあいつのことに触れようとすると、怖ろしい顔で怒って」

ミューザはエリスバートの父親のことを思い出す。町の人間の誰とでも分け隔てなく接し、声をかける優しい領主だった。学校の式典の時には必ず現れ、厳しく思いやりのある言葉を生徒に伝える人だ。

別人のようだ、とエリスバートが語る様子を、ミューザは思い浮かべることができなかった。

「関わっては、教会や、それにきみのお父さんにも迷惑がかかるかもしれない。もう少し、自分で調べてみるよ」

「そう……力になれなくて、ごめん」
謝るミューザに、エリスバートが苦笑した。

「きみが頭を下げる必要はないさ。ぼくこそ、ひどい物言いをしてすまなかった」

「気にしてないわ」

笑って見せたミューザに、ほっとした笑顔を返してから、エリスバートはその表情を収めた。

「ミューザ、訊いてもいいかい」

「うん？」

「きみは、もしかして聖職者になりたいのか？」

「……………」
ミューザは自分を見つめるエリスバートを見返し、言葉を失くした。

少しの間をおいて、再び口を開く。

「急に、どうして？」

「急に思いついたわけじゃないんだ。ずっと前からそうなのかなと思ってた。きみは、その……聖なる力がないって話になると、ひどく悲しそうな顔をしていたし」

エリスバートは遠慮がちにそう説明した。

「……気づかれてるとは思わなかったわ。マナにも、話したことなかったのに」

望みを、口にしたことはこれまで一度もなかった。セルバンに近づきたいと、彼と同じものを持ち、同じ場所にいる資格を得たいと切望していることを、ミューザは誰にも話していない。

「やだな、みつともない。ないものねだりしてるの、人に知られるのなんて」

苦笑して、ミューザは地面に視線を落とす。

「ぼくも同じだから」

「え？」

だが、エリスバートの言葉を聞いて、すぐに顔を上げた。

「ぼくも昔、白魔法士になりたかったんだ。だから多分、ミューザの気持ちがあわかったんだと思う」

静かに、エリスバートが言う。

「昔に……？」

「うん。ぼくの母親は、二年前に病気で亡くなってしまった」

それはミューザも知っていることだったので、頷く。大きな葬儀になった。もちろん、ミューザも教会に足を運び、棺に花を飾った。「母の病は医者でも、ドモスでもっとも優秀な祭司でも助けることができなかったんだ。それからずっと、今も思ってる。もしもっと強い力を持つ祭司がいたら。大きな町と同じような神官が呼べたら。」

もし 自分にその力があつたら」

「……」

ミューザは思い出す。いつかの夜、苦しみに満ちた姿でうなされていたセルバン。その体の傷。それを癒すことが自分にできたのなら。

何度もそう思った。

「母の家系は聖職者を出すことがあつたらしくて、ぼくも父も唯人だけど、弟だけは聖なる力を持っている」

今年十歳になるエリスバートの弟は、たしかセルバンの教え子だ。神学校に通っていると、ミューザも聞いたことがある。

「クレディスにはその力があるのに、自分にはないのがもどかしかった。どうして自分には癒しの力がないのか、苦しむ人を助けることができないのか、それが口惜しくて……」

エリスバートが顔を歪め、歯がみする。ミューザはただその姿を見ていた。

「でも」

軽くかぶりを振り、今も湧き出すその口惜しさを振り払うような仕種をしてから、エリスバートは真剣な眼差しを作った。

「ないものねだりばかりしていても、仕方がないんだ。ぼくにはできないことがあるけれど、できることもたくさんある。ぼくにできるのは、学問で力を得て、政治のことを知って、この辺境のドモスにだつてもつともつと立派な教会を造つたり、神殿を呼んだり、優秀な白魔法士を育てるために神学校を大きくしたり ぼくに癒しが使えないのなら、それを使える人がたくさん増えるように。ドモスが、傷つく人のいない、安全な町になるように」

ああ、とミューザはエリスバートをみつめ、思う。

ああ、この人は、男の子なんだ。

熱っぽい声で語るエリスバートを、ミューザは出会って初めて、格好いいと思った。そのきれいな容姿に関係なく、格好いい男の子だと思った。

知らず笑みを浮かべるミューザのことを、エリスバートが真剣な顔のまま、覗き込んだ。

「ミューザ、きみの隣人は、本当に黒魔導士ではないんだろうか」
ミューザは、この優しく強い思いを抱く級友に嘘をつくことが、辛くなってきた。

「……そうだとしたら、どうするの？」

それでも事実を口にすることができない。ファムスを黒魔導士だと談ずることが、間違っていると、どうしても思ってしまう。

「わからない……でも、許せない」

エリスバートは険しい眼差しで、ファムスの家を見遣った。

「黒の魔導は悪しきものだ。罪もない人々を苦しめる、自分の欲望のため、間違った方向へと心を向ける、病や、死と同じくらい忌々しく禍々しいものだ」

そう、黒魔導は悪いものだ。それはミューザも知っている。

だが、ミューザはやはり真実を口にすることができず、ただ、エリスバートに向けて首を横に振って見せた。

「……そうか」

頷き、エリスバートはミューザに向けて優しく微笑した。

「いろいろ話してくれてありがとう。きみは家に帰るところだったんだろう、送っていくよ。ここはもうずいぶんと暗い」

「うん　ありがとう」

素直に頷き、ミューザはエリスバートと並んで翳る母利の道を歩き出す。

エリスバートはミューザをその家の前まで送り届けると、自分も家に帰ると告げ、街の方へ去っていった。

その後ろ姿を見送りながら、ミューザはずっと抱いていた疑問を、また心に乘せた。

（なぜ、あたしはファムスを庇うようなこと言ったんだろう）
じっと、もう傷痕のない右手をみつめる。

怪我をしたこと自体がなかったかのように、きれいなてのひら。

でもまだ、あの時の灼けつく痛みは明瞭に思い出せる。
振り仰ぐと、少し遠くに森の姿。その向こうには、ここからでは見えないけれどファムスの家がある。森の方へは、夕闇のせいばかりでない不吉な翳りが落ちている。
空で、低く、季節はずれの雷鳴が響いていた。

ゆうべ遅くから降り始めた雨は、今日もまだ降り続き、重くて暗い空気を町中に染み渡らせていた。

(何だか、頭が重い)

気候のせいだろうか。ミューザは学校の昼休み、昼食をあまり口にすることができないまま、机の上でこめかみを押さえた。

「ミューザ、大丈夫？ 顔色がよくないわ」

そばに座っていたマナが、心配そうにミューザの顔を覗き込む。

「また、眠れなかったの？」

ミューザの頭痛を察したのか、煩わせないようにと小声で訊ねるマナの言葉は、激しい雨の音に掻き消されてしまいそうだった。外に出ることができないから、教室には大勢の生徒が残っていた。だが皆どこかしら声をひそめて話をしていたから、部屋の中は日頃の喧噪からかけ離れた、奇妙な静けさが覆っている。

「……ん、眠ろうとは、思ったんだけど」

この調子で「大丈夫だから」と言っても信憑性がない。ミューザは正直にマナへ頷いて見せた。自分の顔色の悪さはわかっていて。

数日前、珍しく早い時間に帰ってきたと思ったセルバンは、次の日からはまた忙しさを理由に、家に寄りつかなくなってしまった。

本当の理由なんて、ミューザにはわかりすぎるほどわかりきっている。

自分とふたりきりにならないように、セルバンは全力で『逃げて』いるのだ。

(あんなこと、言わなければよかった)

愛していると、そう言っただけで、脅すようなことをした。自分の浅ましさに、ミューザは吐き気のする思いだった。

(言えないことなんて百も承知なのに)

どうにもならない状態を、どうにかしたくて、言っただけのこと口にしてしまった。

(離れて行かれるくらいだったら、『父娘』のままの方がずっとましだったのに……)

でも、どうすれば一番よかったかなんて、ミューザにはわからない。

混乱する頭を持て余し、頬杖をついていた手で顔を覆うミューザの耳に、小さく、心地よい声が響いた。

「豊饒の大地、空の光、我が足許を照らす詞　お願い、力を貸して。ミューザに癒しの光を与えてください」

小さな光が、目の端を掠ってミューザの中に流れ込む。あれほど悩まされていたこめかみ辺りの鈍痛が、柔らかく消えていく気配を知る。

ミューザは驚いて顔を上げ、マナの方を見遣った。

マナは少し困ったような顔で、微笑みを返していた。

「本当に、小さい力だから……」

マナが癒しの力を使ったのだ。ミューザはごくさりげない仕種で注意深く周囲を見渡したが、マナ自身とミューザ以外に、そのことに気づいた人間はいないようだった。

「マナ、あなた」

「……小さい頃、今よりはもう少しだけ、力があつたの」

目を伏せて、消え入りそうに小さな声でマナが言う。

「でもうまく精霊が喚べなくて、神学校に行くのは諦めたの。女の子だから、普通に嫁いだ方が私のためだって、父様も母様も聖職者になることは嫌がっていたし……力を持っていることは、誰にも教えては駄目だって言われてたわ」

女性の聖職者は、男性よりも待遇が悪く、数自体が少ない。神の声を直接聞くことのできる巫女になれば、結婚は禁じられるから、それを嫌がって娘に聖なる力があることを隠す家も少なくなかった。マナも、そう言う家の娘だったのだ。

「でもミューザになら、教えても大丈夫だと思っから」

ミューザに向き合い、そっと、マナがその手に触れた。ミューザの瞳を覗き込む。

「ごめんね、今まで黙っていて」

ミューザは咄嗟に泣きそうになって、それを堪えながらマナの指先を握り、首を横に振った。もう頭は痛まない。

「ありがとう、マナ」

微笑んだミューザに、マナが嬉しそうに笑顔を返す。

マナもまた、ミューザの望みを知っていたのだ。

土砂降り、と言っていい勢いになったようだ。

暗い部屋の中で、ファムスは大仰に溜息をつく。

屋根や壁の木を、大粒の雨が勢いよく殴りつけている。その勢いと風の強さで、家というより小屋という風情の建物が頼りなく揺れている。今にも壊れそうだ。

（今日はさすがにあの娘も来ないだろう）

それだけが、陰気になりかけたファムスの精神を救う。

もともと静かなのが好みなのだ。そばでうるさくされると気が散るし、苛つくし、ろくなことにならない。

かといって殊勝にされたところで、何だか妙な気分になるのだから、始末が悪い。

ミューザが来ると、銚子が狂う。

もう一度、深々と嘆息しかけたところで、ファムスは座ったままの椅子からドアの方へと視線を向けた。土砂降りの音に紛れて、キ

イキイト、耳障わりに金属の擦れるような音がしている。

「出来損ないか」

おもしろくもなさそうな口調で呟く。

ドアの下の隙間から、枯れ木のような、黒くて細いひよろひよろしたものが入り込んでいた。枯れ木の先は、さらに細く、尖った四本の枝に分かれている。枝 指だ。地面をひっかきながら、どうにか隙間をくぐって家の中に入ろうとしている。キィキィと聞こえる音は、哀れな妖魔の哀れな泣き声。

天气が悪いと、まれにこんなものがやってくる。

ファムスは上品とは言えない仕種で舌打ちした。見苦しくもがいた枯れ木のような腕は、ようやく開いた小さな穴に指を突っ込んで、それを支えに体全体を部屋の中へ滑らせた。

腕が三本。脚が二本。頭がなくて、体の脇で間抜けな目玉がぎょろりと動いている。

カサカサと音を立てながら、手足すべてを使って、出来損ないの妖魔が地面を這った。ファムスの足許までやってくる。

ファムスは軽い動きで足を持ち上げ、素早く移動している妖魔を靴底で踏みつけた。キィ、とまた哀れっぽい金属音がして、すぐに潰えた。ファムスが口の中で短い詞を唱えると、靴底の下でもまだもぞもぞしていた枯れ枝みたいな手足が、煤のように崩れて床に広がって、そして消えた。

光を導く詞ではなく、闇を生み出す詞。当然のように、ファムスはそれを口に乘せた。

詞を唱え終わると同時に、ファムスはフツと目を閉じ、そのまま机に頭を落としそうになった。辛うじて片手で頭を支える。

「血が足りない」

呻くように呟く。

こんなことでは駄目だ。すぐに破綻する。そう思ったが、うまく体が動かない。邪魔な小蟲を追い払うのにも、こんなに力が要るようになってしまった。

もつと血が必要だ。

(長くは保たないかもしれないな)

他人事のように、そう思う。

思ったそばから、また金属音が聞こえた。億劫げな動きで見遣ると、ドアの下から、今度は無数の枯れ枝みたいな手。転がってくる目玉。ろくなもんじゃない。

(しかし、落ち着きのない町だ)

来るところを、間違ったかもしれない。

心底からそう思いつつ、ファムスは重い体を、テーブルについた両手を支えに立ち上げる。

(あの女のせいだ)

とりあえず、目の前にはいない隣人に責任転嫁をして、ファムスはドアに向かって歩き出した。

学校は午前中で授業が終わり、生徒たちは早めの帰宅を促された。教師たちの選択は賢明で、夕刻を過ぎた頃には、外はすでに嵐と呼べる天候に成りはてっていた。

(すごい雨と風……)

自宅に戻ったミューザは、何も見えない窓を見遣って眉をひそめた。ガラス戸は、横殴りに降りつける雨のせいで絶え間なく震えている。割れた時のためにと、中から板を打ちつけた。

夜になると、さすがにセルバンも学校から帰ってきた。久しぶりに一緒に食事をとった。とはいえ買物に行く余裕もなかったから、残り物のスープしか作れなかったが。

寝る前にセルバンとミューザは手分けして、家のあちこちの窓や、壁の弱いところを補強した。もともと安普請だ。下手したら家ごと吹き飛んでしまうかも、などと冗談を言ったセルバンの言葉が、冗談になりそうになくてミューザには笑えなかった。

(眠れない)

おやすみの挨拶をして、数時間は経つのに、ミューザはちっとも寝つけなかった。寝台に入ったまま、目を閉じていることもできずに、暗い天井や壁に落ち着きなく視線を這わせる。

どうせ眠れないのなら、いつそ本でも読もうかと寝台から起きあがった時、ミューザは玄関の方から激しい音が聞こえるのに気づいた。

雨か風のせいだと思っていたが、様子がおかしい。絶え間なく、ドアを叩かれているような気がするのだ。

「やだ、何だろ……」

こんな嵐の夜、こんな夜更けに現れる客なんて、不吉だ。

怯えに似た気分を味わいながら、ミューザは手探りでランプに火を灯し、寝間着に上着を羽織ると、ランプを片手に部屋を出た。

玄関に向かうと、すでにセルバンが起き出し、誰かと会話をしていた。

「レスマイン先生？」

セルバンの向こうに立つ、頭からずぶ濡れになった中年の男性に、ミューザは見覚えがあった。

「ああ、ミューザか、すまないね」

セルバンと同じ神学校の教師をしているレスマインは、廊下の向こうにミューザの姿をみとめ、申し訳なさそうに声をかけた。

「こんばんわ、先生。セルバン、どうしたの」

不安げに問いかけるミューザに、振り返ったセルバンの顔は、常になく引き締まった表情をしていた。

「神学校の生徒がひとり、いなくなっただんだそうだ。家にも、学校にも、友達のところにも見あたらな」と

「小さな子供？」

「うん、初等の生徒だよ。ミューザ、僕はこれからレスマイン先生たちと、その子を捜しに行ってくるから」

外はますますひどい嵐になっているようだった。咄嗟に引き留め

たくなつたが、ミューザは堪える。ここで出かけないようならば、それはセルバンではない。

「上着、出すわ。濡れないよう外套も着ていって」

言つて、ミューザはすぐにセルバンの部屋に入り、着替えや必要になりそうな道具を引つ張り出してくる。セルバンはミューザの用意したもので急いで支度をすませた。

レスマインと共に外へ出るセルバンをミューザはドアのすぐそばまで見送る。セルバンが、彼女を振り返つてその髪に触れた。「ドアにはきちんと錠を下ろして。誰が来ても決してドアを開けてはいけないよ、いいね」

それは幼い頃から彼が出かける時いつも口にする言葉だったのに、どうしてか、ミューザはセルバンの声を聞いて体が震えた。

「 気をつけて」

だが、不安は口にせず、それだけ言つてセルバンの腕に触れる。

セルバンは身を屈めると、ミューザの頭を抱き寄せ、額にキスしてから家を出て行った。

(何か、起こつてるんだ)

漠然と、でも確信に近い形で、ミューザはそう感じていた。何かが起ころうとしている。あるいはもう起こり始めている。この町で。胸騒ぎがして止まらない。

「部屋を暖めて、セルバンのこと、待つてよう」

誰もいないのに声に出していつてしまったのは、そうしていかいと不安だったからだ。ミューザはランプの明かりを頼りに居間へ向かい、部屋の灯りを新たに灯した。部屋が明るくなると、いくらかほっとする。もう暖炉を使うような季節ではなかったが、ミューザはそこにも火を入れた。外はずいぶん冷える。セルバンが帰ってきた時に、寒いままではいけない。

着替えやタオルを用意して、なけなしの食材で温かなスープを作り、他にすることがなくなつてしまつと、ミューザはお茶を入れて食卓についた。

(早く帰ってきて、セルバン)

がたがたと、風に煽られ絶え間なく家が鳴っている。

不安なまま、何十分か、何時間かをミューザが過ごした時、ドアの方で音がした。雨に紛れて聞き逃してしまいそうだったが、それはノックの音だった。

(セルバンが戻ってきたんだ！)

全身に広がる喜びが押さえきれず、ミューザはすぐに椅子から飛び降りると、廊下を走って玄関に向かった。

「セルバン？ 帰ってきたの？」

中から錠を外すのに手間取り、ミューザはなかなかドアが開けられなかった。声だけでも早く聞きたいと、木のドアに耳を押しつける。

「ぼくだ」

「」

ミューザは錠を開けようとする手を止めた。

「ぼくだよ」

セルバンの声ではなかった。

「 エリス？ エリスバートなの？」

予測していなかった相手に、ミューザは怪訝になりながらも、嵐の中にいさせては可哀想だと急いでまた錠を開けようとする。

だが、湿気のせいか手が滑って、うまく錠を開けることができない。

ドアはその間もずっと叩かれている。

「どうしたんだよ、早くここを開けてくれよ」

「ちょ、ちょっと待って、錠が硬くて……」

ドン、と苛立ったように、ノックの音が大きくなった。

「待ってったら、焦らせないで」

まだ錠は開かない。ノックの音が続く。

「……」

ふと、ミューザは錠にかけた手の動きを止めた。

(何か……変だ)

「開けてくれよ。ここは寒いよ、死んでしまおうぞ」と、ミューザの全身を悪寒が包んだ。

(違う)

絶え間なく叩かれるノックの音が、まるでドアを壊そうとするかのように響き続けている。ミューザは反射的に全身を押しつけ、壊れそうなドアを支えた。

「ひどいよ、ぼくを殺す気が、なんてひどい女なんだ。なんてひどいことをするんだ。まるで魔物だ。きみはひどい人間だ」

ミューザは素早く辺りに視線を走らせ、ドアから離れてそばにあった柵に飛びつくと、それをドアの方へと引きずった。とにかく周りにあるものすべてドアの前に並べ、バリケードを作る。あまり役には立たなさそうだったが、ないよりはましだ。

ノックの音は、家全体が震えるほどのすさまじい音で響いている。ミューザはバリケードの効力を確認するいとまもなく、履き慣れた靴を捨ててからすぐに身を翻すとドアとは真逆、今の窓へと走った。打ちつけられた板を力尽くで剥がし、窓を開け放つ。途端、激しい雨粒が痛いほど体を打った。

(このままここにいたら、危険だ)

理屈とは関わりなく、本能を信じてミューザは窓枠を乗り越え、靴を履くと土砂降りの外へと抜け出した。後ろを振り返るのが怖ろしく、前を向いたまま泥水を跳ね上げて走り出す。

(教会か、学校へ)

とにかく人のいる方へ。セルバンのいる方へ。

手許のランプも、月明かりも、家の灯りもない道を、感覚だけを頼りにミューザは走った。民家の並ぶ辺りまではまだ遠い。道は暗く、雨と風の音、そして自分の息づかいばかりが夜の中に響いていた。

目を開けていると、雨粒が瞳に当たる。どうせ何も見えないのだから一緒だと、目を瞑ったまま闇雲に走っているミューザの腕を、唐

突に掴む腕があった。

「きゃ……ッ」

「ミューザ!？」

すんでに大声で悲鳴を上げそうになったミューザは、名前を呼ばれてどうにかそれを堪える。

空いた手で目許を拭ってから見遣ると、驚いた顔で自分を覗き込んでいるエリスバートの姿があった。

「本物!？」

「え!？」

ぎよつとして声を張り上げたミューザに、エリスバートもぎよつとしたようだった。

(本物だ)

いつものエリスバートだった。手に濡れないように工夫した悪天候用のランプを持っている。

「どうしたんだミューザ、こんな時に、こんなところで!」

雨で声が掻き消されそうになるから、エリスバートは声を張り上げる。ミューザもそれに倣った。

「きみこそ、どうしたの! 子供を捜しているの!？」

大声で訊ねたミューザに、エリスバートが頷いて見せた。

「さつき家に報せがあったんだ、手が必要だからばくも探しに来た

! ミューザ、きみは!」

「あたしも一緒よ、セルバンのところにレスマイン先生がいらっしやったから」

正直な状況をエリスバートに告げる気が、ミューザには起こらなかった。どっちにしろ、こんな雨の中悠長に説明をする場合でもない。

「搜索なら、大人と男連中がやってる、きみは家に戻って」

「エリスバート様!」

叫ぶエリスバートの背中の方から、ばしゃばしゃと水を跳ね上げ、大柄な男が走ってきた。

「お戻り下さい、エリスバート様、こんな天気の夜に出歩くのは危険です」

エリスバートの家の従者だ。おそらくエリスバートもひとりで家を飛び出してきたのだろうとミューザは察する。

エリスバートは、従者を振り返ると、躊躇なく彼を怒鳴りつけた。

「馬鹿！ 危険だから領主の息子ほくが捜しに来てるんだろう！」

「しかし旦那様がご心配を」

「怖ろしいのならひとりで帰れとさっきから言っている、誰もおまえについてこいなどと頼んでいない！」

従者は自分よりもずっと年下で小柄なエリスバートの比ではないほど、明らかに怯えて萎縮していた。苛立った声で、エリスバートは彼を追い払う。

さすがに主人の息子を見捨てて屋敷に戻るわけに行かず、従者は少し離れた場所でエリスバートとミューザの様子を窺っている。

「見直したわ、エリス」

様子を見ていたミューザが笑いながらそう言うと、エリスバートもちよつと笑ってから、すぐにまじめな顔になった。

「でもミューザ、きみはどこか安全なところにいた方がいい。その、薄着だし」

エリスバートの視線が、困惑げな様子でわずかにミューザから逸らされている。ミューザは慌てて、雨に濡れ体に張りついた上着の前をかき合わせた。

「そ、そうだ、マナの家に送らせよう、あの家なら人が大勢いるし。セルバン先生は他の先生方と搜索を続けていらっしやるから、すぐには戻らないだろうし」

ミューザはエリスバートの言葉に従うことにした。エリスバートといっても、おそらく足手まといになる。先刻セルバンについて行かなかったのも、余計な心配と面倒を増やすよりは、自分にできることをした方がいいと判断したからだ。

「わかった、そうする。エリス、きみは」

「ぼくは明かりもあるし、もう少し捜すよ。行方がわからないのは、弟と仲のいい友達なんだ。まだ弟と同じ歳だよ。何としても無事なままみつけないてはならない」

「……気をつけて」

ミューザはエリスバートの腕を引き寄せ、その頬にキスをした。幸運を、と告げる。

エリスバートはひとりおろおろしている従者を呼び寄せ、ミューザをマナの家まで送るよう命じた。安全な場所に行けると喜び、従者はミューザを連れて急ぎ足でマナの家へと動き出した。

気懸かりそうに振り返るミューザに手を振り、彼女たちが闇の中に消えてしまつうのを見送りながら、エリスバートはそつと自分の頬に掌で触れた。

先刻、ミューザがキスした右の頬。

「何よりの加護だ」

小さく笑いながら呟き、エリスバートはすぐに表情を引き締めると、明かりをかざし、子供の名を呼びながら闇の中に踏み出していた。

この夜、明け方まで捜索は続いたが、結局子供の姿は見つからずじまいだった。

そして代わりのようにみつかったのは、数日前からやはり行方の知れなかったラルの、変わり果てた姿だった。

第四章『疑念』(1)

教会の周りには、黒い服を着た人々が集まっていた。

死者を悼む鐘の音が鳴っている。それに、まだ止まない雨の音と、啜り泣きが混じった。

「ラル！ラル！！」

悲痛な叫び声に、誰もが耳を覆いたくなくなった。死んだラルの母親、ルカの泣き声。

ミューザはマナと並んで、手に花を持ちながら、それを棺へと飾る列へ並んだ。

「結局、一度もラル兄さんに会えなかったわ」

見ていられず、棺に取り縋って泣くルカから目を逸らし、マナの隣でミューザはぼつりと呟いた。マナがそつとミューザの腕に手を添える。マナは数度言葉を交わしたことがある程度だったが、ラルとミューザは幼馴染みだった。

順番が来て、棺のそばまで進んだミューザは、その中に花を添えようとして動きを止めた。

(いない)

棺の中には、ただ彼の愛用していたペンや服、そして供花があるばかりだった。ラルの遺体はみつからない。

ミューザもマナも無言で花を置き、そつと棺から離れた。

「なあ、知っているか。ラルは、もう昨日のうちに教会で燃やされてしまったんだろ」

棺を墓地に移動するまでの間、静かに待っていようと教会の外へ出かけたミューザは、そんな囁きを聞いて知らずに足を止めた。

「ああ、聞いたよ。何でもゆうべ神学校の先生がみつけた時には、すっかり干涸らびていたって」

ミューザはぎゅっと目を閉じ、マナの手を取ると急ぎ足で教会を出た。入り口の庇で雨から逃れ、マナとふたり、並んで濡れないよ

うに壁に凭れる。

今朝、葬儀の報せを受けて教会にやってきた時から、誰しもが噂していた。

ラルはまるで、生き血を抜かれたような姿でみつかったのだと。そしてその姿は、まるで黒魔導にかかったようだったと。

穢れを被うために死体は焼かれてしまったから、棺の中にラルの姿がないのだ。

(兄さんを焼くだなんて)

ひどい、とミューザは唇を噛んだ。普通、死者は棺に入れられ、花を飾られ、丁寧に土へと還される。体を焼くなんて、犯罪者を罰する時とか、呪いが原因の悪い病気で死んだ時とか、怖ろしくて不幸なことが起こった時だけだ。

ルカの悲しみは、ただ息子を失っただけのものではない。それ以上の悲しみと恨みがある。

「誰かあの男を捕まえておくれ！」

教会の入り口のところで、棺が出てくるのを待っていたミューザは、聞こえた叫びにハッと顔を上げた。

「ラルが死んだってのに顔すら見せないじゃないか！ あいつのせいで、あいつがラルを殺したんだ！」

叫びが近くなってくる。教会の中から、棺と、それを運ぶ大人たち、棺に縋ったままのルカの姿が現れた。

「あいつは怖ろしい黒魔導士だよ、殺してしまえばいいんだ！ ラルのように、体を焼かれてしまえばいいんだ！」

マナが、怯えたようにミューザの腕に体を寄せた。その体を抱き返すミューザの姿に、涙に汚れた顔のルカが気づく。棺から離れ、次にはミューザに縋るように駆け寄ってきた。

「ああ、ああ、ミューザ。来てくれたんだね。ほら、あたしの言ったとおりだったろう、あなたの隣の家の男は黒魔導士だったんだよ。あいつが、あたしのラルを殺してしまったんだよ」

「おばさん……」

ミューザは何を言っているのかわからず、悲痛な心地でルカを見返した。

ルカは痛いほどミューザの肩を掴み、乱暴に揺すっている。

「ミューザでいい、あいつをここまで引き摺ってきておくれ！ 忌まわしい黒魔導士なんて、みんなで殺してしまっただよ！」

我を失ったように叫ぶルカの指先が、ミューザの肩に喰い込む。痛みを歪めるが、ミューザはそれを払うことなんてとてもできなかった。

「ルカ」

代わりに、ルカの腕を横からそつと宥めるように掴む者があった。「ほら、棺が行ってしまいますよ。あなたも行かないと」

声を聞いて、ミューザはほつと息を吐いた。黒い喪服に身を包んだセルバンが、ルカの背中を優しく叩く。

「セルバン、でもあの魔導士を！」

「彼がやったと決まったわけじゃない。母親のあなたがこんな日に誰かを呪ったら、ラルは神の御許に行けなくなります。さあ、向こうへ」

穏やかなセルバンの声に諭されると、ルカはようやく我を取り戻したように、悄然と頷いて棺の方へと歩いていった。

「大丈夫かい、ミューザ、マナも」

問われて、ミューザとマナは揃ってセルバンに頷いて見せた。

「……だいぶ弱ってるね、おばさん」

小さな背中を丸めて歩くルカを見遣りながら呟いたミューザに、セルバンも同じ方を見て頷く。

「うん、朝から、ずっとここでは噂で持ちきりだから……」
ラルの死に関する噂話。

それから、最近見かけるといって黒ずくめの男の　あるいはミューザの隣人の噂話。

（あだし、やっぱり言えない）

ミューザは、まだ聞こえるルカの泣き声に、ひどい罪悪感を覚え

ていた。

それでも、言えない。ルカの言うとおり、ファムスが黒魔導を使うと言うことを。

もしかしたら本当にファムスが黒魔導を使って、ラルのことを殺してしまったかも知れないのに。そうじゃない証拠なんてひとつもない。ミューザが知っている限り、この町にいる黒魔導士はファムスだけだ。黒魔導士なんて不吉な存在が、そうそうあちこちにいるものじゃない。

なのに、言えない。ファムスをこの場所に連れてこようなんて、どうしても思えない。

「セルバン先生……本当なんでしょうか。ラルのこと」

怯えて震えながら、それでも我慢できない様子で、マナがセルバンに問いかけた。

セルバンはマナを見返し、曖昧に首を横に振った。

「葬儀が終わったら、ふたりとも家に帰っていなさい」

ミューザはゆうべから、マナの家に世話になっている。

セルバンとミューザの家は、玄関のドアが壊れ、濡れた足跡が部屋のあちこちに続いて、とても安心していられる場所ではなくなっていた。

「僕はまだ生徒を捜さなくてはならないから、もう行くよ。マナのお父さんには話してあるから、僕もこんばんはミューザと一緒に世話になると思う。夜の捜索は外してもらった」

ミューザは少し驚き、セルバンを見上げた。

「いいの？ 一緒に捜さなくて」

「君も狙われたんだ。護らなくては危ない」

「……」

ゆうべのことを、ミューザはセルバンに話した。ドアを壊した者のこと。エリスバートと同じ声の誰か。その時間、ちょうどセルバンもエリスバートと行き会っているから、声の主が彼ではないことはたしかだった。

「何が起きているの、セルバン」

問うたミューザに、セルバンはやはり首を横に振った。

「わからない、だけど必ず安全な町を取り戻すよ」

ミューザはセルバンの首に両腕を回した。

「危ないことしないで、セルバンまでいなくならないでね」

「大丈夫、神のご加護があるから」

軽くミューザの背を抱いて、セルバンはすぐに体を離れた。ミューザに向けて少し微笑む。

「もう行くよ、君やマナにも神のご加護を」

ミューザと、マナの額に接吻してから、セルバンは教会から雨の中を駆け去っていった。

その姿を見送り、ミューザは少し苦笑気味に笑う。

(こんな時になって、またキスしてくれるようになった)

いつからか、セルバンは決しておやすみの前にも、いつてきますの前にも、ミューザにキスをしなくなった。

多分、ミューザの体が少女らしく丸みを帯び、少年のようだった顔が少しずつ花開くように変化しだしてから。

その変化を拒むように、ミューザは髪を切り、男の子のような格好ばかりを選ぶようになった。

それでもセルバンは、優しい抱擁も、接吻けも、ミューザにはくれなかつたけれど。

(普通じゃないんだ。もう、この町は)

それを、ミューザは強く実感した。

昼を過ぎ、夕方に近い時刻になっても、雨はまだ降り続けていた。春先にこんな雨が続くなんで、珍しい。

「外、もう暗いのね……」

窓から外の景色を眺め、マナがひそやかな声で呟いた。マナの家

は広く、家族や使用人たちも大勢いるはずなのに、今はどこかしんと静まりかえっている。誰もが声をひそめ、降り止まぬ雨の音に怯えるように、ひっそりと過ごしていた。

ミューザはマナの部屋で、彼女の淹れてくれたお茶を飲みながら、うわの空でマナの呟きに相槌を打つ。

(ラル兄さんの葬儀、もう終わったかしら)

結局、ルカの泣き叫ぶ声や人々の囁き合う暗い噂に耐えられず、ミューザはラルの棺が埋められる前にマナの家に戻ってきてしまった。

(……昨日のエリスの贖物は、何だったんだろう)

思い出し、ミューザは知らず自分の体を抱くようにしながら、震えた。

あの時すんなりと鍵が開いていたら、自分はどうなってしまったのか。想像することも怖ろしく、ミューザは固く目を閉じて首を振る。

ラルが、行方知れずの子供が、もしかすると自分のように騙され誘い出されたのでは、と思えた。だからセルバンもミューザのことを心配しているのだ。

「どうしてこんなことになってしまったのかしら……」

外をみつめたままのマナが、悲しそうな呟きを漏らした。美しい自然を誇るこの故郷が、暗い翳りに覆われているのが辛かった。

(あたしにできることはないの?)

マナの呟きを聞きながら、ミューザは強く自分にそう問いかける。セルバンは子供を捜しに行った。おそらくエリスバートも。たくさんの大人たちが動いている。

なのに自分はこうして、安全な場所で、ただ愁えるばかりで。

それが、口惜しい。

(いいえ)

ぐっと、ミューザは拳を握り締めると、閉じていた目を開いた。

「マナ、あたし」

呼びかけられ、マナが窓辺からミュージーザの方を振り返る。

「どうしたの、ミュージーザ」

「ちょっと出かけてくる」

「え」

マナが目を見開いた。

「出かけるって、どこへ？ 外はこんな天気だし、それに今出かけるなんて」

「すぐに帰ってくる、ちょっと、家に忘れ物しちゃったのよ」

言いながらも、ミュージーザはすでに立ち上がっていた。自分の上着を拾って羽織る。

「待って、お願いやめてミュージーザ、外はとても危ないわ、せめてセルバン先生が帰ってくるまで」

「じつとしていられないの、ごめん、マナはここにいて……」

「ミュージーザ、お願い！」

泣き声に近く、マナはミュージーザの名を呼ぶとその腕にしがみついた。

「……マナ」

宥めるように、ミュージーザはマナを見下ろす。

「心配かけて、ごめん。でも本当に、すぐに戻るから」

拒むようにかぶりを振るマナの頬に、ミュージーザはそっと手を当てた。反対の頬に軽く接吻ける。

「あたしには加護があるから、大丈夫」

「すぐに、戻ってきてくれる？ 本当に、すぐよ」

濡れた目を上げたマナに、ミュージーザは笑って頷いて見せた。

「ほんの数刻。待ってて、帰ったらマナの淹れたお茶が飲みたいな」

「わかった。準備して待ってる」

マナは、自分の友人がこうと決めたら気持ちを変えないことを知っている。精一杯の動きで微笑んで、ミュージーザを見送ってくれた。

「父様たちにみつかれば、きっと心配して止められるから。裏口から行って」

マナに感謝して、ミューザはそつとその家を抜け出す。雨天用のマントを頭からかぶり、そのまま水に浸かりかけた道を走り出した。通い慣れた道を迷わず進む。マナの家から、町の南へ。

そして自分の家を通り過ぎると、さらに南へと入る。臭や泥に何度も足を取られそうになりながら、暗い森を抜け、粗末な小屋の前まで。

「ファムス、ファムス！」

小屋のドアをミューザは渾身叩いた。

「開けて、ファムス！ ミューザよ、いるんでしょう、ここを開けて！」

ドアを叩き続けると、しばらくの間のものち、中から鍵の開く音がした。

「何だ、騒々しい」

もうミューザの耳に馴染み始めた、いかにも億劫そうな、迷惑そうな声音。

ファムスは相変わらずの黒い服を身にまとい、闇色の瞳をミューザに向けた。

そしてその瞳が、いつもとはほんのわずかに違う何かをたたえていることにミューザは気づく。

「あなた、知ってるわね」

「……」

ずぶ濡れの格好のまま、まっすぐ自分を見上げる少女を、ファムスは黙って見返す。

「この町で何が起きているのか、知っているわね」

ファムスは何も答えなかった。

「教えて、ラル兄さんを殺したのは誰！ 神学校の子供はどこに行ったの？ どうしてあたしの前にエリスバートのふりをしたやつが現れるの、ファムス！」

叫びながら、ミューザはファムスの体を乱暴に押した。勢いに吞まれるようにファムスは数歩下がり、強い風のせいでドアが大きな

音を立てて閉まる。衝撃で、家中が震えた。

「まったく」

暗い家の中で、ファムスは溜息をついたようだった。

「どうしておまえはいつもいつも、そうやって矢継ぎ早に質問ばかりするんだ」

いつもと変わらないファムスの語調に、ミューザはなぜかほつとする。呆れ果てた、嫌味っぽい声なのに。

「おれは何も知らない」

一度息を吐いてからそう言ったファムスを、ミューザはキツと睨んだ。

「嘘。ファムスは絶対に知ってるはずだ」

「残念ながらおれは千里眼ではないものでな」

自分を睨んだままのミューザに、ファムスはもう一度溜息をついた。

「おれはここに来て以来、この家から一步も外に出ていないんだ。だからこの町で何が起きているか何て知らない」

「一步も……」

それは、異常な事態ではないのだろうか。噂には聞いていたが、事実本人の口から聞いて、ミューザは改めて思った。

(じゃあこの人、どうやって生きてるの?)

食べ物も、新鮮な水すらないこの家で、たったひとり。

「だからおれにわかるのは」

ミューザが何か訊ねるより先に、ファムスが言っつて、ふと暗闇の中、景色を遠く見晴るかすような眼差しになった。

「今、とても悪いものがこの町にいるということだけだ」

重く、静かな口調でファムスが言った。

何も知らない、というファムスが、やはりいろいろなることを知っているのではないかと、ミューザはどうしてもそう思えて仕方がなかった。

雨に降られた体が冷え切り、感覚が無くなってしまったので、エリスバートは仕方なく一度自分の屋敷へと戻った。

教会の鐘はもうやんでいる。ラルの葬儀はとっくに終わってしまったのだらう。始まりの頃少し顔を出しただけで、エリスバートはすぐに子供を捜しに向かった。

（死んでしまった者よりも、生きている者だ）

辛い気分でそう選択した。ラルのことを悲しんでいる間に、いなくなつた子供が同じ目に遭つてしまふのでは、悲しみを繰り返すだけになってしまう。

家の中はしんとしていた。男たちはみな子供の捜索に駆り出され、女たちは部屋の中で息を潜めている。エリスバートが帰ってきて、出迎える者は誰もいなかった。

誰も彼も、平和だつたはずの町に訪れた不幸に、恐れおののいている。

（クレデイスは、部屋か）

弟は、世話係の女性がみているだろう。本人にも、世話係の者にも、部屋からは出ないようきつく言い含めておいた。クレデイスは自分も友達を捜しに行くと言い張っていたが、エリスバートが諭すと大人しく頷いた。聡い子供だつた。

湯で体を温め、服を着直して、もう一度外へ向かおうと廊下に出たエリスバートは、その向こうに父親の姿を見つけて足を留めた。

こんな時だというのに、父親はただ、家の中にいた。朝から、誰に子供捜しの命令をするわけではなく、ラルの葬儀に出向くわけではなく。

そしてその父親のそばに、あの黒ずくめの男の姿があるのを見て、エリスバートは怒りと失望のあまり目の前が暗くなつた。

「父様！」

エリスバートが呼ぶと、父親は足を留め、隣にいた男はスツと近

くの部屋に消えていった。

「おお、エリスバート」

駆け寄ってくる息子を、リエインは笑顔で待ち受けている。

「その笑顔にもどかしさを覚えながら、エリスバートは何度も繰り返した問いをまた父親に向ける。

「あれは誰で、何のためにここにいらっしゃるんですか。父様は、どうしてこんな時にあんな男と」

いらだちに任せて訊ねていたエリスバートは、唐突に言葉を止めた。

リエインは、自分を見返していると思っていたのに、見てはいない。

瞳はこちらを向いているのに、まるで焦点が合っていない。

「父」

「エリスバートや、可愛い息子。おまえは本当にテイレイにそっくりだ」

頬に触れられた時、エリスバートは総毛立った。父親に触れられて身の毛がよだつなんて、生まれて初めてのことだった。

「父様……」

「十五になつたとはいえ、母がいなくてずいぶんと寂しい思いをしただろう。おまえも、クレティスも。この二年間ずっと寂しかっただろう」

「父様、今はそんな話をしている時では」

「私も寂しかった。あの美しいテイレイが死に、後添えを進める者もあつたが、テイレイの他私の妻に、おまえたちの母になる者など考えられるものか」

「……」

リエインは、エリスバートの言葉が聞こえないかのように、ひとりで話し続けている。

「だがな、バートイ、もうすぐ母に会えるぞ」

「え？」

父親の言う意味がわからず、エリスバートは眉を顰めた。

「父様、何を……」

「テイレイにもうすぐ会えるのだ。あのお方のおかげで。本当に感謝しなくてはなるまいよ。さあ、おまえも祈るがいいエリスバート。クレデイスはどこだ。テイレイのために部屋を飾らなくては」

（何を言っているんだ、父様は）

エリスバートの問いかけは、ただ喘ぐだけの吐息になって、音にはならなかった。リエインは上機嫌に鼻歌まで歌い、男の消えた部屋へその姿を追っていく。

死んだはずの母テイレイ。

それに 会えるという父。

不吉な黒い男の影が、エリスバートの脳裡を掠る。

（反魂の術？）

それは、『黒の領域』だ。

エリスバートは混乱する頭を持て余し、壁に手をつくると、何をしたらわけでもないのに荒くなる呼吸を押さえるために目を閉じた。

教会に行こう。

少し考えて、すぐに結論を出す。

父親の、家族のことだからと、ずっと躊躇していた。自分だけであの男の正体を探り出し、問題があればそれを排除しようと思っていた。噂どおりにあの男が黒魔導士であるのならば、父親も、もちろん家族である自分も、クレデイスも、ただではすまない。それがわかっていた。

だが、今はもう、たったひとりで何かを変えられる状況ではなくなっている気がする。

（ぼくに勇気をくれ、ミュージザ）

大きく息を吸い込み、ぐっと顔を持ち上げると、エリスバートはようやく瞼を開いた。

決意して、そっと家を出ようとしたエリスバートは、不意に首筋を撫でる生臭い風に、体を揺らして動きを止める。

「どこへ行かれるつもりか、ご子息」

「ッ」

笑いを含んだ声。 澱んだ音。 振り返らなくてもわかる。 あの男だ。 男の指先がきつくエリスバートの腕を掴んだ。 反射的にそれを渾身振り払い、エリスバートは玄関の扉に飛びつくと、それを開け放った。

外に出ると、雨粒と、震えるほどの寒さがエリスバートの全身を打つ。 あっという間にずぶ濡れになった。 春なのに、こんな天気が続くのはおかしい。 何もかもがおかしい。

エリスバートは必死にぬかるんだ道を駆け、見慣れた教会へと辿り着いた。

「誰か！ 祭司様、エリスバートです！」

叫びながら中へ飛び込む。

だが、エリスバートを迎え入れたのは、重く沈んだ静寂ばかりだった。

「……ああ……！」

絶望に似た音がエリスバートの口から洩れる。

床には血の穢れがあった。 祭壇に目を遣れば、敷布の辺りも赤く血で染まっている。 倒れた花や燭台まで、べつとりと同じ色で濡れている。

（この人たちもやられたんだ）

祭壇に近づき、エリスバートは血濡れた布に触れた。 指に冷たい感触。 まだ乾いていない。

（ここは危険だ）

祭司たちが害されたのならば、手を下した人間 あるいは別の生き物 は、まだ近くにいてもかもしれない。

少なくとも、町の中にいる。

人のいるところに行かなくてはいけない。 悪しき者に対抗する手段は何ひとつ持ち合わせていないエリスバートだった。 神を信じる力のみで事態が変わると思えない。

とにかく家へ戻ろう、と思いかけて、エリスバートは踏み出しかけた足を止めた。家も、きつと危ない。あいつがいる。でも。

(クレデイスを置いてきてしまった)

それが悔やまれた。クレデイスや家で働く者たちが、屋敷にはまだ残っている。自分だけ安全なところへ逃げてしまっただけでいいわけがない。

(戻らなくては)

雨の中、エリスバートは再び家に戻るため、教会を飛び出して走った。

風の流れ、横殴りに降る雨粒が、まるで凶器のようにセルバンの体を襲った。

寒さにもう、すっかり手足の感触はない。それでもセルバンは声を張り上げ、いなくなった子供の名前を呼ぶ。

レスマインたちとははぐれてしまった。強い風が皆の視界を奪い、呼び合う声も耳に届く前に費えた。かるうじて、手許の明かりだけが生きている。それを高くかざし、道の端や、木の蔭に子供がいないかと、身を屈めて確かめる。

「……ッ」

子供の名前を呼ぶ途中、ぐつと喉に嫌な感触が昇ってきて、セルバンはさらに背を丸めた。何度も咳き込む。止まらない咳に、口許を掌で被った時、喉の奥から生暖かいものが流れてきた。

赤い血が、雨に混じって地面に落ちる。

セルバンは体を支えていることができず、その場に膝をついた。

(こんなところで)

倒れるわけにはいかない。

セルバンは体中で呼吸をして、荒いその息を長い時間かけて落ちて着けようと試みた。

「しっかりしろ……、……どうぞ主神セイマーよ、今少しだけ私に力を……」

泥を掴みながら絞り出した声は、か細く、雨音に吞まれて消えていく。

(ミューザ ……)

言葉で神を呼び、心でミューザを呼んだ。

もしかすると罪深い自分へ下された罰なのかもしれないと、そう考えかけ、セルバンは少し笑った。

「それでも、君は許してくれるだろう、ミューザ？」

名前を口に出して呼ぶと、少し体に力が戻った気がする。

セルバンはよろめきながら立ち上がり、夜のように暗くなっている辺りへ目を向けてから、再び歩き出した。

第四章『疑念』(2)

「きやつ」

小さな悲鳴が聞こえて、エリスバートは驚いて足を留めた。雨で視界が狭くなっている。目を凝らすと、目の前に見慣れたクラスメイトの姿があった。

「マナ！」

「あ……バーティなの？」

怯えたように身を竦めていたマナは、自分がぶつかっただのがエリスバートだと知って、ほっと肩の力を抜いた。

「どうしたんだ、きみまで、まさか神学校の生徒を探しに来たって言うんじゃない」

「ミューザを見なかった？」

エリスバートの質問の途中で、マナが声を上げる。エリスバートはきつく眉を寄せた。

「ミューザが、どうかしたのか？　彼女はきみの家にいたんだろう？」

「わたし、ミューザを捜しに来たの。少し前に、忘れ物をしたからつてうちを出て行って……でも、忘れ物なんてきつと嘘だもの。わたし、不安で、それで、ミューザを捜さなくちゃって」

マナは大人しい彼女らしくなくこの雨の中、暗い町の中を家から飛び出してきたのだ。

「わかった、なら、ミューザはぼくが捜す。他の人にも捜すよう頼むから」

エリスバートは一刻でも早く自分の屋敷に帰らなくてはと思ったが、それでも言わなければ、マナは戻りそうになかった。

それに、エリスバートもミューザのことが心配だ。

「外は危ない、家に戻るんだ」

「でも」

「きみに何かあつては、ミューザが戻ってきた時に悲しむだろう。家に戻つてなくちゃいけない」

「でもバーティ、おかしいの。とてもおかしいのよ、わたし、ひどく怖くて……この町はおかしいの、だから、ミューザをひとりになんてしておけない！」

マナは、やはり彼女らしくなく強情な様子で、決してエリスバートに譲こうとしなかった。

どうするか、と少し迷って、エリスバートはすぐに「そうだ！」と声を上げた。

「マナ、神学校に行こう。教会は駄目だけど　あそこなら、白魔法を持つ先生方がいらっしやるし、それに、セルバン先生もいる。もしかしたらミューザは先生のところに行ったのかもしれない」

「……そうね……きっと、そうだわ」
不安を無理に払い、自分に言い聞かせるように呟いて、マナが頷いた。

「行こう、走れるか？」

「ええ」

エリスバートが差し出した手に、マナが掴まる。ふたりは神学校のある方へと走り出した。

家に戻る前に、神学校に助けを求めればいいのだと、エリスバートは少し救われる心地になった。あの場所の教師たちも、聖職者だ。聖なる力を持っている。教会の祭司たちがいなくなってしまったことも、早く報告しなくてはならない。

「ねえ、バーティ」

走りながら、マナが大きな声でエリスバートに呼びかけた。エリスバートも、雨音に消されないよう声を張り上げる。

「なに！」

「どうしてミューザに好きだって言わないの!？」

エリスバートは思わず泥に足を取られそうになって、慌てて体勢を立て直した。

何でこんな時に　と狼狽して、エリスバートは上手い誤魔化し方も思いつかずに言葉を失う。

「ミューザはそういうことだけ鈍いから、言わなければパーティの気持ちに気づかないわよ！」

「そ、それはわかってるけど！」

本当に、何だってマナはこんな状況でこんな質問をしてくるのかと、混乱しかけたエリスバートは、自分の手を握る彼女の指先がひどく震えていることに気づいた。

怖いから、明るい話をしようとしている。日常を取り戻そうとして、教室でそうするように、現実的で身近な話を欲しがっている。

自分のミューザに対する気持ちを持ち出されてしまうことが、エリスバートにはいささかならず複雑な気分ではあったが、マナの気持ちも痛いほどわかったので、素直に内心を答えることにした。

「ぼくがまだ、ミューザに勝てないからだ」

そう、だから、ずっと彼女に勝ちたかった。

試験で一度だけでもミューザよりいい成績が取れたら、気持ちを告げようと思っていた。

「男の子って、面倒なのね」

思わずくすつと笑ったマナの小声が、エリスバートに届かなかつたのは幸いか。

思惑どおり、状況も忘れて、ついふたりが気恥ずかしく、浮き足立つ気持ちになって笑い出しそうになった時　、

「あ……ッ」

唐突に自分たちの周囲を暗い影が覆い始めたことに気づき、エリスバートとマナは揃って足を留めた。

すでに暗闇に紛れかけていた町。それをさらに囲う暗い影。

「おまえは　」

影の中からゆっくり現れたのは、あの黒ずくめの男だった。

エリスバートとマナを見て、蠅のように白い顔で、赤い唇を持ち

上げる。

エリスバートは、咄嗟にマナを背後に庇った。

「血が足りないんだ、まだ」

男が、にやにやと笑みを浮かべながらそう言った。

「祭司さまたちを殺したくせに……ッ！」

エリスバートの言葉に、マナが後ろで大きく震える。男が、不愉快な声を立てて笑った。

「まだまだ足りない。思った以上に時間と手間がかかるんだ。おまえの母親を」

「やめろ！！」

マナに聞かれたくなくて、エリスバートは絶叫した。男は鼻先で笑っただけだった。

「おまえに用はない。そこを退け」

エリスバートに近寄った男は、その肩を押し退けてマナに手を伸ばそうとした。エリスバートは男に体ごとぶつかりそれを阻む。男の体は思ったよりずっと軽く、簡単に濡れた地面へ尻餅をついた。

カッと、男の頬のような頬が羞恥の赤に染まる。

「このッ」

「マナ、逃げる！」

理由はわからない。だが、男がマナを狙っていることは明白だ。

とにかくこの場からマナを逃がそうと、彼女の方を振り向いたエリスバートは、彼女が両手を胸の前に組み合わせて何かを呟いていることに気づき、目を瞪る。

「『主は我が守護者、我が神は我が避け処、我は神に因りて望みを抱く』」

（御詞を）

ただたどしい口調ながら、マナは聖教典にある詞を唱えていた。

「マナ、きみ」

「小賢しい！」

立ち上がった男がマナに襲いかかろうとするのを、エリスバート

はまた体当たりで止めた。

「『光よ、我が佑けとなりて闇を払い、邪悪を討ち滅ぼし給え！』」
渾身の力で叫び、手を振り上げたマナの指先から、鈍い光が生まれて男の方へと流れた。

「ぐ……ッ！」

光はエリスバートの体を包み、その腕が抑える男の体を灼いた。

(すごい、これが)

初めて目の当たりにする、癒し以外の聖なる力に、エリスバートは驚愕した。そしてマナがそれを使えるということにも。

「おのれ、小娘が……ッ」

体を灼かれてよるめいたはずの男は、だがすぐに体を立て直し、屈辱の呻きを洩らしてマナを睨みつけた。

大した打撃を受けていない。白い顔が、少し爛れたように赤くなっているだけだ。

男が両手を持ち上げ、それが魔導を使おうとする動きだと気づいたエリスバートは、咄嗟に地面に落ちていている小石を拾って男の眉間に当てた。叫び、顔を押しさえる男にもう一度体当たりを喰らわせようとしますが、気づいた時には腕で顔を払われ、泥水の中に倒れ込む。「バーティ！」

悲鳴を上げるマナが、エリスバートに駆け寄るよりも早く、男が彼女の腕を掴んだ。

「いやっ、離して！」

「マナ！」

打ちつけた体の痛みを耐えて立ち上がったエリスバートの背を、男の靴が容赦なく蹴りつける。それでも地面に手をつき、身を起こしかけたエリスバートの上から、酷薄で陰気な声が降ってきた。

「生意気なクソ餓鬼……これでも喰らいな」

早口に唱えられる詞。感覚で、それが決して聖の領域にある響きではないとエリスバートが悟るよりも早く、その背をこれまで覚え

たことのない痛みが貫いた。

「……………」

激痛に、悲鳴すら出なかった。

「バーティ！ やめて、お願いやめて！！ バーティ！！」

マナの絶叫が響く。

背中から、体の内部まで鈍く昏く、重い苦痛が入り込み、エリス
バートは一瞬のうちに視界を失う。

「離して、いやよ、いや…………ツ、助けてバーティ、助けて、ミュー
ザー！！ 助け」

不意に、泣き叫んでいたマナの声途切れた。

その理由をたしかめることもできず、エリスバートは呼吸のでき
ない体を持って余し、恐怖で気がふれそうになるのを堪えるために、
爪の先で地面を掻いた。

「…………ツ…………は…………！」

しばらくもがいた後、唐突に呼吸が戻ってきて、思い切り息を吸
い込む。嘔吐しながら、エリスバートは何度も空気に肺を入れた。

（生きてる）

あの衝撃を受けた時、エリスバートは自分が死んでしまうのだろ
うかと思った。殴られたのとも、病を得たのとも違う。総毛立つよ
うな不吉な感覚。

あれがおそらく、黒魔導。

（マナは）

強く目許を擦り、震える体を起こして辺りを見回したが、雨に消
え入る景色以外に見えるものは何もなかった。

あの男に、マナは攫われてしまったのだ。

そしてひとつ、エリスバートにはわかったことがある。

（聖なる力を持つ人間が狙われているんだ）

ラルも、神学校の生徒も、もちろん教会の人間も、そしてマナも。
全員が聖なる力を持っている。

エリスバートは、いつか弟から聞いたおそろしい話を思い出した。

「妖霊の好物は、聖なる力なんだ」

授業で教わった話を、クレデイスはよく大好きな兄にしてくれた。理屈はまだわからないらしいんだけど、だから、悪い力を持つ人が黒の魔導を使おうとする時、より強い力を使おうとすればするほど、必要になるのは自分の妖力と、妖の領域にあるものと、聖なる力を持つ人間なんだって」

もし、あの男がやろうとしていることが、本当に自分たちの母親をこの世に還そうとするものであれば。

それはきつと、考えもつかないほどたくさん力を、犠牲を、必要とするのだろう。

「……ツク」

エリスバートはまだ痛む体を押さえ、手近な樹の幹に掴まりながら立ち上がった。

（クレデイスかが危ない）

あの家で聖なる力を持っているのは、クレデイスだけだ。

父親がいるのなら、決して弟に手出しをさせることはないだろうと、そう思うのに、エリスバートは自分でその心を信じていることができなかった。

リエインはもう、これまでの彼ではない。

体を引きずるように歩きながら、長い時間をかけ、ようやくエリスバートは自分の家に辿り着いた。身の内が灼けるように熱い。だが、それに構っている暇はない。

「クレデイス　クレデイス！」

玄関の扉を開くと、エリスバートは泥まみれのまま弟の名を呼んだ。

家の中は、相変わらず誰もが息をひそめるように、しんと静まりかえっている。エリスバートは弟の部屋に向かったが、その中に誰もいないことをたしかめただけだった。食堂にも、客室にも、エリスバート自身の部屋にも人影はない。女中部屋を開けると、部屋住まいの使用人たちが身を寄せ合って震えていた。クレデイスの行方

を訊ねるが、誰もそれを知っている者はいなかった。クレデイスの世話係の姿もどこにもない。

「クレデイス、どこにいるんだ！ 兄様に姿を見せてくれ！」

「どうした、エリスバート。騒がしい」

手当たり次第のドアを開けて弟の名前を呼んでいたエリスバートは、自室から出てきた父親の姿に、それでもほっとした。

（父様はここにいます）

ならば、まだ元に戻る望みはあるのかもしれない。

「父様、クレデイスが見あたらないんです。どこにいるかご存じですか？」

父親は、訊ねるエリスバートに向かって笑った。

エリスバートがずっと尊敬する、優しく、聡明な父親の変わらない笑顔だった。

「クレデイスなら、あのお方が連れて行った」

笑ったまま答えたりエインに、エリスバートは言葉を失う。

「……何を……父様……あなたは一体……」

かろうじて、喘ぐように、それだけ音になった。

「テイレイを再び生き返らせる力になるために、あのお方が連れて行ったのだ」

絶望を、エリスバートの全身が占めた。

「クレデイスも嬉しいだろう。あの子はテイレイに会いたがっていた。無理もない、まだ十を過ぎたばかりの子供なのだ。可哀想に」

「……父様……」

「でもエリスバート、おまえも喜びなさい。クレデイスは再び母親に会えるばかりか」

にっこりと、ここから嬉しそうな笑顔で、リエインが笑う。

「テイレイの、その血肉となれるのだから」

（ 狂ってる …… ）

エリスバートは、父親から目を逸らし、物音の聞こえる二階の廊下へと視線を上げた。

いつの間にか、あの黒づくめの男の姿が家の中にある。叫び出したいのに、エリスバートはそうすることができなかった。

黒い、闇のように黒い男の服。白い貌。赤い唇。

(クレデイス……)

男の両手が、血に濡れている ……。

「どこへ行く」

しばらく黙り込んだ後、自分に背を向けドアに手を伸ばすミューザに気づいて、ファムスがそう訊ねた。

「わからないわ」

ミューザは苛立ちを堪えるような声で答える。

「わからないわよ、でも、町に危険があるのに黙っているわけにはいかない」

「おまえに何ができる」

「何もできなくても！」

振り向き、ミューザはファムスを見返した。

「できることを探すわよ、何もできないなんて理由で何もしなくていいはずがない、それがあたしの矜持よ！」

結局ファムスは、町に悪いものがいると告げただけで、ミューザにそれ以上のことを教えてくれようとはしなかった。

本当に知らないのか、知らないふりをしているだけなのか。

ミューザにはわからなかったが、とにかく、自分がここでただ何もせずにいるだけでは仕方だないことだけは、わかっていた。

(何かあるはず、あたしにもできることが)

些細なことでもいい。もしその『悪いもの』を直接退けることができなくても、たとえばセルバンのために部屋を暖めようとしたように、誰かの助けにはなるかもしれない。

扉に触れようとした時、ミューザはその向こうから水を跳ねて誰

かが近づいてくるのに気づいた。

何だろっ、と思うより早く、乱暴にドアを叩く音がする。

「出てこい、黒の魔導士め！」

ミューザは驚いて、ファムスの方を振り返った。

ファムスは特に関心を惹かれた様子もなく、普段どおりの顔でドアの方を見遣った。

「出てこなければこのドアを壊すぞ！」

「ラルを返せ、この魔物め！」

「こんなドア破ってしまえ、おい、鍵を壊せ！」

怒鳴り声は、どれを取っても殺気立っている。

(町の人たち　ラルのお母さん)

声はすべてに聞き覚えがあった。ミューザは彼らに声をかけようとして思い止まる。自分が何を言ったところで騒ぎが収まると思えない。狂気に似た気配が、ドアの向こうでわだかまっている。普通じゃない。

「千客万来、だな」

ファムスは軽く肩を竦めて、息を吐きながらそんなことを言った。

「何を呑気なことを！」

ドアを壊そうと、何か重いものがぶつかる音がしている。鍵が掛かっていないことにも気づけないほど、全員の心が常軌を逸しているのが、幸いか、あるいは。

ミューザはとにかく時間を稼ごうと、タベのように、障害になるものを捜して辺りを見回した。だが、この家には必要最低限の家具すら見あたらない。もう！と地団駄を踏んで、ミューザは再びファムスを振り返った。

「ファムス、逃げなさい、姿を見せたらあなた、きっと殺される」

「なぜおれが」

焦るミューザに、ファムスはまったく他人事のような顔をしている。

「いくらあんたが性格悪くてムカつく奴でも、目の前で死なれちゃ

寝覚めが悪いのよ！ それに町の人たちを、そんな罪に手を染めさせるわけにはいかない！」

「やれやれ……おまえもやりたいことだらけの人間か。あれを護りたい、これを護りたいと、ご苦労なことだ」

「茶化さないで、いいからほら、窓からでも外に行つて！ あたしがみんなを止めるから！」

ミューザがファムスを怒鳴り終わらないうちに、とうとう安普請のドアが壊れた。

振り返つたミューザは、ルカを先頭にして、思った以上に集まっている町の人たちに言葉を失つた。十人以上はいる。

そして全員が鉞や、杖や、鋤を手にしていた。明らかな殺意を顕わにして。

「違うの」

咄嗟に、ミューザはファムスを背に庇い、ルカたちの前に立ちただかつていた。

「おどき、ミューザ。そいつをあたしたちの方に渡すんだ」

ルカは光を失くした瞳で、ミューザのことを睨めつけた。じりじりと、大人たちがミューザの方へ近づいてくる。

「そいつは忌まわしい黒魔導士だ。この町に滅びをもたらす魔物だよ」

ミューザは必死に首を振つた。

「違うの、この人はそうじゃないのよ、この人は」
「言いかけるが、言葉が続かない。」

（この人は（、、、、、）、何（、）（？））

自分が何を言おうとしたのか、ミューザにはその言葉が理解できない。

「……そう、そうかい、ミューザ」

混乱しかけたミューザは、笑いを含んだルカの声に、自分を取り戻した。

「あんたももう、その魔物に取り込まれてるんだね」

「ルカ、みんなも、待って！ やめて、この人を傷つけちゃいけない！」

叫ぶミューザの言葉に耳を貸さず、ルカたちは手にした得物を構え、まずはミューザの方へ襲いかかろうとした。

ミューザの後ろでそれを見ていたファムスが、面倒そうにひとつ舌打ちして、片手を上げ口を開く。

「暗黒の使者、妖に生を享ける者ども」

「光よ！ 闇に囚われし魂に一時の安らぎを！」

ファムスが詞を唱え終えるより先に、町の人間の背後から、闇を裂くような鋭い声が響いた。

「！」

刹那、眩い光が辺り一帯を染めて、ミューザは咄嗟に目を瞑った。聞こえた声に心が躍る。

「セルバン！」

すぐに目を開けると、ルカたちが全員床に倒れ伏し、その後ろに息を切らしたずぶ濡れのセルバンが立っているのが見える。

ミューザはルカたちを避け、自分たちの方へ歩いてくるセルバンの許へ駆け寄った。

「セルバン、助けに来てくれたの！」

首に抱きつくミューザを、セルバンが両手で抱きしめる。

ミューザの背を抱きながら、セルバンは掌で顔を覆っているファムスの方を見遣った。

「大丈夫ですか」

「ああ」

ファムスの声音は、おもしろくなさそうだった。

「術を使うなら一声かけて欲しいもんだ。少し目が灼けてしまった」「申し訳ありません、余裕がなかったものですから」

「まあ、いい。大したことはない」

ファムスは掌を顔から離し、床で倒れているルカたちを見下ろした。セルバンも同じく、彼女たち町の人間を見下ろす。

「急激に、とてもよくない波動が生まれるのを感じました。おそらく何者かがルカたちを操ったのでしょう」

「魔導だな」

簡単な口調で言ったファムスの言葉に、セルバンも頷く。

「少しの間眠らせたただけだから、すぐに目を覚まします。そうすればまたあなたを襲うために暴れ出す」

「胸くそ悪い。こっちに罪を押しつけるつもりか」

「彼らにかけられた術を解くには、少し準備が必要です。教会の祭司が殺されました。今のこの町の力では、そんな大がかりな術は使えない。あるいは術をかけた者を倒すしか道はありません」

セルバンの首に縋りながら、淡々と話すその声を、ミューザは聞いている。

（そんなひどいことをする、強い力の持ち主を、誰が倒せるっていうの……）

「あなたはここから移動してください。申し訳ないけれど、ここにルカたちを閉じこめさせてもらう。少しは時間稼ぎになりますから」

「面倒だ」

言葉どおり、億劫そうに顔を顰めたファムスに、セルバンはにっこりと笑って見せた。

「この人たちを雨の中全員担いで運ぶよりは、ミューザとふたりで逃げた方が楽でしょう？」

ファムスは内心で肩を竦めた。

（割と喰わせ者だな、こいつは）

笑ったまま、当然のように言ってくれる。

「セルバン」

セルバンの胸に押しつけていた顔を上げ、ミューザは不安げな目になった。

セルバンが、それを間近で覗き込む。

「いいかい、ミューザ。君は、ファムスと一緒に行くんだ。彼と一緒になら安全だから」

「でも、セルバンは」

「今、聖なる力を持つ人たちが、力を合わせて学校に結界を張っている。無事な人を護るために。それがすんだら迎えに行くから」

ぎゅっと、ミューザはセルバンの袖を両手で握り締めた。

「きつとだよ、きつと迎えに来てね」

「……もちろんだ。君がいるところなら、僕は決して見失わない。必ず迎えに行く。だから、待っていなさい」

もう一度、ミューザはセルバンの首に両腕を回した。

セルバンはそれを抱き締め返し、しばらく堅く目を瞑ると、何かを振り切るようにミューザから両腕を離した。ファムスの方へと向き直り。

「ミューザを、よろしくお願いします」

丁寧な口調で言って、セルバンがファムスに頭を下げた。

ファムスは諦めの溜息を吐くと、仕方なしに頷いてみせる。

「あんたはなるべく早くこの娘を迎えに来てくれ。跳ねっ返りの世話は苦手だ」

「何よ、その言い種は!」

ファムスの悪態に、ミューザは反射的に顔を上げて相手を睨みつけた。

様子に、セルバンが声を立てて笑う。

「その元気があれば、大丈夫。ミューザ、行っておいで」

「……うん」

セルバンに、ミューザはどうにか笑顔を作り、頷いた。

さっさと歩き出すファムスに続き、ミューザも壊れた玄関から外へと出て行く。

「セルバン　気をつけて」

心から言ったミューザに、セルバンも微笑する。その姿に安心してから、ミューザはミューザは彼に背を向け歩き出した。

セルバンはしばらくの間、ミューザの後ろ姿を見送り、それから、自分のなすべき仕事を始めた。

第五章『雨と闇』

雨の中をファムスの後をついて歩きながら、ミューザはようやく、
(マナに無事だと伝えなくては)
と思い至った。

「ねえ、どこに行くのか決まってるの！」
女のミューザの足を顧みず、どんどん早足で進むファムスに小走りに追いつき、ミューザはその服を掴むと大声で訊ねた。雨の音がうるさくて仕方がない。

「知るか、だからおれはこの町であの家しか居たことがないんだ！」
「じゃあ、あたし行きたいところがあるの！　そこならきっと安全だから、行こう！」

ミューザはファムスの答えを待たず、マナの家のある方へ進路を変えた。

ファムスは言葉どおり、行く当てがないのか、黙ってそれについてくる。

(マナに、無事だと伝えて……何も変わりがないようなら、ファムスとあそこにいよう)

ファムスの風体はいかにも怪しかったが、マナやその両親になら、話してわかってもらえるかもしれない。

(……マナの家族まで、ルカのようになっていたらどうしよう)
不安になる心を叱咤して、ミューザは急ぎ足で道を進んだ。

それから、進む先、道の脇に生える樹にぼんやりと白いものが浮かんでいるのに気づく。すでに真っ暗になった夜道で、その白だけが目に焼き付く。

「あれは……」

「おい、道を逸れるな。滑って落ちても助けないぞ」

ファムスの言葉を見殺して、ミューザはその樹の方へと近づいた。道の脇は低い畑になっている。注意深く、転ばないように気をつけ

ながら、ミューザはその樹まで辿り着き、枝に手を伸ばした。

「……これ……マナのリボンだ」

呟きながら、ミューザの心臓が鳴った。

「どうして、ここに……」

ミューザはマナの家の方へ視線を巡らせた。雨が邪魔で、その建物の屋根すら見えない。

「どうしたんだ」

ファムスもそばにやってきた。

「これ、友達のなの。こんなところにあっという間のものじゃない」

「似たものだろう、どこにでもある代物だ」

面倒そうに言うファムスに、ミューザは強くかぶりを振った。

「違う、だってこれ、あたしがマナの十六の誕生日に贈ったものなのよ！」

間違いない。

「ついさっきまでマナが使ってたものなのに！」

マナの部屋で彼女と別れた時、たしかにこのリボンをしていた。

ラルの葬儀から帰ってきて、黒ずくめのものばかりでは気が滅入っ

てしまうと、ふたりとも着替えて、ミューザはマナの髪をときりポ

ンを結んであげたのだ。

「こっちから、西の方に巻きついてるから……向こうに動いたはず」

リボンの様子を見て、ミューザは口の中で呟くと、そのまま道に戻って走り始めた。

「おい！……まったく」

止める間もなく走っていくミューザに舌打ちひとつ、ファムスも彼女の後を追う。

（跳ねっ返りめ）

女なら女らしく、怯えてどこかの家の中で息をひそめていればいいものを、あのミューザという娘はまったくその気が起きないようだ。

できればその襟首を捕まえて、おとなしく、せめて自分の面倒を

増やさないように説教のひとつもしてやりたかったが　ファムスは全力で走るミューザに追いつくのがやっとで、それも叶わなかった。

上手く動かない体がもどかしい。

もともとの数日、思ったように体が動かなくなっていた。

今は、走るごとにさらに体が重くなっている気がする。

（これは……）

ミューザの少し後を歩きながら、ファムスはますます面倒な心地になった。

（魔導が発動している）

誰かが妖力を使い、妖魔を集め、どたかで大きな術を使っている。その力場がこの近くにあるのが、ファムスにはわかった。

「気持ち悪い……」

少しずつミューザの足取りも重くなり、ファムスはそれに追いつくことができた。ミューザは見るからに青白い顔色になって、喘ぐような呼吸をしている。

ミューザにもわかっていた。

何か、嫌な気配が進む先で充満している。

（あつちは）

顔を上げると、見覚えのある屋敷が雨に煙って見えた。

この町の領主リエイン　エリスバートの住む家。

その家が近くなるほど、ミューザの足は萎えたように力が入らなくなっていた。悪い気配に対する圧迫感のせいと、そして恐怖のせい。今まで感じたことのない、心と全身を包む重苦しい感触。

それを振り切るようにミューザは走り、広い門をくぐると、屋敷の門扉に手を掛けた。

「マナ　マナ、エリス！　エリスバート！」

叫びながらドアを開けると、むっと、腥い空気がミューザの鼻を突く。

「こいつは……」

ミューザの後ろで、ファムスもその感じに顔を歪めている。

(血の臭い)

悪い想像を頭に昇らせないように、ミューザは何度もマナとエリスバートの名前を呼んだ。

だが、しんとした屋敷の中で、ミューザの声はむなしく響くばかりだった。

「マナ！ エリス、どこなの！ いるなら、返事をして！」

廊下を進みながらミューザが声を張り上げていると、ひとつの部屋のドアが開いた。

ふたりのうちどちらかと期待してその方を振り返ったミューザは、見覚えのある男が現れたことに一瞬落胆し、その半瞬後に全身の産毛が逆立つような、あの不快感を味わっていた。

「おお、ミューザか、久しぶりな。おまえも祝いに来てくれたのだな」
この家の主人は、ミューザの顔を見ると、満面の笑みで近づいてくる。

ミューザは思わず後退さっていた。リエインの目は赤く血走り、口の端から涎が糸を引いている。目の焦点がまったく合っていないかった。

「祝い……？」

「そうとも！ ティレイの祝いだ、宴の準備だ！ 私の妻が帰ってくるのだ、エリスバートはどこだ！ バーティ、クレディスを連れてきなさい、母様に会えるぞ！」

リエインは馬鹿げて大きな声を、家中に響かせてうるうる歩き回っている。

「狂ってる……」

それはおそらく、ミューザだけでなく、誰の目から見ても明らかだった。リエインは、すでに気がふれている。

「鬱陶しいな」

短くそう感想を洩らしたのは、ファムス。つかつかとリエインの前に進み寄り、片手をその焦点のぼやけた目の前で軽く振る。

フツと、リエインの瞼が落ちて、その両膝が柔らかい絨毯の上についた。ファムスがひよいと体を避けた辺りに、リエインが体ごと倒れ込んだ。

「何をしたの」

「眠らせただけだ」

訊ねたミューザに、こともなげにファムスが答える。

それよりも、とファムスが辺りを見回し、綺麗な顔を大仰に顰めた。

「何て妖力だ。妖霊がうじゃうじゃいやがる」

聖なる力も妖力も持っていないミューザには、妖霊の姿は見えなかったが、空気がひどく腥く重いことだけは嫌というほどわかった。「あなたも黒魔導士なんでしょう。妖霊の気配は気持ちいいものではないの？」

「自分の支配下にいない妖霊なんて、生ごみと同じ程度に邪魔だし不愉快だ」

そう答えながら、ファムスはより妖霊の気配のする方へと歩き出した。ミューザもそれに続く。

「……地下室……？」

廊下を進むうちにそれが行き止まり、扉が目についた。ファムスが躊躇なくその把手に手を掛けると重い鉄扉が開く。現れたのは、地下へと続く階段だった。

ファムスに続いて階段の方を覗き、ミューザは瞬時に半歩身を引くと、腕で口許を押さえた。

ひどい臭気だ。

「ここも、血の匂い……」

悪酔いしそうなほど、それが充満していた。

ここにマナやエリスバートがいるのではと思っただら、ミューザは気が遠くなりそうだった。

「ファムス、その明かりを取って」

それでも立ち竦んでしまうわけにはいかず、ミューザは暗い階段

に目を凝らしながら、隣のファムスに言った。ファムスは気丈なミューザの態度に感心したのか、呆れたのか、とにかく肩を竦めて廊下に掛かっていたランプを手に取った。みゅーざには渡さず、自分で持って階段を下りていく。

ミューザもすぐ後に続いた。

地下室は狭い階段の下に、広い廊下があった。両脇にいくつかのドア。空いたドアの隙間からミューザが覗くと、そこは書庫であったり、酒蔵であったりするようだった。大きな屋敷によくある、ごく普通の地下室だ。

廊下のランプには火が灯されておらず、空気も悪い。澱んでいるようで、視界が上手く利かなかった。ファムスが手にした。ランプの灯りだけが頼りだ。

ファムスの後ろを進んでいたミューザは、彼がより血腥い方へ進んでいるのがわかった。次第に空気が重さを増していく。歩きたび、ミューザの心臓が跳ね上がった。ひどく緊張している。マナやエリスバートたちの名前を呼びたかったのに、自分の足音にすら心が疎んでしまうようで、むしろ息すらひそめてしまう有様だった。

(マナ エリス、どうか無事で)

祈るように、ミューザが両手を胸の前で握り締めた時、ファムスがひとつの部屋の前で立ち止まり、そのノブに手を掛けた。

ゆっくりと、それをファムスが開く。

「誰だ」

嫌な低さの声がミューザの耳に届いた。低いのに金属が擦れるような音に聞こえる。不快な声だった。

ミューザはファムスの体の横から、そっと顔を出し、部屋の様子を窺った。

そして、大きく目を見開く。

「マナ！」

食卓のように大きなテーブルの上に、マナが仰向けになって横たわっていた。

目を閉じたマナの横に、頭からマントを被った、黒ずくめの格好をした男が立っている。ぱさつく髪が異常に長い。顔色はひどく悪く、白皙などと言えるものではなくて、屍蟬のようだとミューザは思った。

「マナから離れなさい、その子に触れないで！」

男の、黒く塗り込められた尖った爪が、マナの背筋に宛がわれている。テーブルの上に漏斗と、その下に広い桶のような器があった。何をするつもりなのか、ミューザはすぐに察した。

（マナの血を）

「何だ貴様は。俺に命令するな、小娘が」

男は、現れた少女と、自分と同じような格好の男に不快げに顔を歪めた。

男も不愉快だったが、ファムスの方がさらに輪を掛けて不愉快だった。

「まさか、これと一緒にくたにされてたつていうんじゃないだろうな」
何て悪趣味で美しくない男だ、とファムスはその姿を見ただけでうんざりしていた。髪は手入れされていないし、顔は馬鹿みたいに白く何かで塗りたくられているし、極めつけは赤い唇と黒い爪。まるで出来損ないの女のような。しかもとびっきりの醜女。

「醜悪だ」

「貴様も何だ！ 何をぼそぼそ言っている！」

怒鳴る声まで下品で、ファムスはこの男と同じ空気を吸っているのすら嫌になった。

（こいつ、人間だな）

うんざりしながら、ファムスはそう確認した。妖魔ではなく、生粋の人間だ。

「マナを返して！」

ミューザが叫ぶ。すぐに彼女の許に駆け寄りたいが、相変わらず男の尖った爪がマナの首筋に当てられているから、タイミングが掴めない。

「ふん、あの娘を取り戻せばいいのか」

ミューザに進んで協力するつもりなんてなかったが、とにかくこの不愉快な男を叩きのめしたくて仕方がなかったファムスは、そう呟くとスツと目を細めた。

「その辺にいる妖霊ども」

微かに、ファムスを取り巻く空気が震えたのが、ミューザにもわかった。本能的に、ファムスから数歩後退さる。

「おれの声を聞け、そしておれに従え」

「愚か者め！ この町にいるすべての妖霊はおれの支配下に
な
っ！」

ファムスを嘲笑いかけた男の顔色が、すぐに変わった。

「な、な、何を……馬鹿な……ッ！」

「バカはおまえだ、愚か者の極みが」

蒼白になる男を見遣り、ファムスは壮絶に嫌味な顔で笑った。

「格つてものが違うんだよ、おまえ程度の小虫とこのおれではな。さあ行け妖霊ども、おまえたちを縛りつけていたあの醜い男に、せいぜい礼をくれてやるがいい！」

ファムスが男に片手を向けると、その背中から黒い風が沸き起り、男めがけて走り出す。

「マナ！」

男のそばにはマナがいる。ミューザはファムス突き飛ばすように駆け出し、マナの体を抱き寄せてテーブルの下に庇った。

「うおおおあああ！」

聞き苦しい男の叫びと共に、ぼとぼと、何か液状のものが床に落ちる音が響いた。ミューザは床に視線を滑らせる。

錆びた金属を含んだような、ねっとりとした液体が男の体から零れ落ちていた。

「な……なんだ貴様、その力は一体……！」

男は明らかに狼狽し、声を裏返してファムスから離れようとして、自分の零した液体で足を滑らせ床に尻餅をついた。

滑稽な男の様子に、ファムスが容赦なく笑い声を立てる。

「道化が。殺されたくなかったらおとなしくそこで震えている」

「何、何者なんだ、き、貴様、名を名乗れ」

「貴様などに、おれの名など勿体なくて名乗れるものか」

ファムスがわずかと男のそばに近づくと、男は「ひいっ」と情けない悲鳴を上げ、そのまま昏倒してしまった。

「……なんだこいつ。殴ってやろうと思ったのに、触りもしないうちに気絶しやがった」

「よっぽどあなたの顔が怖かったんでしょ」

ミューザは立ち上がり、マナを抱き締めようと腕と足に力を籠めた。

だがいかにマナが小柄とはいえ、同じ女のミューザにそう簡単に抱き上げることはできない。

「退け」

ファムスが、今度はミューザたちに近づくと、軽々マナの体を抱き上げた。

「まだ人がいるな」

マナを抱き上げたまま、ファムスが廊下の方へと視線を向けた。

「子供の声」

ミューザも気づいて呟いた。どこからか、か細い子供の声がしている。幼い男の子のものだ。

「いなくなっただっていう、神学校の生徒かもしれない！」

ミューザは希望を持って、部屋から廊下に走り出た。耳を澄まして、泣き声のする方へと近づいていく。後ろから、マナを抱えたファムスもやってきた。

(ここだ)

先刻マナがいた部屋のごく近くにあるドアから、泣き声が聞こえている。ミューザはすぐにそのドアを開け放った。

男の子の泣き声が、大きく聞こえるようになる。

見ると、広い部屋の中で、小さな男の子が床に座り込み、泣き

じやくつていた。

「クレデイス……？」

ミューザには、その横顔に見覚えがあった。泣いている子供は、エリスバートの弟のクレデイスだ。

クレデイスの方を見遣ったミューザは、座る彼の目の前にあるものに気づくと、ぐらりと体を揺らした。体だけでなく、頭も平衡感覚を失い、そのまま床に崩れ落ちそうになる。

それを免れたのは、すぐ真後ろに来たファムスの体に背中がぶつかったからだ。どつと、思いがけない衝撃に、わずかだけ頭が覚醒する。

「……」

震える息を飲み込み、ミューザは自分では歩いているのか立ち止まっているのかわからないまま、クレデイスの方へ近づいた。

クレデイスの前に俯せに横たわる少年の体。

床に大きく広がる血の池の中で、身じろぎもしていない。

ミューザはその体の前に、つんのめるようにして膝をついた。

「エリスバート……！」

ミューザの叫び声に、ぴくりと、エリスバートの背中が揺れた。

横向きに血だまりへ置かれた顔の、瞼がゆっくりと開く。

「……その名前で……呼ぶなって……」

「エリス！」

生きてる。ミューザは泣き声でもう一度エリスバートの名前を呼び、血だまりから彼を救うように、その体を仰向けた。

力なく、ミューザにされるままになりながら、エリスバートがその顔を見上げてちよつと笑う。

「泣くなよ、ミューザ……きみらしくもない」

「エリス、待ってて、今誰か人を呼んで」

震える足で立ち上がるうとしたミューザは、部屋の向こう、闇に紛れた中でぐちゅりと何か気味の悪い音がしたのに気づき、身を震わせた。

「何」

暗くて、よく見えない。ミューザは音のする方へ目を凝らす。いつの間にか近づいてきていたファムスが、マナを床に置き、手にしたランプを部屋の隅へ向けて掲げた。

「……っ」

ミューザは咄嗟に悲鳴を飲み込んだ。

部屋の隅にあったのは、まるで人間の形のようなモノ。

人間になりきれず形を崩す、濁った肌色の塊。

立ち上がるうとしてはさらに崩れ、耐え難い粘着質な音を響かせている。

「ティレイ……」

力ないエリスバートの声が聞こえて、ミューザは彼に視線を戻す。

「あれは、ぼくの……ぼくやクレデイスの、母だ……」

「！」

ミューザは息を呑み、両手で口許を覆った。

(反魂……?)

決して人が踏み入ってはならない、闇の領域。

「……父が……母を、蘇らせようと……」

言いかけたエリスバートが咳き込み、唇から赤い血を吐く。

(体の中がやられてる)

助けたいのに、ミューザは何もできない。ただ、血に濡れきったエリスバートの手を握ることしかできなかった。

「すまない……すべて父の妄執が……止めようとしたのに、ぼくのかでは」

父親の願いを、その狂気を知った時、止められるのは自分しかない。エリスバートはあの黒づくめの男に向かっていった。

だが聖なる力も、妖を操る力もないエリスバートが、あの男に敵うはずもなかった。

エリスバートの母親の形をした塊は、何度も立ち上がるうとしては、力なく床に崩れ込んでいる。クレデイスは兄の名を呼び泣きじ

やくつていた。

ふつと、エリスバートが瞼を閉じ、ミューザは青ざめた。

「……残念だ。最後まで、きみにテストで勝つことができなかった」
微かな、掠れた小さな声でエリスバートが言った。それを聞き取り、ミューザはきつくエリスバートの手を握り締める。

「何言ってるの、こんな時に！」

叱りつける口調のミューザに、エリスバートは小さく笑ったようだった。

「……聞いてくれるか？　ぼくはさ　ただ、自信がなくて、言えなかったんだ。たったひとつでも、ミューザ、きみに勝ったと……
思えることが、なけりゃ」

「もう喋らないで、エリスバート！　バーティ！！」

「……泣くなよ、ミューザ……」

エリスバートはわずかだけ瞼を開いてミューザを見上げ、笑って力なく呟くと、そのまま再び瞳を閉じた。

「駄目、エリス！！」

ミューザは絶叫した。ミューザの握る手から、急速に力と熱が失われていく。

「目を閉じちゃ駄目、エリス、あたしを見て！　眠ってしまったては

駄目！」

焦燥しながら、強く、ミューザは両手でエリスバートの手を握り締めた。その手を揺らし、瞳を閉じたままのエリスバートを叱咤する。

「きみ、あたしに勝つんでしょ！　勝って、何か言いたいことがあるんでしょ、起きて！　起きなさい、エリスバート！　何を言うつもりだったのか聞かせてよ！！」

「よせ」

叫び続けるミューザを、ファムスが後ろから静かに止めた。

「もう死んでる」

「ッ！」

ドツと、ミューザはエリスバートの手を握ったままの拳を床に叩きつけた。

度し難い怒りが、ミューザの全身を包む。

「冗談じゃない！ 冗談じゃないわよ！ あたしは認めない、こんな
な
」

怒りと たとえようのない悲しみが、ミューザのすべてを覆う。

「こんなことつて……ッ！」

こんな死が許されるはずがなかった。

まだ温かさを残すエリスバートの両手を、それでも何もできず、ただ握り締めるばかりのミューザの耳に、低く嫌な音が届いた。

「妖霊……闇の火……夜の眷属よ……」

「……」

ミューザは怒りに満ちた目で振り返る。

部屋の入口から、這いずるようにあの黒ずくめの男がやってきて、ぶつぶつと言葉を連ねている。

「おまえ よくも」

どんな手を使ってでも男を傷つけてやろうとその姿を見据えたミューザは、男の声に呼応して、部屋の隅にいる肌色の塊が苦しげに身もがいていることに気づいた。

「やめて！ やめなさい、もう眠らせてあげて！」

顔はなく、表情などわからないのに、ミューザには『彼女』の悲しみがわかった。

すでに死んだはずの体を、魂を、無理にこの世に連れ戻され、愛する息子の死を目の当たりにしている。

悲しく、辛いはずがなかった。

「おかしい……なぜだ、なぜうまくいかない」

男はミューザの言葉にも耳を貸さず、ただ相変わらずぶつぶつと呟き続けている。

「あの本は間違っていたのか、いや、そんなはずは……あの方の下さった本が、そんな」

ひとり呟く男を見遣り、ファムスは鼻先でその様子を嗤った。

「なぜって、あたりまえだ。何の本とやらを読んだのかは知らないが、貴様のような小者に、反魂なんて大それた術が使えるわけもなかるう」

そう吐き捨て、ファムスは片手を持ち上げ男の方へ向けた。

「餓別代わりだ、本物の魔導というのがどんなものか教えてやる」

「やめて、ファムス！」

今度こそ男の息の根を止めようとしているファムスに気づき、ミューザが声を上げた。

ファムスが動きを止め、ミューザの方を振り返る。

「……やめて、その人を殺さないで」

懇願するミューザに、ファムスがからかうように「やれやれ」と肩を竦めた。

「お優しいことで」

「違う」

男を見据えながら、ミューザは首を振った。

「殺して楽になんかしてやるものか。生きて償うんだ」

死んでしまえばそれでおしまいだ。慈悲深い神に、死を持って許されてしまえば、誰も苦しんだ代償を味わうことがなくなる。

だったら、生きたまま苦しめばいいと思った。

エリスバートの父親も。

「だそうだが」

ファムスは未だひとりごとを止めない男の方へ近づくと、その背を思い切り足の裏で踏み躪った。

「ぐ……ッ」

「せいぜい半殺しくらいで許してやるさ、おれは割合慈悲深いたちだからな。死んだ方がましな程度にしておいてやる」

「お、おのれ……おのれおのれ、貴様ら、許さんぞ……ッ」

わめく男の背に、ファムスがさらに体重を乗せる。ファムスの分の体重だけではない重みが、男の背中にのしかかっているはずだ。

「地獄に堕ちる、貴様ら……覚悟しろよ、あのお方が、貴様らのよ
うな虫けらなどすぐに滅ぼしてくれる……ッ」

「何を言ってるやがる、誰の助けを借りているのか知ったことじゃないが、てめえで手が下せないのならきんきんとわめくな、野良
犬風情が」

虫けら、などと言われたのが癪に障り、ファムスはぎりぎりの手
加減をして男の背中を蹴りつけると、あとは妖霊を使って男の意識
を奪った。あっけなく、男が泡を吹いて床に倒れる。

「……エリス……」

そんなふたりの遣り取りを見る様子もなく、ミューザはエリスバ
ートのそばで泣きじゃくっていた。クレディスは兄の亡骸に俯せ、
もう声も出せずにただ震えている。

「どうしてエリスがこんな……」

ミューザの泣き声に、ファムスに運ばれて床に横たわっていたマ
ナが、意識を取り戻した。

「……ミューザ……？」

目を覚まし、聞こえた声にマナは首を傾げる。自分のおかれた状
況がわからず、戸惑いながらも身を起こし、泣いているミューザの
そばに近づいた。

「ミューザ、バーティ……？」

意識がまだはつきりしていないのが幸いか、マナは血まみれのエ
リスバートを見ても、それが現実感を伴わず、不思議そうに名前を
呼ぶことしかできなかった。

ただ、泣いているミューザが可哀想で、悲しくて、マナはその背
中を宥めるように触れた。

悲しみに身動きも取れなくなるミューザのそばに、カサカサと、
奇妙な音が近づいた。枯れ枝のような手と足を持つ、下級の出来損
ないの妖魔。

人の悲しみにつけ込み、心を取り込んでしまおうと、ミューザの
方へ手を伸ばす。

しかしミューザに触れるより早く、妖魔の体が雷に打たれたように震えて碎け散った。

「無礼者」

静かな、だが容赦の見えない声が、碎けた妖魔の上に降る。

その声に、ミューザは泣き濡れた顔を上げ振り向いた。

「セルバン……」

現れたのは、セルバンだった。

「いなくなった子は……？」

どんなことでもいいから希望を繋ぎたくて、ミューザが問いかけるが、セルバンは黙って目を伏せた。

それでミューザは察する。

「……別の部屋で、服と、髪だけは残っていたよ。家族に渡してあげなくちゃ」

ミューザは拳を握り締め、嗚咽を漏らした。

口惜しさに言葉を失くすミューザのそばに、セルバンがそっと近づいた。

「……セルバン……」

震える泣き声で、ミューザはセルバンに呼びかける。

「……エリスを助けて……友達なの……町や人の未来を考える、とても優しい人なの……こんなところでいなくなっていい人じゃない……」

セルバンは、ミューザのそばに斃れた小柄な少年を見下ろした。

「エリスバート。彼はまだ、体が残っているね」

ハッと、セルバンの言葉にミューザは顔を上げる。

自分を見上げるミューザに、セルバンは視線を遣らず、代わりに部屋の隅で壁に寄りかかっているファムスへと目を向けた。

ファムスは何も言わずにセルバンを見返す。

セルバンはファムスに向けて少しだけ微笑み、再びエリスバート、それからミューザに目を戻した。

「おいで」

セルバンの優しい呼びかけに誘われるように、マナとクレディスはゆっくり立ち上がった。自然と、エリスバートの周りを囲むような格好になり、床へと跪く。

セルバンはミューザのそばに立ち、その瞼に触れた。

「目を閉じていなさい。エリスバートのことを考えるんだ」

言われるまま、ミューザは瞼を閉じる。どうしてか、自分では何も考えることができなかった。ただセルバンの言葉に従う。

セルバンが、静かに、とても綺麗な詞を紡ぎ出した。光を生み出す強い音。

ミューザはたくさんのエリスバートの表情を思い出す。彼と交わした言葉を、その姿を眼裏に浮かべる。

わけもわからず突っかかれて、苛立ったこともあった。

優しい心に気づいて、その魂を愛しいと思ったこともあった。

(エリスバート……)

かけがえのない友達だと、そう思う。マナと同じように、自分のそばにいてくれた人。大切な人。

見守っていて欲しかった。

見守っていたあげたかった。

過去形ではない、それはミューザの望み。

(ああ)

暖かな光が自分を包んでいることを、ミューザは感じていた。自分を包んで いや、包まれているのではなく、自分こそが光りそのものだ。

目を閉じているのに、マナとクレディスが両手を組み、深く祈っているのがわかる。

そして暖かな光が、体の奥から沸き上がってくる。

なんて優しい気持ち。

すべてのものを包んでしまえそう。

(涙が止まらないよ、セルバン)

絶え間なく、ミューザの目から涙が溢れ、そしてそれが光の珠に

なつてエリスバートの体に降り注いだ。

悲しくないのに涙が止まらない。

希望だけが全身を包む。それが溢れるように涙になった。

「エリスバート、戻ってきて」

気づくと、ミューザはそう口に出して呟いていた。

「あなたの魂はまだ、あたしのそばにある」

そう声に出した刹那、今度は暖かな風が辺りを包むのがわかった。自分から沸き上がる優しい風が、何かを乗せて、ゆっくりとエリスバートに降り注いでいる。

（あ……）

そして、わかった。

部屋の隅で苦しんでいた塊。テイレイの姿。それが、光に包まれながら、風に乗って、ミューザの エリスバートの方へと近づいてくる。

（あなたも、力を貸して）

そつと、心でその魂をミューザは抱き締めた。魂は砕け、光の粒子になつて、エリスバートの全身を覆った。

どれだけ長い時間が経つたのか、それとも瞬きの間だったのか

ミューザがゆっくりと瞼を開いた時、自分を見上げるエリスバートと目が合った。

エリスバートが、眩しそうな顔で小さく笑う。

「……夢を……見ていたようだ……」

ミューザは震える指先で、エリスバートの頬に触れた。優しく問いかける。

「どんな？」

「母様と……きみに、抱き締められる夢を」

「……馬鹿」

ミューザは泣き笑いで、エリスバートの体に顔を伏せた。部屋の中に、いつの間にかファムスの体は消えていた。

第六章 『悪い夢から覚めた町』

ようやく雨が止んだ。

あの悪夢のような夜から明け、ミューザが目覚めると、空には太陽の光がいつぱいに輝いていた。

「晴れた……」

寝台で起き上がり、窓に打ちつけたままき板を剥がせば、明るい光が飛び込んでくる。眩しくて、ミューザはちよつと目を細めた。

「痛てて」

雨の中を全力で駆け続けたせいか、あちこち痛む体を寝台から下ろして、部屋を出る。太陽はもう高い。すっかり昼になってしまったようだ。

「おはよ、セルバン」

「おはよう、よく眠れたかい」

居間に向かうと、セルバンがお茶の準備をしているところだった。訊ねたセルバンに頷いて、ミューザは食卓へとつく。

「あー、おなか空いちやった」

言いながら、テーブルの籠に盛られたパンを手にするミューザを見て、セルバンが笑う。気づいてミューザが首を傾げた。

「どうかした？」

「元気でよかったなあと思って」

「どーせ、起きるなり食欲満点ですよ」

少し拗ねた口調で言いながら、ミューザがパンを千切り、セルバンがますます笑う。

ふたり分淹れたお茶をテーブルに置くと、セルバンもミューザの前に腰を下ろした。

「ねえ、セルバン」

パンを食べる合間に、ミューザはセルバンに呼びかける。

「領主様は……エリスの父親は」

ふと、セルバンは笑みの性質を変えた。苦笑に近かった。

「正気に戻られるまで、もう少しかかりそうという話だよ。ゆうべ議会で、首都に送られて罪が裁かれることに決まった」

「……そう」

首都送りになれば、おそらく、重い罪になるだろう。ミューザはやりきれない思いで溜息を飲み込んだ。

ゆうべ、エリスバートが『戻ってきた』後、子供を捜していた町の人たちも領主の家へと辿り着いた。彼らがやってくる前、セルバンはミューザやエリスバート自身、それからマナやクレディスにも、たった今使った術のことは誰にも言わないようにと告げ、皆それに頷いた。

マナは白魔法を使う許可を得ていないし、それに、全員、おそらく誰にも話さない方がいいことだと、察していた。

町の人たちが、倒れている黒ずくめの男やリエインをみつけ、その体に縄を打つと議会で監視することになった。ややもすれば殺気立ち、男やリエインを傷つけようとする人たちを、セルバンの説得がどうにか宥めた。

エリスバートの家の地下室は、神学校の教師や上級の生徒たちが協力して清めた。あちこちに黒魔導を使った形跡があり、その作業は一晩中かかった。セルバンもその作業に駆り出され、帰ってきたのは明け方のはずだ。もしかしたら眠っていないのかもしれないとミューザは察する。

ルカや、あの時ファムスを襲った人たちは、我に返り、自力でそれぞれの家に戻った。全員、ファムスの家に行ったことはほんやりとしか覚えていないようだった。

「結局、誰も蘇ったりなんてせずに、血ばかりが流れたんだわ」
ひとりごとのように、ミューザは呟いた。

リエインが望んだ、妻テイレイの復活。それは叶うべくもなく、ただそのための犠牲が山積みになった。ラルも、神学校の子供も、祭司たちも、それにテイレイも。

全員、安らかに眠れるように、祈ることしかミューザにはできない。

「エリスバートやクレデイスは、どうなるのかしら」

訊ねたミューザに、セルバンがまた悲しそうに微笑む。

「おそらく、縁者を頼ってドモスを出ることになるだろうね。もうこの町にはいられないだろうから」

「……」

ゆづべのうちにミューザも予測していたことだが、改めてそう聞くとき、辛い。

「今はふたりとも、レスマイル先生のおうちで眠っているよ。朝少し様子を見てきた。回復の魔法を使ったから、エリスバートも明日か明後日には目が覚めるだろう」

「よかった」

ミューザはほっと息を吐いた。エリスバートが元気になる、それだけがミューザの心を明るくした。マナもひどい怪我をすることなく、些細な傷はゆづべ帰る前にセルバンが癒した。

「……ねえ、セルバン」

ミューザはもう一度、セルバンに呼びかける。

「うん？」

優しく問い返したセルバンに、しかし、ミューザは訊ねる言葉を選びきれなかった。

「……ごめん、何でもない」

セルバンも笑っただけで、何も言わなかった。

どう訊ねたらいいのか、ミューザにはわからない。

（あの時どうして）

思い出す、自分の中から沸き上がった光。暖かなもの。

それが一体何なのか、ミューザにはわからなかった。

そしてそれをセルバンに訊ねるのが、怖い。

（どうしてだろう）

聖なる力なんて、ほんの少しでも持ち合わせていないはずの自分

が、エリスバートを呼び戻すための力になるなんて。

だがセルバンは、当然のように、マナやクレディスを誘い、導いた。

マナの力に気づいたように、あるいは、ミューザにも潜在的な力がある、セルバンは知っていたのか。

(……後で考えよう)

とにかく今は、エリスバートが助かったことを喜んでおくべきだと思った。彼が戻ってきたのは、反魂の術のせいなんかじゃない。悪い力じゃない。たったひとつ、ミューザにはそう確信できた。そうじゃなくちゃセルバンがそんなことを許すはずがない。それがわかっていればいい。

ミューザが食事を終えたのを見届けると、セルバンが椅子から立ち上がった。

「出かけるの？」

「うん、魔導に惹かれて、妖霊がここに現れているんだ。住み着かないうちに、全部被ってしまわなければ危ない」

「あたしにできることって、ある？」

セルバンは見るからに顔色が悪かった。休まなければ保たないだろうに、それでもここで立ち止まれる人ではないのは、ミューザも承知している。

セルバンは、優しくミューザの頭に手を乗せた。

「久しぶりに、魚のシチューが食べたいな。あと、くるみのパイも」

「……ん、帰って来るまでに用意しておくから」

セルバンを見送ると、ミューザは少し伸びをして、まだかすかに痛む腕や足を動かした。

「よし」

痛いのは生きている証拠だ。

ひとり気合いを入れて、ミューザはここ数日ですっかり荒れてしまった家の中を片付け始めた。窓は破れているし、床は汚れているし、洗濯物はたまっていくし、さんざんだ。

熱心に片付けを続ける合間に、エリスバートやマナ、そしてファミスのことを考えた。

マナには、夕方にも顔を見せに行こう。エリスバートは、きつと疲れているだろうから目を覚ました報せを受けたら少しだけ会いに行つて、そして、ファミスには。

（お礼、言わなくっちゃ）

ゆうべ、気づいた時にはファミスの姿はリエインの屋敷から消えていた。セルバンに訊ねると、もう家に戻ってしまったのだろうと言う。

ルカたちが睡っているの、大丈夫だろうかと心配したが、彼女たちは無事戻ってきたから、何とかなつたのだろう。

「ファミス、あの人……一体、何者なんだろう」

結局それもミューザにもわからない。

黒魔導士なのはたしかだ。あの忌まわしい、黒ずくめの男と同じ、闇の力を持つ者だ。それも、おそらくあの男よりも遙かに強い力でも、ミューザを助けてくれた。特別ミューザを助けるという意図はなく、成り行きでしかなかったのかもしれないが、少なくともあの男を倒し、マナを運んでくれた。

「まあ、いいか」

呟いて、ミューザは納得する。

自分や、セルバンや、町の人たちに害がなければ、何だつていい。感謝こそすれ、疑い、忌む必要なんてきつとないだろう。

そうして家の中を片付け、あちこちぴかぴかに磨き上げてから、買い物ついでにミューザはマナの家に向かった。だがマナはひどい経験をしたせいか熱を出し、眠っていると家族に告げられ、ミューザは仕方なしに彼女に会うこともなく帰ってきた。

セルバンのために、腕をふるって料理を作っていると、ちょうどそれができあがる頃セルバンが帰ってきた。

「ああ、いい匂いだね」

家に入るなり、セルバンがシチューの匂いに顔を綻ばせ、ミュー

ザも嬉しくなつてセルバンにおかえりのキスをした。セルバンも、ミューザの額にキスを返してくれた。

セルバンと向かい合つて上出来な夕食をとりながら、ミューザは幸福で仕方がなかった。

たくさんの怖いことはなくなつてしまったのに、セルバンは、ずっと昔のように自然にミューザの背を抱いて、キスをくれる。

優しい目を向けて、自分の話に相槌を打ってくれる。

幸福なまま食事を終え、ミューザはその後もお茶を飲みながらセルバンと他愛のない、楽しい話をして、夜が更けた頃もう眠るよう促された。

明日からは、また学校が始まる。

「おやすみ、セルバン」

「おやすみ、ミューザ」

眠る前に挨拶をして、またお互い頬に唇を触れ合う。

ミューザははしゃぎ出したいような気分を抑えて、自分の部屋の寝台に収まった。

(昔みたい)

ぎゅっと、ミューザは毛布を握り締めて笑いを堪えた。

自分とセルバンが、言葉にはできないほど些細なぎこちなさを持つて余す前。愛していると言え、僕もだよと優しく応えてくれた頃。

町に蔓延りかけていた妖霊は、もうほとんど祓われたとセルバンがさつき話してくれた。

これで町も、きつと元通りに 全部は決して戻らないとしても、たくさんの悲しみを残すにしても、とりあえず落ち着きを取り戻し、日常の生活が始まるだろう。

たくさん起こつた悪いことは、そのうち悪い夢のように、楽しい時間に紛れて忘れていけるだろう。

そう信じながら、ミューザは目を閉じて眠りに就こうとしたが、どうしてか一向に睡魔が訪れてくれない。嬉しくて興奮しているせ

いか、それともゆうべから今日にかけて眠りすぎたせいか。

水かお茶でも飲んでこよう、と仕方なく寝台を降り、部屋を出た時、ちょうどこちらにも水を飲んできたらしいセルバンと顔を合わせた。

「ミューザ？ どうしたんだい」

「眠れなくて……セルバンも？」

「僕は、少し喉が渴いたから」

ミューザはそつとセルバンの寝間着の袖を掴み、遠慮がちに彼を見上げた。

「ミューザ？」

「……眠るまでそばにいてくれる？」

子供みたいな我儘を言っていると、きつと窘められることを覚悟したのに、セルバンは少し驚いた顔をした後、すぐに笑ってミューザの頭を撫でた。

「いいよ、怖いことが続いたからね」

ミューザが怯えて眠れないのだと解釈したのだろう、セルバンはそつと彼女の背を押し、部屋へと促した。

ミューザはおとなしく寝台に昇り、そのそばに椅子を運んでセルバンが座る。

セルバンに顔を見下ろされ、ミューザは何だか少し恥ずかしくなつて、毛布を鼻先まで引き上げた。

そんなミューザの態度にセルバンは目を細めて笑い、髪を優しく何度も撫でた。

感触がとても心地よくて、ミューザは驚くほど急速にまどろみへと落ちていく。

「お眠り」

セルバンの声が合図のように、ミューザは瞼を閉じ、吸い込まれるように眠りの底へと落ちていった。

もしもその声に眠りの魔法がかかってたいたことにミューザが気づけたとしても、それに抗える隙もないほど、急激に。

健やかな寝息を立てて瞼を閉じるミューザをみつめ、セルバンはその髪を撫で続けた。幸福そうな寝顔を見て、セルバンもとても倅せな心地になる。

その手の動きが強張るように止まったのは、しばらくの後。

「……っ」

セルバンは唐突に咳き込み、ミューザの髪を撫でていた手で自分の口許を覆った。口許を抑えた指の間から赤い血が溢れ出した。

体中を駆け巡る苦痛に耐え、長い時間を掛けてその苦しみをやり過ぐすと、セルバンは血に濡れた自分の掌を見下ろした。

「……潮時か」

ぼつりと、セルバンが咳いた声は、眠りの淵に嵌り込んだミューザの耳には、決して届かなかった。

ずるずる、と擬音がついてもおかしくないように思われた。

まず溶け出したのは左腕だった。上腕が茶色に変色し、泡立ちながら流れ落ちる。指先に、ぬらつとした感触が絡みつく。

「畜生……」

部屋の中は闇が支配していた。陽は落ちたとはいえ、今日はやけに月明かりや星明かりがうるさい。今のこの身にとって、そんな些細な光すら毒のようなものになる。

右手で左腕を押さえるように触れると、右の指先は滑り落ちてしまった。茶色い粘液と共に。

「く……」

喉元で押し殺した声が漏れる。痛覚などないはずなのに、どうだ、この苦痛は。

地面に描かれているのは、石で作られた環。その列石魔法環の中心部へ据えられた椅子に、ファムスは半ばずり落ちるようになっている。衣服は体から出る瘴気によって、焦げ付きだし、いやな

匂いを発した。

描かれた魔法環の外に、祭壇。その上には長剣、短剣、杯、円盤、黒水晶、杖が恭しく置かれている。

半月足らず前に執り行つた魔導のためのごく簡略な儀式場は、未だ維持され続けている。術は続いているからだ。

「やつぱり、本調子じゃなかったのが敗因か……」

恨めしげに、ファムスは呟いた。

「それとも、こんな適当な道具でここまで保つたのが奇蹟か？」

いちいち考えていることを声にしてしまうのは、そうでもしなければ体が溶け崩れる苦痛のために、気が狂いそうになるからだ。

「くそうつ、そもそもこのど田舎には妖石が少ないんだ、精霊ばかりがうじゃうじゃやがって！」

精霊の多い町には、妖に属する物質が少ない。特にこのドモスの町は、よほど教会の祭司が優秀だったのか、単にそういう土地柄なのか、精霊があちこちに存在していた。祭司の結界外にも、妖霊の姿がほとんど見られなかった。

どうにかして妖力を持つ石を捜したが、魔法環を作るにはとても間に合わない。大きな円を包んで建てるには、かなりの量の石が必要なのだ。足りない分に、そこら辺に落ちていた適当な石を混ぜてしまったのがいけなかったのかもしれない。

それとも、古道具屋からかっぱらってきた剣や杖が、どう見てもまがい物だったのが不味かったのだろうか。人間の生き血を、民家から盗んできた鶏の血で代用したのも失敗か。杯に入れる酒をけちって半分をただの井戸水にしたのも失敗か。そもそも呼び出せた妖霊の数が少なすぎたことも見過ごせない。

それらの道具を、ファムスが命じて準備させた妖霊が、限りなく下級の者だったのもいただけない。何しろ消耗していたので、上級の妖霊が呼び出せなかったのだ。かろうじて姿を保っているような妖霊に、使い走りを頼んだのが敗因だった。できればすべて自分の手でやりたかったのだが、状況がそれを許さなかったのだから致し

方ない。

ともかくとして、ファムスが行った、妖の姿を借りて魂の器を造り出す魔導、つまり新たな体を造り自らの魂をその中に移すという術は、とりあえずの成功は見たものの、現状として失敗の方向へ激しく傾いている。

もとより、この自然に反した魔導は、黒魔術の中でも上級の術なのだ。第一級の禁忌に国から指定されている。その魔導を、限りなく適当でいい加減な方法で行い、とりあえずと注釈つきでも成功させたのは、ファムスの力が歴々の黒魔導士の力をすら、遙かに凌駕するものであるからに他ならない。

それが、ここへ来て綻びが見えた。

原因のほとんどは、万全の体制を整えなかったファムス自身にあるが

「本当に、来る町を間違った……！」

妖の気配と縁のない町だと思っていたら、唐突にそれがあちこちに現れ、増殖しだした。整えた力場を保つために余力が割けなかったから、その原因を探ることもままならないうち、あのミューザという娘がやってきて、次には頭のおかしくなった町の住民、拳げ句の果てにはミューザの父親までが現れて、ファムスは、オルターの
あるこの家から離れなければならなくなってしまった。

やっと家に帰れた頃には、蔓延りはじめてくれた妖霊たちは、セルバンら聖職者に被われ、おまけにこの家の周囲まで空気が清浄になつてきてしまっている。これでは何のために陽の入りづらい、陰気な家をわざわざ選んで住み込んだのかわからないではないか。

「それでも、あの力がなければ、いきなりにここまでにはならなかつたんだ！」

思い出すのも忌々しい。

あの醜い男がいた屋敷、あの地下室に沸き起こった、とんでもない力。

紛れもなく聖の領域にある莫大な光。

セルバンに促され、その力が発動する前にあの屋敷を抜け出したというのに、光はほぼ町全体を覆ってこの家にまで届いていた。

せつかく作り上げた魔法陣は崩れ、それを直すだけでも半日かかった。

「あの、女……っ」

ファムスは堪らず舌打ちした。

あの、ミューザという、口が異様に達者な娘。

馬鹿げて強い聖なる力を発したのは、間違いなく彼女だった。嬉しくないことに、何度か会ってその波動を知ってしまったから、わかる。彼女の持つ光に、おそらくセルバンという非常に優秀な白魔法士の導きが加わり、死んだはずの人間をひとり、生き返らせてしまった。

（あの術には覚えがある）

目の当たりにしたわけではないが、つい二週間前に、同じ術の気配を感じた。

「しかし、まさか、『あいつ』と同じような術を使えるほどの力の持ち主が」

ミューザが発した聖なる力は、今まで『あいつ』以外ではファムスが認識したことのない、強大なものだった。離れていても、妖の領域にあるこの身が灼かれてしまうほど。

しかも、それすらほんの一端に過ぎないのだ。奥底に秘められた潜在的な力は、想像もつかないレベル。

彼女の力に中毒ったせいで、術を使うための力場も、ファムスの体そのものも浸食されてしまい、それでこのざまだ。

「何者なんだ、あいつは！」

握り締めた左手の甲に指が突き抜けてしまって、ファムスは眉をしかめる。

ミューザに悪態をついている暇はなさそうだ。

ファムスは立ち上がると、座っていた椅子を魔法環の外に放り投げた。拍子に左腕が一緒になって吹っ飛んだ。

「……いかな。あまり美しくない姿になってしまった」

ファムスの美意識を結集した体が、欠落していく。もげた左腕のつけ根からは、しゅうしゅうと音を立てて茶色い煙が吹き出している。

一度環を出て、ファムスは祭壇に近づいた。黒い布の上に置いてある杯に、床に転がっていた葡萄酒の中身を移す。同じく床に転がっていた壺のふたを空けて、指を突っ込む。どろどろになった中身を確認して、ファムスはまた思いきり眉をしかめた。

「腐ってやがる」

妖霊に命じて集めさせた鶏の血だ。悪臭を発している。

これから血液を採取しに出かける場合でもない。それに、今外の清浄な空気に晒されてしまえば、体の腐敗はもう止めようもないものになってしまう。

ファムスは諦め、壺を逆さにして魔法環の中に振り撒いた。途端、茶色の煙が勢いよく噴き上がり、部屋に充満する。

「ええい、何なんだ一体！」

もはや癩癩に近い。ファムスは壺を壁に叩きつけ、どかどかと魔法環の中心部に移動した。

「暗黒の使者、妖に生を享けし者ども」

残っている方の腕を床につく。ファムスは目を閉じ、さらに口を開いた。

「この身再生のため、その力を我に与えんことを命ず。我が名乗りを上げようとした瞬間。」

「ごめんください」

静かな声が、いく枚かのドアを隔てて、ファムスの耳に届いた。詞を中断され、ファムスが不快気に闇に顔を上げる。

「誰だ」

苛立ちに任せて怒鳴りつけた声に、やはり静かな声が返ってくる。「夜分にご無礼をいたします。セルバンと申しますが」

セルバンは、手を触れるものもなく開いたドアの中に、ためらいも見せず進んだ。

「すまないが早くドアを閉じてくれ。外の空気を入れるな」

低い声が届き、セルバンが言われたとおりに素早く身をドアの中に滑らせ、ドアを閉めた。

部屋の中はひどく暗かった。起きている人間がいるのに、明かりひとつ灯されていない。

「カーテンにも触らないでくれ。月明かりも見たくない」

言いながら、奥の部屋に続いているドアから出てきたのは、当然この家の主。見惚れるほどの美貌に、今はかすかな苦渋の表情を浮かべている。それでも、その面立ちの秀麗さは損なわれていなかった。

鼻を刺激するエキセントリックな臭いと、その原因となっている彼の姿に対し、セルバンはわずかに目を細めたものの、ことさら話題に乗せる気はなく、無言を保っていた。

ファムスは食卓の前の椅子に、今まで腕がついていたはずの左肩を押さえながら、身を投げ出した。

「茶ぐらい出してやりたいが、生憎この状態だ。見苦しくて心苦し
いものだよ」

「いえ……遅くに突然訪れた非がありますから。おかまいなく」

ファムスの嫌味に、セルバンは微笑で応えた。何の含みもない笑顔を作れる辺り、彼もやはりなかなか喰わせものなのか、それとも単に鈍感なのか。ファムスは判断つきかねた。

「喉が渴いているようでしたら、私が淹れますよ」

「いや、いい。どうせ腹は空かない体だ」

問いかけたセルバンに答えてから、ファムスはその笑った顔を見て、軽く吐息した。

「豪胆と言うか、大雑把な奴だな。おまえといい、娘といい」

ファミスは呆れて呟いた。

よくもまあ、片腕を溶かしている人間を目の当たりにして、のんびりと笑顔など浮かべていられるものだ。

「おまえにならわかるんだらう？　こんなに妖の空気が充満していれば、この場所で魔導を行ったことくらい」

ファミスの問いに、セルバンは相変わらず笑顔を見せるだけだ。

韜晦しているのか地なのか、やはりファミスにはわからない。観察するように、ファミスはセルバンの姿に目を向けた。

ずいぶんと頼りない体つきの男だ。薄暗い部屋のせいなのか、目の下が翳り、悄然とした雰囲気も感じる。しかし、浮かべた笑顔に、それは気のせいと言ってしまってもできるが。

「……何の用があるのかは知らないが、ちょうどおれもおまえに聞きたいことがあった」

「娘の……ミューザのことですね」

ファミスの言葉を聞くと、質問というより、わかりきった事実を確認する口調でセルバンが言う。そうだ、とファミスが頷き。

「あの娘、何者だ。おまえと血は繋がっていないんだらう？　それであの力だ。冗談じゃない」

ファミスは忌々しげに言うと、後ろのドアを振り返った。

「おかげで術の効力が切れちゃった。もともと完全な術じゃなかったがな。もう少し力が回復するまで時間は稼げるはずだったんだ」

力が回復すれば、今度は完全に新たな『器』が作り直せたはずだが、ここでこの容器を失ってしまえば、またも妖霊に祭儀を任せなくてはならなくなり、結局二の舞を演じてしまうことになる。

それは避けたい事態だったのだが。

「なぜなんだ？　あの屋敷に行くまで、あいつには聖なる力など欠片も、塵ほども感じなかった。それが、いきなりあれだ。近くにいてだけで侵される波動だ。喰らってこの為体だよ」

ファミスは左肩から服を落とし、腐りかけの体をセルバンに示した。

セルバンは表情も変えず、まっすぐファムスの茶色く変色した体をみつめる。

「潜在する能力を封じていたんです。けれども、エリスバートを呼び戻すのに必要だったから、それを解いた。すべてではありませんが、ほんのわずかだけ」

「『ほんのわずか』であれか」

ファムスはうんざりと吐き捨てた。成程、それでミューザにまだ潜む力を感じたのだ。

しかし とファムスはすぐに怪訝な表情になる。

「妖力ならともかく、聖なる力ならなぜ封じる必要があるんだ。歓迎されこそすれ、忌み嫌われる力ではなかるうに」

「あの子が持つているのは、『聖なる力』とは同種ですが同一ではありません。指向性なしに発揮されれば、あの子の命を縮めることになる」

「……何？」

「対となるものに向けられるべき力なのです。たとえば、癒しの術などはミューザ自身には使えない。詞で精霊と契約することもできない。あの子の力が果たす役割は、通常の聖職者とはまったくべつの領域にありますから」

セルバンの言葉の意味が飲み込めず、ファムスはただ眉を寄せた。セルバンは構わず続ける。

「それに、力は隠し果さねばならなかった。外に漏れては危険な性質だったからです」

「……どういうことだ」

セルバンは一度視線を宙に彷徨わせ、それからファムスに戻した。「セイマー神が振るったとされる、サンファールの聖剣の話はご存じですね」

セルバンの言葉に、ファムスはまたほんの少し、眉を顰めた。

「国興しの伝説だろう。守護神セイマーが、地を乱す強大な妖を斬ったという、聖なる剣。名をくサンファールナ」と

セルバンが頷く。

「妖を斬り地を治めたのち、セイマー神はサンファルナを地中に収め、その場所を祀り城を建て国を興しました。それが、このサンファールです」

「ああ」

まるで歴史の授業だ。

ファムスは繰り返して聞いて育ったサンファールの故事に、大した感動もなく相槌を打った。

「それがどうした。ただの『伝説』だろう、サンファルナは、民に平穏をもたらす祈りの詞としてしか今は知られていない。二十二代前と五代前の物好きな国王が剣を捜して地面を掘り起こしたが、結局みつからなかった。聖剣など、セイマー神が生み起こした真正銘の伝説に過ぎない」

「いいえ」

ファムスを見返すセルバンの瞳は、静かで、なのにまっすぐ自分をみつめるその顔から、ファムスは視線を逸らせなくなった。

「サンファルナは実在します」

「何だって？」

「いえ……この先現れると言った方が正しいと思いますが」
「……」

何を言い出すのかと、怪訝になるファムスを見返すセルバンの表情に、もう笑顔は見あたらぬ。

「サンファルナは、剣にあって剣に非ずと伝えられる。普段は眠っている状態だと言われています。波動だけが存在し、剣の形を成さない」

だから、サンファルナは存在しないとわれ続けていたし、地を掘り起こしても見つかるはずがない。

「剣を象ってしまえば力は強大になり、持て余されるだけです。邪心を持つ者が剣を振るえば滅びが訪れる。だから、剣は時代と使い手を自らの意志で選ぶ」

「時代？」

重く、セルバンが頷く。

「サンファルナは、平穩の世には剣という形をもっては現れない。強過ぎる力は、聖と妖のバランスを崩します。すべての聖を上回る妖の存在があつて初めて、聖剣サンファルナは世に発言するのです」

「……そんな話を、聞いたことはないが」

「ええ、洩らされたことはないでしょう。聖剣の秘密は私たちモーフリートの神殿にある人間にのみ伝えられたものですから」

伝えられた、とセルバンは過去形で話した。

「十五年前まで、私はモーフリートの神殿にいました。そこでは、サンファルナ伝説はたしかな史実として伝えられ、私も、それは上級神官だった父や、神殿の他の人間から聞いていました。決して他の者に、たとえ同じ神職を持つ者にも話してはならないときつく言い含められて」

モーフリートが、セイマー神が妖との最終決戦に臨んだ地だとされているところを、ファムスは思い出す。

「モーフリートには、サンファルナに関するこんな伝承があります。

『聖剣サンファルナは、自らその能力を解放することはできない。傍らに守護、そして制御を司る聖人があつて、初めて目覚めを受け入れる』と」

つまり、剣を手に入れるには、永きに亘り眠り続けるサンファルナの覚醒を促す存在が必要となるのだ。さもなければ、サンファルナはただの精霊と変わらない存在ということだろう。

守護と解放を受け、サンファルナは初めてその姿を剣に変ずることが出来る。

「サンファルナを携えセイマー神が戦った時、彼の娘ミューゼルが彼の左肩に乗っていたそうです。彼女が剣の守役だった。だから、守護者は女身とされています。ただ聖なる力を持ち得るだけの者ではなく、存在したいが聖にあるという」

「おい……ちょっと待てよ」

静かな口調で語るセルバンを、ファムスは愕然として見遣った。思い出すのは、ミューザの言葉。

『神さまから預かった子供だから』って、一生懸命育ててくれた。

名前をつけて、愛してくれた。

だからあたしはものすごくセルバンには感謝してるの。

この世で一番、大切な人なの。

「ミューザが生を享けたのは、モーフリートの神殿でした。モーフリートの神殿は、他の神殿とは違い、セイマー神だけでなくその娘ミューゼルをも祀っています。ミューゼルの彫像の下にあの子は現れました。ミューゼル像から生まれた守護聖女、それがミューザです」

ファムスは肩を押さえるのも忘れ、凝然とセルバンをみつめている。

両親を失ったミューザを引き取ったセルバン。彼を愛したミューザ。すべては虚像。始めから彼女には親など存在しなかった。

セイマー神の愛娘にしてサンファルナの守護聖女、ミューゼルの彫像から生まれたミューザ。

「神殿の人間は、私を含め慄然としました。守護聖女が現れたからには、それは聖剣も存在するという証に他ならないのです。つまり、平穏な時期は過ぎたということ」

聖と妖のバランスが崩れたのだ。その証がミューザ。

「王宮とバーンズの神殿に報告がなされ、秘密裏に剣の搜索が始まりました。ですが、手を尽くさぬうちに、バーンズやその周辺の町は襲撃を受けた」

十五年前の、魔導士グーマーの反乱だ。

どうにかグーマーを捕らえ処刑したものの、サンファルナの搜索は済し崩し的に延期になった。多くの神官が妖霊、邪霊との戦いで命を落としたのだ。

グーマーを処刑したのち、荒れた町の復興や、数多く残った妖霊

たちの退治に人々は時間と力を費やし、サンファルナを捜す余裕を失った。

ようやく首都周辺が落ち着きを取り戻した頃、守護聖女の存在を語る者はいなくなつた。それを知るほとんどの人間が死んだからだ。「グーマーの放つた邪霊によつて、モーフリートの神殿は壊滅状態に陥りました。グーマーは守護聖女の存在に気づき、それを抹殺せんと企てたのです」

「なぜサンファルナはみつからなかつたんだ。そもそも、剣の搜索など今まで一度も耳にしたことがないぞ」

黙つてセルバンの話に耳を傾けていたファムスは、ようやくその口を挟んだ。今まで驚きで自失していた。そんな自分に忌々しさを覚える。

「モーフリートの人間が死んだからとはいえ、バーンズの神殿の人間や王宮の人間まで全員死んでしまつたわけではないだろう。それにおまえや、ミューザ自身がいる。どうして探索を続けなかつた」
「サンファルナの話は、禁忌になりました。口に乗せることすら禁じられたのです」

「禁忌か　誰が命じたんだ」

「オルジア王の厳命です」

「……何？」

「サンファルナの存在を、陛下は否定なさいました。サンファルナを語る者は、国を不安に陥れる反逆者として次々処刑されました。ミューザも当然処刑の対象になつた。妖霊から受けた傷で瀕死だった私の父も。わたしはまだ学徒で、正式にモーフリート神殿に名を連ねていたわけではなく、処刑は免れていた。父は、私にミューザを連れ逃れるよう命じました」

セルバンは父親の命令に従い、嬰兒の姿をしたミューザを抱えて、モーフリートやバーンズから遠いこのドモスへと逃げ延びた。

「ミューザの能力を封印したのは、二重の意味があつたのです。剣がみつかる前に、使命を果たせず力が行き場を失くし、彼女の心身

を消耗されるという事態を防ぐこと。それから 彼女の存在を伏せること」

セルバンが少しの間、瞼を閉じる。

「父は処刑の寸前、生まれたばかりの娘の子を王宮に差し出し命乞いをしました。守護聖女を渡す代わりに、自分の命は助けて欲しいと。……もちろん、父は私の姪とともに殺されたと伝え聞きました」

こうして、守護聖女が失われたことを、疑う者はいなくなつた。少なくとも当面の間。

「私はモーフリートの神殿で死んだ、学舎を出たばかりだったセルバンの名を借りて、この町に移り住みミューザを育てました。セルバンは私と同じく、神官だった父を持つのに、ずいぶんとおちこぼれで……」

『セルバン』のことを思い出したのか、ふとその顔に微笑が浮かぶ。「この辺境で、小さな子供を育てる私に疑いの目が向くことはありませんでした。セルバンの成績では、たとえ自分から訴え出たつて王宮から重要な仕事を回されることはない。私は持てる限りの力を使い、ミューザの力を封印するための術を何度も何度も試みた。周りの人間も、彼女自身もその力に気づくことがないように」

そして 十五年。

「王宮に気づかれないよう、過ごしてきたとういうわけか。ここで溜息混じりに呟くファムスに、セルバンが軽くかぶりを振つた。

「私が警戒しなければならなかったのは、オルジア国王だけではありませんでした」

「他に、何を」

「魔導士グーマーに、ミューザの存在を気づかれることのないように」

「……馬鹿な」

知らず、ファムスの口調が強張つた。

「奴は神官たちと民衆の手によって、あらゆる方法での処刑を受けただけだ」

「ならばなぜ、オルジア王は剣の守護聖女であるミューザを葬ろうとなさるのか。サンファルナの存在を、無視しようとなさるのか。」

サンファールの現状には知り及ぶことかと思えます。妖霊が前例なく増えている」

セルバンの言葉をファムスは否定できず、頷く。

「聖剣は発現しました。いや……その証である守護聖女は誕生しました。これから先国は荒れます。なのに、王はサンファルナの存在すらを否定なされているのです」

「国王が……グーマーに操られていると……」

「あるいはそれに代わる存在に、です」

惑いなくセルバンは言い切る。

しばらく、ふたりの間に沈黙が流れた。

何百秒かが経過したのち、ファムスは大きく息をついた。知らず、呼吸すらひそめていたらしい。

「成程……否定する材料はないな。たしかに王の所行は狂人のそれだ。妖霊に憑かれたと口にする者もある。もつとも、そんな人間はすぐさま捕らえられて処刑されたがな。……だがなぜ、そんなことをこのおれに告げる？ ミューザの存在や正体は、軽々しく第三者に話していいものではないだろう」

「剣を守り、その力を制御するものは選ばれる。そして、その剣を振るう人間も選ばれるのです」

セルバンは、音もないほど静かに、ゆっくりと椅子から立ち上がった。

「サンファルナはセイマー神の聖剣。そして、今この世界でサンファルナを振るうことができるのはただひとり」

そうして、セルバンはファムスのそばまで歩み寄り、その足許に膝をついた。

「セイマー神の聖なる光を受けし者、あなただけです。サンファール国の御子、カナン王子」

ファムスは目を睨り、跪くセルバンを見下ろした。

「なぜ……」

「以前、必要があつて内密にバーンスを訪れた時、一度だけ城下でお姿を垣間見ました。見目形は変えられていても、発する波動は同じです。ひとめ見て気づきました。それとも……待っていたからわかつたのでしょうか」

「待っていた？」

「聖剣は振るわれるために現れる。ならば剣、守護者、神の代理者と、三者は一堂に会すこと理」

「……代理者は父だ。オルジア国王ではないのか？」

「残念ながら。あの方は王たる資格を失いました。民への慈愛を捨て、人知を失つた者に、王どころか人たる資格もありません」

静かだが辛辣だ。ファムス サンファール国王子にして、王位継承権一位を持つカナンは、初めてセルバンの人様を見たがした。

ファムスにとって、オルジアの存在は、ただその名を持つ男が自分の父親であり自国の王であるというだけに過ぎなかつた。だから面と向かつて『他人』にその悪辣非道さを指摘されたところで、腹も立たない。彼自身も同じことを思っていたのだ。血の繋がりがあろうとなかろうと、個人の才能に変わりはない。事実の評価は公平であるべきだ。

「剣をお捜し下さい。この先国は荒廃の一途を辿るところでしょう。斬らねばならないものがあるから、剣は生まれるのです。ミューザを連れ、サンファールナを手に入れ、国を平穏にお導きください。次代の国王として」

跪いたままきセルバンが顔を上げた。真摯過ぎるほどの、貫く瞳。優男ふうの顔つきが、光をたたえるほどに強い意志を表していた。

（そうか、これがおまえの）

思い出したのは、あの腹の立つほど気の強い、そして今日の前にいる男と同じ瞳を持つ少女。

跳ねっ返りだと思っているのに、どうしてか、ファムスが真っ先に思い出したのは彼女の泣き顔だった。

「……おまえは、どうするんだ」

「わたしでは力及ばず、おそらく足手まといになります。残念ですが、共に参ることは」

「そういうことを言っているんじゃない！」

張り上げた声は、自分でも意外なほど鋭かった。ファムスは驚いて目を瞠るセルバンを上から睨み据えた。

「ミューザはどうするんだ。あいつはおまえに惚れてるぞ。言うまでもなく、父親に対する娘として以上の感情だ。そんなことすらわからない朴念仁ではないだろう、十五年以上も一緒に暮らしているセルバンの顔が一瞬歪んだ。全身に痛みが走り抜けたかのように「立場が違うとか身分が違うとか、くだらないことを言いやがったら張り飛ばすぞ。父親だからっていうのも却下だ。それでもあの女を拒む理由があるのなら聞かせてみる！」

ファムスはセルバンに鋭い声を浴びせながら、なぜ自分が言葉を荒らげるほどに苛ついているのか、わからなかった。

目の奥に浮かんでいるのは、ミューザの翳った、迂闊にも美しいと思ってしまった表情。落とした涙の透明さ。

「……私は、あの子の想いに応えることはできません」

「だからなぜ！」

低く呟くセルバンの言葉を聞いて、ファムスはカッとして右手を振り上げた。食卓を拳で叩こうとして思い止まる。そんなことをしたら、左手同様右手まで欠落してしまう。

上げた右手を持って余すような顔をするファムスの足許で、セルバンは着ていた服の上衣をはだけた。

ファムスは右手を下ろし、つと目を細める。

セルバンの右胸から左の脇腹にかけて、鉤爪で裂かれたような、大きな傷跡があった。傷はすでに肌色になっていたが、肌がひきつれて不自然に波打っている様が、暗い部屋の中でもありありと見えた。

「それは……」

「十五年前、邪霊に裂かれた傷です」

「……」

「ということは、ただの傷ではありえない。下級の妖霊につけられた傷ならともかく、邪霊に切り裂かれたのなら、体内に多量の妖気が入り込み、相当のダメージを負ったはずだ。」

「ひどい傷だ」

「生きているのが不思議なほどだと思った。」

「呟くファムスに、セルバンが少し笑う。」

「それでも、ミューザには傷ひとつつけなかったのが誇りなんですよ」

「なぜ治癒させなかった。邪霊相手の怪我とはいえ、おまえほどの力の持ち主なら完治させることはできたはずだ」

「傷が消えていないということは、完全な治癒を施していないということだ。」

「当然、妖気は体内に残る。」

「たとえその量が微笑であっても、ゆるやかに体内組織を破壊され、体力が削られ、ついには命が尽きてしまう。」

「セルバン自身が持ち得る聖なる力が自然に妖力を中和していくとしても、彼ほどの大きな傷を負ってしまったのでは、それにも限界がある。」

「事実彼は、見るほどにわかり、消耗している。」

「この傷を治すには、かなりの力を消費しなくてはなりません。少なくとも聖域を捜し、祭壇を準備し、相応の道具を用いて癒しの術を使わなくてはならない。そんなことをすれば、あの子に封印の術をかけることも、その術を継続させることもできなくなった」

「……」

「ミューザの守護聖女としての潜在能力は、はかりきれない強大さです。術を何度もかける必要がありました。余計なことに力を割くわけにはいかなかった」

「余計なこと、と言いつ切るのだ。ことは自分の命に関わる問題だと」

いうのに。

「私の力はもうあとわずかな時間で尽きるでしょう。ここしばらくで体力の低下が著しい。それでも、自分で考えていたよりは長く保った方です」

「自分から死ぬ趣味がないのなら、あの女を使って体を治せばいいじゃないか。一度死んだ人間が息を吹き返したんだ。死にかけのおまえはもつと簡単に」

セルバンは小さく首を振った。

「十五年の間、この体も、力も、使い尽くしました。私がこの身で生きて行くには、もう留まる力がなさ過ぎる。あるいは、ミューザの力を正しく導ける強い聖なる力の持ち主がいれば、体を作り替え、魂を回復するための術で、それもかなうのかもしれないが……」

セルバン自身が、考えた末の結論なのだ。

(あのバカは、何だってこんな時にいないんだ)

王家の血族が受け継ぐ、国で最高級の力と術を持つ『カナン』は、ここにはいない。

ここにいるのが自分ではなくあの自分だったらと、思いかけてファミウスはやめた。考えでも仕方のないことだ。

「私の役目は、ここで終わりです」

俯いて微笑すると、セルバンは顔を上げた。

「僭越ながら、お願い申し上げます。どうか、ミューザを連れ聖剣をお捜し下さい。あなたにしか叶わない責務です。その身、王位継承者カナンの名にかけて」

「……」

ファミウスは、じつとセルバンの強い瞳を見返した。

本音なら一言である。

御免だ。

はつきり言って面倒臭い。ミューザを連れて旅立てたの、剣を捜せだの、拳句妖霊や邪霊、国王を操る黒幕を切れときたもんだ。

そう言って、何時を避けてこの町を出ることもできる。そもそも

何のために自分がここにいるかといえば、『カナン』という名が煩わしかったからだ。黒魔導ならともかく、白魔法になんて欠片も興味がないし、それを強要される王位なんてしまったことではない。

だが

「……わかった。すぐにでも出立する。おまえも……見られたくはないだろう。あの女に、自分の死に様など」

ファムスは、気づけばそんなことを口にしていた。

(……まあ、いい)

そう無理矢理自分に言い聞かせる。まあ、いい。たとえ直接自分が働かなくても、進んで使命を代わってくれそうな、正義感にとち狂った存在に心当たりがある。自分はそいつとさっさと再会して、今の話を伝えればいいだけだ。

セルバンは安堵したように微笑むと、それから首を傾げた。

「ですが、今少し……時間を与えてくださいませんか」

「何だ。どうせならあの女に看取ってもらいたいのか」

いえ、とセルバンは首を振った。

そして、次に彼が切り出した話は、今まで彼の口から語られたことで、ここ数年分の驚愕を使い切ってしまったと思っただけで、さらなる驚きと衝撃をもたらした。

第七章『旅立ち』

窓の外からは、月の光が射し込んでいた。

寝台の上で眠る顔は、安らかで、この眠りを妨げてはならないと思っただ。

ずっと見てきた。次第に成長していく、日を追い美しくなる姿を。これから見守っていてあげたかった。見守っていたかった。

けれど。

「さようなら、ミューザ」

触れることもなく、別れを告げた。

触れてしまえば、もう離すことはできないとわかっていたから。

「さようなら、ミューザ」

それは、もう完全な悪夢だった。

なぜ彼が、自分に別れを告げなくてはならないのだろう。あまりの理不尽さに怒り狂いながら目を覚まし、飛び起きた。

寝台の上に半身を起こし、辺りを見渡すとまだ闇の中。真夜中だ。嫌な胸騒ぎがする。心がざわざわと音を立てて、波打つように。

「……セルバン……？」

名前を呼びながら、起き上がる。眠る前までそばにいてくれたはずのセルバンは、部屋のどこにも見当たらない。

そのまま、廊下に出る。

彼の眠っているはずの部屋のドアをノックしてみると、返事が無い。

血の気が引いていく音を、ミューザは耳許で聞いた気がした。

力一杯にドアを開け放つ。どの程度力を入れればドアが開くのかなど、忘れてしまった。

「セルバン……」
呆然とする。

部屋のどこを見ても、セルバンの姿はなかった。

身を翻して、ミューザは食堂に駆け込む。半ばで覚悟していたとおり、そこにも人影はなかった。

理屈ではなく体でわかる。セルバンはこの家のどこにもいない。十五年間感じ続けた存在感なのだ。不在など、視覚に頼らずに判断できる。

「どうして」

だがその理由が見当たらない。

ただの気まぐれとか、そんなものではないことはわかった。でなければ、こんな胸騒ぎはしない。

何をすればいいのかの判断もなくして、うろつろつと意味もなく歩き回る。

「どこに……そう、そうだ、捜さなきゃ。でも、ああ　どこに！？」

ミューザは泣き顔になった。

かぶりを振った視界の隅に、食卓が入った。正しくはその上に置かれた白い紙が、だ。

紙をもぎ取り、ミューザは吸い込まれるようにその紙に書きつけてある文字を目で追った。

『最愛の娘　ミューザへ』

見覚えのある綺麗な字で、そう始まっている。

『ファムスのところへ行きなさい。すべては彼に任せます。

どうか悲しまないように、どこにいても、どんな時にでも、お父さんは君のことを見守っている』

最後に『セルバン』と署名されたその紙から、ミューザはしばらく目を離さなかった。一読した後は、すでにその文字を見てはいな

かったのに。

「何が……ッ！」

紙を持つ手が震える。ミューザは堅く目を瞑り、何度も首を振った。

「何がお父さんよ！ 何が、見守って……っ」

ミューザは叩きつけるように手紙を食卓に置くと、寝間着のままだということに気にも掛けず、夜道へ飛び出した。靴を履くのももどかしく、裸足で走る。

途中何度も躓きそうになりながら、夜の下を走り、森を抜け、ファミスの家へと辿り着いた。

「セルバン！」

ドアを叩く暇もあらばこそ、ミューザは入り口のドアを力一杯開け放った。鍵は掛かっていなかった。

「セルバン、いるの？」

いつも通されていた食卓には、誰の姿もない。ミューザは奥部屋に続くドアに目を遣り、それも音を立てて開け放つ。

「……セルバン！」

セルバンは、いた。

地面に石で描かれた、円の中心に佇むように。

息を切らすミューザのことを、セルバンは緩慢な動きで見遣った。「……ミューザ……、来てしまったんだね。朝まで眠っていてほしかった」

困ったように微笑むセルバンから少し離れた壁際に、椅子に座ったファミスの姿がある。暗いのでよくは見えないが、消耗しきった表情をしているようだった。

「セルバン……」

部屋の中は、外界からの光を拒んでいた。

円のあちこちに据えられた蠟燭の光が、足許からセルバンの姿を照らし出している。

ぞっとするくらい、セルバンの顔には力がなかった。体から精気

が感じられない。寒気がするほど　それは、死期の迫った者の顔だった。

「やだ……いやだよ、セルバン」

足が、全身がガクガクと震える。ミューザは恐怖のあまり、気が遠くなっていた。現実のこととして、目の前のものが映らない。

この数日で見ただんな怖ろしい事実よりも、今の状況が耐えきれないほどに怖い。

「入っては駄目だよ。出ていきなさい」

「嫌！　帰ろう、ねえ帰ろうよセルバン！　こんなの嫌だ！」

「お願いだ、ミューザ。見られたくないんだ、僕が死ぬところなんて」

「嘘！　死ぬわけなんてないでしょう？　嘘をついちゃ嫌！」

「……見てほしくないんだよ。頼むから、ここを出ておいで」

そう言いながら、セルバンの体は不自然にぐらついている。立っ
ていられるのは気力だけのおかげだ。

ファムスは、無言でミューザを見遣った。口の中で何ごとかを咳く。

ミューザが涙を流す目を閉じ、ゆっくりと床に崩れるのと、セルバンが激しく吐血して倒れ伏すのが同時だった。

「果たしてどちらが倖せなのか」

ファムスは呟き、立ち上がった。

最愛の者の死に様を間近で見届けるのと、見ずにすむのと。

すでにファムスは、右足の足首から下も喪っている。他の部分も、腐敗が進みつつあった。ミューザがこの場所に姿を現してから、顔の反面も崩れ始めてしまった。

ファムスはどうにかして歩み、再び口の中で呪文を唱えた。

ふわりと、ミューザの体が浮き上がり、静かに部屋を出て行く。

手を触れず彼女の出で行ったドアを閉じると、ファムスは陣の中心まで歩んだ。その過程で、以前はファムスの体を構成していたものが液状になり、泡立ちながら流れ落ちる。

顔の片側は完全に朽ちた。

ファムスはセルバンの遺体のそばに跪くと、その半身を起こさせた。セルバンの体の前面が血で汚れている。だが静かな死に顔だった。

ファムスはセルバンの顔についた血液を、着ていた服で拭い取ってやると、彼から手を離し自分は立ち上がった。

これからが大仕事なのだ。

目が覚めた時、自分がいる場所がどこなのか把握するのに、かなりの時間がかかった。

自分の部屋ではない。セルバンの部屋でも、居間でも

(ああ)

そうか、と納得した。ここは、ファムスの家なのだ。

昨夜のことははっきりと覚えていた。夜中に目を覚まし、隣人の家までやってきた。そして。

「……」

自分が横たわっているのが寝台だとわかると、ミューザは体を起こした。見渡した部屋は、とても閑散としていた。必要最低限のものしかない。

「起きたのか」

声がして、ミューザはその方に目を遣った。

朝日が射し込む窓の方を向き、ミューザに背を向けている後ろ姿をみつける。

「……悪趣味ね、ずいぶん」

「ああ。おれもそう思う」

答えた声は、愛想というものをどこかに忘れてしまったような、投げやりな口調。

薄い茶色の髪を、大雑把にまとめて結わえてある。服は、見たこ

ともない黒衣だった。長身だがひよろりとしていて、少し頼りない体つき。

「……どうして」

声と同じだった。姿が同じだった。

だから、間違えっこないのだ。これは、セルバンではない。ミューザが心から愛した、大好きだったセルバンではないのだ。

振り返る、見慣れたはずのその顔は、穏やかで優しい微笑を浮かべてはくれない。無表情でミューザを見返している。

絶叫したかった。泣いてしまいたかった。

なのにミューザは、ただ疲れた表情で寝台に座っているだけだ。

「驚かないんだな」

ファムスは、セルバンの声で訊ねた。

「死んだもの、あの人は。それなのに動いているなら、それはセルバンじゃないわ」

口を動かしているのは誰だろう、とミューザは不思議に思った。よく知っている声に似ている。

自分の声だ。自分は、今、喋っているのだろうか。

「セルバンから言い出したのね、きつと。自分の体をあげるって。」

……あの人らしいな、魔導士に体を譲るなんて。聖職者のくせにね「責めてもいいんだぞ。詰る権利くらいはあるはずだ」

ファムスの言葉に、ミューザは首を振った。

「セルバンが望んだんでしょ。でなければ、あの人なら死んでも自分の体に乗っ取られたりなんてしないわ。自分で自分の体を焼くくらいは、平気でやる人だもの」

言つと、ミューザは体を揺らした。ふ、ふ、と息を吐き出すように笑つ。

ファムスがわずかに眉をひそめた。

「ひどい話だわ。最期に愛してるの一言くらいあってもいいと思わない？」

くすくすと、ミューザは声を上げて笑い出した。

「こんなふうに放り出して」
顔を伏せ、しばらく肩を揺らしていたミューザは、言葉を途切れさせ、ただ息を吐き出した。

両手の拳を振り上げ、寝台に叩きつける。

「……こんなのつてないじゃない！ どうしてあたしを置いていくの！？ ひとりで勝手に死んでしまうなんて狡い、最期くらいそばにさせてくれないなんてひどいじゃない！ 苦しかったら、苦しって言うてくれれば抱き締めてあげるくらいはできたのに！」

全身から絞り出すように、ミューザが叫ぶ。

ファムスは黙って、大声で泣くミューザのことをみつめていた。

「……落ち着いたか」

絶叫が啜り泣きに変わる頃、ファムスはようやく声を発した。

ミューザの泣き声を聞いているのは、正直拷問に近かった。手に入れたばかりの身が切られるように痛かった。それでもこの場を逃げ出すことが、ファムスには何となくできなかった。

「……落ち着いた」

虚勢であったとしても、ミューザはとりあえず頷いた。両目を手の甲で拭いながら顔を上げた時、瞼が赤く腫れ上がっていた。

「理由は聞かせてもらえるわよね。どうしてセルバンがファムスに体を譲ったのか」

泣きすぎで声は囁れていたが、思いのほかしくかりとした眼差しで、ミューザはファムスを見上げた。

芯の強い少女なのだろうと、ファムスは改めて感じた。泣きわめきはするが、それで何かが変わることなどないのを知っているのだ。悲しみだけに我を忘れ、考えることをやめるようなやわな人間ではないらしい。

それがいささか、ファムスには哀れにも思えたが。

(おれが哀れむ筋合いじゃない)

ファムスは、ミューザがきちんと話に耳を傾け、飲み込むことができる状態であることを確認すると、昨日自分がセルバンから聞いた話を彼女に告げた。

十五年前のできごと。

ミューザの出生の秘密。

自分の正体。

そしてこれから、自分たちが何を為すべきか。

「じゃあ……その、聖剣を探すのね、これから」

驚きもしたし、何度も『信じられない』と言ったような表情にもなったが、ファムスの話を聞き終えたミューザは、はっきりとした口調と眼差しでそう言った。

「いまいち真実味に乏しいけど……セルバンがそう言ったのなら、あたしは信じるわ。何でもやってあげるわよ。それがあの人の望みならね」

言い切るミューザに、ファムスは感嘆の眼差しを向けた。

大したやつだ、と思った。

こんなにすごい女は、今まで見たことがない。

「じゃあ、おまえもグーマーだかそれに代わる魔導士だかの退治に乗り出すのか」

「あたりまえじゃない、そんなこと」

ミューザはファムスの問いに、こともなげに頷いた。

「別に、このまま平穩無事に暮らしていても構わないんだぞ。たとえ国が減びたって、他にも住める場所はいくらでもある。へたな使命感に燃えて、人生投げ出すこともないんだ」

「使命とか、そんなもの関係ないわよ。あたしの正体が守護聖女だろ？が単なる女の子だろうがどうでもいいの。この場合重要なのは、セルバンがあたしにそうしてほしいと望んでるってことだもの。だから、あたしは行くわ。剣を捜し出して、あなたと、妖霊を操っているっていう黒魔導士を倒す。平穩無事な人生なんて、その後いく

らでも送れるんだから」

「死ぬかもしれないんだぞ。楽な仕事ではない」

「構わないわ、それならセルバンに会える時期が早くなるだけだから。死ぬのなんて怖くないの。セルバンが先に待っているんだもの。怖いことなんてあるはずないわ」

「……そうか」

ファムスは静かに頷きを返した。

セルバンにとって、ミューザのこの気性は、何物にも代え難い大切なものだったに違いない。残り少ない生命の中で、彼女は光にも見えただろう。

わかるのだ。この体はセルバンのもの。

彼の脳が、全身が、ファムスに記憶を伝えるのだ。

彼がいかにミューザのことを愛していたのか。

もちろん、それは娘としてや、彼が保護すべき守護聖女としての想いではない。純粹に、ひとりの人格としてミューザを愛していた。いつまでもそばにいて、見守りたいと全身が願っていた。

セルバンの体にファムスが術を使って入り込んだ時、彼の体にもつとも強く残っていたのはミューザに対する愛情だった。

だが、ファムスはそれをミューザに告げる気はない。『愛している』と口にするのは、セルバンでなくてはならないのだ。彼の顔を、姿を、声を保つファムスだったが、だからこそ、その姿でミューザに告げてはならないのだ。

それはただひとり、セルバンにだけ与えられた権利だったのだから。

「そうとなったら、早く支度をしなくっちゃね」

「気が早いな」

寝台から降りるミューザを、ファムスは我に返って見遣った。

ミューザは少しだけ困ったように笑った。

「何かやらなくちゃいけないこののある方が、今のあたしにはありがたいもの」

辛くないわけではない。あたりまえだ。

それでも彼女は笑って見せるのだ。

「いろいろいい、整理したり、することがあるんじゃないのか。荷物とか」

遺品、という言葉はファムスには口にできなかった。

「いいの。だって、あなたがいるでしょう？」

「……そうだな」

あらためて、ファムスは自らの魂を入れた『器』を見た。

心臓は動いていない。呼吸も必要ない。だが、元が人間のものなので、昨日までの『人形』とは違い、陽光を浴びても大丈夫だ。ミューザのそばにいても、苦痛は感じない。むしろ、彼女がそばにあることがあまりにも自然だった。セルバンの体の記憶なのかもしれない。

「あ、そうだ」

旅支度をするため、ファムスの部屋を出ようとしたミューザは、思い出したようにファムスを振り返った。

「あなたのこと、カナン様とか、王子様って呼ぶべきなのかしら」

「……よしてくれ。背中がむずがゆくなる」

「よかった、強制されても呼ぶ気なんてさらさらなかったから」

にこ、と笑ってミューザは部屋を出て行った。

ファムスは思わず苦笑を浮かべる。

「たいした女だよ、おまえの娘はさ……」

元の体の持ち主に、そう語りかける。答えはなかったが、もし彼が聞いていたとしたら、笑顔で「当然ですね」とくらい返してくれるだろうか。

ひとつ溜息をつく、ファムスは自分も旅の支度を始めるために動き出す。

簡単な旅にはならないと、覚悟はしておいた。

自分が町を離れることを聞いて、きつとひどく泣くだろうとミューザは覚悟していたのに、マナは意外なほど落ち着いた様子で微笑んでいた。

「そう、ミューザも、行ってしまっのね」

マナは学校を休んでいたが、ようやく熱も下がって起き出せるようになった。

彼女を誘い、よく学校帰りに寄った、ドモスの美しい景色が見渡せる丘にミューザは向かった。

途中でレスマインの家に寄り、こちらでも町を出る支度をしていたエリスバートも誘って。

「そんな気がしていたの。遅かれ早かれ、ミューザはここを出て行くんじゃないかって」

「マナ……」

マナは丘から街の方を眺め、ミューザの顔を見ないようにしている。

「ぼくも、今晚中にはドモスを出て行くよ」

マナの隣に並び、エリスバートも彼女と同じ方を見渡した。

「こんなに早く？」

自分もすぐに発つとふたりに告げておきながら、ミューザはエリスバートの言葉に驚いた。

エリスバートが苦笑気味、頷く。

「ルカや、他の人たちに合わせる顔がない。みんな、優しくしてくれるけど……」

「……」

我に返ったルカや死んだ子供の母親、そして町の人々は、決してエリスバートやクレデイスを責めることなく、リエインを口汚く罵ることもなく、ただ淡々と町を清め、新しい領主を迎えるための準備に没頭していた。

「クレデイスは親戚の居る町に引き取られることになった。ぼくは

少し早いけど、試験を受けて寮のある上級学校に行くつもりだ。クレディアの行くことになる家が、援助してくれることになったから。感謝しなくちゃいけない」

リエインの治めていた領地も、財産も、すべて国に召し上げられた。わずかに残ったエリスバートやクレディア個人のは、すべて死んだ者たちを弔うために手放したらしい。

「……頑張つて。きみならきっと試験に受かるわ、エリス」

「もちろん。きみと同じ学校に入って、寝る間も惜しんで勉強したからね」

悪戯つぽく笑うエリスバートに、ミューザも自然と笑顔を返せた。「きみはどこに行くんだ、ミューザ。セルバン先生と一緒に発つんだろ」

「うん……行き先はまだ、決まっていなんだけど」

旅立つ目的は、もちろんふたりには話せない。

少なくとも、今は。

「手紙をくれる？ ミューザ」

堪えきれず、目に一杯の涙を溜めたマナが、それでも笑ってミューザを振り返った。

「もちろん。必ず出すわ。それに……いつか必ず、ドモスに帰ってくる」

とうとう泣き出してしまったマナの肩を抱き、ミューザもドモスの景色を見下ろした。

十五年過ぎた町。

セルバンと暮らした場所。

「……わたし、神学校に入ることにしたの」

涙に声を震わせながら、マナがミューザを見上げて言った。

「父様も母様も反対しているけれど、でも、頑張つて説得する。わたしの力でも誰かが救えるように、頑張つて勉強するわ」

「マナなら、できるわ」

おとなしいマナが両親に逆らうのは、きっと辛く勇気のいったこ

とだろう。

「だけどミューザは、そんな友人を心から誇りに思う。」

「エリスも。きつとまたここで会いましょう。みんな行き先は違ってしまっけど、帰る場所は一緒だわ」

「うん、でもミューザ」

まじめな声で呼びかけたエリスバートを、ミューザが首を傾げて見返す。

「え？」

「次に会う時は、その名前で呼ぶなよ」

「……」

三人とも顔を見合わせて、とうとう、一緒になって吹き出した。明るい笑い声が丘に満ちる。

「そろそろ、行くわ」

立ち止まってしまえば、この場所から動けない気がして、ミューザは残る気持ちを振り払うようにふたりへそう告げた。

「うん」

頷いて、マナとエリスバートは、丘を降りる道筋までミューザと一緒に歩いた。

「ここでいいわ。町の入口で、セルバンが待つてるから大丈夫」
荷物はすべて、ファムスに預けてあった。大した量じゃない。

振り向いたミューザの前で、マナと、エリスバートが彼女をみつめる。

「……いつでもあなたのために祈るわ、ミューザ」

「きみに、世界中からの祝福と加護を」

祈りの詞を告げるふたりの頬へ、ミューザは順番に接吻けた。

「さようならマナ、バーティ。幸運を」

笑って手を振るミューザを、マナとエリスバートは静かに見送った。

まっすぐに背筋を伸ばしたミューザの後ろ姿が、丘の下へと見えなくなっていく。

「いいの？ バーティ」

小さく訊ねたマナの言葉の意味が、エリスバートにはすぐわかった。

結局、ミューザに気持ちを伝えないままだった。

「いいんだ」

自分でも不思議なほど晴れ晴れした気分で、心から、エリスバートはそう言った。

ミューザはきつと、高いところへ向かう存在な気がする。

だから 今はまだ。

「ぼくはまだ、彼女に一度も勝つたことがないから」

言って、エリスバートはマナに笑ってみせた。

「今度会う時には、絶対、ミューザを負かしてやるぜ。そしたら、言うよ」

くすくすと、マナが濡れた瞳で笑い声を立てる。

空は春らしく、鮮やかに晴れ渡っていた。

ミューザの姿は、もうふたりの目には届かなくなっていた。

「まずは、やっぱり首都に向かうべきなのかしらね」

ドモスを出て、街道沿いをファムスと並んで歩きながら、ミューザは問いかけた。

「バーンズか……まあ、この姿なら大丈夫かもしれない」

複雑な気分でファムスは相槌を打つ。あの場所にはいろいろとこだわりのようなものがあるのだ。

曖昧な調子で呟いたファムスを、ミューザは隣を歩きながら見上げた。相変わらず鬱陶しい黒ずくめ、手ぶらに等しい出で立ち。荷物は少なく、家は面倒なのでファムスの手で破壊してしまった。これで、謎の美青年・ファムスは、妖霊にでもやられ、死んでしまったことになるだろう。

「そういえばさ」

セルバンの服は自分が持ってきたから、後で着替えさせねばならないとミューザはひそかに決意する。穏やかだったセルバンの目つきはすっかり悪くなり、その上この黒マントでは、いかにも風体が悪い。どうして一国の王子ともあるう者が、こんなに陰険そうな姿になれるのか、ミューザには不思議だった。

「どうしてあなたって、こんなところにいるわけ？ 王子様でしょう、普通は王宮にいるべきじゃない？」

ミューザに指摘されて、ファムスは渋面を作った。いつかは訊かれるだろうと思っていたが、朝話した時は、故意にその説明を避けていたのだ。

「サンファール王家は白魔法を使うのが伝統だろう。次期国王が、黒魔導に走るっていうのは、あまり普通じゃないんだ。だから……」

「ああ、だから、追い出されちゃったのね？」

端的に言ったミューザを、ファムスは上から睨みつける。

「追い出されたんじゃない、自分で出てきたんだ」

「同じことですよ、出て行かなくちゃ行けない状況に陥ったってことなんだから」

ミューザはまた、単純明快に辛辣なことを口にする。言い返してやることもできたが、ファムスはこの姿でミューザに喧嘩を売れるほど、冷酷非道にはなれなかった。

「あたしたちってつまり、国から追われるお尋ね者ふたり組なのね」

「まあ そういうことだろうな」

「気が重くなる。」

が、むっつりとするファムスとは対照的に、ミューザは楽しげな表情になった。

「試練試練、また試練、とかいつてね」

「お気楽な娘だな」

「言ったでしょ、その方がいろいろとありがたいのよ」

溜息をついて、ファムスは軽く空を見上げた。半月ぶり、まとも

に見上げる太陽だった。

「まあ、当面の捜し物はおれだな」

「は？」

呟いたファムスに、ミューザが怪訝な顔で問い返す。

「何を捜すって？」

「だから残りのおれを　ああ、言っただけだったか」

今さら思い至って、ファムスはミューザを見返した。そういえば、肝心なことは何ひとつ説明していなかった気がする。

「『おれ』はひとりじゃないんだ。おれの他に、あとふたりほど『カナン』がいる」

「……ごめん、あたし、突然馬鹿になってしまったみたい。意味がちっともわからない」

「だから。おれは『カナン』というものを構成する人格のうちのひとつなんだ。カナンは三人いる。おれの他に、白魔法マニアと剣術マニアの馬鹿どもだ」

「……」

ミューザはまったく不得要領といった顔をしている。

「ま、おいおい話すさ」

ファムスはすぐに説明を放棄した。こんなややこしいことを、短時間で説明する自信はない。

首を捻るミューザを放っておいて、ファムスは軽く自分の拳を握った。今までの仮の体と違い、リアルな感触がある。息を吸い込むと、花の香りを感じた。心臓が動いているわけではないのだが、神経は繋がっているのだろう。仕組みはまだよくわからない。勉強が必要だと思った。

黒魔導については、資料が少なく、ファムスはずっとそれが不満だった。

（旅のついでに、新しい魔導書でも捜すか）

いずれ力の強い白魔法士に、体を治してもらわなくてはなるまい。黒の魔導では体の腐敗を喰い止めることしかできない。セルバンの

体は邪霊に受けた妖力のせいで、あちこちがぼろぼろに傷んでいた。よくも、こんな体で昨日まで生き存えていたものだと感心するほど。治してもらえれば、もうしかすると心臓も動くようになるかもしれない。自分の鼓動が感じられない状態は、いまいち不安定だ。

何なら、あの白魔法士のやつを捜し出した時に治させてやればいい。ついでに、任務を押しつけてそこでさよならだ。敵は倒したいやつが倒せばいい。国は治めたいやつが治めればいい。こっちは、たとえ妖力が支配する世の中になっても、一向に困らないのだから「よくわからないけど、とにかく」

何かしら自分の中で整理をつけたのか、ミューザが、やっと困惑の表情から立ち直り、ファムスを見上げた。

「頑張りましょう、これからは戦友だわ」

にっこりと笑う、健気とも言える表情を見て、ファムスは少しだけ沈黙した。

（ まあ……後のことは、後で考えればいいさ）

いつ終わるともわからない旅は、もう始まってしまった。もうひとりの『おれ』がどこにいるのか見当もつかないが、捜すしかない。捜して、めでたく仕事を押しつけてしまおう。

それまで自分の隣にいるのがこの少女だということに、不安は感じる。どうにも一言多い同士だから、道々喧嘩は絶えない気がする。だが退屈はしないだろう。少なくとも。

「とりあえず、次の町を出たら北に向かうぞ」

頭の中で地図を思い浮かべながら、ファムスが言った。北方には首都バーンス、さらに北へ上がればパラスの国がある。

行き先はまだ決めていないが、ドモスがサンファールの南端、つまり大陸の南端にある以上、北に進むサンファールナしかない。

「それで、どうやって捜すの？ 剣サンファールナにしる、もうひとりのあなたとかいっのにしる」

「歩いてりゃそのうちみつかるだろ、集まるのが理だそうだから」「いい加減ねえ」

「おまえの父親が言ったんだぞ」

ファムスの反論を、ミューザは見事に無視した。そのままファムスを、なぜか睨めつける。

「そうだ、言っとくけどあたし、お金ないからね。セルバンは薄給だったんだから」

「そんなことを威張って言うな」

「ファムスはどれくらい路銀、持ってるの？」

ふっと、ファムスは口許で笑みを浮かべる。

「体すらなかったんだ。路銀なんて持っていると思うのか、このおれが」

「……あんたこそ、わけわかんないことで威張らないでよ」

白々とした空気がお互いの間に流れ、ミューザは痙攣を起こしたように足取りを荒くした。

「もおおっ、さっさとみつけるわよ、捜し物！」

「どうやって捜すつもりだ」

「そんなの、歩いてりゃそのうちみつかるわよ、集まるのが理だそ
うだから！」

「……おまえ……」

脱力して、ファムスの足取りが遅くなった。

「ほらほら、さくさく歩きなさいよ！」

ミューザがファムスを急ぎ立てる。

ファムスは力一杯嘆息した。

(……先が、思いやられる……)

とにもかくにも、彼らは旅立ったのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9379x/>

TRILOGY

2011年10月26日05時13分発行